昭和廿九年春二月

発行者

謹呈

槇大兄

石井滿著

野村龍太郎傳

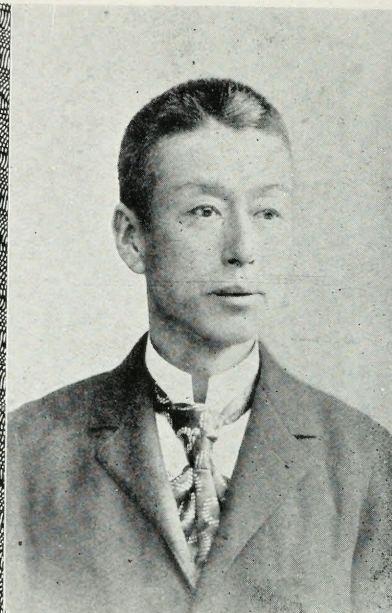
日本交通學會版





青年時代の先生

→ 米國費府ニテ
（明治三十年一月二十七日）





← 倫敦ニテ
（明治三十年五月）

青年時代の先生



東京ニ於テ
（明治三十一年遞信技監當時）

倫敦ニ於テ
（明治三十一年四月）
↓





鮮滿視察旅行



鮮滿視察旅行



鮮滿視察旅行

海外視察時代



漢堡（ハンブルグ）ニ於テ →
向ツテ右ヨリ
島安次郎
大河内甲一
井上鋭雄
野村先生
（明治四十四年七月三十日）



伯林ニテ
同郷人邂逅記念
向ツテ右ヨリ ↓
渡邊謙吉
岡田朝太郎
野村先生
（明治卅年八月廿一日）



海外視察當時



鐵道院副總裁當時（大正二年五月）→



滿鐵總裁當時（大正二年）←



（昭和二年十一月）

新坂町邸應接室ニ於ケル野村先生



（昭和二年十月）

濃飛學寮創立十周年記念撮影（前列中央野村先生）



（昭和三年四月十六日紅葉館に於て）

蓑洲會主催野村先生古稀祝賀會



（昭和十年一月二十五日）

七十七回誕辰記念撮影



（昭和十年二月一日常盤家ニテ）

第八回蓑洲會記念撮影（前列中央野村先生）

野村先生近影



↑ 七十七歳當時の先生（昭和十年七月）



古稀當時の先生（昭和三年）↓



（昭和十三年一月二十五日）

八十回誕辰記念撮影

最近の野村先生



新坂町客間椽先ニテ
（昭和十三年十月二十九日）



書齋ニ於ケル先生
（昭和十三年十月二十九日）

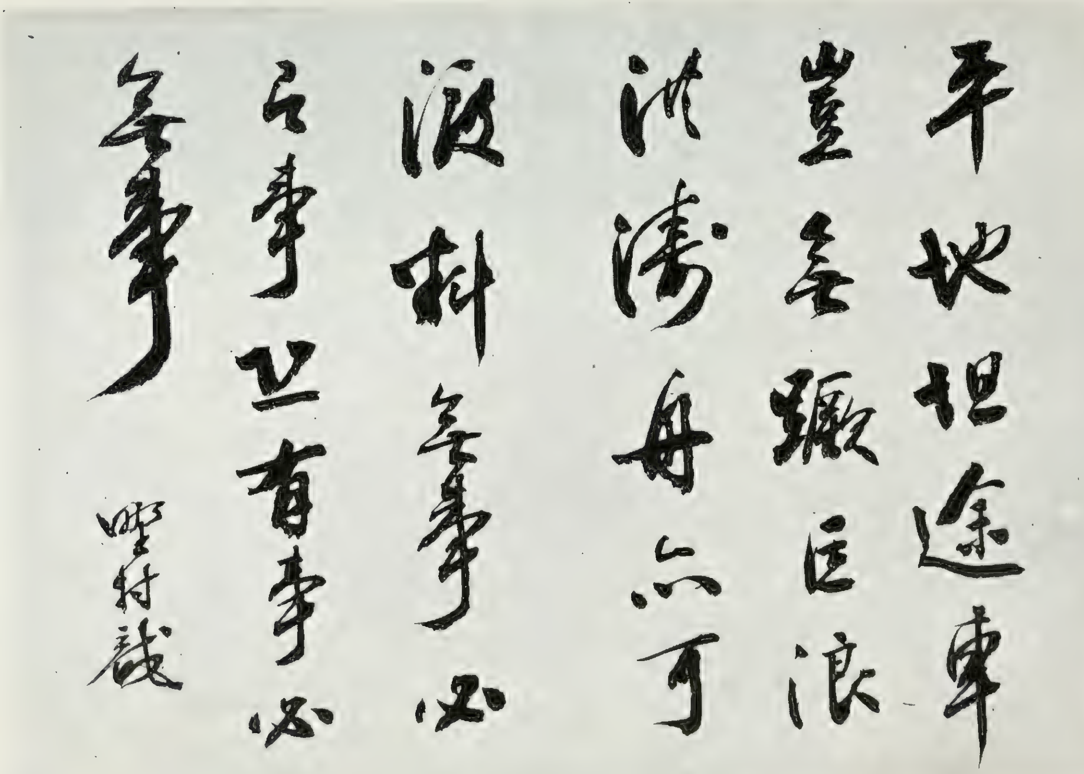


（昭和十三年十月二十九日撮影）

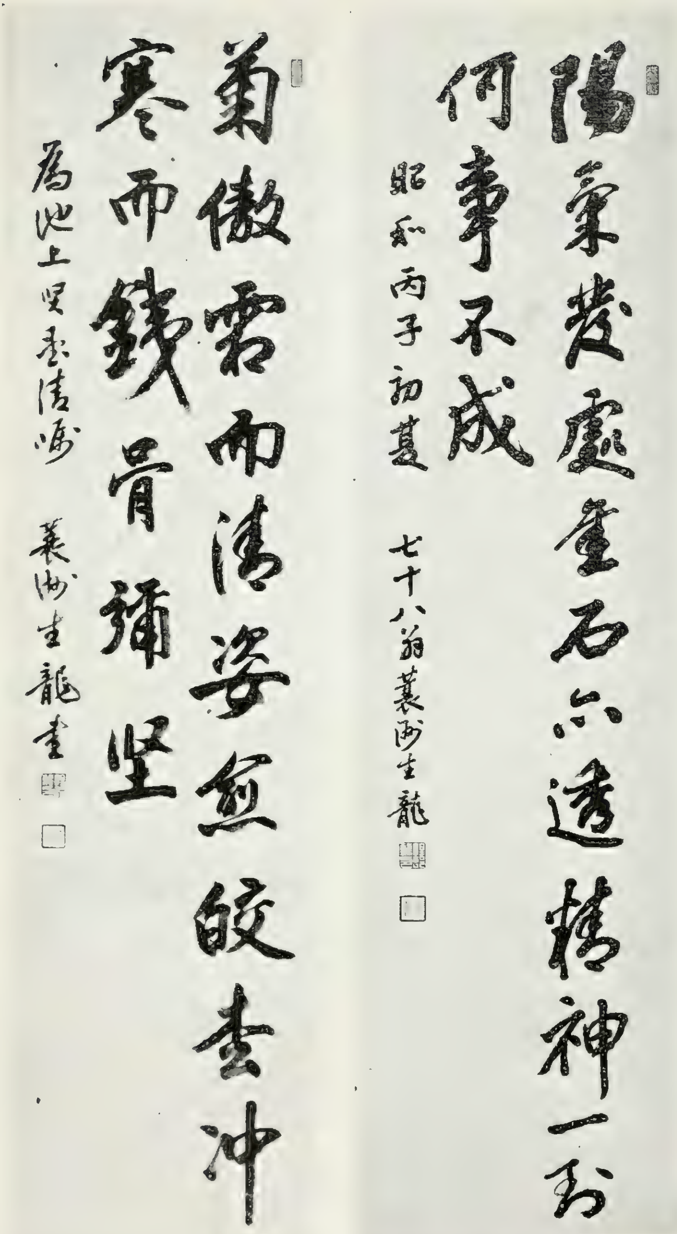
野村先生邸



野村先生揮毫ノ一



野村先生揮毫ノ二



野村先生揮毫ノ三

序

工學博士野村龍太郎先生は舊大垣藩名門の出にして我國鐵道界に於ける當世第一の耆宿たり。

先生年若ふして夙に志を斯業に馳せ多年研鑽努力學を修め業を習ひ一朝擢でられて任を鐵道建設の業に負ふや自彊姑くも熄まず北嶺南濱到る處先生の偉蹟を留め今に至る迄萬衆皆其の惠に浴す。

先生は識見高邁にして寡言謹行常に後進の啓導扶掖を以て任ぜらる予亦齡壯にして斯界に身を投じ先生に師事するもの多年其の間鐵道國有法の實施に由る準備局の設置となり或は新線路の敷設、敎育機關の創始、滿鐵會社の經營、地下鐵道の建設等先生は常に其の樞機を握り拮据經營孜々として倦まざるもの幾十年。

晩年勇退高踏花鳥文墨に親みその殘年を樂しまれんとするも弟子後進尚其の德風を慕ひ常に先生の門に出入して止まず、宜なるかな積善餘慶あり、天は健康を以て先生に幸ひし鶴髮童顏矍鑠として尚壯者に伍するの慨あり。

先生今年齡八十、多年其の惠澤に浴せる吾等同人は特に先生壽頌の議を起し先生を中心として團結せる蓑洲會々員諸彥に謀りしが衆口一致して先生の事歷を編み之を膝下に捧呈せんことを期せり。

本册子は斯界筆硯の雄者たる石井滿君の麗筆に依ると共に多年先生に親炙せる池上重吉君の協力を得て先生多年の閱歷勳功を詳敍し其の風貌動止も亦擧げて卷中に躍如たるものあり。

惟ふに人間の毀譽褒貶は棺を蓋ふて而して後定まるもの多しと雖も先生多年の德澤は洋々として既に海の如く動績亦昭々として萬古に傳

ふ。されば吾等後進子弟相計つて敢て玆に此の編を就すも人奚んぞ之を怪まん。

語に曰く「默シテ之ヲ識リ學ンデ厭ハズ人ニ誨ヘテ倦マズ何カ我ニ有ランヤ」と。これ洵に先生多年の心事にして光風霽月眞に一世の儀表たり。

終りに臨み特に一言すべきは本書の編纂に當り各方面より有力なる資料を提供せられたるの一事なり。時に或は編者を引見し或は特殊の文献を寄せらるゝ等尠なからざる便宜を與へられたるは、固より野村先生多年惠德の然らしむる所なるべきも又實に大方諸彥の高誼に外ならず、玆に深厚なる感謝の意を表す。

今や先生の傳記成るに際し編纂のことに當りたる一同に代り其の顚末を叙し謹みて先生の健康と福祥とを祈る。

昭和十三年十月下浣

中川正左

凡例

一、本書の記述は略年代順に從ふと雖も、時に順序の前後をかへりみず、事實を敍したるものなきに非ず。

一、本書中先生を敍するに方りても敬語を省きたる場合多く、他の人物については、故人はすべて敬稱を略し、現在の人物についても敬語を用ゐざることゝせるは、主として人物事件の活躍を敍する便宜に出でたるに外ならず。茲に謹んで先生はじめ各位の御諒承を請ふ次第なり。

一、本書の作成に方りて、貴重なる資料を提供されたる各位の尊名を記し、謝意を表すべき筈なるも、書中關係箇所には、なるべく材料を寄せられたる各位の尊名を記する事に努めたるを以て、こゝに之を省略することゝせり。

一、本書稿を起したるは昭和十二年八月にして、漸く今秋稿を脱するを得たり、然も尚未定稿たるを免れず、他日の修正に待つもの多し。

野村龍太郎傳・目次

附　錄

野村龍太郎傳

第一章　野村先生素描

野村龍太郎先生は八十歲の今日においても尙ます〳〵健康にして、後進のために種々盡力さるゝのみならず、社會のため邦家のために盡瘁されて倦むところを知らずと云ふ有樣である。之れ洵に芽出度限りである。こゝに先生の過去を叙するに方つて先生について概要を叙述しておかう。

先生は大垣藩の名門に生れ、風雲急なる幕末維新の頃に人となり、早くも上京して新らしき學術を學び、技術家として社會に立ち、東京府より轉じて鐵道に入つた。

蓋し鐵道に入ることは先生の最初からの希望であつたと云ふ。先生が大學を出られたのは明治十四年であつて、東京橫濱間に鐵道が敷設され、畏くも　明治天皇親しく開通式に臨御せられてより九年の後であつて、鐵道に對する一般の知識漸く普及し、鐵道を以て有利なる事業なりとするの思想が漸く熾ならんとする時代であつた。されば、先生が夙に斯の業に着眼して東京府より鐵道局に轉ぜられたのは實に時代を知るの明があつたと云ふべきである。

其の初めは現場方面の工事を擔當し、勉勵努力、建設時代の鐵道に貢獻されるところが少くなかつた。殊に、横濱國府津間に、天下の嶮たる箱根のトンネルに、甲武線に、濃尾大地震の復舊工事に、福米間の板谷トンネルの難工事に、野村先生の殘された功績は顯著なるものがある。今日においても鐵道を利用しこのあたりを旅行する者は、野村先生の建設の勞苦に對して感謝の意を表すべきである。

其の後先生は現場から本局本院の勤務となり、歐米を視察して先進國の鐵道交通の技術及び諸規程並に經營の實際を見學して歸朝し、次第に累進して鐵道建設部長となり、運輸局長となり、技監となり遂に鐵道院副總裁となられた。

先生は幼年の頃から神童と云はれた。文章に達し書道を極め、しかも品性の高雅なる氣節の崇高なる點に至りては父藤陰先生と母堂鈴子の感化の賜ものとは云へ、また以て天稟の如何に拔群であつたかを知るに足らう。

世には十歲にして神童と謳はるゝ者、廿歲卅歲にして漸く凡化する者がないでもないが、先生は天性の英才に、自己の修練と彫琢とを加へ、ます〳〵大成し、官に仕へては最高の地位を占め、しかも其の學識に對しては工學博士の榮冠を授けらるるに至つた。

しかも先生の業績は官界に止らずして、出でゝは二度、南滿洲鐵道株式會社に總裁又は社長として赴任し功績を大陸の交通事業界に殘されてゐる。歷代の滿鐵の總裁、社長及び理事長たりし人にして、就任前後二回に及びたるは、僅かに先生一人あるのみである。

其の後先生は民間の事業家より懇望されて、或は發起人總代となり、創立委員長となり、會社成立後も推されて社長に就任されたるもの二三に止らない。東京地下鐵道會社、湘南電氣鐵道會社、南武電氣鐵道會社、大湊興業株式會社等は先生の德望と力とによつて今日あるを得たものと云つて過言でない。勿論かゝる民間事業會社は、其の時勢により社運に消長盛衰なしと云ふことは出來ないが、之等の事業は何れも國家公共のために重大なる使命を有するものであるから、かゝる事業を通して先生が、我國產業界に貢献されたる功績も亦鮮少ならざるものがあることを知るべきである。

更に先生は實によく後進者の世話をされた。人格高く品性のすぐれたる人には往々にして獨り自ら淸くして足ると云ふ樣な考の人もあるけれども、先生はよく己れを忘れて後進の爲めに奔走された。

また多くの人を世話するものは、時に自ら親分を以て任ずるの風があるが、先生は全然此

れ等の人とは趣を異にし、後進者の人格を尊重して敢へて親分風を吹かす如きことを微塵もされなかつた。否先生の性格にはかゝる分子が少しもなかつたと云つた方が正當であらう。

また先生は鐵道界、土木界及び鄉里の關係の幾多の學會、協會、教習所、學校、養成社、寄宿舍等の代表者又は幹部として貢獻するところが少くない。

現に舊藩主戸田家においては、協議員として、重大なる相談に與つて居られる。政友會總裁原敬は野村先生を二度滿鐵に推薦したる人である。しかも榊田清兵衛の如きは先生の人格學識を尊敬し床次竹二郎に

『野村さんは早く勅選になれる様にして上げて下さい』

と云つてゐた。床次、原兩氏の間にも野村先生を勅選に推薦するの議が熟してゐた時、原敬は突如東京驛頭において凶刄に殪れて仕舞つた。其の爲めに先生が勅選議員たるの機會を失はれたることは、邦家の爲めにも一大損失であつたと謂はねばならない。

先生の後進者は約十年前から相謀つて「濃州會」を組織し、時々相會合して、先生を中心とし、先生から追懷談や、江湖の漫談を聽くことにしてゐる。先生も亦悦んで其の會に出席し端然として居られるが、杯をあげては左右を顧みて快談される。洵に一座藹然たるものがある。

會名の「蓑州」は先生の雅號からとつたものである。

先生は先夫人との間に十人の子女がある。不幸にして其の中六人を喪つたが、駿吉氏陸雄氏美惠子さん及び壽惠子さんの二男二女は、夫々幸福なる生活を營んでよく先生に孝養をつくして居る。

先夫人の歿後尾崎男の未亡人を迎へたが、この夫人も亦他界された。

先生の趣味は廣いとは云へない。其の最も長く、其の最も深きは酒杯にありと云ふも過言ではない。然し先生の酒は君子の嗜好であつて、杯に親しまれる間も先生は端然として、少しも亂れない。酒も亦先生に至つて眞に天の美祿たる所以を發揮するものと云へやう。

其の他は謠曲、書畫等をあぐべきか。

先生の詩歌は藤陰先生より二代に亘るものである。其の作品中には珠玉の如く輝けるものが少くないので、本書の附錄として其の一部分を收めておいた。

第二章　名門野村家

一、誕生と郷里大垣

工學博士野村龍太郎先生は、美濃國大垣の出身である。

俚謠にも

『お天氣よければ大垣樣の時の太鼓の音の好さ』

と云ふ。大垣は美濃國安八郡の中央に位し、揖斐、杭瀨の清流に圍繞せられ、北は東山道を扼し、南は東海道を控へ、水運の便は伊勢灣に通じてゐる。德川時代は戶田氏の居城で、封十萬石、其の內容は、分家の戶田淡路守の一萬石、德川幕府御藏入預り七萬石を合せて、所轄合計十八萬石の城下であつた。

今日においても人口約五萬、この市の出身者は戶田伯爵を舊藩主と仰いで尊崇し、東京をはじめ各地に多くの名士を送つてゐる。

市內には今尙、大垣城阯が殘つて居り、繪に見る樣な天守閣が、空に聳えて居る。

抑もこの大垣城は天文四年三月、美濃の守護土岐氏の一族、宮川吉左衛門尉源安定の創築したものであると云ふ。

始め地名は牛屋村大尻寺内と云ふ在郷で、牛屋東大寺の砦と云ひ、僅かなる掻上屋舗であつたが、安定、本丸等の構の狹少なるを以て、故城の北方から西南に繞れる牛屋川の流を要害に取入れ、大柵を附繞らし、城郭を廣めたために、大尻を改めて『大垣の城』と稱するに至つたと云はれてゐる。

この城は天下分け目の關ヶ原の一戰には、重大なる役割を勤めて居る。

慶長三年八月に前關白たりし豐臣秀吉薨じてより、關東の德川と大阪陣との間はます〳〵險惡となつて來た。五年六月十五日、家康が諸將と共に上杉氏を討たんと大阪を發して急に關東に赴いた。依て、石田三成は佐和山の蟄居を出でて、小豐公を擁護すと云ふ名目の下に關西諸侯に家康退治の擧を謀つた。

馳せ集る者西國五十餘將、兵十數萬と稱せられた。三成は自ら八月三日大阪を發し佐和山に歸り、同八日兵六千七百を率ゐ美濃垂井に至り大垣城主伊藤彦兵衛盛宗の家臣に旨を諭し『今回秀頼公の御代官として當地に出張、關東一味の軍士を滅さん爲其の方の城を借用し

たし、在郷へ退き候へ』

と交渉したが盛宗はなか〳〵承諾しなかつたと傳へられてゐる。だが、

『秀頼公の上意なり』

と云ふことで、盛宗も城外に出で、今村の里に搔上の要害を構へて陣取り、十一日三成大垣城に入り、之を本據として、大阪より島津義弘・豊久、小西行長等を招き城中において劃策する所があつたと傳へられてゐる。

かくして關ヶ原の合戰となるや、西軍の諸將はこの大垣城に會して屢々戰を議した。宇喜多秀家が、大谷吉繼、長束正家等と共にこの城を守るべきことを獻策して三成の容るゝところとならず、三成は關ヶ原に出でて戰ふべきことを自ら主張して、却つて敗軍の將となつたことは人の知るところで、九月十四日三成はこの城を去つて、其の女婿福原長堯に七千五百の兵をつけて留まらしめた。

既にして關ヶ原の一戰に三成敗るゝや、關ヶ原に行くことを得ざりし家康方の水野勝成は大垣城を攻略してゐたが、二十二日禪僧二人をつかはし長堯を諭して開城せしめた。長堯は士卒の救命を條件として開城し、自らは朝熊山の麓、永松庵と云ふ禪寺で切腹した。

これが大垣城に因む關ヶ原合戰の物語の一部である。
かくて大垣は古來城郭の宏壯なること、市街の殷賑なること、軍略上、交通上、商業上樞要なる地として知られてゐる。
また明治維新前後に大垣藩が活躍したことも、見のがすことは出來ない。

共の一例は、嘉永六年六月三日アメリカの提督が、軍艦を率ゐて浦賀へ來た時のことである。當時の浦賀の町奉行は、戸田伊豆守氏榮とて、大垣藩の末家、戸田定之助の分家に當つてゐた。さればペルリ來るの情報も、翌四日には既に大垣の權臣小原鐵心の許に詳細報道されてゐた。

この時も、鐵心は主君氏正公の命により、見舞の使者を浦賀に派遣し、更に家臣の中から警衞のため百三十餘人を進發せしめたことがあつた。また當時の狀勢は、大垣に手にとる如く報告された。

ペルリ再度の渡航の時(嘉永七年正月十九日)鐵心は、自ら浦賀に赴いた位である。
浦賀と、大垣がかくも密接な關係を保ち、浦賀における物情は細大洩らさず大垣に分つて來た。

この一事は大垣を語る場合において、見のがすことは出來ないと思ふ。

蓋し大垣は、京都江戸交通の要路に方り、維新の風雲の如きは東西の狀勢を最も早く知り得る地位にあつたと云つてよい。さればこゝに着眼して、小原鐵心、野村藤陰等の諸先輩のことを書けば、まさに木骨を中心として『夜明け前』が書かれた樣なことが書けると思はれるが、本書の使命はそこにないので、ごく要點だけをつまんで、當時の情勢を偲ぶと共に野村先生誕生時代の時勢を知るの便に供することにしたい。

安政五年幕府はいよ〳〵アメリカ使節と假條約を結ぶことになつた。

而してわが野村博士は其の翌年、安政六年正月二十五日の生れである。

卽ち幕末、維新の風雲はます〳〵急となり、遂にいはゆる安政の大獄となつて現はれた年で、幕府が頼三樹三郞、橋本左內、吉田松陰等を死刑に處したのも、實にこの年の出來事であつた。

この內外の物情恟然たるの時に方つて、野村先生は、大垣の城下の町外れ、藤江に呱々の聲をあげられた。

子供の時から博士は、瞳光が二つあると云はれた。豐太閤は双瞳の人として知られてゐる

が、これは、昔から神童又は麒麟兒と云はれた人の特色とも見られてゐる。されば幼いときから博士は、眼光人を射るものがあつたと云ふ。

父君は藤陰先生、母君は鈴子と呼ばれた。

思へば先生は、息づまるが如き日本の非常時に呱々の聲をあげられたわけである。安政はやがて萬延、文久、元治、慶應となり、明治となり、時代は急テムポを以て開展されてゆくが、しかもこの時代にも大垣藩は大きな一と役を受持つてゐたことを見のがすことは出來ない。明治のはじめの頃、

『右は薩州、左は長州、兩手に丁の字、九曜の星』

と云ふ俗謠が大垣の城下で流行した。右は薩州と云ふのは薩州の袖印は右に一線をつけてゐたからで、長州は左に一線であつた。大垣は兩袖に丁字形の白線をつけてゐた。九曜の星はいふまでもなく大垣藩公の紋所である。

伏見鳥羽の戰に惜しくも朝敵の名を受けたが、其の後は小原鐵心等の名臣の苦心によつてよく其の汚名を雪ぎ、東北の戰等にも大垣藩の兵は大に活動してゐる。

而して、この目まぐるしき世相を眺めつゝ、藤陰先生の一家は、其の子供を育成し、其の

成長を樂しむでゐたのである。

然らば其の家庭は如何、こゝに野村先生の父君母君等について少しく語るであらう。

二、先生の父君母君

——藤陰先生と夫人——

先生の父君、野村藤陰先生は名は煥、字名は士章と云つた。藤陰は其の號である。幼い時は龍之助と云つた。

藤陰先生の父は龍左衞門と云ふ人であつた。大垣藩の步卒で井上左衞門の組下に屬して居つた。母は大野郡の下方村の百姓加納某の嫡女である。文政十一年正月廿七日に藤陰先生が生れた。

藤陰先生は幼少の頃から學問が非常に好きで、然も人に優れたる才能の持主であつた。天保十二年元服してから藩校『致道館』に入つて三年の間大いに勉强した。十五年に年十八歲にして藩學の助敎に補せられた。助敎として働く事數年間、よく業務に勤めたので賞品をさづけられた事がある。嘉永三年に父の龍左衞門が沒した。

そこで其の後を繼いで、母に願ひ許を受けて大阪に遊び、後藤松陰の門下生になつた。翌四年、更に津藩の齋藤拙堂に學び、學業が大いに進んだ。

安政元年に再び大垣藩に歸つて藩校『敬敎堂』の講官にあげられ、其年の十一月に藩の命を受けて江戶に行つた。公暇を以つて鹽谷宕陰の門に學んで、この間に學業はいよ〳〵進んだ。職務に對しても非常に忠實であつたので、しば〳〵金品を賜はつた。慶應元年に學館の督學參謀に進み、尋いで多年の功によつて祿五十石を賜はつた。

されば其の父は大垣藩の步卒であつたが、藤陰先生に至つて甚しく進出した譯である。當時海內が非常に多忙で、各藩に於て盛に文武の道をはげんだ。この大勢は云ふまでもなく大垣藩にも影響して、人才登庸の道が開けた。殊に藩老小原鐵心が深く藤陰先生の人となりを認めて學政を託するに至つた。この小原鐵心の知遇を受けるに至つて藤陰は非常に感奮激勵し、身を以つて公に奉ずる決心をした。

されば時には藩侯に侍講し、又時には政治の機密に參與し、又時としては藩の學校に敎鞭をとり、多くの若き秀才を薰陶した。而して藤陰先生の敎育の方針は議論を避けて實際を重んじ、廉耻を重んじ禮節を尊び、鄉土の人心に貢献する處が多かつた。

されば一藩の人望が翕然として藤陰に集まつた。

維新の時の大垣藩の藩主は特に勤王の功顯著なものがあつたが、これ全く一面に於て小原鐵心の補翼によるもの多きとゝもに、他の一面に於て野村藤陰先生の力もまた實に尠くなかつた。

明治元年の十一月に評定局の設があつて藤陰先生は擢きんでられて上局副總裁になり、郡年寄に亞ぎ縣奉行加役を兼ねた。同年督學を拜し祿五百石を賜はつた。洵に著しき躍進ぶりである。

後大垣藩の權少參事に進み、專ら學問の方に關係してゐた。廢藩置縣に及んで尙ほ學務を管理して居つた。

ところが、此の頃になつて

『藤陰氏をこのまゝ大垣におくのは惜しいものだ』

と云ふことが先生を知る程の人の間に云はれて來た。殊に井田讓は

『田舍におくのは人物經濟上から云つても惜しいものだ。東京に出て一つ働いたらどうか』

と薦めた。藤陰先生は勿論

『いや、わしはもう年が年だし、今更東京へ行つて働かうとは思はぬ』
と云ふのを無理にすゝめ、明治五年八月嫌がる藤陰を東京にひき出して、大藏省に出仕させたのである。役名は大藏省租稅寮九等出仕と云ふことであつた。
この井田讓と云ふ人は井田磐楠男の父である。而してこの藤陰先生東京へひき出しの一と幕には、檢査院の部長をしたことのある安藤氏も一と役を勤めてゐる筈である。
かくして嫌々ながらすゝめられるまゝに東京へ出て來た藤陰先生は、日本橋あたりの酒屋に下宿して居て、大藏省の租稅局に勤めたけれども、これは長く續く筈はなかつた。元々、東京で役所勤めをすると云ふことは藤陰先生の本心でなかつたので、翌明治六年三月、母の病の故を以て辭職して、郷里に歸つて靜養したのである。
蓋し藤陰先生はあくまで世事の嫌ひな、純然たる儒者であつた。到底紛々たる世の俗務の間に生活の出來る人ではなかつた。この性質は、多分に野村先生も受け繼いで居られる。若し野村先生が當代の學問をされなかつたならば父藤陰先生と同じく俗務にたづさはることは好まれなかつたであらう。
其の時に藤陰先生には次の樣な述懷の詩がある。

家江自ニ一背ニ煙波一　奈ニ此鷗盟誓約一何
又是蕭風鱠魚候　要下投ニ軒冕一著中漁蓑上
誤脱ニ彩衣一著ニ朝服一　歸心夜夜夢ニ慈顏一
決然今日上レ程去　去向家郷養老山

猶ほ藤陰先生の事についてもう少し述べて置かう。

藤陰先生は大藏省の役人を辭して郷里大垣に歸つても專ら學問を主として敢て他に心を散らさなかつた。明治元年に私塾を開いて『鷄鳴塾』と云つた。この塾は大藏省に出仕した爲に一寸閉鎖されて居たけれども再び郷里に歸りてこの塾を開き、傍ら興文義校教員總轄、師範研習學校監事、同校豫科教員、岐阜縣第一中學兼岐阜縣師範學校教員、興文義校附屬豫備學校漢學教師、華陽學校大垣分教所教諭、同本校教諭に歴任した。されば藤陰先生の教を受けた秀才は其の數を知らない。おそらく西濃より出て社會に多少なりとも知られたるものは盡く藤陰先生の教を受けたものであると言つていゝ。

其の間に戸田葆堂等と共に『鷗笑社』と云ふのを創立し、鷗笑新誌を發行して斯文の振興に力を致した。この運動に參加した秀才もかなり多かつた。明治十八年の七月に教諭の職を

辭して其後明治二十七年に大垣中學分校の教授を囑託されたけれども、其の職にある事わづか一年にしてこれを辭した。

それ以來、專ら家にあつて閑雲野鶴の生活を樂んで、時に旅行し、時に書物を讀み、悠々たる生活をして居つた。明治廿九年の十一月に野村先生は洋行に先立つて、父藤陰先生を東京に迎へた。

三十二年二月上旬、藤陰先生は夫人と共に大垣に歸省し、親戚戸田銳之助氏方に寄寓した。久々で藤陰先生夫妻を迎へた大垣の親戚故舊の悅びは一方ならぬものであつた。先生夫妻も亦日々なつかしい人達の來訪を受けて非常に滿足の有樣であつた。だが、人生と云ふものは分らぬもので、ここに藤陰先生の地上における最後の生活が營まれてゐるとは誰れが思ひ設けたであらう。

野村先生の當時の日記には

二月初旬、家大人並ニ母堂郷里大垣ニ歸リ親戚戸田銳之助氏方ニ寄寓、日々親戚故舊ノ訪問スル者多ク又、彼此ノ筵席ニ招カレ或ハ舊門生ノ歡迎會ニ臨ミ頗ル多忙ナリシ

とある。然るに歸京に先立ちてふとした感冒から肺炎を併發し、夫人及戸田家の人々をは

じめ故舊の人達の心からなる看病の效果も空しく病勢は少しも衰へなかつた。

されば野村先生の日記には

三月十日、夕刻ニ至リ、家大人ニハ少シク感冒ノ兆候アリシヲ以テ其ノ翌十一日醫師ノ診察ヲ受ケラレシニ熱氣ナク、靜養ヲ要スルトノコトニテ臥蓐、翌十二日モ亦別ニ異ルナク十三日ハ稍輕快ナリシヲ以テ母堂並ニ親戚等モ大ニ安堵ノ思ヲナセシニ十四日朝ニ至リ俄然肺炎ニ變ジ苦悶甚ダシク醫師數名席ニ侍シ治療ニ怠ナカリシモ藥石效ヲ奏セズ十五日午前二時溘然遠逝セラレタリ余ハ十四日朝急電ニ接シ蒼皇行李ヲ理シ午後十二時半新橋發ノ列車ニ乘リ歸省ノ途ニ就キ十五日午前二時半大垣ニ着シ直ニ戸田氏方ニ至レバ已ニ瞑目ノ後ニ在リ遺憾之ニ過ギズ

行年七十三　法名善道院藤陰煥章居士

十七日正午戸田氏方ヲ出棺船町全昌寺ニ於テ葬儀執行、導師京都寂光寺常日靜、脇導師常隆寺、本顯寺、實相寺及ビ寂光寺隨從ノ兩僧、諷經、圓通寺、全昌寺、誓運寺、大泉寺、長勝寺、乘蓮寺、覺養寺等ニシテ儀式執行後切石村ニ於テ火葬セリ

此日會葬者中學校職員生徒一同、興文六街西小學校職員並高等科生徒、親戚故舊門生等

ヲ合セテ千五百名許リナリ式場ニ於テ中學校職員總代柴崎鐵吉氏、門人總代小野正弘氏、小學校教員總代廣瀨三策氏、中學校生徒總代某氏等ノ悼辭アリ頗ル盛葬ナリキ遺骨ハ大垣冋向庵並ニ東京本鄕菊坂長泉寺ニ分埋シ墓標ハ長泉寺ニ建設セリ

とある。

先生のこの詳細の日記を見て、如何に先生が孝心深く、藤陰先生の葬儀の盛なりしことを以てせめての心やりとされたかゞ分らう。

而して、當時の野村先生が如何なる社會的地位に居られたかを顧ると、先生は明治三十一年二月歐米視察の旅より歸朝し、遞信技監に任ぜられ高等官二等に叙せられて居る。正五位勳四等にして鐵道會議々員、東京市區改正委員であつた。

其の後技監の職は官制改革の爲廢官となり、先生は勅任遞信技師、正五位勳四等、遞信省鐵道局設計課長心得、兼營業課長心得であつた。

されば先生は、父藤陰の葬儀にもこの資格を以て參列された譯で、父の葬儀に列する子としての地位においては實に堂々たるもので、父君としては思ひ殘されるところがなかつたことが察せられる。

後に門人達が相謀つて碑を大垣城の陲に建てゝ小野湖山の還文を刻んだ。

藤陰先生の夫人は増田耕曹の長女で鈴子と呼ばれた。天保十年四月五日の生れである。藤陰先生に嫁して貞淑の聞え高く、三男一女を生んだ。野村先生は其の長男である。弟が虎次郎、大藏省主計官である。先立ちて沒した。三男は喜三郎夭折してゐる。女は廣子、戸田鋭之助氏に嫁してゐる。而して吾が野村先生は小原迪氏の女を娶つてゐる。卽ち小原鐵心の嫡長孫である。鈴子夫人は賢母良妻の鑑とされた女性で藤陰先生には内助の誠をつくし、其の子女に對しては愛育至らざるものなく、野村先生の今日あるは聖人と呼ばれた父君、賢母の名高き母君に負ふところ甚大なるは申すまでもない。

藤陰先生に就いては其の人となり端正、溫厚にして寡默と謂はれてゐる。而して其の風采は野村先生によく似て居つて、其の言葉はおだやかであつて、而も眼中に異彩ありと謂はれてゐる。人をして自ら禮を正しくして狎るゝ事能ざらしむると謂はれ、其の人を敎ふるに當つては諄々として倦む事がなかつた。たまく其の弟子に禍をなすものがあつても決して大聲で怒る樣な事はなかつた。むしろおだやかに敎へて自ら反省する樣に仕向けて居つた。されば藤陰先生のことを人呼んで『聖人』と云つた。

藤陰先生は親に仕へては非常に孝行であつた。幼いときに父を失つて家の生活は豐ではなかつた。然るに母の加納氏は非常に賢く而も貞淑であり、一家の經濟は極て巧であり家政井然として整つて後顧の憂がなかつたと謂はれる。其の母の力によつて藤陰先生は社會に成す事が出來た。この母にしてこの子ありと謂はれてゐる。

藤陰の先輩として藤陰を引き立てた家老小原鐵心は性質が非常に豪邁であつて喜んで海內の豪傑と交はつた。談論風發、聲氣相加はると謂はれたこの人が藤陰と交るに及んで、積極的の鐵心と、溫和な藤陰とが人格的に相制して益々尊敬し合つたと云ふことも故無きにあらずと謂はれて居る。

藤陰は、學問は經史百家に涉り、最も左氏の硏究に深かつた。殊に詩文筆札の如きは鄕黨これを貴ぶこと甚しく其の文章は一代の名文と謂はれて居つて、著書としては左氏傳評釋、藤陰詩文稿、其の他世に發表されざるものもかなりあつた。

明治四十一年に野村先生は父藤陰の遺稿を集めて『藤陰遺稿』と名付けて出版した。

大正四年十一月、大正天皇の卽位の大典を擧げさせられるに當つて特に野村藤陰生前の勳功を思召され從五位を追贈されて居る。洵に一門の光榮と云ふべきである。

翌五年四月に大垣公園の内の墓碣の前に於て盛大なる贈位奉告祭が行はれた。

昔から『醫者に三代なく學者に二代なし』と謂はれてゐる。野村藤陰先生は大垣に於ける一代の學者として其の名を謳はれたことは斯の如くである。然るに吾が野村先生も亦其の後を繼いで新時代の學問を受けて鐵道の大官となり、學問に於ては工學博士の學位を受けて居る。よく二代に渉つて其の名を謳はれたことは、蓋し例外的の事實とも云ふべきもので其の父共の子共に精勵して以て天分をよく發揮し國家社會に事へるものと謂ふべきである。

三、小原鐵心と藤陰

ここで小原鐵心のことを書いておく必要がある。この人は云ふまでもなく戸田家の權臣であつて、藤陰先生を引き立てた關係もあり、更に、野村先生の夫人の祖父に當る人でもあるからである。

小原鐵心と云ふ人は政治的の才幹があり、縱横の機略を持つて居つた。所謂大きく打てば大きく鳴り、小さく打てば小さく響く鐘であつて、時代の必要に應じてそれ相應の立派な働きを現した人である。

其の天分は豐かであり、其の上に學問が好きで禪に入つて其の神機を會得し、居乍らにして經國濟世の器をそなへて居つた。

鐵心の先生は齋藤拙堂であつて、卽ち野村先生の父藤陰もこの拙堂の門に學んだことのあつた人である。拙堂は天下の文豪であつた。この拙堂の敎へを受けて鐵心の學問は非常に進んだ。鐵心の政治的着眼と云ふものは、所謂『明を貴び察に失せず』と云ふものであつた。常に藩主の戸田公に仕へるに極めて忠實であつた。實際に於て小原鐵心が藩の政に力をそゝいだのは嘉永の頃からである。

徳川の幕政は其の十年以前、天保年間に於て弊害が著しくなつてその弊風は自然と大垣にも傳はつて來た。殊に全國を擧げての天保の大饑饉では、庶民は文字通り塗炭の苦しみに喘いだ。しかのみならず大垣に於ても當時揖斐川の出水にあらゆる堤防は破壞され、家屋は浸水され農作物は大害を加へられた。これが一度や二度ではなかつた。

其の爲に藩の住民は疲勞困憊の極に達した。この時の藩主は戸田家九代目の氏正公であつた。名君の聞え高き人である。主として領地の中に奢侈を禁じられ善政を布く事に苦心されたけれども、其の效果が少かつた。

此處に於て氏正公は慨然として一大決心を爲し藩政の大改革を斷行する事にした。かくして用ひられたのは小原鐵心であつた。氏正公が小原鐵心に藩政改革の大任務を命じたのは、實に嘉永三年の事である。

一代の傑物鐵心が藩公の信賴に感激して其の學識と手腕とをかたむけて政治の改革に着手したのはこの時からである。而して藩公に薦めて自己多年の主張である、明を貴び察に失せず、政治家の本領を以つて事に當るべき事を以てした。

小原鐵心がこの政治改革に當り、先づもつて手本としたのは松平定信の幕政改革であつた。而し乍ら彼はそれで滿足しなかつた。それで恩師の齋藤拙堂の著書「救荒事宜」が洵に適切なる名著である事を發見して、先づ藩主にこれをすゝめて印刷し、領内一般の役人や地方の名ある人々にこれを分ちて、其の書物の中に書かれたる政治の大項をよく研究する樣にすゝめた。

また自ら丹後の宮津に出かけて當時宮津藩の政治の改革を實行した中山爾三に就いて親しく其の意見をたゝき、鐵心自らが起草した「矯弊私記」を示して、果してこれが實際に行ふべきものであるか否かを尋ねた。

斯くの如き實際調査の結果、確信を得て、自分の胸中に計畫して居つた政治の刷新を行つたのである。

當時藩公は勿論、鐵心自らも粗衣粗食に甘んじ、至誠を以つて政治の職に當つた。當時の記錄を見ると、嘉永四年八月の頃、祖先の供養を全昌寺と云ふ寺で行つたときも、眞に一汁一菜、といつてもいゝ程度の御馳走であつた。堂々たる十萬石の大名、戸田家の年回法事に於ける献立が、小作人の供養にも及ばない程度の質素なものであつた。

これを以つて見ても、其の平常如何に質素、儉約であつたかゞ解る。

鐵心のこの勤儉朴行の政策は美事に效を奏して疲勞困憊の極に達して居つた大垣藩の民政の狀態は次第に回復に赴いた。

或る者は、鐵心を大言壯語をもてあそぶ非實際家の如くに見て居つたけれども、それはこの人の眞實を知らない者の觀察であつて、鐵心の見識は常に現實より一歩高い處にあつた。そして物を達觀する特長があつた。また同時に其の一面に於て非常に綿密な實行力をそなへて居つた。これがあの大言壯語をする人かと思はれる程着實な實行力をそなへて居つた。

であるから彼が多くの人々の間に往來して酒を飲み、詩を作り、人を見る事あたかも眼中

になきが如き場合を見ては、殆んど幕末時代に於ける壯士の如き氣持がするけれども、而も他の一面に於て理財の才があり人に卓絶したる見識を持つて居つた。

後年明治政府が適材を適所に置くと云ふ趣旨によつてこの人を大藏大臣にも比すべき地位に推さうとした一事を以つてしても、如何に議論家にあらずして實際の手腕をそなへて居つたかを知る事が出來る。

斯くして嘉永安政の難關を美事に打破して、大垣藩の政治の改革に成功したと云ふ噂が四方に傳はるや、萬延元年九月、徳川幕府は大垣藩主を特に江戸城西丸に召し出し破格の推奬の言葉を與へた。大垣藩主の喜びは云ふまでもないが、歸來藩主は鐵心に對し特別の褒辭を與へ、五百石の祿高を更に三百石加增して八百石にされた。

かゝる事は實に、何れの藩に於ても稀の事である。

又鐵心はひとり理財家であつたばかりでなしに大いに言論を尊重し、人才を登用することにつとめた。鐵心は常にかう云つて居つた。

『非常の改革を起して舊弊を一新する機會に當つては、なるべく衆議公論を貴び、衆智を集め善政を行ふ樣にしなければならない。言論、壅塞して下情に通ぜざる事は古今の通弊であ

るから、先づこれを打破し、大いに言論の道を開いて人才の登用をつくる事が改革の要義である』

野村先生の父藤陰が小原鐵心に認められて拔擢されたと云ふのは、洵に見る人も人であり、見られる人も人であつたと云はなければならない。

四、先生の幼少時代

野村先生の生れた藤江村字大門は大垣の城下に續いて街道を北に入つた十四、五軒の屋敷町であつた。舊幕の頃には街道筋を上り下りの旅人が大垣の町に入る前に一休みして草鞋のひもをしめなほし、其れからいよ〳〵町に入ると云ふ處であつた。

從つて其の繁華はこと〴〵く大垣の町に奪はれて、こゝは何時までも淋しい町外れの宿場にしかすぎなかつた。只、宿場が東海道だけに晝も夜も旅人の往來は相當に頻繁であつたから、其の表面は賑かさうに見えた。殊に江戶に參覲交代する中國、西國の大小名が行列を整へて、

『下に〳〵』

『寄れッ――』

と云ふもの〳〵しい掛聲に長槍大駕、あたりの庶民達を威壓しながら往復をしたものである。それだけに其の往來筋だけは行列の度毎に相當繁昌した。

明治維新の頃には尾張大納言を總督として長州征伐の幕府の軍勢がラッパを吹き、太鼓をたゝいて歩武堂々と藤江の宿を通つて京都に上つたが、忽ちにして一敗地にまみれ算を亂して逃げ歸つたと云ふ。

今は町の北裏を東海道の線路が東西に走り、大日本紡績の大工場が建てられるなど時代の變遷に伴ふ變化が、この淋しい場末の村にも眺められ、既に大垣市に編入されて昔とはまるで變つて、繁華な土地になつてゐる。

この一帶の風光は町の東に新規川の清流が曲折して、北には牛屋川がゆるやかに流れ、其處に樹木がこんもりと茂つて優れた風情を見せてゐる。

女傑の江馬細香はこの村から出てゐる。細香女史には賴山陽が密かに心を寄せて居つたとも謂はれてゐる。或時・山陽から細香を是非貰ひ度いと云ふ申出があつたのに對して、父蘭齋は單獨でこれを拒絶してしまつた。後になつて娘細香もまた山陽を意中の人として居つた

と云ふことが解つて父は使を京都に走らせて縁談のよりをもどしにかゝつたけれども、山陽は其の時すでに小石玄瑞の養女梨影をめとつて居つたので其の目的は達しなかつたと云ふ挿話もある。

細香は晩年に、星巖や、藤城等と『白鷗社』を結び詩文を講じた。女史の墓は今でも藤江の禪桂寺に殘つて居ると云ふ。

かく世の中が騷然として至る處血に彩られた。幕末の多忙な事件が展開されて居つた時代に、藤江の村に藤陰先生の長男として先生は生れて、育つたのである。

其の頃の野村家と云ふものは、何百石と云ふ大祿をはんで居つた譯ではないが、さりとて衣食に其の日を追はれて居ると云ふ程の貧しさではなく、家柄としては父の學問と人格によつて相當の格式は認められて居つた。

父の藤陰は前にも書いた通り儒者であり人格者であり、而も子供の養育に就いては相當に心を用ひた人であつた。子供達が惡戯をしたからと云つて、これを頭から怒つたり、責めたりはしなかつた。だが、少し位いゝ事をしてもすぐにこれをほめそやす樣な事もしなかつた。只、常に自分は幼少の頃から貧苦の間に育つて勉强した苦心の思出話を子供達に淳々と說い

て聞かせた。そして

『幸にお前達はさうした苦勞をせずに學問が出來るのだから一生懸命になつて勉强して一層偉いものになることを心がけなければならない』

と訓戒し、又勵ました。同時に藤陰先生は更にかう云ふ話をした。

「自分は津の齋藤拙堂先生の下で塾生をして居つた頃には親からの送金は乏くなかつた。其の爲に自分の身の廻りの事は節約の上にも節約しなければならなかつた。それで着物の洗濯も自分で近所の川まで出かけて行つてやつた。又三度々々に食事も思ふ樣ではなく粥をすゝり、美味しいものと云つては一つとして口にした事がなかつた。

書物の如きも一冊として買ふ事が出來なかつた。そこで毎晩遲くまで先生や塾生の書物を借りて一生懸命これを寫して、そして苦學をしたものである。」

と話して聽かせた。

幼心にも先生をはじめ兄弟の者はこの父の苦心談が餘程骨身にこたへたと見えて

『よし、自分達もお父さんに負けずに勉强して立派な者にならなければいけない』

と小さな胸の中に確く決心した事が再三であつた。其の爲に學問の進歩も目に立つて居た

樣である。
先生の母の鈴子も、子供の教育には父藤陰以上に熱心であつた。殊に家塾の經營者の妻として十人に餘る塾生に對して全く自分の子供と少しも差別をつけず母の如く世話をした。育つさかりの子供、云はば腕白ざかりの子供の、手のかかることは昔も今も變りはない。其の細い世話は夫人の役であつた。着物のよごれたものを洗濯したり、其のほころびをつくろつてやつたり、なるべく子供達の喜ぶものをこしらへておやつに食べさせたり、萬端の世話をやいた。其の爲に塾生からは全く母親の樣に慕はれて居つた。
先生は父の訓戒を幼い胸に確く守つて學問に精進した。まだ五つだと云ふのに、父が塾生に論語や詩經を講義して居る傍にチャンと座つて熱心に聽いて居つた。これは別段父から强制された譯ではない。進んで本人がするので父もまたなすがまゝにまかせて聽講を許して居つた。其處で何時の間にか先生は一年もたゝない内に論語や文章規範や日本外史の一節を暗記して大きな聲でこれを空で讀む事が出來る樣になつた。
先生が、正式に塾生として勉强する樣になつたのは六つの時、藩の『致道館』に入つてからである。

野村先生の子供の時代の事について那波光雄博士は

『私の家と野村さんのお宅とは庭つゞきであつて、野村さんは私の生れた時から知つて居られる位です。私の母が野村さんに就いてよく話して呉れた事ですが、龍太郎さんは子供の時からよく出來た人で瞳が二つあつたと申してゐました』

と語つた。

野村先生は父藤陰の關係から、早くからこの藩の學校に入學した。當時の藩學校は科目としては習字が多く、四書五經、其の他にはわづかに英語などを敎へて居つた。其の學校に通つて居る者は大概士分以上の者であつた。元々藩學校と云ふものは士分以上の子弟の敎育の爲に出來た學校である。然るに先生は家の格式から云へば餘り高くはなかつた。只父が學者であると云ふので入學を許されて居たから、家から學校へ通ふ途中、しば〱同級生や先輩等から侮辱されたり、いぢめられたりしたことがあつた。

だが、其れでは野村先生の家が其んなに低かつたかと云へば、決して左樣ではない。當時はどこの藩でも、同じ士族の中にも種々なる階級があつて、家老などは別としても、外の士族の中でも上中下の別があり、野村先生は上の部の學校に入つてゐたわけである。

されば佐藤三吉博士の如きは同郷であり、同年配であるけれども、大垣においては野村先生とは全然異つた學校で教育を受けたと云はれてゐる。其の大垣の士族の階級では

『本を教へて貰ふならば野村藤陰先生』

と云ふことになつてゐた。だが

『野村さんの講義などはなか〳〵きくことは出來ない』

と云はれてゐたもので佐藤三吉博士などは野村藤陰先生の教を受けることが出來なかつたと述懷された相である。

この一事を以てしても、野村家が如何に當時から大垣の名門であつたかは想像が出來る。又この學校には大垣藩主の戸田氏が親しく聽講された事がある。そして先生は學生時代に優等生の故を以つて御前講演をした事もある。

當時、藩の學校は、總督、督學、參謀、學監、講官、准議官、勾讀師、副勾讀師と云つた樣に可なりの澤山の職名があつた。先生の中にも又多くの階級があつた。其の先生の重なるものは次の通りである。井田雷堂、井上果齋、岩瀨尙庵、雲谷仁齋、佐藤孝之丞、村松次郎、名村泰藏、野村藤陰であつた。殊に國文は井田、漢文は雲谷、其の他の學問は藤陰が教へた。

つまり藤陰先生は家にあつては先生の父として、學校にあつては先生の教師としてこれを教へた譯である。井田雷堂は長州征伐の陣中で時の將軍慶喜侯に大政を奉還せよと建白したと云はれる大の勤王の士である。又極て剛直な變り者であつた。後年憲法發布されるに先立つて自ら大政黨と銘打つて一黨を組織した程の人であつたが其の事業の中途で長逝した。井上果齋は其の頃すでに米國カリホルニヤの月を詠じて當時のチョンマゲの人達を驚かした程の世界の大勢に通じた人である。

村松次郎はこれ又洋學の大家で後藤新平を世話した人で特に冶金術には造詣の深かつたと云ふ人である。

こんな具合で藩校の『致道館』は新舊の知識を取りまぜて藩の子弟達の訓育に務めて時の潮流におくれさせまいと努力した。

現在大垣藩から多く優れたる人才を出して居るのも藩校の訓育の結果に外ならないと云つていゝ。この『致道館』と云ふ學校は大垣城の龍の口にあつて、校庭に今も天空にそびえてゐるトネリコの老木がある、今でも其の綠翠の若葉を茂らせて居るが、先生はよくこのトネリコの老木の下に行つて休みの時間に冥想にふけることが常であつた。

されば此の土地の人々はこのトネリコの老木を（龍太郎博士冥想の木）と云つてゐる。
藩校に通つてゐる藩の子弟達は何れも悪戯盛りの者ばかりであつた。家庭では勿論のこと藩校にあつても先生の目をぬすんでは小さな頭をしぼり乍ら悪戯の限りを盡した。
時計のなかつた舊幕の其の頃の學習時間、休み時間の定めは線香の本數でしてゐた。だから各教室毎に線香をたてる燒香器が置かれてあつた。それでなくとも遊び度い盛りの子弟達は、學習時間の短縮をはかる爲に燃えてゐる線香を扇であをいだり、口で吹いたりして線香の燒滅を早める事につとめた。それと反對に遊び時間には燃えてゐる線香の火を消して一秒間でも長く遊ぶことに心がけた。線香の火を消すことも扇であをぐことも交代で先生の目をぬすんではやつたものだ。
性來温厚な、そして謹直そのものゝやうな野村先生は同級生からしば〳〵仲間入を強要されたり、無理矢理に押しつけられたりしたが、其の都度彼等から脱してはトネリコの木陰に一人たゝずんで冥想にふけつたものだつた。それ程先生は眞面目であつた、だから先生は藩校の子弟達からは仲間はづれにされてゐた。
或一日、悪太郎の一隊は藩校に登校する途中

『どうだい、龍太郞の奴、笑つた事がないから奴を笑はせてやらうぢやないか』
『ほんとだ、龍公の笑つたのを見た事がないから今日は一つ笑はしてやらう……』
と云ふ樣なことを相談して敎室に入つた。授業中途で一人の生徒が突然頓狂な聲を出した。そのあまりの頓狂さに先生までが聲をあげて笑つた。而し目指す野村先生は顏色一つ崩さず默々として耽讀してゐたので惡太郞共はいま〳〵しがると共に內心先生の其の生一本さに驚いたものだ。
そんな具合だから友達なんてものもなければ無論喧嘩をしたこともなかつた。また賞められたことはあつても叱られたことは只の一度もありつこはなかつた。
當時大垣市で淑德婦人會長をしてゐた故加野椽川と云ふ老刀自は藤陰先生の私塾に通ひ日本最初の女敎師となつた人で、かつては愛知縣女子師範の敎諭として昭憲皇太后から拜謁の榮に浴した女史である。
この老刀自の話に
『龍さんは幼少の頃から頭髮をみだした事と袴のひだを崩してゐた事はなかつた。いつも人に接する時は容を正し端座してゐた』

と云つてゐる。これだけでも先生が幼少の時から如何に謹嚴であつたかゞ解る。

少年龍太郎が、友達を多く持たなかつたのは、生來の內氣な性質もあつたが、一つには藤江の村には士族の友達が一向居なかつた爲でもあつた。そんな事から家に一人居て自然讀書に親しませ、更に彼の性格を內面的にさせたともいへやう。

龍太郎少年が藩校『致道館』に入學した頃には相當競爭仲間もあつたらしいが、龍太郎少年が日を追ふてぐん〳〵拔いて行く異常な成績には誰もが其の膝下に屈するを餘儀なくされてしまつた。

丁度龍太郎少年が九歲の時の事であつた。あまりの群を拔いた優秀な成績に、時の藩公戶田釆女正氏彬侯から特に招かれて藩公御前の揮毫をさせられ、數々の御褒美をもらつた事があつた。

又十三歲の頃のこと、明治大帝御誕辰の佳辰を卜して藩校の生徒達は大唐紙に書を認めて鎮守の八幡へ奉納した。鳥居前に並べられた藩生の書はいづれも筆勢豐かなものだつたが、野村先生の書には誰もが一步讓らせられた。

青雲の志を小さな胸に燃してはる〴〵百里にあまる東海道を東京に上つたのは明治五年の

夏で、大藏省租税寮に出仕する父藤陰に伴はれての旅であつた。

その頃の東海道には勿論汽車もなければガタ馬車もない。旅人は舊幕そのまゝの遺物、駕籠をたよるか、徒歩かであつた。だから大井川や箱根の難所では可成り難儀したらしかつた。それは龍太郎少年が上京した翌年母の病を理由に官を辭して父が歸省する時暑中休暇でもあつたので彼も父と共に郷里大垣に歸り再び上京することゝなつた際、彼は父に東京まで迭つてもらひたいとせがんだことによつても、旅の苦しさがうかゞはれる。

その後二、三年たつてから實妹のひろ子さんや父藤陰が龍さんの勉學の樣子を見ながら上京した時は人力車があつたので、東海道の大半は人力車に乘つたが箱根八里はまだ駕籠だつた。箱根を越える日は絶好の快晴であつたのに雲助共は

『こんなよい日は一年に三度位しかない。だからお祝に酒代をくれ』

と父に尻をまくつて驚かしたさうである。龍さんが一人旅を嫌つたのも無理もないことだつた。これはひろ子さんがその當時の思ひ出話である。

『横濱からは汽車がありましたが大垣から横濱迄は九十里の間ほとんど人力車でした。この長い道中を人力車にゆられたためお尻がふくれてしまひ東京に着いた時は歩けなかつたほど

でした』

といつてゐる。

藤陰先生がまだ若い頃のこと、菱田海鷗と共に小原鐵心に伴なはれて江戸へ下つたことがある。その時の紀行文を『亦奇錄』と序して上中下の三卷に分けて出版し洛陽の紙價を高からしめた。卷頭には松平春嶽が題字を揮つて居り鴻雪爪の序文もあつた。その中の一節に岡崎の宿で女中の品定めした珍文が書かれてある。

謹嚴寡默の藤陰先生にこの文があるのは珍中の珍だと非常な評判になつた。小野湖山はこれを評して

『藤陰君は寡默の君子、忽ちこの冷語を著す、けだしよく口に默して筆に默する能はざるか』

といふのである。

後年息子龍太郎を伴なふて上京の途次岡崎の宿に一泊し、若かりし日を回顧して苦笑を禁じ得なかつたであらう。

五、令弟虎次郎

先生の令弟虎次郎は元治元年十二月八日生れである。明治五年に學制が發布せらるゝと同時に大垣に四つの小學校が出來た。興文一校から興文四校までがそれである。

虎次郎が興文一校に入つた時は、八つか九つであつた。だが非常に頭腦明晰で學問が出來、クラスの內でも始終首席であつた。殊に行狀がよく其の日常の行ひも分別のある大人の樣な處があつたと云はれてゐる。されば當時に於て學校の人を監督したり、しめくゝりをつけたりする樣な仕事をまかされて居つた。又友達も虎次郎を尊敬して常に其の手本として居つた。

明治十一年に興文一校に師範の豫備校が併置された。これは中等教育を目的としたものであつて、當時興文小學の上級生の中にはこれに轉學したものが非常に多く虎次郎もまた師範豫備校に轉校した一人であつた。明治十二年に十六歲で師範豫備校を退いて東京に留學し翌年九月に東京大學豫備門に入つた。四年の後卒業して、其の上の東京大學文科に入學し、二十一年七月に法科大學の政治學科を卒業した。學校に於ては常に業績拔群で品行が端正であつた。この人は明治十三年の頃に一時飯島と云ふ苗字になつたけれども十八年頃に野村の姓にもどつた。大學を卒業した當時の十一月に大藏省に勤める事になつた。試補たる事三年、二十四年七月に大藏主計官に任ぜられた。はじめ主計局豫算決算課に勤務し、二十六年十一

月から更に主計局の國庫課長になつた。職務に非常に勤勉であつた。而も物事の判斷が常に正しいので名事務官と謂はれて居つた。

明治二十七、八年の戰役に、云ふまでもなく其の軍費の問題が一番大きなものであつた。この軍費の供給の早いと遲いは非常に軍の士氣にも關係がある。虎次郎は非常に努力をして、朝早くから夜遲くまで實に寢食を忘れて事務をとつた。この大問題に對しても貢獻する處非常に多かつた。

明治二十八年に下關の媾和條約によつて淸國は吾國に、償金二億テールを八回に分けて支拂ふことになつた。然るに庫平銀をテールにするとどの位の英、佛、貨幣になるか、若しくは吾國の貨幣の幾らに相當するものであるか、更に爲替の換算等が大問題になつた。庫平銀の品位は幾らの割合のものであるか、更に又この償金の受授の場所は何れの地にすべきかと云ふことが當時の大問題であつた。そして結局淸國政府と協議の結果、庫平銀はこれを英貨に換算して英國に於て受授することに決定した。其處で庫平銀の品位量目を確定する必要が生じて、渡邊大藏大臣は林公使の請求によつてこの事務の爲主任の役人を選んで派遣することになつた。而して虎次郎が其の選に當つた。

そこで八月十六日に北京に着いて、庫平銀の品位量目に關して銀行、若しくは各國公使館等に就いて色々調査研究し、それによつて清國政府と協定するに至り、遂に庫平銀の量目を確定して十月六日に林公使は清國政府と議定書を交換した。

こゝに全く償金受授の談判の結末を告ぐるに至ることが出來た。そこで虎次郎は十一月に歸朝した。其の功勞によつて勳六等に敍し單光旭日章及金千圓を下賜された。すると或る友達が

『君の今度やつた手柄に對してはむしろこの論功賞は少いではないか』

と云つた。これに對して虎次郎は

『私は上官の命令を受けて自分の任務を行つたに過ぎない。であるから殊に功勞と云ふものはない譯で、北京に於て活動したのも公使の命を受けて一面に於ては技師の力によつたものであつて、決して私に大した手柄がある譯ではない』

と云つたので、むしろ友達の方が愧ぢ入つたと云ふ話である。

虎次郎が北京に行く時に父藤陰先生は一詩を賦して愛兒に書き送つた。

その詩を讀んでみると洵に時局の重大と、そして仕事に對して訓誡する處が用意極て周到

である。」元來親孝行の虎次郎はこの父君の教に從つて使命を全うした事は偶然ではないと考へられる。

明治三十年四月大藏省の官制改革の結果、國庫課は理財局と云ふのに移ることになつた。虎次郎氏は依然として其の課長の職にあつた。

然るに十月下旬、腸チブスにかゝつて自宅に靜養すること僅かに一日、直に東京帝國大學の第二醫院に入院した。平時非常に健康であつて勉強な同君の有樣を知つてゐる同君の友人達は

『何、大したことはなからう』

と思つて居つた。處が病勢はだん〳〵惡くなつて十一月上旬になつて非常に惡くなつた。青山醫學博士の如き當時の名醫と謂はれた人が八方手をつくしたけれども其の甲斐なく十二日に死去した。年わづかに三十四歲である。

十五日に本鄕菊坂の長泉寺に葬つた。

虎次郎の夫人は會計檢査院書記官の河野通氏の女きよ子である。

一男一女を擧げた。虎次郎は性質が非常に温厚で着實で沈靜寡言の人であつた。堂々たる大家の風采を持つて居つた。親に仕へては孝順であり、野村先生に仕へては洵に悌、友に交つて信義あり、交る人は皆これを尊敬しないものはなかつた。殊に義に臨んでは正しい意見をとつて犯すことが出來ないものがあつた。

虎次郎の逝去した時、父藤陰先生は七十一歳、愛兒に先立たれて洵に心をいため、悲しみに沈まれたものであるが、藤陰先生のいさゝか慰められるところは、やはり野村先生が居られてすでに其の時遞信省の勅任官になつて居られた事であつた。嘗つて龍、虎と並び立ちて社會國家の柱石たれと名づけた其の虎を失つて仕舞つた。龍たる野村先生に對する藤陰先生の期待がます〳〵深められることは當然のことと云はねばならない。

しかも其の時野村先生は丁度海外漫遊中で、たま〳〵パリーに滯在中であつた。平生から弟思ひの野村先生にこの悲しむべき愛弟の訃報を傳へることは內地にある人達としては到底忍ぶことが出來なかつた。其れで

『この出來事を電報で知らせたものかどうか』

と云ふことが、すべての人によつて眞劍に考へられたが、結局

『其れではあまり心配をかけることになるといけない』
と云ふことに衆議一決して海外の先生には知らせなかつた。
然るにたま／＼先生はバリーの旅舍に於て、其の頃虎次郎が病死した夢を見られた。
『妙な夢を見るものだ、弟の身の上に何か凶事がなければよいが』
先生は異郷萬里の旅の空のことでもあり、一入に肉親の愛情の切なるものを感じて、はるかに故山の弟の上に多幸あれと心から祈られたのであつた。
この夢を見てから程なく日本の新聞に愛弟の訃を傳へる記事を發見して、現實の出來事と、旅窓の夢との意外なる暗合に吃驚されたことがあつた。
殊に先生は、この前途洋々たりし愛弟を失へる藤陰先生や母君の心中を思つて暗然とされた。
『かうなつては自分が弟の分も働くより外に仕方がない、而して老ひゆく兩親に弟に代つて孝養をつくすのが自分の責任だ』
先生は口には出されないが堅く決心されたに違ひなかつた。

令弟虎次郎の未亡人は當時まだ年が非常に若く春秋に富んでゐるので獨身を通すことは無理であると云ふので野村先生が再婚をすゝめ、市村鑽次郎氏に再婚をした。遺兒は長女愛子さん、長男の得一君の二人であつた。

この二人は全部野村先生が引き取つて面倒を見られた。

愛子さんは華族女學校を卒業して大森鐘一男の長男佳一氏に嫁いだ。同氏はさきに內務次官をつとめた。

得一氏は慶應の理財科を出て就職の運びに至らずして途中で病に侵されて亡くなつた。

この愛弟の遺兒を世話されると云ふことは、當時の先生にとつては非常に大きな苦心であつたらうが、非常によく面倒をみられた。

今、夫人が亡くなつた先生の老後の身のまわりの世話をしてゐる香代さんと云ふ女性は得一氏の未亡人である。その娘さんは、すでに尋常六年生となつて、康子さんと云ふが白百合女學校の小學部に通學してゐる。

殊に、得一氏の病氣は非常にはか〲しくなくて長い月日を要したが、其の世話も全部野村先生がした。

野村先生の妹廣子氏は戸田鋭之助氏の夫人、今の奈良電鐵の社長戸田直温氏の母である。
二番目の弟喜三郎は那波博士と同年輩であるが九歳にして亡くなつた。

第三章　學校生活時代

一、上京・當時の生活

十四歳の時、父藤陰先生が、友人達の推挽によつて大藏省出仕を命ぜられた頃野村先生も伴はれて上京した。

これが明治五年の八月に大垣を出發して、東京に着いたのは九月のことである。明治五年と云へば、當時東京においては新橋横濱間に蒸汽車が出來て開通式の行はれた年である。たまたま先生がこの年にはじめて東京に足を入れられたことも奇縁と云へるであらう。だが、東京の役所に勤めると云ふことの嫌ひな藤陰先生は翌年の三月に、母の病の故を以つて辭職して郷里に歸つて靜養したことは前に書いた。父が郷里に歸つた後も勉强する積りで上京した先生だけは東京に殘つた。はじめ父と共に日本橋の酒屋に下宿して居つた先生は慶應義塾の童兒局に入つたので芝に移つた。童兒局と云ふのは今の幼稚舍の前身である。

先生の上京の目的は勿論偉い人とならうといふにあつたことはいふまでもなかつたがそれ

も普通の子供の様に漫然たるものではなかつた。先生は父の志を繼いで世界的の大學者たらんとしたのである。

その頃大垣藩から上京勉學したもので小原鐵心の聲がかゝらなかつたものはなかつた。(鐵心は參與に任ぜられ重きをなされた人宮中顧問官男爵小原駩吉氏の祖父)氏は『鐵艦人を造らず、人よく鐵艦を造る』と人材養成に心血を注いだ。まづ藩主戸田子を米國に留學せしめ後に全權公使式部長官たるの素地を作り、松本莊一郎氏を大學南校に送り米國に留學せしめ、つひに我が國最初の工學博士として鐵道廳長官とした外、松井直吉、關谷淸景、佐藤三吉氏などを貢進生として面倒をみた。先生の上京遊學にもまた鐵心翁の聲がかゝつてをり、なにくれとなく世話をうけた。次弟の虎次郎氏も先生と同じやうに鐵心翁の世話をうけた。虎次郎氏の日誌によると晝食五錢、宿泊料十四錢(朝夕食を含む)で藩から支給される月額七圓あれば食事と湯錢位には充分だつたと記されてある。

二、慶應童子局の頃

當時慶應義塾には福澤諭吉先生をはじめとして莊田平五郎、中上川彥次郎と云ふ樣な人達が先生として居つた。慶應に通學する關係から、當時三田綱町の會津の屋敷內に住むでゐた戶田五郎氏の家に寄寓した。

今でこそ三田は獨立自尊の慶應大學で知られ、綱町附近にも住宅が澤山あるが、其の當時はほんの場末であつた。

ここは江戶時代は荏原郡『御田の鄕』と云つた位であるから明治初年のことは略想像することが出來るであらう。江戶名所圖繪によると、ここは昔渡邊の綱の住宅のあつたところとも云はれ、また三田三河守が住んで居り、其の子駿河守綱勝以來三田の一家は代々綱と云ふ字を一字其の名につけて居たので綱町と云つたとも云はれてゐる。

ここに松平隱岐侯と會津家の藩邸があつた。

其の二つの大きな邸の間に道があり、其の道の寺町へ下る坂を綱坂と云つた。

戶田氏のところに寄寓してゐたころ、何しろ先生は十四歲の少年であつたので座敷の都合のつかない時は押入れのなかに寢かされたことがあつた。

『何しろ小さかつたので押入れが丁度寢臺の様な具合になつて、其れに寢かされたものだ』

と先生は追懷談をされたことがある。

ここには先生の外にも大垣から來た人が二三人居たらしい。これ等の人を世話するために婆やがおいてあつた相である。

戸田直温氏の叔母さまに當る早川の御隱居さまは其のころ、其の家に一ヶ月位野村先生と生活を共にしたことがあるので、其の御隱居さんから當時の學生生活をきいたことがある。

『何しろ、私も野村さんもまだ子供で、丁度同年でありましたから十四歳位でありました。當時の三田の綱町あたりは非常に淋しいもので會津の屋敷あとに割合に大きな長屋を借りて合宿して居りました。明治五、六年の頃で東京になつて間もなくで、私は二、三年前にあの邊に行つて見ましたが、昔の面影のないのに驚きました。

當時は狐が出ると謂はれた位で淋しいものでした。

私共は田舍で育つたので教育も多く受けてないし、其の爲に片假名は知らないで平假名だけ知つて居たので平假名のカナをつけてゐましたので、片假名を書かないのかと云はれた位です。

今でもその頃の人で生き殘つてゐるお婆さんは電報が讀めなくて困つてゐる樣です。とにかく、ソロバンは出來ないし、女大學だけ讀めれば女はいゝと云ふことで當時の事もあまりくわしくは憶えて居りませんが、當時學校としては私立では慶應と謂はれて居りました。

交通機關はまるでなく陸は人力車とお籠とで、國に歸る場合にも船で横濱から四日市まで行くと云ふ樣な譯でした。まだ其の頃は男は二本差して居つた時代であります。三田ではランプを使つて居りましたけれども古い家では行燈を盛に使つて居つた頃です。

野村さんは非常に立派な人で口數は少い方でした。其の頃男の方は勿論學校の制服と云ふものがないので、多分袴もはかず、着流しに手ぬぐひを腰にぶらさげて居つた樣です。或は間違つてゐるかも知れませんが帽子もかぶらなかつた樣です。食物等は至つて粗末なもので牛肉は其の頃から食べては居りましたけど平常は粗末なものばかりでした。人力車は病人か何かでなければ乘らないので、書生さんが人力になど乘ると

「あれは病氣か」

と云はれた位で、皆、ほうばをカラカラ音をさせて車になど乘らずに歩きました。

私共は貧乏士族として育つたので當時の學費等は少いものでありました』

先生は其の後間もなく慶應の寄宿舍に移つた。
慶應義塾の童子局の同級生には東京高師の校長をしてゐた三宅米吉氏がゐた。郷里からの友としては谷慶造、淸水鐵吉等がゐた。
この淸水は大垣傳馬町の出身で至つて小男だつた。宿舍にゐても夜具を押入に入れることが出來ずよく野村先生が手傳つてやつた。時たま先生の歸りの遲い時には淸水は布團を出すことが出來ないので、うたゝねしながら先生の歸りを待つてゐると云ふ具合だつた。先生は最初淸水に同情して手傳つてやつたのが、後には日課の一つとなつてしまつたので閉口することもあつた。彼は慶應を出てから米國に留學し藥學の硏究に專念しヂアスターゼの硏究も間近に完成しやうとした時、異國の土となつた。彼の友人高峰博士はその後を受け、つひに完成しタカヂアスターゼとして發表し世界の醫學界を驚かした。
先生が學生時代に最も悲しい思出は上京の翌年下宿でハシカに罹つた時であらう。丁度郷里では三番目の弟喜三郎が、ハシカのために夭折し、妹のひろ子も實家にハシカで臥床してゐた時であつたので、兩親にこの上心配かけて、萬一體にさはるやうなことがあつてはと、命日

夕に迫つた重症にあり乍ら密かに自分で療養した。勿論鄕里に知らせない位だから上京中の叔父增田作造にも知らせなかつた。只同宿の谷や淸水の看護をうけたのみで漸く快癒した。全快後間もなく玉蜀黍を食べてまた重症の床につき再び死線をさまよつたことがあつた。少年時代最もの嗜好物、玉蜀黍もそれ以來口にしなくなつたと云ふ話もある。

かうした悲しいことや苦しいことの幾多の思ひ出を遺して野村先生は明治七年、慶應義塾を去つた。先生の十七歲の時である。

三、外國語學校から大學

慶應の童兒局を出てから東京外國語學校の英語科に入つた。然るにこの外國語學校は其の後間もなく制度が變つて同校から分れて東京英語學校となり、八年七月同校下等敎科を卒業し同年九月東京開成學校の入學試驗に合格して英語豫科三級に入つた。然るに十年四月省令にて東京開成學校と東京醫學校とを合併して東京大學と爲し同年九月より法、理、醫、文の四學部に分たれたので野村先生は東京大學理學部に轉じ土木工學科を專修された。

當時の學校について今少しく述べてみるならば明治元年の六月二十六日、先づ明治政府は

醫學所を復興し、次いで昌平黌及び開成所を復興し、更に其後昌平黌を開成學校、醫學所を醫學校と改名した。

昌平黌は徳川綱吉が本郷湯島に建設したもので、程朱を旨として儒教を明らかにする爲に建てたものである。

開成所は安政四年の徳川幕府二十番書和解御用の局を以つて蕃書調所となし一般人士の入學を許し、其後洋書所又は開成所と改めたもので徳川幕府直轄の學校である。

醫學所は文久元年に下谷和泉橋通りにあつた種痘所を幕府の手に收めて醫學所と改稱したものだが、更に西洋醫學教習所となつた。幕府直轄の機關である。

右の醫學所と二つの學校とも、共に吾國最高の學校であつたが幕府が瓦解すると共に、明治二年に昌平學校を大學校と改め、開成學校及醫學校は大學校の分局とせられた。其後大學校が大學と改稱せらるゝや開成學校は大學南校、醫學校は大學東校と改稱せられたが、其後、又大學が廢止せられた。東南兩校は何れも大學の二字を削られて東京開成學校及び東京醫學校となり、いよ〳〵獨立の機關となつた。其後明治十年に至つて合併されて東京大學となつたものである。

かくて先生は東京大學理學部の土木工學科を明治十四年目出度く卒業した。年二十三歳であつた。

この頃は卒業生の數も少く、同期生は僅かに三十名にすぎなかつた。眞に群衆の粋をすぐつて大學に入れたもので、さればこそ大學出と云ふと世間からもてはやされたものである。卒業證書に署名された土木學の教師はダブリユー・エス・チヤツプリン氏（一寸面白い名だ）であつた。當時の卒業證書と學位授與證も亦面白い。

明治十四年七月九日東京大學理學部に於て左の證書を受けられた。

野村龍太郎土木工學ヲ修メ毎學年ノ試問ヲ完ウシ正ニ其業ヲ卒ヘリ仍テ之ヲ證ス

明治十四年七月九日　東京大學理學部

土木學　W. S. Chaplin

應用地質學　David Brauns. ph. D. Mll. D.

東京大學總理正五位加藤弘之㊞

印

野村先生の手記に左の註がある。

是證書ニ土木學、地質學ノ教師二名ノミ記名シアルハ最後ノ一年間ニ於テ只此兩氏ニ就キ

タルヲ以テナリ同校ノ規則ニテハ毎學年ノ終ニ於テ其一學年間ノ修業證書ヲ與フル例ナリ

同月同日同學部に於て理學士の學位を授與せられた。

野村龍太郎土木工學ヲ修メ定期ヲ歷テ其業ヲ卒ヘ考試咸完シ乃予カ掌ル所ノ權ニ據リ授クルニ理學士ノ位ヲ以テス爾後優待令名ノ此位ニ屬スル者ハ永ク汝ノ享有ニ歸セン因テ東京大學ノ印ヲ鈐シ予ノ名ヲ署シテ以テ之ヲ證ス

明治十四年七月九日

東京大學總理正五位加藤弘之㊞

東京大學總理加藤弘之ノ申稟ヲ領シ證スルニ予ノ名ヲ以テス

文部卿正四位福岡孝弟㊞

四、東京大學の友人達

野村先生の大學を出られたのは明治十四年の事である。當時同期生としては大學を卒業した者が三十人ある。

だが、現在においては故人となつた人が多い。現存してゐる人は五代龍作博士外數人にしか過ぎない。大學の頃には五代氏は神保町に下宿して居つて、野村先生等と交りを深くし、

休暇で故鄕に歸る時は一所に旅行をした親友である。當時汽車がなかつたので東海道を歩くより仕方がなかつた。

野村先生の學生時代の思ひ出話に次ぎの樣なことがある。

『自分の大學生のころには、濱松には飯島魁君が居り、大阪には五代龍作（當時九里）君が友人として居つた。

であるから自分は大阪では九里氏の家に宿り、濱松では飯島氏の家に宿つた。

當時の宿屋と云ふものは二十五錢位で泊めたものであるが、自分は宿に泊ると必ず茶代を先に置く。さうすると宿屋の方でも氣をきかして、いゝ部屋に泊めて呉れる。そこで、自分が鄕里大垣から東京に往復する爲に宿屋ともなじみが出來て或宿の如きは主人が袴をつけて一丁も見送つて來て

「御機嫌よう、どうぞ御達者で」

と云つて呉れる程親しみが出來てゐた。そして宿と云ふのが、名古屋で宿り、濱松で宿ると云ふ樣に十里位の行程で泊る樣に藩の定宿が決つて居つたものだ』

また、五代龍作氏はかう當時のことを語つた。

『自分は野村君の家に泊つた事もあるが、野村君のお父さんは實に立派な人で顏も野村君にそつくり似て居つた。お母さんも實に親切ないゝお母さんであつたことが記憶に殘つて居る。先づ大阪に行く時には大垣の野村君の家に泊り、それから野村君が大阪に來て自分の家に泊つたものだつた。大阪まで東京から十二日もかゝつて行つたと云ふ始末であつた。』

その頃の東海道の大井川は勿論橋もなく、昔の物語りや、又義太夫の朝顏日記などにあるが如く、旅人は人の背中に乘つたり、或はまた輦臺に乘つたりして急流を渡つたものである。川の水が增せばたちまち行路は行き止りとなり、色々の悲喜劇が起つたことは物語りに出て來る通りである。

丁度野村、五代の兩氏が大井川に差しかゝつた頃に、やはり東京から京都に向けて旅をするらしい二人の娘さんがあつた。

現在八十歲の五代氏が當時を省みて

『仲々の別嬪でしたよ』

と語られる位だから當時の青年の目に美人として印象が深かつたのだらう。この二人の娘

の旅行者と當時青年の五代、野村兩氏が後になり先になり旅行したと云ふ情景は今から思つて見ると、淡いロマンティックな臭ひがしないでもない。

其の大井川を渡る時に娘さん達は蓮臺に腰かけて、かついで貰つたのであるが、すぐ目の下に川の流れが見えて非常に恐がつたので、二人が

『恐いことはありませんよ』

と聲援して無事に川を渡ることが出來た。

川を渡つてからも、ものゝ十町程ばかりはこの二人の女性の旅行者と後になり先になりしたが、それから先はこちらが先に……と歩いたので遂に見えずになつてしまつたと云ふことである。

當時の旅行と云ふものは、(膝栗毛に出て來る樣な)原始的なもので、宿場に入つて行くと小さい盛り場に遊廓が軒を並べて居つて、二階からなまめかしい女の人が旅行者に聲をかけて、呼んだりする樣なことがあつた。野村先生はとても美男子であつたから、呼ぶ方でも一生懸命に呼んだことであらう。

而し乍ら野村、五代の兩青年は、わき目もふらずに通つて自分達の目的の處に行くと云ふ

眞面目な青年であつた。

また五代博士は

『野村君は酒が好きで、兩國に近い海の近くの料理屋で皆で會をやつたことがあつたが、其の宴會の席は二間つづきであつて、其の間じきりの處に友人が酔つて仆れてゐた處を、野村君が飛び越えて向ふへ行からとした時、鴨居に頭をぶつけ、額にけがをして大騒ぎをしたことがあつた。

自分は柔道をやつたが、野村君はすゝめても遂にやらなかつた。而し飯島君と野村君は角力をとることはあつた。宴會のときに二人で角力をとつたことなどもあつた。

平生、非常に勉强家の野村君は成績も一番、二番を下つたことがない。原龍太等と優秀な學生であつた。

自分は大學を卒業してからも一年ばかり大學の方に殘り、それからと云ふものはすつかり民間にあつて事業の方にすゝんで行つたので、從つて役人生活に進んだ野村君とは長いこと交渉がなかつた。

運動については、今柔道のことを話した樣に嘉納治五郎氏や自分はボールをやつたけれど

も、自分達が晝間、盛に運動をやるのに野村君はさうした仲間に入らず、專ら勉强して居つた。』

とも語つた。

大學の卒業式に關聯して問題が起つたことがあつた。其れは先生が大學を卒業した翌年の卒業式のころの出來事である。

その當時、東京大學に於ては、毎年卒業式に、其の年の卒業生達を御馳走することが慣例となつてゐた。然るに明治十五年の卒業式に大學總長加藤弘之は

『卒業式に卒業生を學校側で御馳走する如きはよろしくない』

と云ふ意見の下に斷然この慣例を破つて其の年に限り之を中止して仕舞つた。

當時の學生は添田壽一、奧田義人等のクラスであつたが、この突然の慣例破りに大に憤慨し

『毎年やつてゐることを自分達のときから止めると云ふことは馬鹿にしてゐる』

と云つて、これが動機となつて學校騷動となつた。何分理窟は云ふし血氣さかんな連中のことであるから、勢も亦猛烈であつた。

總長は自分の理想論からかかる英斷を行つたものの、學生達からかく反對されて騷がれたので少なからず焦慮し狼狽した。

この時野村先生は、去年卒業したばかりである關係上、其の年の卒業生とは親しみもあり、かつ先生の人格が後輩の學生達から尊敬されてゐたので母校出身者の一人として、又學校の先輩の一人として、總長から賴まれ、これ等の騷動を起した大學生達の仲へ入つて、之が鎭壓の勞をとつた。其の結果この騷動も擴大することなくして止んだ。

また、先生の名の龍太郎は弟の虎次郎と相對して「龍虎」となつてゐることは前に述べたが當時大學を同期で出た者の中に當時三龍と云はれた人があつた。それは五代龍作、原龍太、野村龍太郎、この三人であつた。原龍太は酒が强く、有名な吾妻橋の設計者で其の落成の祝宴に酒を二斗も飮んだと云ふ事である。

先生は慶應の童兒局を出てからは神田の神保町あたりに下宿して居られたが、大學を卒業してからは本郷の弓町に居つて鈴木充美と云ふ人と下宿して居つた。この鈴木充美は後に司

法次官まで出世した人で先生とは晩年まで親交を續けて變ることがなかつた。卒業後は東京府に勤めるやうになつてもやはり鈴木と一緒に下宿して居つたが、金が要るので非常に困り、下宿をやめて弓町に一軒家を借りて婆やを一人置いて鈴木と共同生活をした。共の婆やが臺所の道具等を持つて來て呉れた。そしてとにかく簡單な生活をして居つた處が、鈴木が妻帶したので、先生は婆やを連れて神保町に家を借りて移つた。婆やは長く先生の家に居つた。この婆やは終に先生の子供の世話までする樣になつたが、彼女は鳥取縣の士族の娘であつた。先生が九段坂のほとりに住まはれて居つた頃まで先生の處に居つたと云はれてゐる。

第四章　社會生活へ

一、東京府出仕

野村先生は學校を卒業すると直ちに東京府の御用掛となつた。

野村龍太郎

東京府御用掛中付月俸金四拾五圓給與候事
但取扱准判任候事
明治十四年七月二十三日

東京府廳

東京府御用掛
野村龍太郎

土木課工事部可相勤候事
明治十四年七月二十三日

東京府廳

先生が東京府御用掛として最初に擔任されたのが、靈岸島東湊町一丁目に架した高橋の鐵橋である。鐵橋としては東京で三番目に架けられたもので、小さい橋としては珍らしくトラス桁を架けたものである。房總半島あたりから東京に來て靈岸島の船着場に上陸すると、其處に高橋の鐵橋があるので皆

「東京には鐵の橋がある」

と云つて驚いたものであつた。震災後は全然新しい橋になつて昔の俤はないけれど、當時は鐵の橋として有名なものであつた。

其後甲州街道、青梅街道の道路修築工事を擔任せられて居た。

十五年十月から淺草橋の鐵橋架換の設計から其の工事の完成まで擔當された。其の時代に郷里大垣の士族小原廼氏の令嬢てつ女と婚約された。當時てつ女は十五歳であつた。

十六年に水道掛兼務を命ぜられ此の方面の仕事も擔當された。翌年四月皇居御造營事務局より御造營地内に水道布設につき設計施工を東京府に依賴があつて先生が其の一切を擔當された。

當初從來の木製樋桝を以てする議があつたけれども結局歐米に行はれる風に倣つて水路に

は鐵管を布設し又井に代ゆるにハイランド即ち立活栓を以てしたり沈澄池、濾過池を開設して上水を清淨ならしめたり又は宮内省前の低い處に池を造り噴水を設けるやうにしたり夫々の設計を先生が擔當され、同年七月に皇居御造營御敷地内水道工事擔任を命ぜられ第一着手に沈澄池の開鑿工事に着手された。

此の沈澄池と云ふ名は當時先生の上役に居た原口要氏が名付たものである。水路は半藏門の外に溜桝があつて夫れから鐵管で吹上御苑に開設される沈澄池に送つて夫々配水するもので、本邦最初の鐵管配水工事なので先生當時の苦心は實に容易でなかつたことが察せられる。其の頃の先生の月給は半年か一年で躍進してゐることもある。

十四年十二月自今月俸	五十圓
十七年七月	五十五圓
十八年七月	六十圓
同　年十二月	七十圓

東京府廳處務規程改正あり土木課に庶務、設計、道路、治水、水道、營繕、橋梁の七部を置かれ、十九年二月先生は水道部長心得を命ぜられ同年八月東京府一等技手に任ぜられ判任

官一等に叙せられ、中級俸を給せられた。

二、大月橋事件

其の當時妙な事件が一つ起つた。と云ふのは山梨縣に大月橋と云ふ橋がある。これは猿橋の先にあるが、山梨縣から葡萄の培養を視察する爲にサンフランシスコに行つた某と云ふ人が歸つて來て比較的外國の知識があると云ふので此の人にこの橋の工事を擔當させた。この大月橋は橋脚なしの比較的長い橋で特別の設計を要するものであつた。そこで某と云ふ人がポケットブックをたよりにしたり、外國の橋の寫眞を參考にしたりして設計圖を作りいよいよ橋が出來上つてお祝をすると云ふ段になつてこの橋が落つこちてしまつた。

山梨縣の當局者が驚いて東京府に設計更正を依賴して來た。當時の山梨縣の狼狽ぶりは想像にあまりある。

土木課長と大工の棟梁が東京府にやつて來て

『洵に面目なくて困つてますから、是非東京府でやつて下さる樣に』

と云ふことで賴みに來た。それで東京府では原口工師が其計畫を擔當され、野村先生がハ

ウトラスの桁を設計して大月まで出かけて行つてこの工事の指揮をされた。
始め設計した人に就いて段々聞いてみたら其の人は橋桁の設計は全然始めてなので外國の圖面や寫眞を見て桁の大さを單に比例で出して大月橋の設計圖を作つたことが知れたと云はれた。當時はそんな人でも地方では新知識の所有者として優遇されて居たらしい。

三、結婚生活

大學卒業後三年、即ち明治十七年一月六日大垣で結婚式を擧行、先生は十七日に歸京された。新夫人は母堂につれられて四月十八日に東京に着いて、いよ〳〵新家庭を作られた。
新夫人は故貴族院議員男爵小原廸氏の長女でてつ子と呼び、小原鐵心の孫である。野村家としては、父子二代に亘つてます〳〵深い因縁を小原家と結ぶに至つたわけである。當時先生は二十六歳てつ子夫人は十七歳であつた。
當時においては大垣藩においても大學を卒業する程の秀才は稀れであつたので、從來の關係もあり、小原廸氏が是非にと云ふことで、懇望されて其の愛孃を貰つたわけであつた。當時先生が東京府の御用掛として受くるところの月給は最初は四十五圓であつたが、其の年の

うちに五十圓となり、結婚された年の夏五十五圓になつた。何しろ其のころの金の値打は現在と比較すれば三倍以上にも當るわけであるから、かけ出しの生活としては相當のものであつた。

されば先生の家庭生活は極めて幸福であつた。新家庭は麹町區飯田町三丁目でいまの富士見小學校の前の邊であつた。

だが、この新生活にもやがて人生につきものの悲慘なる風が吹いて來た。其れは結婚後間もなく生れた最愛の長女の幹子が二歳にして逝つた事件である。これは疑ひもなく野村先生の生涯のうちにおいても大きな悲しみの一つであつたに相違ない。喜怒哀樂をあまり表はされない先生ではあるが若い父として、長女をいたいけな年に失ふといふことがどの位大きな痛手であつたかは想像することが出來る。

那波光雄氏は同鄕の關係から、上京して野村先生の飯田町のお宅によく出入りしたので當時の事を

『當時夫人は十八歳、野村先生は二十七歳でありました。大學を卒業されたのは二十三歳でしたが、當時私は高等學校に入學の準備の爲に共立開成學校と云ふのに通つて居りました。

上京したのは明治十八年二月の事で、十日ばかり野村先生のお宅に厄介になつて居りました。遊就館の裏手で富士見町の角の處に住宅がありましたが、結婚早々の野村先生に對して、私も當時はまだ若かつたので何と云つてお悦びを言つたらいゝのか、私も恥しいので遂にお悦びを言はずに歸つた事があります』

と語つたことがある。

四、鐵道に轉ず

明治十九年に鐵道に移つた。先生は前から東京府よりも鐵道の方面に興味を持つて鐵道に移り度いと云ふ考を持つて居つたがなか〳〵許されなかつた。しかし心中に於ては是非鐵道に入り度いと希望して居つた。然るに先輩の原口要が先生より先に鐵道に居つて

『是非鐵道の方に來ないか』

と云ふ話があつたのでいよ〳〵希望通り鐵道に移ることになつた。

當時鐵道局と云つて赤坂の榎坂に事務所があつて鐵道局長は井上勝氏であつた。鐵道局は今のアメリカ大使館のわきの引つこんだ處にあつて、局の下の坂のところに井上氏の官舍が

あつた。この官舎は後に森村開作氏が引き取つて居る。

井上氏は官舎にあつてなか〳〵役所に出て來なかつたと謂はれて居る。

其の頃

鐵道局には仙石貢氏に次いで松本莊一郎博士の就任があり、其の後に原口要氏が入つた。其處で、原口氏は明治十九年に野村先生を東京府から鐵道に拔擢した。

其の時、たま〳〵鐵道では關西と東海道本線の幹線を連絡させる計劃が起つて居つた。東海道線の方が重要なる幹線ではあるけれども、其の沿線には海岸が多く、且つ又大きな川が澤山あつて、土地の高低が多く頗る難工事と見られて居つた。其の結果、長い間計劃はあつたけれども其の實現を見ることとなくして明治十九年に至つて居つた。

處が、はしなくもこの東海道線を速成させると云ふ空氣が濃厚になつた。その當面の實行者に野村先生が選ばれた譯である。

この案と云ふのは橫濱と名古屋の間を四ヶ年で連成すると云ふ計劃である。如何に新進の技術家であつても、機械技術の幼稚な當時にあつては實に容易ならない仕事であつた。

而し乍ら野村先生は非常な勤勉さを以つて晝夜兼行の努力をつゞけ、橫濱、國府津間の約

三十一哩を一年足らずで開通せしめるの成績を擧げた。

原口氏の如きは夜更の二時と云ふのに沿線を視察して、不眠不休の野村氏を勵ましたことがあつた。

かくしてこの難工事の建設がだん〳〵と進んで、さしもの箱根の難工事も見事に出來上つた。豫定の如く東海道線に龍の如き汽車が黒煙を吐いて走る事が出來る樣になつた。

野村先生等の努力と云ふものは實に莫大なるもので、今日に於ても汽車によつて東海道を旅行するものは野村博士をはじめ多くの鐵道建設者の多年の苦心、努力と云ふものに對して敬意と謝意とを表すべきである。

第五章　鐵道の建設

一、横濱國府津間

明治十九年七月十九日、政府は閣令第二十四號を以て中山道鐵道敷設を廢し、更に工事を東海道に起し、中山道鐵道公債募集金の現在殘額を轉じて之を東海道工事に使用すべきことを公示し、同時に内閣總理大臣は鐵道長官に左の如く訓令した。

『中山道鐵道工事相廢し、之を東海道に變換するに決定し、乃ち閣令第二十四號を以て公布したるに付速に工事に着手すべし』

依て、鐵道局長官は此の訓令に接するや同月二十二日二等技師原口要に命じて、横濱沼津間の測量及び工事を擔任せしめ、三等技師南清に命じて沼津熱田間を測量させ、横濱沼津間はまづ、横濱酒匂川間を敷設し速かに其の開通に努め酒匂川以西は傍ら測量に從事して、其の調査を精密にし、比較線數條に就き一條の測量を竣る毎に報告すべきことを擔任者に訓令した。

かくして東海道線の測量を了つたのは、十九年秋のことであつた。そこで十九年十一月全

線に亘つて工事に着手した。而して沼津以東の工事は二等技師原口要の董理を以て一等技手たりし野村先生と大屋權平とが之を擔任することになつた。

横濱國府津間三十一哩の開通を見たるは明治二十年七月十一日のことで、僅かに一年足らずで竣功し一日三回の往復を以て旅客列車を運轉した。

野村先生はこの工事の間は國府津の官舍に住つて、毎日現場に出かけて行つた。

當時先生の鐵道における地位は次ぎの如く昇進した。

十九年九月十三日　任鐵道一等技手

同　年十月十五日　任鐵道五等技師　叙奏任官五等賜下級俸

二十年三月二十七日　叙從七位

建設時代の鐵道の現場には一種の型があつた。上の人はいはゆる親分肌のところがあつて、時にはガミ〳〵と部下を叱りつけることもあるが、また人情の濃やかなところもあつて、部下から信頼を受けてゐた。この建設時代の親分肌と云ふものは其の後鐵道界に相當長く續いて居た。云ふまでもなく創業當時においては建設は大仕事である。多額の金を使ひ大勢の人を使ふ、從つて、之が總帥とも云はれる人は自然仕事も出來るが人の使ひ方も上手である。

恩威並び行はれると云ふ手腕と人格とを兼備した人が澤山あつた。これがいはゆる建設型とも云ふべきもので、鐵道界にはこの方面から出て副總裁たり總裁たる大物が輩出した。文官出の者よりも技術出身者の方が却つて大物と云はれる人物に富んでゐたのはこの仕事の關係から生じたものであると云つて差支ない。仙石貢、原口要、長谷川謹介等々の人々は其の代表的な存在と云つてもよかつた。『雷おやぢ』と云ふ樣な名をつけられて、部下から恐れられもし又信頼もされた。

其の代りまた仲間を集めて酒をのませたり、時には勝負事をやる樣な親分もゐた。勝負事の仲間に入らないと御機嫌の惡い樣な親分もゐた。

これ等の人達の中において野村先生は全然流儀違ひの存在である。先生がかうした『雷おやぢ』とか「親分肌』とか云はれる人達と伍してゐることが既に不思議である。先生も度々勝負事のおつき合ひをさせられたことがあつた相だが其の後は全然其れ等の仲間へは入らなかつた。

かうして、外の人達とは全然其の肌合のちがふ野村先生が大きな聲を出して人を叱ることもせず、高壓的に物を云ひつける樣なこともせず、外の先輩達とは反對のやりかたをしなが

ら、下積みにされることもなく時には之等の人達よりも優れた成績をあげ今日の地位を得られたことを思ふと全く人格人徳の力の偉大なることを痛感させられる。ここに野村先生の眞骨頂があると云つて少しも過言ではない。

殊に、前にも云つた通り工事は急速を要する關係上、皆區間を分つて受持を定め、其の區間區間が互に競爭し合ふやうにして其の成績をあげ一日も早く工事を終らせ様とすることになつてゐた。

野村先生と、大屋權平氏とは當初横濱國府津間の工區を分擔して、互に負けずに工事を急がせてゐた。

而して原口氏は其れを見廻つては兩方に相手方の工事が進捗してゐるからしつかりやれと云ふ様なことを云つてゐた。

其の原口氏は又南清氏と東西相分れて工事を分擔し、其の成績を爭ふ様なことになつてゐた。其れだけに工事關係者は非常に緊張して晝夜兼行で仕事を急いだ。

氣の短い原口氏は夜中の二時三時頃、しかも雨のひどく降つてゐる晩などに合宿所にやつて來て、

『早く工事をはじめろ！』

と吸鳴つたりした。また、井上鐵道局長官が降雨の日に蓑笠をつけて、現場を見廻はつたこともあつた。

何しろ當時工夫の數は少く、然も仕事は夜を日に繼いでゐるので工夫達は疲れ切つてヘト〳〵になつてゐた。其の疲れ切つた工夫達を勵まして一層馬力をかけさせるために

『一杯飲ましてやれ』

と原口氏からも云はれてゐるので、野村先生は馬入川の川原の上に菰かぶりを持つて來させ、其の鏡をぬいて皆に飲ませ、先生自身も杓子で一杯ひつかけては元氣を出して現場廻はりをしたこともあつた。

今日特急が走り、超特急が走る東海道の建設時代のことを思ふと、ここにも先人の苦心の跡が繪卷物の如くくりひろげられるわけである。

原口氏は、野村先生の方に來ては

『もう程ケ谷のトンネルが出來てゐるのに、こつちぢや何をしてゐるか、まごまごしてゐる時ぢやないぞ』

と云ひ、又大屋氏の方に行つては

『もう馬入川の方の橋脚は出來上つてしまつた。こつちは何をやつて居るか』

と云ふ風に、兩方にそんなことを云つて急きたてゝ居つた。

處が、實際に於ては野村先生の方の工事は早く出來て保土ケ谷のトンネルはまだ出來てゐなかつた。

其の爲に馬入川の鐵桁は鐵道に載せて持つて來る事が出來なくて船で取りよせると云ふ始末であつた。

これが野村先生の鐵道に入つてはじめての仕事であつた。勿論非常に骨も折れたに相違ないが、年は若いし、かねてから希望の鐵道へ入つての仕事であるので其の骨の折れることなどは忘れて働いた。當時のことを追懐して先生は今でも語られる。

『何しろあの頃は忙しかつた。殆んど洋服を脱いだことはなかつた。原口氏はそれでなくても氣の短い人であるから夜中の三時頃から呶鳴り出して當時電話等はなかつたので、たまに雨が降つて官舎等に休んで居ると原口氏がやつて來て＝何をして居るかッ！＝と云つて呶鳴る樣な始末である。そして夜晝なしに働いた爲に身體も疲れて眠くはあるし、とてもやり切

れなかつた。或時は居眠りをして築堤の下に落ちたこともある』

明治二十年七月に、横濱國府津間三十哩七十四鎖の工事が竣功した。依つて、十一日から運輸營業を開始した。

そこで野村先生は其の月に更に受持を變へて御殿場に行き、國府津山北間の工事を擔當した。翌年に至つて、箱根の難工事たりし一號と二號の兩隧道も略竣功し列車が通るようになり、其他の工事も大體落成した。偶々其の時甲武鐵道工事の擔任者仙石四等技師が歐米巡視の爲め原口二等技師と更代したので、野村先生を箱根より迎へて甲武鐵道の工事擔當者とせられ、二十一年七月赴任された。野村先生は當時五等技師であつた。

二、甲武鐵道

政府が東海道の幹線の工事を急ぎつゝある間に、民間に於ても亦鐵道事業を發起する者が相尋いで起つた。

卽ち、明治十九年から二十年に亘り大阪、甲武、兩毛、山陽、九州、水戶の諸鐵道が發起され、其の中のあるものに對しては、政府に於て特別の保護を與へて其の完成を期せしめん

とするの内議がゐつた。

この民間鐵道の計劃に對しては、鐵道局長官としては、當時の私鐵の計劃は多くは不完全であつて、免許するの價値なきものとして、二十年三月内陳書を内閣總理大臣に致し、政府の態度を定めさせ樣とした。

其の要領は

『目下ノ鐵道企業ハ一種ノ病弊ニシテ妄想ニ基キ前途ヲ揣摩シ猥ニ政府ノ保護ヲ得ントスルモ、斯ル計劃ハ宜シク排斥スベク、今ヤ官設鐵道漸ク擴張ノ域ニ入ラントスルニ際シ漫然私設鐵道ヲ許シ殊ニ之ヲ保護スルガ如キハ得策ニアラズ』

と云ふにあつた。井上鐵道局長官は更に明治二十一年七月四日附を以て二十年度の鐵道事業の概況を内閣總理大臣に報告するに際して、更に意見を陳述し企業者をして靜思徐歩の態度に歸らしめやうとした。蓋しこの頃、私設鐵道の企業熱が勃興したため企業者の中には、鐵道の性質を誤解し、單に投機の事業として之を計劃するものがあつた。またさうでなくても其の計劃調査何れも粗笨杜撰なるものが少くなかつたからである。

だが、滔々たる時勢の力は如何ともすることが出來ない。明治十六年の日本鐵道の開業を

先驅とし十八年には阪堺鐵道が開業し、二十一年には兩毛、伊豫、山陽、二十二年には水戸、甲武、大阪、讃岐、九州、北海道炭礦等が續々開業する樣になつた。

この中で野村先生の關係されたのは甲武鐵道であつた。東海道の箱根のトンネルの工事にかかつて居られる時に原口要氏と先生とが仙石貢氏に變つて甲武鐵道の工事に當ることとなつた。これは明治二十一年七月のことである。

之より先、明治二十一年の一月十七日、甲武鐵道會社創立委員は、日本鐵道會社々長と連署を以て、甲武鐵道線を日本鐵道の枝線と見做し之が工事を鐵道局に於て施行され度旨を申請し、二十一日を以て之を聽屆けられるに至つた。

仍て、鐵道局に於ては二十一年一月四等技師仙石貢を擔任者として測量に着手し、三月二日、鐵道局長官より、實測の結果興業費八十六萬二千六百五十四圓を要する旨達示され、會社は資本金を九十萬圓に增加することを願出でて認可され、六月其の建築事務所を新宿に置き工事に着手したのである。

今日でこそ新宿は大東京の西の玄關口として、東京驛をしのぐ程の乘降客を有する大驛となつて居るが、當時はほんの場末の宿場にすぎなかつた。甲州街道、青梅街道に足をふみ入

れると、角筈のあたりは麥畑や茶畑であつて、櫟林が至るところにこんもりとして居た。更に街道筋には欅や樫の並木が武藏野の特色を見せてゐる有様であつた。當時のことを野村先生はかう語つた。

『新宿から八王子までの鐵道の測量は大體仙石技師主管の下に菅原恒覽君がやつた。最初の計劃は境驛迄直線でやる設計であつたけれども工事を進めて見ると多少曲つてゐた爲に其の取付けに短かい曲線が出來たが、あの區間は約九哩ある。あの位直線の長く續いてゐるところは珍らしい。

自分が行つたときは測量はすんでゐた。菅原君が九州に行くことになつたので、其の後へ自分がゆき、いよ〳〵新宿から工事をやりはじめたときに、また菅原君は入つて來た』

新宿八王子間は概して平坦であつて、一つの隧道もない。其の中で工事の主なるものと云へば、多摩川鐵橋である。この鐵橋は七十呎桁十九連を架し、避溢橋は四十呎桁十二連を架した。

この工事は明治二十二年四月十一日に新宿立川間十六哩七十四鎖開通し、ついで九月十一日立川八王子間六哩三鎖の間が開通した。

この年の五月に、會社は、新宿から神田區三崎町まで、複線を以て延長敷設せんことを申請し、七月に至つて假免狀を得た。依つて、鐵道局に實測を申請し、野村先生が飯田町までの測量をやつた。

「はじめはこの線を神田橋のところまでやる積りであつたが、認可にならなかつたので飯田町を起點とすることになつた。其の後、岩田作兵衞、大久保利和、三浦泰輔等の人が働いて、萬世橋まで測量することになつた」

と野村先生は語つた。

元來新宿から飯田橋に至る線は、曾て、大山陸軍卿が線路を砲兵工廠に達せしむれば軍事上有利なるべしとの意を日本鐵道に諭示したので、甲武鐵道會社は之にヒントを得てこの計劃を建てたもので、起點を新宿停車場に取り坂町本村町を經て、外濠を横貫し市ケ谷に出で外濠の內側に沿ひ、小石川橋に至るものであつたが、後明治二十五年に至り變更し、新宿から青山練兵場の北端を經て四谷に至り外濠に達し、其の內側に沿ひ、市ケ谷を經て、小石川橋に至るものとして、二十六年三月、新宿三崎町間四哩二十鎖の免許狀を得るに至つた。

野村先生はこの測量に當つた關係から砲兵工廠のところを鐵道に讓り受けることを計劃し

て其の意見を洩したところ大久保氏は

『其の土地を何に使用する積りか』

と聞いたので先生は

『あすこに鐵道の官舍や工場を造れば非常に地の利を得て居ると思ひます』

と云ふ意見をのべられたが

『それは賛成が出來ない』

と云ふので採用にならなかつたが、砲兵工廠の計劃も其の後多少變更されて、一部分は開放されて市街地となつた。もし野村先生の案が通つて居ればあの邊に鐵道村が出來て居たかも知れなかつた。

第六章　濃尾大震災と線路調査

一、出張先から震災地へ

横濱國府津間のスピード工事と云つてもいい仕事で腕を練り、更に甲武線で經驗を積み、甲州の橋の工事までやつて、すつかり技術家としての試練は積んだ。

ここにはしなくも濃尾の大地震と云ふ思ひがけない大事件がおこつて、先生が其の震災で荒らされ、破壞された郷里の鐵道の復舊事業のために働かれたことは、實に先生にとつては得難い思ひ出であると云つてよい。しかも先生は既に十二分に經驗を得てゐる時にこの事件である。まさに天が先生を郷里のために働かせる樣に、先生をすつかり仕込んで置いたのも同樣である。

されば先生の鐵道の現場における活動の歷史の中でも、この震災復舊の仕事と、福米間の工事とは特筆大書さるべきもので、先生としてもかなりお得意の思ひ出の一つであると思ふ。

先生は神戸に勤務することになつた。鐵道廳第一部建築課と云ふのが其れである。時は明

治二十三年の十二月のことで、當時先生は鐵道廳四等技師であつた。神戶驛の構內に官舍があつて、先生は其處に住んで居られた。

濃尾の大震災の時、先生は山陽鐵道會社線路の竣功監査に出張して備後の尾の道にゐたが、神戶からの電報で濃尾地方に大地震のあつたことが分つた。濃尾地方と云へば先生のためには鄉里のことでもあり、役目上のことでもある。この二重の責任に、先生は走る汽車の時間さへもどかしい思ひをしてひき返した。汽車は關ケ原まではあつたが其れからはまるでメチヤメチヤであつた。

この震災の模樣は後に詳細に書くとして、まづ野村先生の當時の述懷を聞かう。

『尾の道から急いで引き返したのであるが、關ケ原までは汽車があつた。其れから東の方はすつかり地震のためにやられて、鐵道は駄目になつて居た。そこで止むを得ず、機關車一臺で乘れるところまで乘り、あとは步いて大垣の町へ行つて見た。すると大垣の町と云ふものは人家がすつかり倒れて仕舞つて、自分の家さへ、どこがどうだか分らない程であつた。』

と云ふ。幸に先生の一家は無事であつた。そこで先生は震災の復舊工事を擔任することと

なつて、このいたましくも破壞された鄕里の、第一線とも云ふべき交通機關の復舊のために働かれることになつた。

實に男子としては本懷至極のことである。

この出來事は先生の永い歷史の間においても特に記憶さるべき事柄であるから更に筆を改めて震災の模樣から詳述することとする。

二、濃尾の大震災

日本が地震國で關東にも關西にも、しば〳〵歷史的な大地震があつたが、濃尾の大地震は關東地方の大震災に優るとも劣らない大事件であつた。

明治二十四年の十月二十八日、朝の六時半を過ぎる頃に突然大震動があつた。濃尾一帶の地方は人家の瓦は飛ぶし、屋根は倒れ、地面は地裂を生じ、井戸の水は溢れ、殆んど一瞬間の間に世界が滅亡するかと思はれる程の修羅の巷を現出した。

岐阜の測候所の觀測によれば、當時の報告は、午前六時三十七分十一秒に於て上下及び水平動共に起り、南北に震動したが十秒を經て大烈震となり、北西、南東に震動した。一秒を

經ない中に器械を損し、其の後を測る事が出來なかつたけれども、烈震の間が五分餘りそれから後は南北西、北北東へ震動を感じたと云はれて居る。そして地面の實動は曲尺にして四寸餘もあつたと云はれて居る。

この濃尾大地震の震源地は美濃國である。本巢郡根尾谷の水鳥を中心として現れた。地盤上下の差が最大三間、延長二十五里に亘つた大斷層の場所もあつた。其の爲に震動を四方に傳播したものである。

其の地震の區域は、西南は中國地方に及び四國、九州全體に達し、北東は遙かに奥羽地方にまで響き、被害區域は本邦全面積の十分ノ一に及んだと云ふ大きな地震の一つである。就中、震動の激烈であつたのは美濃、尾張、越前、近江、加賀、飛驒、伊勢等の諸國であつた。

以上の七ケ國に於ては大地の陷落、山の崖の崩潰、地盤の決裂、泉水の噴出、相當堅牢なる家屋の毀損、人畜の死傷等實に慘狀を極めた。中でも其の慘害の一番ひどかつたのは岐阜と愛知の兩縣で、岐阜では笠松以西の被害が最も甚しかつた。死者四千八百餘人、傷者一萬二千三百十一人、全潰四萬四千二百餘軒、半潰が三萬九百餘軒でこの時の大垣の町の損害は建物の損害だけでも二百萬圓餘に達し、家財の損害は八十六萬圓、商品の損害が百二十萬圓

に上り、全損害四百三十餘萬圓である。

美濃國で災害の最も甚しかつたのは岐阜、大垣、笠松、竹ケ鼻、關等の町であつた。これ等の町では震動に次いで猛烈なる火災が起つた。町はさながら修羅の巷と化した。

大垣に於ては倒潰家屋が約四千、死亡者七百餘人、重傷者千三百人に垂々として居る。輕傷者に至つては其の數を知る能はざる有樣である。實に大垣町の慘狀は言語に絶するものであつて、わずかの間に家は倒れるし、梁は折れて無數の老若男女が其の下に壓せられて、叫び聲等地獄の如き有樣であつた。

其の傷の輕い者はやがて屋根をかき破つて辛じて屋外に出た。其の人達が漸く屋外に出た頃には、すでに火は八方から起つて風と共に擴がつて居つた。

されば親は子を助け、子は親を救けやうとしてお互に叫び合ひ狂氣の如くになつてあせつて居る。而も火は次第々々にそれ等の人に近づいて、遂に其の爲に燒死した者、其の數を知らない。幸に震災をまぬかれたものでも火の爲に倒れたものは相當にあつて大垣の町でも一番慘狀の甚しかつたのは傳馬町の開闢寺であつた。

當日は親鸞聖人の命日に當つて居つた。開闢寺に參詣する者は非常に多かつた。其の爲に

寺院の倒潰と共に八十餘名の者が一度に下敷になつて倒れた。其の中から二、三十名の者は辛じて逃れ得たけれども、其の他の者はこと〴〵く燒死した。後で調べて見ると人間が折り重なつて燒死して居るので誰がどの骨であるか殆んど遺骨さへも明らかに出來なかつた。其處でこれをお寺の內に一集めにして葬むつた。

大垣警察では火災と共に掛りの人達は制服を着るひまもなく馳せ集まつて、夫れ〴〵救護に出かけた。或物は棍棒を持つて屋根を打ち破り、下敷になつて居る人を助け、或者は柱を切つて、壓せられて居る人を堀り出した。

安八郡役所に於ても郡長以下必死の努力をもつて被害者の救ひ出しに骨を折つたが、丁度この時に前夜から大垣市內に東京相撲の一行七、八十人が滯在して居つた。これは屈竟な救ひ手である。郡長は咄嗟の間にかう考へて警察署長と相談してこの相撲の一行を救援にかり出した。何しろ力のある人達であるから被害者を助けるには非常に役に立つた。又監獄からは四人五十人を巡査につれさして救護におもむかしめた。

とかくする內に垂井警察の掛の者が七、八十人來て應援をしたので一同大いに力を得て午後八時に至つて火は漸く消し止める事が出來たが、この間十二時間、掛の者は一回も食事を

とらず渇する者は泥水を飲んで一時をしのいで居つた。

二十八日の地震のはじめから午後の一時までは搖り返しが間斷なく、一時間に八回から、甚しい場合には十二、三回の搖り返しがあつた。其の間にも時々强震をまじへた。

人々は戰々兢々として、ひたすら屋外に居つて其の鎭まるのを待つて居つた。二十九日から翌月の三日頃までは一時間に平均五回乃至七回の震動があつたと謂はれて居る。

震災後に最も懸念するところは水防の工事であつた。其の附近の川の堤は何れも甚しく陷沒したり、又は決潰箇所を生じて居るので、若しはげしい雨が降れば一朝にして附近に浸水する樣になるから、水防の準備は寸時もゆるがせには出來なかつたので、震災後豫め水防品及び水防用具の準備をさせて、急の處置に應ずる樣にして居つた。

それに應じて鐵道の方でも破壊した鐵橋の復興の工事等を急いだ譯である。

三、藤陰先生の詩

この濃尾の地震について當時野村藤陰先生は次きの如く書かれた。

地　震

明治廿四年辛卯十月廿八日、午前六時過、地大震。濃尾越當其衝。山崩水涌。村落陷沒、堤防壞裂。死者不知其數。餘震所及、西南日隅薩。東北則三陸磐岩二羽。其餘五畿七道、莫不皆震焉。若吾大垣、則當衝之中心、震動最劇烈。闔境無復完屋焉。加之祝融逞暴威、一炬蕩然、壓焦幾百人。其慘狀不可言。嚮嘉永甲寅之歲、遭兩度之震災。以爲希代之大劫。詩以紀之。今而思之、輕震耳。因又作五古一篇以紀之。

維歲在辛卯。十月念八日。大地忽鳴動。轟轟百雷叱。烟塵鎖朝曦。磅礴又滃渤。高巖陷爲谷。地縫濁水沸。曾耳天柱摧。今日地維缺。萬屋齊如跳。瓦片木葉拂。欲逃出無力。狼狽走顚匐。柱折摧頭顱。棟墜折脊骨。九死得一生。其間不容髮。吾家幸無恙。相集無人色。忽見祝融狂。焰烟四方塞。周章誰敢救。延燒四郊達。焦骸積成山。腥風吹慘怛。闔區變荒原。滿目頓蕭瑟。死者長已矣。生者艱衣食。孤兒又寡婦。何以免飢渴。穀價日騰貴。糟糠且不給。時方向玄冬。氷霜氣凉慄。縛樹纔結屋。掛蓆庇霜雪。餘震無休時。一月連兩月。人心常恟恟。訛傳又煽惑。嗟乎如斯震。前史所未述。西延日隅薩。東迨陸羽國。延袤幾百里。殆將遍全域。濃尾當其衝。震動最激烈。近聞磐梯山。破烈村落沒。又聞熊本震。城郭盡傾踣。比之今回震。猶一之於十。傷哉無辜民。遭此慘毒孼。性命與

財產。一併歸蕩逸。瑣尾流離氏。誰施振窮術。天子聞惻傷。勅使來賑䘏。萬金有恩賜。下民悉感泣。首相相踵至。弔死又問疾。皇恩大於山。吾民可以活。

四、震災復舊工事

名古屋に震災の復舊事務所が出來た。

現場に馳せ付けた野村先生は、被害の狀況を調べて、神戶から佐武正章、木村懋、永井種同と云ふ人達を呼び、東京からも二、三百人の部下を呼び寄せ、其の下で鹿島組とか杉井組とか云ふ請負師が働いた。この請負人も四、五百人の勞務者を東京から連れて來た。この勞務者は東京でも一流の腕ぞろひの鳶職であつた。

野村先生が隊長でその命令は實によく行はれ、この多くの人達がまた先生に心服して實によく働らき、晝夜兼行で仕事をして少しも不平を云はなかつた。

線路の被害は、東は境川、大府のあたりから、西は關ケ原までがひどかつた。中でも揖斐川と長良川とは橋脚が倒れて二百呎のトラスも河の中に墜ちてしまつた。木曾川は桁は落ちなかつたが、橋脚が曲つてしまつた。

名古屋の停車場附近では、機關庫と保線事務所とがわずかに殘つただけで、他の建物は全く倒れ潰れて目につくものはなかつた。大垣の町も線路はメチャ〳〵になつて居つた。附近の笠松町は火災の爲半月位も燃えてゐた。然し昔の建築と云ふものは偉いもので、名古屋城は一向平氣で嚴然として殘つて居つた。

『さすがに昔の建物は偉いものだ』

と先生は述懐して語つてゐる。

復舊事務所の連中は皆汽車の客車の中に寢泊りしてゐた。其處へ井上局長がやつて來て

『汽車の中にばかり泊らず宿屋に來たらよからう』

と云はれ先生は支那忠と云ふ宿屋に行つた。宿に行つたことは行つたけれども、其の當時はまだ夜も晝も餘震でさかんに搖れる。支那忠の主人公は危いと云つて外に出て寢たが、井上と云ふ人はなか〳〵强情な人でトウ〳〵宿屋の部屋にがんばり通した。

復舊工事は先づ第一に應急施設をして東海道線の旅客連絡をつけることゝした。そこで被害區間はトロリーで中繼することゝし、列車は木曾川の手前で止まり、それから木曾川は鐵橋の上に假線路を設けてトロリーを通し、長良川と揖斐川は河の中へ假橋を造つて、乘客も

手小荷物も郵便も全部このトロリーによつて中繼された。

復舊工事の中では長良川が一番の大仕事で野村先生が自ら擔當された。部下は前に書いた通り實によく働いた。然し實地上りの人が多かつたので設計は總て野村先生の頭一つで進められた。小さな橋の基礎杭を打つことでも、現場監督の人にはこの杭を打込む程度がわからなくて、夫れさへ先生の指圖を受けるといふような譯で、其の上復舊工事は晝夜兼業で進めて居るので、先生は殆んど休まれる暇とては無く、長良川の事務所のバラックの中に不自由を忍んで寢泊りして工事を監督され、翌二十五年四月四日に長良川の復舊工事完成して全線開通した。

かくして野村先生は復舊工事の初めから殿りまで成し遂げて、鄕里の交通機關のために立派な功績をたてられたのであつた。

當時、先生の部下としては技師に佐武正章、木村懋、永井種同、金田秀明氏が居り、技手に中島忠顯、板倉銃丸、野崎信一郎氏等が居た。

五、野崎信一郎氏の話

當時、野村先生の下で働き、其の後も南武鐵道の技師長として先生に仕へた野崎信一郎氏に濃尾震災當時の思ひ出話を聽いた。

『濃尾の大震災は、到底關東大震災の比ではない。關東震災の時に被害のひどかつた小田原、湘南地方の損害の狀況を親しく目擊したが、濃尾の震災の方が被害の程度ははるかにひどかつた。

鐵道の區域は名古屋の保線事務所の管轄に屬して居つた。東京の方面から云ふと、大府あたり被害があつたが木曾川までは大した事はない。木曾川から西の方がひどい。簡單なものは二ヶ月位で復舊が出來たが、最も甚しかつたのは長良川で、これは五ヶ月少しかかつて翌年の四月になつて漸く復舊が出來た。

木曾川の橋桁は九本、揖斐川は十一本、長良川も十一本で、木曾川は橋脚は曲がつたけれども橋桁は落ちなかつたからリベットの締め替へ、メムバーの歪みなをしの程度で再用することが出來たので案外復舊も早く出來上つた。

あの當時の仕事のやり方をみると、どうも昨今よりもキビ〳〵として、早かつたのではあるまいかと思ひます。これは私共が當時一生懸命で働いたからさう考へるのかも知れま

せんが冷靜に見て、よほど敏速であつた事はたしかです。
野村先生が隊長で、神戸と東京から部下を呼び寄せられましたが、これが二三百人居りましたらう。夫れに鹿島組や杉井組が、東京から一流の鳶職を四五百人連れて來ました。この連中に對して野村先生の命令が、實によく行はれて、皆も一生懸命晝夜兼業で働きました。
先生は仕事を云ひ付ける場合には、口頭で云ひ付けて、技術に渉るものは其の場で圖面をひかせて働らかせましたから、部下もよく會得して仕事が出來ました。
先生は初め名古屋の事務所に居られましたが、長良川の工事を始めてからは、長良川の事務所に寢食して居られました。何しろトテモ御多忙でしたから、殆んど休まれるときとては無かつたでせう。尤も、時には御用の提灯をつけさせて、トロリーに乘つて、長良川から二哩位ある岐阜の町へ、お酒を召上りに出かけられた事もあつたやうです。それを部下の者が又トロリーに乘つてお迎へに行くやうな事もありました』

六、餘話二三

この震災のほとぼりがまださめやらない最中に大事件が勃發した。それは大津の町で、津田三藏が露西亞の皇太子殿下に斬りつけた事件である。野崎氏は云ふ

『この事件を早く上長の佐武技師に報告したいと思つて、其の行衞をさがして大さわぎをした事を覺えて居ります。其の時は木曾川が復舊して漸く列車を通せるやうになつてから間もなくの事と思ひます。私は、明治天皇陛下が此の事件について京都へお出ましになるその御先行列車にパイロットとして乘つた記憶があります』

『濃尾の震災の經驗で、震災後最初に必要なのは事務を執る場所を準備することを敎へられましたので、關東大震災の時に餘震のグラ〳〵してゐる間をくゞつて建物の中から机などを持出して東京驛の前に早速假事務所を造つて非常に役立ちました』

當時、野村先生は痔を患つて居られて之れが痛んで非常に困つて居られた。然しどうしても工事の關係上トロッコに乘らなければならない。乘るとその震動で餘計痛くて困られた。だが無理をして乘り續けてゐたら、そのために痛いところがトウ〳〵破れて、却て早く膿が

出て癒つたといふ話である。
　また長良川の附近に事務所を置いた頃、仕事は急がなければいけないし、元氣もつけなければいけないと云ふので、茶釜に酒を沸かして、それをひしやくで飲んで元氣をつけたと云ふことである。

七、線路調査(上)

　明治二十四年二月、第二回帝國議會に於て、衆議院議員佐藤里治は、鐵道擴張取調の爲め、特別委員を置くの動議を提出したが、會期最終日の日程に上つたために議事に入らずして閉會となつた。併し之が贊成者は全院議員の過半數に上り、國家將來の大計上線路調査の必要が如何に眼前に迫つて居るかを物語るものであつた。依つて、二十四年に鐵道廳長官は、內務大臣に意見を具申して線路調査の必要なることを力説し、六萬圓の豫算を要求した。
　其の後第三回の帝國議會において、鐵道敷設法が帝國議會を通過し、法律第四號を以て公布せられ、中央線以下九線路の實測調査は第一に之を施行するの必要を生じた。
　而して之が調査費は、當初全國鐵道線路調査費中より支出すべき豫定を以て豫算を編成し

たが、敷設法の要求する緻密なる實測調査を爲すためには一層多額の費用を要するを以て、廿五年六月鐵道長官は、第一期線實測費として六萬六千圓の支出を稟請し更に後之を改めて五萬二千二百圓としたが、政府は之を支出することとした。

そこで明治二十五年七月に、鐵道廳に線路取調委員を置き、工學博士原口要を委員長とした。野村先生も亦この委員の一人となつた。

二十六年二月線路取調委員を廢し、線路取調掛を置き其の經費を增加し、原口が調査掛長となり、野村先生、大屋權平、久野知義、木村懋等を調査掛とした。かくして線路調査の仕事がはじまつた。中央線が野村先生の擔當になつて居つて、石丸重美は野村先生の下に居つた。

この結果線路網が出來上つて、これが國有鐵道の線路網の基礎となつたものである。この線路網の完成と共に、國有鐵道線路建設の計劃が出來上つて議會に提案されたが通過するに至らず、翌年辛じて通過して豫定線となつた。

この線路調査の仕事をされてから、野村先生はいよ／＼難工事と稱された福米間の工事にかかられた譯であるが、之は更に章を改めて說くこととしやう。

第七章　福米間の建設

一、板谷の難工事

明治二十五年の八月から奥羽線の線路調査が始まつた。本線を二分して、一方は福島から、一方は青森から、各羽前國大瀧に向つて進み、同年十二月に其の調査を結了し、二十六年四月に、青森に出張所をおいて、まづ其の北端から起工することになつた。

然るに南端なる福島から米澤に至る間は、有名なる板谷峠を控へ、地勢險峻にして線路の選定が容易でなかつた。二十六年の十月に漸く實測が完了し、十一月に福島に出張所をおき北に對して南端からも工事を開始することになつた。

野村先生はこの時福島の出張所長として赴任し、事務所を庭坂におき、福島の官舍から毎日通勤して、多くの現場從業員を指揮監督した。

この區間の中でも、庭坂關根間はいはゆる板谷峠の難所で、山は高く、谷は深く、斷崖絶壁が多く、其の谷には深い溪流があつて、ここに高い橋梁を架するなど本邦鐵道中において

も難工事を以て聞えたるものであつた。野村先生は既に東海道線をはじめとし、濃尾震災地方の復舊工事等、實地の經驗も多く經たる後であるから、この難工事を物ともせず、多くの從業員からは父の如く尊敬されつゝ、この工事を急がせた。

汽車で奥羽線を旅するものは、必らずこの板谷の難所をすぎ

『よくもかかる所に先人が汽車を通はせたるものだ！』

と感嘆するであらう。其の人は必らずこの工事の責任者として活動した、新進の技術家野村先生の功勞を記憶すべきである。この板谷峠は、勾配三十分の一で、從來の線路中碓氷線に亞ぐ急勾配線である。

しかもこの區間には松川橋梁、袖ヶ澤大築堤、及び板谷隧道がある。松川橋梁は徑間百五十呎、上路構桁を架設し橋面は河底から實に百三十呎の高さにある。袖ヶ澤築堤は一大深谿を埋立てたるものであつて、高さ百十六呎、之に要したる土積約四萬五千餘坪、使役延人夫は實に十五萬人に達した。板谷第二號隧道に至りては延長實に五千三百四十二呎に達してゐる。蓋し奥羽線中最長の隧道で、又當時本邦における最長の隧道である。

この隧道は岩代・羽前の國境板谷峠を貫通するもので二十七年十月から工事に着手して、

二十九年六月に竣功し、工費四十七萬六千百八十二圓を費してゐる。其の東口は線路彎曲して施工上不便なるため、先づ直線に導坑を掘進貫通して、後曲線の本隧道を仕上げることにした。

岩質は中硬であつて、掘鑿上甚だしき困難はなかつたが、二十八年三月の雪融けのために、東口の切取が崩壞して坑門を塡塞したが、前記の直線導坑の爲め、作業上甚だしい支障を受けずにすんだ。

西口においても坑口から三十四鎖ほど入つた山腹の凹處に深さ三百呎の竪坑を設けた。また西口から約三鎖五十節の箇所は、羽黒川水源の溪流の底を通つてゐるが、隧道上の土被り地層が薄かりし爲め、川を附換へて幅十二呎の水拔隧道を線路隧道に通したが、隧道内に漏水して噴水止まず、施工頗る困難であつた。

堅坑から東西に向つて導坑を掘入れたため、掘鑿は頓に其の歩を進め、大に貫通を速かならしめたが、この隧道は一哩餘に及んで居るので、掘鑿の進むに從ひ空氣は益々稀薄となり、且坑道彎曲殊に急勾配を有するを以て燈油竝に爆藥の發煙は常に坑内にこもり、消散しないので空氣が惡く、作業上の困難は想像以上であつた。然も山間僻地のことであるから完全な

る器械を運んでゆくわけにもゆかず、普通の唐箕に種々の改良を加へて送風器にあて、又竪坑の坑口に爐を設け、火勢により坑内の汚氣を吸ひ出す等、あらゆる苦心をして坑夫の作業を助けたものである。

また、この板谷峠線は三十分の一勾配にて、此の區間に運轉する機關車の重量は從前の所定車重よりは增加する見込であつたから、松川橋梁に架けた徑間百五十呎の鋼構桁は、車重五十七噸半を所定荷重として桁の强さを計算したもので、これは鐵道局傭技師ポーナルの設計にかかれるものである。

二、中西鍊次郎氏の話

中西鍊次郎氏は、福島米澤間鐵道工事の思出をよく話される。

『野村さんは非常な勉强家で殆んど休みがなかつた。或時に桑折の五代龍作氏の處に行かれた爲に一日休んだ事があつたが、其の外はめつたに休まれる事はなかつた。だからたまに一日位休まれると目立つた。大概八時頃に出て來て、役所で晝飯を食べてしまふと現場見廻り

をする。そして現場から役所に歸つて又仕事をして官舍に歸ると云ふ譯で、庭坂から五哩位の現場を必ず歩き廻つて事務所に歸ると、當時電燈のない事務所にランプをつけて事務を執つた。冬でも六時頃までは事務所に居られた。或年の大晦日、非常に雪が降つて今日あたり先生は休まれるかと思つて居ると、やはりチヤンと見廻りに來られた。特に記憶する事はよく野村さんが

「どうも技術家の人達は事務を執る才能がない。其の爲に大物になれない。であるから技術家もなるべく事務を執る事を稽古しなければならない」

から云ふ考を持つて居られたものと見えて、よくこんな事を云はれたが自分は「事務は刀筆の吏のやる事だ」と云つて野村さんの云ふ事をすぐには聞かなかつた。だが野村さんは委細かまはずに事務の事は總て私にやらせるやうにして居られた樣です。だん／＼時の經つにつれて自分の事務を嫌つて居つた事の間違に氣がついて、やはり事務は一通りも二通りも知つて居なければならないと云ふ事に氣がついた。自分でさう氣がついたので一生懸命にやつたせいか、野村さんは私には直接云はなかつたけれども檢事をして居つた安藤氏に

「近頃中西君が大部一生懸命になつて事務の方の事もやつて吳れるので、私も喜んで居る」

かう云ふ話をされたさうです。後で安藤氏から其の野村さんの話を傳へ聞いて、それではやつぱり自分になるべく事務の方もさせたいと希望して居られたのだと更に氣がついて、一層感謝の念を深めた事でした』

ここにも野村先生の一面がよく現はれてゐる。

三、馬場豐藏氏の話

福島米澤間の鐵道工事の時に、野村先生に使はれて居つた馬場豐藏氏は、當時の模樣を最もよく知つて居る人の一人である。

その浦和の閑靜な日當りのいゝ一室で、當時の追懷談を聽く事が出來た。

馬場氏は語る。

『明治二十六年の福米間の工事の時に、私は野村さんに使はれました。野村さんは當時夫人と一緒に居られた樣であります。お住ひは福島の停車場の脇に官舍がありましたが、それは日本鐵道會社の造つた役宅を借受けたものでありました。西洋間の應接室もあり、當時としては堂々たる官舍で、其の頃はお子さんが二人居られた事を記憶して居ます。多分龍吉さん

と駿吉さんのお二人でしたらう。正月に年始に伺つた時には丁度福島が大雪で、私はその坊ちやん達と一緒に官舍の中庭を竹馬に乘つて歩きまわつた事を記憶して居ります。

仕事の方から云ひますと、庭坂に福島出張所と云ふのが出來ました。其處は福島から米澤の方に向つて六哩ばかりの處です。

野村さんが來られてはじめて其の出張所が出來たのです。鐵道の官舍は庭坂にもありましたが、野村さんは福島から通はれました。當時本線の方は、すでに汽車が通つて居りました。はじめの間は野村さんは歩いて通はれたのですが、この福島庭坂間は非常に平坦なところで工事も簡單であつたので線路が直に出來て、そして建築列車が通ふ様になりました。それからは野村さんもその列車で通はれる樣になつた事は勿論です。

野村さんの前には木村懋さんがやつて居られました。私は庭坂から先の測量をしました。

當時野村さんと鳥越欽之助さんが來られて

「何故福島から庭坂間の測量をしないか」

と云はれた事を記憶して居りますが、其の時はすでに其の方面は測量が濟んで工事がはじ

まつて居つたのでした。當時野村さんが官舍に測量をする人達を集めて非常に御馳走をされた事があります。この記憶から考へても木村さん時代にはまだ測量は完結しないで、野村さん時代に全線の測量が出來たのです。其處で請負が決まつて仕事にかゝつたと云ふ事が考へられます。

野村さんは實に足が達者で、鶴の様な足で實に早く歩いて、後からついて行くのにも骨の折れる様に達者に歩かれました。而も私共は年齡から云つても二十二、三で、若いものばかりそろつて居つて、當時測量など出來る人間は珍しい時代で、從つて私共は齡が若いので、あまり仕事をまかして置くのが不安心に思はれたのでせう。野村さんは毎日必ず現場の監督に出て來られました。仕事をはじめてから、四日目には必ず現場を見廻はられたものです。ですから野村さんのかぶつて居られる中折の帽子には、いつでもトンネルの泥がついて居ました。其の位野村さんは熱心に現場を見廻はられたものです。

庭坂までは第一工區で、この第一工區は甲と乙とに分れて甲は周田晉一氏が現場監督、乙は松丸藤吉氏が現場監督でした。何しろ一體が杉林であり荒蕪地で、其の間に小さい開渠が二つあるきりで實に簡單な工事でした。乙の工區の方はすでにトンネルにさしかゝつて居る

區間でありました。第二工區は橋本組の請負で野村辰次郎氏が現場監督でした。第三工區はやはり橋本組の請負で私（馬場豊藏氏）と安田八造氏とが現場監督でした。この間に有名な松川の橋梁がありました。

これは杉井組が請負つて居りましたが、高さが百二十八尺もあると云ふ有名な橋でありますが、其の後地辷りの爲に線路を變更する必要が出來て、現在の線路は別なところを通つて居ります。第四工區も杉井組が受持つて居りました。何としても野村さんは非常に勉強な人で前にも云つた樣に現場を忠實に熱心に見て歩かれたものです。夏などは汗をたら〳〵流して其の汗をふき〳〵線路やトンネルの中を歩かれたものです。其の線路と云ふのが三十分の一の勾配なので汗だくになつて上つて來られたものです。

而し皆若い經驗のない者が集まつて居りましたから一生懸命で働いて、野村さんにはみんな心服して居ました。從つてあゝ云ふ處では皆が「所長さん」と云ふのが普通ですが、野村さんの場合には皆が「野村さん〳〵」と呼んで居りました。勿論これは親しみを以つてさう云つて居るのです。で、よく汗をふき乍ら見廻りに來られると

「野村さんが見えた」

と云つた位で、中には亂暴なのも居りましたが、仕事の方は實によく働いて、殆んど晝夜の別なく働きました。トンネルの煉瓦まき等は殆んど競爭の形でやりました。

野村さんは決して怒つた事はなく、人を頭から叱りとばした事はありません。只、怒るときは、よく、つばをはかれる。野村さんが、つばきをはかれると怒つて居るなと解つた位です。だが決してどなる様な事はしませんでした。

「困つた〳〵」

と云ひ乍らペッ〳〵とつばをはかれると、これが怒つて居られる證據でした。

四、トンネル火事

其の頃に大事件が一つ起りました。これは野村さんも大變心配された事でした。それは第二號トンネルから火事が出た事です。一體、トンネルから火事が起つたと云ふのは不思議な事だとお思ひになるかも知れませんが、トンネルとトンネルとの間が丁度二百尺ばかりあります。其の間にモルタルを煉る爲に小屋が出來て居りました。この小屋と云つても相當に大きなもので、この小屋の屋根は苫ぶきになつて居りました。處が前にも申上げた様に線路の

勾配が急なので、トンネルはこの建物にとつては煙突の樣な具合に、風がとても吹きこんですひこむ樣に出來て居ります。其の小屋から火が出たのですからたまりません。火の手はどん〳〵と三號トンネルの方に流れて、セントルやチンバリング等を燒きました。又別に山火事も起しました。火は間もなく消えましたが何しろ場所がらが、松川の溪流がせまつて居つて、別に輕便トロリーの棧橋等があつて足場が惡るいので、消防は充分に働けなくて一時は大さわぎをやりました。小屋は二時間ばかり燃えて居りました。方々から人が集まつて來て漸く消し止めることが出來ました。野村さんは皆から始末書を取られましたが、それでも人を叱る樣なことはしませんでした。原因についてもハッパの火である事は確かでした。何しろたき火などは絕對しないし、煙草をのむものはなかつたのですからハッパの火に違ひないと云ふことになつて居りました。

野村さんの德望家であることは、今申上げた樣な譯で、非常に親しみ深く、情深い人柄で、部下の人間が間違つたことをしても、其の爲首を切る樣なことは絕對にしませんでした。部下の人間が不都合な事をすれば大概の人ならば

「あれはけしからん奴だ」

と云ふ譯で處分してしまふ上役が多いものですが、野村さんは決してさう云ふ事はせず、必ず方法を講じて、外の適當な方面に轉勤をさせるなり、何なり工夫をされて、決して其の罪の爲に其の人を捨てると云ふ様なことはしませんでした。

其の爲に部下の人間は、隨分亂暴をしましたが、皆な野村さんの氣持を察して、むしろ其の心中を心配して、一生懸命で仕事をしました。ですから監督をして居ても所長に迷惑をかける様なことは絶對に出來ない様な心持をもつて働いたものです。

當時野村さんは所長で、技師としては其の下に鳥越欽之助、小城齊、富田保一郎、新元鹿之助と云ふ様な人が居りました。みな三十歳前後の元氣な方々でした。

私は當時月十五圓の手當で、工區の主任をして居りました。私も一度大失敗をやつて絶體絶命になつた時に野村さんから助けられた經驗があります。』

五、部下を庇ふ先生

其れはかうした事件である。當時馬場氏が一號トンネルの仕事をして居つたときに、線路一部變更の爲に線路の長さが二十五リンク短縮したのに、此短縮を計算に入れてない變更前

の縦断面圖で、隧道の卷立工事を兩口から進めて行つた。從つて双方からトンネルの煉瓦をまいて行くと、どうしても見通しがうまくつかない。だん〳〵調べて煉瓦卷のメジを見通すと、煉瓦一段だけ段が違つて居る。若い者ばかりがやつた事だからこんな間違ひが出來上つてしまつた。自分としては現場監督として洵に面目ない、色々考へてみたがこれは一つ決心をして辭表を出さなければならない。それにしても野村さんに會つた上で其の挨拶をしてから辭表を出したい。かう考へて「腹切りものだな」と思ひ乍らテク〳〵と庭坂の方に向つて歩いて行つた。そこへ向ふから野村さんがやつて來て

『どうした』

馬場氏の元氣のない姿を見て野村さんが云つた。

『いや、今度は腹切りものです』馬場氏は野村さんにかう云つた。

『それは一體どうした事か、まあ、そんなに大げさな事をしないでもいゝ、俺と一緒について來い』

かう云はれた。詰所に行つて鉛筆と紙で問題の大體を說明すると、野村さんが

『それはそんなに心配しなくてもいゝ、トンネルの煉瓦の處は機關車の煙突より一呎三吋以

上もまだ餘裕があるから、この位の違ひは差支ないよ、そんなに心配する事はない』

から云はれた。これに對して馬場氏は

『實に其の時自分は救はれた様な氣がしました。地獄に佛とは全くこの事です。から云ふ譯で、野村さんは部下の過失と云ふ事を決して深くとがめなかつたものです』

と述懐されてゐる。

また或る時一號トンネルの前のあたりで、馬場氏が數人の者と休んで居た。其處は冬になると霜どけの爲めに山の砂利が落ちて來る。其の上に大きな木がおほひかぶさつて居つて夏でも涼しい。

或夏の日にみんなが日陰で寢て居つた。疲れて居つたので時間の經つのを忘れて皆グッスリと眠り込んでしまつた。さうすると日が廻つて來て日陰であつた筈の寢て居る處に、西陽が當つて來た。それでも知らずに皆が寢て居つた。すると誰かゞ悪戯をすると見えて馬場豐藏氏の近所に石ころが轉がつて來る。

『誰だ、悪戯をするのは！』

から云つて委細かまはずに寢て居つた。すると又かたはらに石をぶつける者がある。

『ふざけちやいけない！』

と云つて目を開くと野村先生が立つて居る。

『こんな處に寢て居ては暑さあたりをする。もつと日陰で寢なければいけない』

から云はれてびつくりした。皆は大いに面目をつぶしたが又其の寛大なる事に後でひどく感謝した。と云ふ樣な事もある。

さう云ふ譯で、野村先生はどうもごまかす事が出來ないと皆が云つて居つた。

當時の若い人達はよく酒を飮み、あばれもしたが、決して不正な事はしなかつた。殊に從業員の氣質の荒くなつたのは碓氷峠の仕事が濟んでから、そちらの仕事をやつて居つた一團隊が福米間の工事の方に廻つて來て、林通友と云ふ人等が大勢の工夫をつれてやつて來た。其の時は丁度明治二十七年であつた。其の工夫と云ふのがみんなしたゝか者で、命知らずで、驚くべき猛者連が澤山居つた。そして喧嘩はする、役人には食つてかゝる、これを取りしずめて行く事は仲々容易な事ではなかつた。それを當時の技手達は月給十五圓以下、年齡も二十二三歲の若さで斷然おさへて居つたのだから大したものである。中にも安田八造と云ふ人が居つて、これは仲々元氣者で殊に不死身の持主であると謂はれて居つた。それだけに酒も

飲み喧嘩もする、理窟も云ふ人であつた。

工夫が夜酒を飲んで喧嘩をする、これを止めるのにも大變な事である。工夫の中で相當の顔役の中にもからした猛者連が居るのであるから、其の物騒な事は想像以上である。非常に氣風は荒かつた。だから宴會などあると非常に盛なもので、其の終には一つや二つは喧嘩があると云ふ始末であつた。

其の爲に野村先生は、床の間を背にチャンと座つて、いつも最後まで其の宴會の席に居つた。これはとかく亂暴をする若い者を監督すると云ふ考へであつたに相違ない。

六、松葉館事件

其の頃に地方の大問題としてやかましかつた福島の騒動があつた。この福島の騒動も元はと云へば安田八造が原因であつた。この人が臺灣に轉任すると云ふので其の送別會の席上で、はしなくも大騒動が持ち上つた。

元々安田は當夜の主賓であり、送られる客である。然るに主賓たる本人がじつとして居らず遂々大事件を引き起してしまつたと云ふ譯である。

事の起りは、丁度この送別會の會場になつて居つた福島の松葉館、これは阿武隈川の流れにのぞんで、見はらしのいゝ福島隨一の旅館兼料亭である。この松葉館に其の日二つの大きな宴會があつた。其の一つが安田八造の送別會、これは鐵道の人達がみな出席した。もう一つは當時福島の共立病院の院長が昇給祝に福島の町の有力者を招いて宴會を催した。鐵道の方は云ふまでもなく野村先生を旗頭として百名餘り、病院の方は院長を主として六十何人と云ふ兩方とも相當大きな宴會であつた。

鐵道の宴會の幹事は松葉館の大きい方の座敷、それは鐵道の人達がいつも宴會をする其の座敷を明ける樣に注文して居つた。又相當な藝者なども其處に呼ぶ樣にして置いた。

然るに町の有力者が澤山來ると云ふので、病院長の宴會の方が其の大廣間を占領してしまつた。藝者も腕きゝの名の賣れたいゝ藝者は大ていそちらにとられてしまつた。其處で技師の富田保一郎が院長とは同じ學士會の委員で普段からよく知つて居る仲だから、座敷の變更と藝者の融通とを交渉したが、先方は仲々オイソレと應じてくれなかつた。それで問題がやかましくなつて、よせばいゝのに當夜の主賓たる安田八造が自分で先方の座敷に出かけて行つて一場の演說をした。

『君の方は私の宴會ぢやないか、僕の方はかう見えても國の爲の宴會で、それに又人數から云つても吾々鐵道の仲間は百人からの大宴會である。君の方は見れば五、六十人にしか過ぎない、して見れば大きい座敷を吾々の方に讓り、給仕の女も少しは割愛して吳れてもよささうなものだ』

と云ふ樣な事を云つた。そして大いにメートルをあげたが、何と云つても鐵道の方が二階の部屋にされてしまつた。全く氣勢が擧らない。たま〳〵野村先生が便所に行つた。共の便所と云ふのは大廣間の脇にあつて、先生が見るともなしに見ると、大層景氣がいゝ。そこで先生が二階に上つて來られてから、

『どうも下の座敷は大層な景氣だ、藝者が圓陣を作つて盆踊りをして居る』

かう皆に語られた。すでに酒もまわつて居るし、これを聞いた仲間は

『どれ〳〵一つ見て來やう』

かう云つて、みんなばた〳〵下に降りて、酒の勢に乘じてその盆踊りの仲間に入つて一緒に踊り出した。何しろ皆もう相當酒がまわつて居る事ではあるし、座敷割の鬱憤はあるしするので、中には盆踊りをして居る藝者をなげたふしたりしたので、それを見ては町の有力者

も默つては居られない。これに應戰して其處で、はしなくも一座大いに入り亂れての亂鬪となつてしまつた。こんな譯で宴會の席上に膳が飛び、人が倒れ大騷動の巷と化した。

この事件の爲に安田八造も最初は三ケ月の刑を云ひ渡されたが、結局拘留十五日で事が濟んだ。さうして無事に臺灣に赴任して行つた。又馬場豐藏氏も取調べの爲に相當の間警察に留め置かれた。野村鐵太郎、佐藤廉吉等と云ふ人も、極て輕いものではあつたが罪になつた。この頃安藤と云ふ檢事があつて、これが野村先生の知人であつた。この人が福島に居れば事は隱便に終着したかも知れないが、不幸にもこの安藤氏が東京に行つて留守であつたので、事件が多少面倒になつた。だが、辯護士等はむしろ鐵道の人達に同情した。これは結局野村先生の德望の然らしむる處だと謂はれた。馬場豐藏氏はかう話した。

『實はこの事件の前に私共は多少警察から目をつけられて居つたものです。云はゞ憎まれて居つたのです。と云ふのは例の二號トンネルの火事の時に刑事が調べに來たが

「いや大した事ではない」

と云つて調べに來た者を逐ひ拂つて仕舞つた。而し刑事は尙數日の間其の近所を見張つて居つた。處が松川橋の處は狹いので、其處等にウロ〳〵して居ると邪魔になる。其處で私等

は
「どうも邪魔になつて仕様がない」
から云つた處が、向ふは名刺を出して
「自分は警察の者だが」
と云つた。處がこちらも負けて居らずに
「警察の者であらうと何だらうと、こつちは役所の仕事をして居るので、いそがしくて邪魔になる」
と云つたので、こんな事でかなり其の筋の人から睨まれて居つたのです。
松葉館事件のとき私が幹事役として大竹氏と二人で警察に説明に行くと例の刑事が有無を云はせずに二人を拘留してしまつた。其の結末としては格別心配する事はなかつたけれども、さう云ふ經緯があつたので二人とも一時拘留されたと云ふ譯です。
其の事の爲に野村先生も隨分心配された樣でした。
當時の野村先生は三十の上を幾つか越してゐたに過ぎません。風采は貴公子然たる上品な立派な態度の人でした。其の德望は前にも云ふ通り非常に高く、人々から尊敬されて居りま

した。』

七、松葉館事件後日物語

野村先生は平生は沈默寡言の人であるが、酒の御機嫌の非常にいゝ場合には、ポツ〳〵と昔の出來事等について周圍の親しい人達に話をされる事がある。

野村先生の邸に、明治三十九年から大正三年頃まで厄介になつて居つて、今は東鐵の工務部に勤務してゐる高味壽一氏等は、よく先生の思出話を聽かれたと云ふ。

かの福島の事件も、野村先生でなければ知らない樣な後日物語と云ふものがある。

そも〳〵この事件は前にも書いた樣に福島の松葉館に於て、大廣間を病院長の宴會に取られて、鐵道の人達は百五、六十人もの大勢でありながら二階の小さな部屋に押し込められ藝者も來ないといふので問題が起つた譯で、始めは些細な言ひ爭ひから、やがては廊下にお客を引き出して來て、鐵道の方の柔道の達者な連中がこれを投げ出したと云ふやうな騷ぎとなり、そして檢事が現行犯として三人ばかり拘引したといふ事件となつた。

其の拘引された人達の釋放の運動が起つて、福島の松葉館を當時の鐵道の人や又鐵道の仕

事をやつて居つた業者が取りまいた。これには相手が驚いた。松葉館をこの連中が取りまいたのは

「第一に松葉館がけしからん、部屋の割當てが不公平である」

と云ふのでこの連中がデモンストレーションを起した。そして松葉館を取りまいて、すぐ近所の料理屋でドンチャンさわぎをやつた。又福島の町の辻々には何百と云ふ配下をつれて來て、たむろしてかゞり火をたき、又大勢の中にはダイナマイトを持つてるものもあるし、土工の使ふシャベルを持つてゐるものも居る。而も其の連中は昔の命知らずの連中である。其の上に酒の勢もかりて、連日連夜示威運動をした。若しこれ等に刄向ふものがあればダイナマイトを投げつけると云ふ評判が傳はつたので、警戒の巡査さへも彼等をさけて通つたと云ふ位であつた。

丁度泉鏡花の小說『風流線』に出て來る樣な大さわぎである。

こんな狀態が一ケ月位も續いたので野村先生は、東京に出かけて行き、時の鐵道局長官井上勝にこの話をされた。すると井上長官も

『それは痛快な話だ。斷じて負けてはいけない、俺が骨は拾つてやるから決して負けるな』

と云つて大層聲援をされた。其處で野村先生も大いに强氣になられたさうである。この事件は二ヶ月もつゞいたと云ふ事である。

この時に野村先生と同鄕の檢事正が中に入つて、拘引した人を釋放して、この事件は圓滿に解決を告げた。

處がこの事件が終ると間もなく福島の病院長が仙臺に轉勤した。鐵道の方は誰も左遷された者も免職になつたものもない、そのまゝになつてゐる。其處で

『鐵道の人達は偉い』

と云つて、福島の人達が非常に鐵道の人達に感服した。松葉館は勿論鐵道に深く詫びを云つた。

平常寡言の野村先生であるけれども、輿に乘られた時はかう云ふ話を內輪の人にはされたのである。

八、笠松愼太郎氏の話

また、當時福島驛において、偶然の機會から、當時野村先生が、福米間の工事の爲めに、

如何に活動されたかを目擊した笠松愼太郎氏は、往年を追想して左の如く語つた。

『野村先生と私とではその年齡に於ても、其の地位に於ても、著しく大きな階段があります爲、既往の四十餘年間親しく先生の御指導を受ける機會が極て少かつたのであります。

それでも今からふり返つてみますと、約四十年前のことでありますが、卽ち日淸戰爭の當時、私は靑森から東京までの軍用列車に車掌として乘務し、途中大雨に遭つたのです。その頃の東北線は日本鐵道會社の所屬であつた爲、諸々の設備は出來るだけ節約し、各驛乘降場の上屋などは一切設備されて居なかつたのであります。當時雨具を持ち合せて居なかつた私は、制服の上着を通して全身ビショ濡れになつてしまひました。そしてやがて私の列車は福島驛に到着し、一時間ばかり休養の爲停車するので、私は少し體を乾かしたいと思つて驛長室に入り込み爐に手をかざしてゐたつてゐました。

忘れもしませぬ、丁度その時、身の丈六尺にも近いかと思はれる同驛々長の小田敬忠氏が入つて來て私の姿を無言のまゝしばらくみつめて居ました。

今でも憶えて居ますが、この驛長は溫厚篤實、如何にも大人らしい風格の備はつた人で、間もなく上野驛長に榮轉されましたが、その小田驛長がやゝしばらくして後

「君は今其處に停車してゐる軍用列車の車掌さんかね」

と尋ねられるので

「さうです、軍用列車の車掌ですが、御覧の通りこんなにビシヨ濡れになつたので、このまゝ乘務をつゞけたのでは風邪をひきますから、一寸乾さして戴いてゐるのです」

と答へた處が、驛長は大きくうなづき乍ら

「さうか、それは氣の毒だ。だが君兵隊さん達は戰地で雨が降つた雪が降つたと云つて、その都度休む譯にはゆかぬ、一人殘らず皆命がけで働く人ばかりだ。それに今軍用列車の周りは見送の人で非常に混雜して居るから、受持の車掌が居なくては申譯ない。御苦勞だが列車に行つて世話をして呉れ」

との話であつた。驛長の云ひ分は勿論御尤もなことではあるが、何分にも全身ビショ濡れになつてゐるので

「もう五分でも十分でもよいから身體をあたゝめさして貰ひ度いものだ」

と云ふ樣な多少の不滿を抱きながら驛長室を出て列車のまはりをうろついてゐた。

間もなく其處へ、米澤線の方から泥だらけの建築列車が入つて來て、軍用列車の隣り線に

停車した。

其の時雨は益々ひどくなつて來たが、小田驛長は大きな體を私の傍に運んで來て

「君、着物が濡れて氣の毒だが、雨に濡れてゐるのは君ばかりぢやない。見給へ、あの建築列車の最後部に乘つて居られる泥だらけの人……あれは鐵道局米澤線建築の主任技師野村さんだ、とても豪い人だよ。今日ばかりぢやない毎日毎日米澤線のトンネルをくゞつて自身泥と水にまみれ、澤山の工夫と苦勞を共にしてゐられるのだ。あの姿を見ると吾々下ッ端の者は苦情も不平も云はれないよ。君はさぞ寒からう、辛からうが、あの野村所長の奮闘ぶりをみて我慢して呉れ。軍國の爲ぢや、奮發して呉れ」

と親が子に敎へる樣に云ひきかせて呉れられた事がある。

その後私は白河在勤となつて、東京盛岡間を始終乘務したが、成程氣をつけてみると丁度私の列車が通る頃、殆んど同時刻に米澤線の建築列車が福島驛に進入して來たが、其の後部には何時も小田驛長の訓へて呉れた泥だらけの野村技師をみるのであつた。

人も知る米澤線は碓氷峠を除き全國第一の三十分一急勾配線で、おまけにトンネルはつゞき、カーブは强く、あまつさへ深い〳〵溪谷を俯瞰しながら布設された線路であるので、そ

の建設工事の苦難は容易なものでなかつた。

私共は今列車に乗つて該區間を通過しただけでも、谷底を見下すと洵にゾッとする様な個處があちらこちらにつゞいてゐる。

この難工事を何ヶ月も〳〵雨に打たれ泥にまみれ、遂に裏日本と東北線との大動脈とを聯接し東北文化の大きな血路を貫通された野村先生の偉勳は、吾々鐵道人のみならず社會すべての人々がこれを記憶し感謝すべきことであると思ひます。

殊に私は最初申上げた通り、その當時親しく野村先生の謦咳に接したのではなくとも、右申述べた如き野村先生の滅私奉公、不言實行の教訓と、小田驛長の訓言とは今も尚私の頭にはつきりと殘つて居る次第であります』

九、當時の思ひ出

濃尾の大地震の復舊工事の時に、野村先生の下で働いた野崎信一郎氏はまた福島にも行つて、板谷に勤める事になつたが、其の當時の大事件として磐梯山が破裂した事があつた。

野崎氏の當時の追懷談によると、丁度野崎氏は親戚の家に泊つて居つた。正月の休みで素

晴しい物音で起きてみると山が破裂して居つたと云ふことである。

これは福米間の測量最中の出來事で、まだ交通機關が發達してゐないので、朝早く仕事場に出かけて、歸りみちはおそくなるといけないので十一時か十二時にはもう歸り支度をしなければならない。行つた連中は一體何處に鐵道の線路が出來るかと云ふ事さへも解らない位で、鐵道の事に對しては智識のないものが多かつた。

『これ等の經驗の無い人達を從へおまけに現今のやうに工事用機械とて完全なものがあるのではなし、それであの難工事をやつた野村先生の苦心は一方ならぬものであつたでせう』

と野崎氏は今でも追懷して當時の事を物語るのである。

當時の人夫賃は、辨當を持つて一日に二十四錢位で、東京から來た人夫が三十錢位とつて居つた。野崎氏の如きも當時の月收は十二圓位で、然も任官した時は相當の御馳走を友達にした事があるので、十二圓の金が當時相當の購買力を持つて居つた事は明らかである。當時中學を出たものが日給二十四、五錢か三十錢で、鐵道に働いて居つた。或者は

『五十圓になつたら俺はひげを生やす』

と云つて居つた。これ等を以ても當時の勤人氣質と云ふものがうかゞはれると思ふ。

福島青森間の工事は十二ヶ年の繼續事業であつたが、其の後八ヶ年に短縮され、更に十三ヶ年又は十六ヶ年に延長され日露戰爭中は、建設工事中止の止むなきに至つた。

野村先生は二十九年十月に青森出張所長を兼職したが、十一月本局勤務となられたので、松井捷悟氏が其の後任となつた。

第八章　鐵道院副總裁まで

一、おどろくべき躍進

野村先生は、東京府から鐵道に轉じて後、專ら現場方面において、建設工事の設計監督の働きをして居られたが、明治二十九年十一月第一回の洋行を命ぜられ、同三十一年二月に歸朝してからは引續いて、鐵道の本局本院において、經營の根幹にふれる仕事をされた。殊に歸朝後の先生の先生の躍進ぶりは目ざましいものがあつた。

二月に歸朝し、三月には早くも遞信技監となり、高等官二等に叙せられてゐる。

明治十九年九月、鐵道局へ一等技手として採用されてから、僅かに十一年の後には既に勅任官たり、技監たりと云ふ躍進ぶりである。而してそれは今日より約四十一年前のことである。であるから野村先生が如何に長壽を保たれてゐるか、又如何に長い間、高い位に居られるかを知るに足らう。

また大正二年十二月滿鐵總裁として赴任されるまでの間をとつても、約十五年間は勅任官

として鐵道に在職されたことになる。昨今、勅任官になれば、あとは數年しか壽命がないと云はれる役人生活とは大變な違ひである。

之より先生が本局本院において、鐵道に如何なる貢献をされたかを叙述しやう。

之より先、明治二十九年遞信大臣は我國鐵道の、廣軌、狹軌に關する根本政策を決定する目的を以て省內に『軌制取調委員』を置いて、廣狹兩軌の利害得失についての調査及び改築の方法、並に之に要する費用等を審議せしむることゝした。

遞信次官田健次郎之が委員長となり、鐵道作業局長松本莊一郎、遞信技監工學博士平井晴二郎、鐵道技監工學博士增田禮作等、二十一名の委員の任命を見たが、野村先生も歸朝後委員の一人として、新知識を以てこの大問題に貢献するところが少くなかつた。

また、遞信技監として監理課長心得となつた。

更にまた、鐵道會議々員を仰付けられ、其の後間もなく官制改正があつて、遞信技師となり、高等官二等に叙せられ、鐵道局設計課長心得兼營業課長心得となつた。

二、遞信省鐵道局時代

野村先生の、遞信省鐵道局時代のことについて堀江貞男氏は共の思ひ出を語つた。

『當時の遞信大臣は大浦兼武氏でありました。明治三十七年にはじめて三階造りの役所の建物が出來上つて、前の方が三階、後の方が二階になつて居りました。

鐵道は共の二階と下の方を占領して居つた譯です。

局長室と課長室が二階にありました。野村さんは設計課長心得、營業課長心得と云ふ役目であつたと思ひます。

大きな部屋が共の部屋の隣にあつて共の大きな部屋に庶務課長が居りました。

野村さんの部屋には公衆電話がありました爲に、私は給仕として野村さんの部屋に一人置かれた譯です。

處が私はまだ子供で、電話をかけるとよく電話の取次の事で交換手と喧嘩をする。それが又はげしいので野村さんも困られたと思ひますが、やつぱり共の時も決して怒られたことがありませんでした。

その事が今でも私の記憶に殘つて居ります。

どうして野村さんが設計課長心得、營業課長心得と云ふ樣に兩方とも心得がついて居つ

たかと云ふと、その頃野村さんはすでに勅任官でありましたから、課長にはなれなかつたので心得と云ふのがついて居つたのです。』

三、鐵道規程取調委員

明治三十三年二月政府は、私設鐵道法案と共に鐵道營業法案を、第十四回帝國議會に提出した。

蓋し、明治五年に鐵道略則が出來、其の翌年鐵道犯罪罰例の發布があり、更に明治二十年に私設鐵道條令があつたが、鐵道の保安、旅客貨物運輸に關し其の規定が具備しなかつたために、私設鐵道條令の改正に作ひ、是等規定の不備を補ひ、以て、鐵道營業に關する法令を定めんとしたものである。

而して、鐵道營業法は三月十六日公布され明治三十三年十一月一日より施行せらるるに至つた。

然るに、營業法は、鐵道の建設、車輛器具の構造及び、運轉並に運輸に關する規程、鐵道係員職制等を命令の規定に委ねたので、營業法施行までに、是等諸規程を整備する必要があ

つたので、野村先生などが鐵道規程取調委員となり、之等の規程の原案を作成した。今日の鐵道法規の根本をなすものは、皆この時に出來上つたものである。

四、鐵道國有の頃

明治三十七年末から八年初めに亙り大浦遞信大臣は、鐵道國有の法案を作つて閣僚の協議するところがあつたが、財政の關係調査が不十分であつたので、第二十一回の帝國議會の閉會を待つて、特に調査委員會を設け、鐵道局長山之内一次を主任とし、鐵道作業局長官工學博士平井晴二郎を顧問とし、野村先生等を委員として次回の帝國議會に、鐵道國有法案を提出するの目的を以て之が調査に從事せしめた。

この調査委員會は非常な勉强で、ここに、鐵道國有の趣旨、概要、並私設鐵道買收調査要項を作成した。これ等はすべて『鐵道國有始末一斑』に詳記されてゐるので、ここに記述することを省略するが、今日の言葉で云へば、國策上私鐵を買收するの有利なることを運輸の疎通、運賃の低減、設備の整齊の三大觀點より決定し、かつ財政上有利なる原因として總係費の節減、運輸費の節約、設備上の節約、貯藏品の節約、運轉上の利便の五箇條をあげ、買

收の方法、買收すべき線路、買收の價格、之が財源等に對する詳細の意見書であつた。

これ等委員の調査が出來上ると、其の都度次官室において會合し討議の結果成案となし遞信大臣はこれを基礎として鐵道國有の大事業を進め、閣議の決定を見たので十二月七日の調査委員に更に具體的調査を命じたが、野村先生の擔當されたものは次の如き問題であつた。

一、線路の選擇に關すること
二、線路及車輛の現況に關すること
三、未成線の工事に關すること
四、建設規程に依る改築金額に關すること
五、事業將來の見込に關すること
六、各鐵道の買收時期に關すること
七、事業授受の手續に關すること
八、事業管理の方法に關すること
九、兼業の處分に關すること
一〇、審査委員に關すること

かくして、十二月二十二日に至つて鐵道國有法案、鐵道國有の趣旨概要、買收價格に關する調書、買收線路調書、買收公債償還に關する調書が出來上つて正式に閣議を稟請するに至つたものである。

鐵道國有法案はかくして明治三十九年二月二十七日、議會の最終日に至つて可決確定し三十一日に公布せらるるに至つた。

當時の消息通の談によると

『鐵道國有の時にも野村先生は諸方に出かけて行つて鐵道の調査をした。山縣伊三郎が遞信大臣、山之内一次が鐵道局長で、議會では國有論に反對があつた。そして兩院の協議會があつて、夜にわたつてその交渉が續けられた。

丁度その夜、電燈が消えて停電の爲に一時議論を中止したことさへあつた。その時に野村先生は役所でその議會の結果如何とまつて居られる。十二時少し前に、いよ〳〵その法律案が議會を通過したと云ふ報告が來たと云ふことである』

と云ふ。

五月廿四日に臨時國有鐵道準備局の官制が公布せられ、先生は五月三十日に臨時鐵道國有

準備局の技師を兼任することとなり第二課長心得に叙せられた。

尙、野村先生は、日本鐵道と、山陽鐵道の引繼立會人として、夫々線路車輛、職員其の他の引繼を完了せられたことは、鐵道國有史上に顯著なる事實として殘されてゐる。

五、日露戰爭

野村先生は、時の鐵道局長大塚勝太郎氏の下に於て、隨一の鐵道技術家の花形として活動された。其の實際的智識と硏究的頭腦とは、すでに其の時內外の認める處となつて居つた。處が、たま〳〵日露の國際關係が風雲急を告げて、彼我の談判は遂に決裂した。日本が國を擧げての一大決戰をヨーロッパの大國の一つである露西亞とこゝろみることゝなつた。年まさに明治三十七年の事である。

此處に於て吾國爲政者の間に釜山、京城間、すなはち京釜鐵道速成の議が熟した。

この京城から新義州に至る線路の延長も、其の急設を圖ることが指定された。

そこで三十七年九月、時の遞信大臣大浦兼武の滿鮮視察となつた。

これは當時鐵道行政が云ふまでもなく遞信大臣の管轄下になつて居つた爲である。

この大浦遞信大臣の視察に、鐵道技術の實際家として隨行を命ぜられたのが實に野村先生であつた。

日露戰爭のすぐ前に京釜鐵道の豫算を野村先生に作る樣に求められた。其處で野村先生は久野に依賴して一晩でその豫算をこしらへられたことがある。當時京釜鐵道の社長は古市公威であつた。

此の鐵道は非常に急いでこしらへることが必要になつて來た。その速成の爲に鐵道局が會社の鐵道を引き受けて建設することになつた。當時の工事擔任者は大屋權平、岡村初之助、久野知義、大村鋿太郎等と云ふ人々で、橋は假橋をかけて、トンネルもなるべくこしらへずに迂廻して、とにかく大急ぎでこしらへた。そして日露戰爭の輸送に間に合せる樣にした。京城から新義州までの間、山根少將が武器の輸送について戰時輸送委員として活動してゐた。

この京釜鐵道は到底普通の經營ではやつて行けないと云ふ考で、政府は特に古市公威を會

社の總裁にした。

當時古市は遞信作業局の長官であつた。であるから、それから新しい鐵道局の方に入ると云ふことは考へられないことだつたが、時局の關係から一身を犧牲にして赴任をした譯である。

六、建設部長時代

明治四十年三月十二日勅令に依つて新に帝國鐵道廳が置かれて、鐵道作業局は廢止されるに至つた。

蓋し、鐵道國有の制度が行はれ、明治三十九年に六私設鐵道が買收され、更に四十二年度に於ても亦十一私鐵が買收され、線路總計二千八百餘哩を增加し、事業著しく擴張せられたるによつて、之が管掌のためには鐵道作業局では規模狹小に失するに至つたからである。

帝國鐵道廳は、遞信大臣の管理下にあつて、國有鐵道の建設保存及運輸並附帶の業務を掌ることとなつた。

この制度と共に總裁は平井晴二郎、副總裁には山之内一次任命せられ、而して野村先生は

建設部長に任命された。

建設部長としての先生の下には山形の出張所長であつた久野知義が迎へられて建設課長となつた。

當時石丸重美は內務省の技師で縣廳に働いて居たが、野村先生は石丸が技師にして文筆も立ち仕事も出來ることを見込んで鐵道に採用し、久野が建設課長のときは石丸は洋行して居たが、翌年石丸歸朝して建設課長となり、久野が洋行した。

中西鍊次郎、石川鼎等も當時野村先生の下で働いた。

中西は當時のことをかう語つた。

『石丸氏はなか／＼仕事も熱心で篤實な人でしたから、仕事のことについては野村さんは石丸さんには直接文句はお仰言らず、私共の方へ尻が來たことが度々あります。

また線路選定伺が來ると、私共のところで再調査をし、其れから課長に出し其れから野村先生に出したものですが、野村先生は其の成案について注意され其の上で書類が返つて來ました』

帝國鐵道廳が鐵道院と改まつても、先生は依然として建設部長であつた。

また、四十二年六月鐵道院技監となり高等官一等に叙せられたが、やはり建設部長であり、この職名は四十四年三月二回目の洋行をするまで續いた。

野村先生が増田禮作の後をうけて鐵道院技監となり建設部長を兼務された當時の副總裁は、平井晴二郎であつた。

當時の野村先生はなか〳〵公務に對しては強硬な態度を持して敢えて讓歩されることがなかつた。例へば平井副總裁の發案にかかる案件でも、建設部長としては之に從つて印を捺されても、技監としては之を留保されたことがある。

蓋し、建設部長は、副總裁の統制の下にある職であるが、技監としては別個の見識をもつてのぞむことを許されて居るからである。

『野村さんはなか〳〵考へて仕事されたことはこれでも分ります。ご自分の意志に反した命令を受けられたときはよくかう云ふ處置をされました』

と中西は語つた。

また當時の建設事務所長は總裁の直轄であつた。建設部長は總裁の命令を受けて監督する立場であつたが、建設事務所長をいぢめることはいくらでも出來た。それで年少の中西等な

どはよく議論を云つたものであるが、野村先生のやり方は柔よく剛を制すと云ふやり口であつた。

『私共はもつと思ひ切つたことをやつた方がよいと當時は思つたこともありますが、自分が年をとつてから考へ直して見ると、やはり野村先生のやり方がよかつたのだと悟る樣になりました』

と中西は述懷して居る。

かく前後四年間建設部長の要職に在つたことは、先生の鐵道生活中においても特筆すべきことである。

蓋し、建設改良工事は鐵道國有時代に於ける主要事業であつた。

殊に明治四十一年度より四十四年度卽ち、先生の建設部長時代における建設線開通哩程、停車場開通區間を一覽しても、我國鐵道建設史中においてレコードとも稱すべき最大の數字を示してゐる。

參考のため四十年度より大正元年度までの建設線開通哩程、停車場開通區間を左に揭載しておかう。

年度	開通哩程	停車場	開通區間
明治四十年度	五八・七九 哩	一二 箇所	奥羽線 土崎雄物川間 山陰線 青谷假鳥取間 十勝線 落合帶廣間
同四十一年度	八四・〇四	二〇	奥羽線 能代能代町間 山陰線 假鳥取鳥取間、米子松江間、和田山八鹿間 鹿兒島線 八代人吉間、八代球磨川間 中央線 中津坂坂下間 富山線 富山魚津間
同四十二年度	八〇・七一	一四	山陰線 八鹿城崎間、松江宍道間 中央線 坂下往原間、鹽尻奈良井間 鹿兒島線 人吉吉松間 大分線 柳ヶ浦宇佐間
同四十三年度	二一七・〇八	四七	富山線 魚津泊間 山陰線 宍道今市間、鳥取岩美間 宇野線 岡山宇野間 舞鶴線 園部綾部間 網走線 池田陸別間 中央線 奈良井宮ノ越間、須原木曾福島間 岩越線 喜多方山都間、新津馬下間 大分線 宇佐日出間 留萠線 深川留萠間
同四十四年度	一六七・一五	三六	中央線 木曾福島宮ノ越間 鳥羽線 山田鳥羽間 富山線 直江津名立間 網走線 陸別野付牛間 山陰線 城崎岩美間、福知山和田山間 房總線 成東東金間、蘇我姉崎間 大分線 日出大分間 天鹽線 名寄恩根内間

大正元年度	一三〇・七九 *四〇・三〇	二八 *一二	大社線　今市杵築間 山陰線　馬潟支線 房總線　姉ヶ崎木更津間 宮崎線　吉松小林町間 網走線　野付牛網走間 富山線　泊青海間、名立糸魚川間 天鹽線　恩根内音威子府間 山口線　山口小郡間 *眞岡線　下館眞岡間 黑石線　川部黑石間 倉吉線　上井倉吉間 岩内線　小澤岩内間 湧別線　野付牛留邊蘂間

*は輕便鐵道

以上を以てしても先生の建設部長時代が、如何に國有鐵道の建設の黃金時代であつたかが窺はれやう。

大正二年に野村先生は鐵道院の技監となり、更に副總裁となられたが、まだ技監の頃は、平井晴二郎が副總裁であつた。其の時に一般の行政整理に先立ち鐵道院の整理が行はれた。この整理のために八十數人の高等官が退職したが、國鐵としても空前の大整理であつた。しかも其の時は多く技術官が辭めた。

この大整理は總裁の床次竹二郎、技監野村先生、古川阪次郎氏と中川正左氏等が相談の結

果決定したものであるが、野村先生は、人事については實によく知つて居られた。野村先生のブラックリストにのつた人は皆やめさせられた。當時のことを追想して中川正左氏は語つた。

『野村さんは平生よく人の世話をされるので、殊に技術畑の人の長短はすつかり知つて居られた。よくあんなに知つて居るものだと思はれる程細かに知つてゐて、然も其の判斷の速かなることに驚かされた。野村さんは直ちに、あれは駄目だとキッパリと云はれた。平生の溫厚なる野村さんとは思はれない程、其の判定は速かにかつ確なものがあつた。野村さんのリストにあげられてゐた人は皆辭めさせられた』

であるから、野村先生は平生靜かに周圍の人達のことを隈なく觀察して、好いも惡いも十分に知りつくして居られるのである。

この大整理は大正二年五月に總裁の名によつて長い訓辭を出して發表された。この整理がすんで間もなく野村先生は副總裁となり、更に滿鐵總裁として赴任されたのである。

今日の熱海線が出來る樣になつたに就ては、後藤伯時代から其の調査が進められて居つた。何しろ箱根の線路はしば〳〵水害で故障が起る。

其處で慧眼の後藤伯は

『こんなに故障が起つては困る。それならば熱海の方を廻つたらどうか』

と云ふことを言ひ出した。

其處で野村先生が熱海線の調査をする事になつた。であるから野村先生はこの丹那のトンネルとか、或は熱海線の鐵道に就ても貢献する處の多かつたことは見逃がすことが出來ない。最初の要點は、湯河原からトンネルを堀つて沼津の方に出るつもりであつた。

然るに、湯河原まで行くならば、熱海の方に行かなければいけないと云ふ議論が出て、湯河原からトンネルを堀つて熱海を通ることに決定された。

何れにしても、この線は箱根線よりも平坦で、距離もはるかに近く、非常に便利になつた譯である。

當時の研究によると『丹那トンネルは必ず出來る。而も、さう困難な工事ではない』と云はれた。それに對して『丹那トンネルは不可能である。何故かと云ふと、其の途中に盆地が

あつて水が其處に廻つて來るから非常に困難である』と云ふことを云つた人もある。

事實に於ては非常に困難な工事となつた。困難ではあつたけれども、結果は成功したのである。

初め丹那のトンネルに就てはこれを複線のトンネル一本にするか、單線のトンネルを二本作るかの議論があつた。それで長谷川謹介が『斷然二本がいゝ』と主張をしたが、野村先生は富田技師の意見を容れて複線を一本堀る方を採用されたのであつた。

丹那トンネルの位置選定についても、やはり野村先生が參加して小田原から熱海を經由して丹那のトンネルを通つて、沼津に出ると云ふコースを選定された。

七、部下を庇ふ（一）

稻垣兵太郎氏は野村先生の建設部長時代に鐵道院に入つた。そして、野村先生が建設部長として如何に新進の者の意見を採用して英斷ぶりを發揮されたかを語つた。

『僕は二十九年に學校を出て北越に數年居つたのですが、それから臺灣などに行つて、四十

二年にはじめて歸つて來たのです。

鐵道院が出來たときに大部人を減じて居りました。其の際に後藤さんや長谷川さん、野村さんが相談して私を入れて呉れたのです。

何處かに行かなければならない。臺灣に居つても用がない。それだからやめてしまはうと思つて居つた處が、私が開通式に行つてゐる時に電報が來ました。

當時は平井晴二郎が副總裁、野村さんは建設部長で其の下に石丸さんが技術課長として居りました。

私の入つた時は仲々入れるのが困難であつたらうと思ひます。入つた時は三等二級で入つて來たのですから、さう云ふ階級の者をどん／＼淘汰して居る時ですから私を入れてくれたといふ事について大いに恩義を感じて居る譯であります。

それで北海道に行けと云ふ事でしたが、行くと云つても其の頃は家内はもう亡くしてしまつてゐるし、子供は預けてあつたので別に何もなく、ごく呑氣でした。半年もぶら／＼してから行つたのです。

其の間パスを貰つて方々の建設事務所の様子を見て來ました。「金は要らないからパスを呉

れ」と云つてバスだけ貰つた譯です。

北海道には七年居りました。赴任したのは春酣の頃で、東京では花の盛りも過ぎてゐたが、北海道へ渡つてみると、線路の左右は一面の銀世界で留萠線の深川邊では貨車のブレーキの上位まで雪が積つてゐる有樣には聊か驚いた。

「トンネルのむづかしいのがあるから來い」

といふので行つてみると留萠線の惠比島トンネルでした。其の工事に就いて本省と僕の意見が違つてしまつたのです。本省は厚さを十二枚にしろと云ふし、僕はそんなことをしないでまかして吳れと云つたのですが、いけないと云ふ。

其處で野村さんの處に持つて來て議論をした。すると野村さんは

「まあ、若い者の云ふことだ、やらしてみたらいゝぢやないか」

と云ふ。そうら、こつちが勝つてしまつた。後藤さんが來たときにも

『これは本省の意見と違ふから、間違つたら私が全部責任を負ひます』

と云はれたさうですが、こんな大きな問題を持つて行つた時に

「若い者の云ふことだからやらして見ろ」

と云ふ處が野村先生の非常にいゝ處だと、今でも感激して居ります。

結局七枚か八枚卷に仕上げました。土壓が非常に強くコムプレッションの影響を受けましたが、土壓の爲變轉した部分を卷き直したので、金はかゝつて居るけれども、十二枚卷よりは非常に安く出來た譯です。

それから野村さんに親しみを増した譯です。

もう一つは地下鐵道をやる場合に、僕を呼んで入れてやると云ふ。その前僕は地下鐵道について

「濕氣の多い地盤では甚だ心もとない。それよりは、むしろ高架鐵道をやつたらいゝ」

と云つたことがあつたので、今更其處に行くと云ふ譯にはゆかないので

「あの時から云ふ事を云つてしまつたので」と云つたら、

「そんな事はいゝ」と云ふことでした。が遠武君が大湊をやめて居つた時分でしたから、同氏が行く事になりました。

それから後は普通の仕事でしたし、鐵道の工務課長になつてしまつたから……。

まあ、幸に事故がなかつたから濟んだのですが、結論としては、若い者を引き立つて何處

までもやらして見て、若し間違つたら自分が責任を負ふと云ふ度量がなければ出來ない譯ですね。要するに氣慨があつたと云ふのか、だから下で働く者もコセ〳〵としないでよく仕事が出來たわけなんですね』

八、部下を庇ふ（二）

また那波光雄博士はから云はれた。

『丁度大分線をやつて居る時に元田さんが、線路を杵築の方に廻せと云ふことを云はれました。僕は既に線路の敷設にかゝつてゐるのに「どうしても廻せ」と云つた。そして「那波と云ふ奴は憲政會の方のひいきをして線路をやつて居るのだ。だから云ふ事をきかないで困るからあいつを返して吳れ」

と床次さんに云つたので、床次さんが野村さんに

「那波を呼び返したらどうか」

と云ふことを云つたさうですが、野村さんは一度見に來たきりで

「それでよろしい」

と云ふことになりました。
一時私は、憲政會の方だと云ふことで大分さわがれました。
あとで元田さんが大臣になつた時に
「君は偉いね」
と云つて居ました。これは、どうも困つた者だと云ふ意味なんだと思ひますが、そんな譯で今の樣に貫通したのです。
野村さんは一寸來て僕の方に肩を持つて吳れた譯です。
丁度明治二十四年でした。
大分線には九年居りましたが、それは野村さんのおかげでした。』

九、部下を庇ふ（三）

梅野實氏も亦野村先生が時に非常な英斷を以て部下の者や、後輩のためになるやうな處置をとられることについて次ぎの樣な感激の深い話をした。
『私はお世話になつたのは學校を出てすぐですが、直接に使はれたと云ふのではありません。

けれども、自分で野村先生に非常に感服して居る事を申上げます。

それは明治三十二年のころの出來事ですから野村さんの四十歳位の時のことです。私は長崎線の建設に行きました時、長崎線が一定の期間に仕上げないと政府から、補助金が貰へないと云ふ時でした。大村から喜々津と云ふ處まで土地買收が遲れて仲々うまくゆかなかつたのです。非常な馬力をかけてやつた譯でありますが、野村さんが開通の監査にいらつしやつた時にはまだ出來上つてゐませんでした。

私の擔當區間が一番あとにぶつかつたのであります。前云ふた通り工事が遲れてるところへ野村さんが監査に來られたのですつかり參つてしまつた。……けれど野村監査官を御案内して未だ工事の完全に出來てないトンネルの中を案内して行きました。野村さんは

「あたり前ならば開業の監査だから、通す譯には行かないが、お前は學校を出てからはじめてゞ、非常な努力をして最後のトンネルの開通をやつたのだから、私の考では一週間か十日で完全に仕上げが出來ると思ふから兎に角監査を濟まして歸るから私が歸つて復命する迄に確實にやれ」

と云ふことを言はれました。私の苦心を了解して下さつたのです。其の後晝夜兼行でやり

ましたからトンネルは間もなく開通しました。其の時に私は非常に感激しました。萬一其の期間内に出來なければ野村さんの責任になることですから、其れをのみこんで知らぬ顔をして歸つてゆくと云ふことは餘程度胸のある人でなければ出來ないことです。それ以來野村さんには非常にお世話になつて居ります。かうして終始お世話になりましたけれども野村さんの下でお仕事をしたことはありませんでした。つまり野村さんは局に居られ、私は私設會社に居つたのです。ところが最後には滿鐵で野村さんの下に居て仕事をした譯であります。

一番はじめに九鐵の長崎線で野村さんに勵まされて十日間の間に一生懸命に隧道工事をやり上げたことから、今でも野村さんのお蔭と思つてゐます。

其の後私が請負人となつて居りましたとき、岩越線の仕事にまゐりましたが、岩越線は國道からは遥かにはなれて居りまして材料運搬が非常に困難なので、請負人が嫌つて誰も行かない處でした。私も皆の行かない處なので躊躇して居ると野村さんが私を呼びよせて

「やれ」

と云ふことでありました。私も、あゝして育て上げて貰つたので、野村さんの恩義に報ひなければならないと考へてやる事にしたのです。非常に困難でありましたけれども何とか出

來上がりました。一番交通の不便な場所をやり上げた譯です。

最後に三菱の兼二浦（けんじほ）の仕事をやつた時に戰後不況の時で非常に損をした譯で、どうも責任上三菱を辭めなければならないと云ふときに野村さんに相談すると

「俺の處に來い」

と云ふ事で滿鐵に參りました。さう云ふ譯で野村さんの若い者を育てゝ行くと云ふお心は終始一貫變らないのです。

丁度松田貞治郎君が滿鐵に行く時にもさうでした。やはり九鐵をやめまして大阪の市役所に行つた處が就任後間も無く植村市長が更迭されて大阪市をやめなければならない事になりました。大阪へ行く時には四五年の條件で行きましたが、其んなことで條件など持出せなくなり、非常に困つて野村さんに頼みに行つた處が、第一回に滿鐵に行かれた頃でしたが

「何か知らんが連れて行つてやらう」

と云ふことですぐに連れて行かれました。間もなく野村さんは滿鐵をおやめになつてしまつたので殘つて御奉公して居りましたが、二度目に野村さんが滿鐵に行かれる時に私が入れ變つたのでありました。

この時にもまた勵まされました。私の一生に對しては終始一貫見て下さつた譯です。私のお世話になつた先輩の中でも親切にお世話下さつたと云ふことでは野村さんが一番でした。』

十、先生とスリ

野村先生が建設部長時代に、よく部内の人達を集めて懇親會を開き、そしてお互の意志の疎通を計つたことがあつた。これはずつと以前からも先生がしば〳〵やつた事であるけれども、さう云ふ懇親會の席上に於ては自分が先立つて酒を飲んで、部下の親密を計る爲に非常に努力した。

處が、或る時のこと大磯で運動會をやると云つてこの懇親會を開いたことがある。其の時に東京へ歸ると云ふ時、何か列車の關係で大船驛で乘り換へて違ふ列車に乘り込んだ。先生が列車に足を踏み入れやうとすると入れ違ひに一人の男が出て來て、先生に一寸ぶつかつた樣な氣がした。先生もハッとしてポケットをさぐつてみると札入がない。

『取られたッ』

と先生が云はれたので

『スリですか？』

と云つて大勢がさわぎ出した。處があまり大勢がさわぎ出したので逃げ場に困つた男は驛の便所の中に逃げ込んでしまつた。皆の努力でやつとつかまへて調べてみると先生からすつた札入れは持つてなかつたが、隈なくさがしてみると便所の中にかくしてあつた。これを警察の手に渡してだん／＼調べてみると、それが有名な箱師であつたと云ふ。

其の時札入には三、四十圓入つて居つた。先生は

『いつもはいくらも入つてないが珍しくあれだけあつたのでよかつた』

と云はれたさうである。

第九章　洋行と鮮滿視察

一、第一回目の洋行

野村先生は役人時代に前後二回洋行された。第一回は明治二十九年のことである。其の年の十一月十三日、鐵道事業視察のため、歐米各國に派遣の命令があつた。依つて十二月の四日に横濱を出帆、米國に向つて出發された。

この洋行の命令の出るすぐ前まで、先生は福島にあつて、福米間の工事を擔當して居られたことは前に書いた。

其處で福島の舍宅を引き拂つて、東京麴町富士見町一丁目一番地の借家に移轉した。鄉里から兩親を迎へられて、留守宅の準備はすつかり出來上つた。船はカナダ太平洋汽船會社のエンプレス・オブ・インデアン號である。バンクーバーに向つて出發された。

同じ汽船で出發した人には、山陽鐵道會社の汽車課長岩崎彦松、三井物産の山口俊太郎等が居つた。又遞信省からは松本鐵道局長と犬塚參事官とが洋行の命令を受けて居つたが、こ

の二人は何れも都合があつて出發が延びた。野村先生だけは先に出發された譯である。先生は海路つゝがなく初洋行の氣分を滿喫されて同月十七日無事にバンクーバーに到着された。

それから汽車でサンフランシスコに行かれた。更に大陸横斷の汽車でロッキー山を越えてカンサスに至り、シカゴ、ピッツバルグ、クリーブランド、フイラデルフイヤ、ニューヨーク、ボストン等の米國の工業都市や大都會を見學された上に、明治三十年の二月半にニューヨークを出發し、太西洋を渡つてイギリスに到着された。イギリスでも北部の工業地方を巡視することに力を注がれ、スコットランドのエジンバラ、アイルランドのダヴリン等の都市を訪問された上にロンドンに歸られた。ロンドンには一ケ月あまり滯在された。

それからヨーロッパ大陸に渡られて、ドイツのベルリンに向はれた。先生のベルリン滯在は約二ケ月あまりであつた。殊にドイツのライン河畔の工業地方を、非常な興味を持つて見學された。再びベルリンに歸られてからオーストロ・ハンガリーに向はれて、ウイン、ブダペストを視察された。そして三度ベルリンに歸られてから先生は、ベルギーのブラッセルに赴かれ、同地方を視察してフランスのパリに到着された。

丁度その時東京の鐵道局から外人の顧問技師を雇ひ入れることを依託された。其處で先生

は、ドイツの工部省參事官や、その鐵道の技師等に相談されて適當な候補者の選擇を依賴して、パリの用件をすました後、イタリーからスイッツルに行かれ、四度ベルリンに行かれた。そしてさきにパリーから依賴してあつた人達と協議の後に、漸く適當の技師を得て內約束をなし、尙表面の契約はベルリン駐在の日本公使と本人との間にこれを締結すべしと云ふことにして先生はベルリンを出發しオランダに向はれた。アムステルダム、ヘーグ等を視察し、更にベルギー國の首府ブラッセルに立ち寄り、翌年一月初旬にパリに戻られ、約半月の間滯在して一月十七日にマルセーユに到着した。フランスのメサゼリー・マリチーム汽船會社のヲセアニアン號で同港を出發し、途中ポルトサイド、ジプシー、コロンボ、サイゴン、シンガポール、香港、上海、長崎等を通り、二月二十三日神戶に安着、出迎の者と共に同夜は神戶に一泊し、翌日神戶を出發、無事に東京に歸られた。

此の旅行でレールや、橋桁等の製造工場の撰擇、高架鐵道の調査等をされた。當時の復命書の全文は卷末に載せることにした。

二、第二回目の洋行

第二回目の洋行は、明治四十四年三月の事であつた。その年の七月にイギリスのロンドンに於て開催される西伯利亜經由歐亜旅客聯絡運輸會議に、委員として出張することになつたのである。よつて四月の二十二日に東京を出發された。同行者は大河内甲一、井上鋭雄の兩氏があり、下關から大連に渡つて滿鐵、東清鐵道、シベリヤ鐵道によつてモスコーに行かれた。モスコーから更に露都に行かれ、更にベルリンを經て再び英國の土地を踏まれた。

英國に於ては、イングランド、スコットランド等の鐵道工場を視察され、七月のはじめにロンドンに於て開かれた旅客聯絡會議に出席され、會議が終へてからヨーロッパ大陸に渡り、ドイツ、オーストリヤ、ポルトガル、イタリーの各地を視察された。これ等の土地は、先生にはすべて曾遊の地で、先生にとつては感慨無量なものがあつた。

第一回は明治二十九年から三十一年にかけての旅行であつたが、それから約十數年を經て居るので、ヨーロッパ各地の都會にもそれ〴〵相當の變化があつて、旅行者として非常に興味を感ぜられたことであつた。

それからドイツ、オーストリヤ、ハンガリー、イタリーの諸國を視察し、米國に渡つた。米國各地の鐵道事業を視察し、サンフランシスコから歸途について十二月の二十三日に無事

歸朝された。

この旅行は汽車の便によること約二萬五千哩、汽船の便によること約一萬海里に達したと云はれてゐる。

現在純整調の音樂を研究し、これを大成して世界的に名聲をはせてゐる田中正平氏は野村先生に負ふ處が多いと云つて話をされたことがある。

それは田中氏がドイツに留學して居つた時の事であるが、田中氏は文部省の留學生としてドイツに派遣されて居つた。

然るに篤學の田中氏は一年を二年に延ばし、又二年を三年に延ばして出來るだけ歸朝する事を延期してドイツで勉强して居つた。處が、遂に文部省から金を送らなくなつてしまつた。

だが、熱心な田中氏は依然として樂器の研究をして居つた。

丁度その時に野村先生がドイツに行つて田中氏の滯在してゐるのに會つた。それでドイツの調査や旅行の際の案内を田中氏に依賴してよく世話をされた。當時、犬塚勝太郎氏もドイツに居つて、三人でよく旅行をした事もある。當時、田中氏は文部省からの送金は止み前途

を悲觀して居られたが、野村先生の好意によつて前途の不安が除かれたのでその御好意に對して感謝して居られる。

ドイツから歸られると野村先生の紹介によつて帝國鐵道廳に囑託となつた。ドイツの鐵道規程類の調査をしたり、又飜譯をしたりする樣な關係になつた。田中氏は種々な發明もされたけれども、併し普通の發明家の樣に其の權利が高く賣れると云ふ譯でなく、研究はよくされるが、やはり境遇は、必ずしも惠まれたものではなかつた。

さう云ふ風であつたので、野村先生によつて引き立てられたことを今に於ても感謝して居られるのである。

その前に、カイゼルは田中氏の偉大なる音樂研究家なる事を知つてゐて、後年伊藤博文がカイゼルと謁見の際田中は何うしてると聞かれて伊藤公が面喰つたのは有名な話である。

先生はドイツのベルリンに滯在中鐵道運送に關する種々の規定を研究された。田中正平氏も又その研究調査に手傳つたことがある。ルムシュッテルと云ふドイツ人が當時鐵道の囑託であつたが、この外人もまた其の研究を助けた。鐵道に於て當時計畫されて居つた高架線の

設計をバルツアーと云ふドイツ人に依頼した。バルツアー氏が鐵道の囑託になつたのは全く野村先生が洋行中に交渉して決められたものであつた。先生はプロシアの國有鐵道の規程を持つて歸つて、これを參考にして日本の國情を參酌して現在の鐵道建設規程、運轉規程、運輸規程等が出來たが、其の根本をなしたものは野村先生の調査によるものである。これ等の規程が日本の鐵道運送上に根本的の規則となつて居ることは云ふまでもない。かゝる規程の制定に野村先生が大きな功績を殘されて居ることは見逃がすことが出來ない。

勿論、これ等の規程も時代の必要に應じて種々改善されて居るけれども建設規程、運轉規程、保安規程、統計に關する規程等ドイツに似て居る。又鐵道國有の際にも山之內一次を助けてその下に於て野村先生が非常に働かれたことは事實である。山之內は人も知る如く內務の畑から來られた人で鐵道方面には必ずしも經驗家と云ふことは出來なかつた。であるから國有準備局の內部に於ては野村先生の如き鐵道生へ拔きの人が種々材料を調査提供したものである。

野村先生の第二回の洋行の時同行して歐洲からアメリカまで行を共にした井上鏡雄氏から

當時の模樣を詳細に話された。

當時井上氏は門司にゐたが藤田虎力から電報で呼ばれ、行つて見ると

『野村さんに隨行して洋行せよ』

と云ふことであつた。井上氏と大河內甲一が同行したが、大河內の方は野村先生には前から使はれてゐたが井上氏はこの時はじめて野村先生を知つた位であつた。

まだ學校を出たばかりで血氣旺な井上氏に課せられた硏究題目は鐵道電化の問題が其の一つであつた。當時問題とされてゐたのは、直流交流の問題で交流はドイツ系統・直流はアメリカ系統で其の優劣の比較が問題の中心であつた。

井上氏は野村先生に

『あなたのお伴をしたのでは硏究が思ふ樣に出來ないかも知れませんね』

と率直に云ふと野村先生は

『硏究の必要が起つた時は君だけ自由行動をとればいいではないか』

と云はれた相である。

かう云ふ譯で一行はシベリア經由で歐洲へ向けて出立した。

シベリア鐵道では松方幸次郎、野田鶴雄兩氏等の一行八名が日本人として旅行者の中にゐたので、一行と合せて十一人の日本人が一團となつてなか〳〵賑やかであつたが、何しろ誰れもロシア語が話せない。またシベリア鐵道の從業員中には英語もろくに話せる從業員がないので、皆物まね手まねで用をたすと云ふ不便極まるものであつたが、幸ひ一行と親しくなつたロシアの參謀大尉が少しばかり英語が分るので、この人の通譯によつて食事を註文すると云ふ有樣であつた。

汽車旅行九日程にしてモスコーに着き、其れからすぐに露都ピーターースブルグに赴き名所舊跡等を見學し其れからベルリンに落着き、そこを中心として各國を視察し三度ベルリンに歸ると云ふ旅行をした。當時島安次郎氏はベルリンに居り、生野團六氏はパリーに居り、何れも野村先生の一行を案內してくれた。

生野氏の如きは既に歸朝する筈のところを野村先生のために其れを延期し、イギリスまで迎ひに來て大いに旅客聯絡會議に援助せられた。又フランス、白耳義等を案內してくれた。

當時はまだ日本の國威が十分に海外に發揮されてゐなかつたので、ノールエーの首府のクリスチヤナに行き公園をドライヴした時通りがかりの子供と戯れて話をして見ると全然日本

と云ふ國のあることを知らなかつたのには皆が驚いて

『どうも心細いことだね』

と云つた。

またこの旅行の一部には岡野昇氏や朝倉希一氏等も加はつてスカンヂナビヤ半島の旅行をした。

ドイツでクルップ工場を見學した時の如きは大に歡待された。井上氏は當時の感想を語つて

『何しろ工場の中が廣いので、二頭馬車で見物したので驚きましたよ。また工場のわきに美事な花や野菜の作つてある農園があつて、其の中に美事な社宅が澤山ありました。これが、この工場で働いて年をとつた者が老後を送るために造られた社宅であると聞いて野村先生はじめ一行が大に感心いたしました。見ると日本ならば高砂の老夫婦とも云ふべき老婆老翁がいとも幸福相に其の邊りを歩いて居る光景を見ました。

其の入口に初代クルップの銅像がありました。見學がすんでから學者名士等の所謂クルップ・キャビネットを動員して接待役とし一行を大に歡待しクルップ夫人の私室まで見せ

てくれると云ふ實に至れりつくせりの優待をしてくれました。酒の如きも何百年と云ふ古い葡萄酒を出してくれたので野村先生も非常に滿足の模樣でした』

と云ふ。またあるところでは港灣設備の視察をされたが、野村先生のために特別列車を出し千トン位の汽船を仕立てて港內を見せてくれた相である。

『こんな具合で歡待されただけに經費も大にかかつたわけです。つまり大名旅行です。旅行するのにもシルクハットを持つて步くと云ふ有樣でした。何しろまだ日本が今程でなかつたので、やはり金を使はねば十分の體面を保つことの出來ない樣なこともあり、無駄と思はれる程の費用もかけたわけです』

と井上氏は語つた。

當時ベルリンに滯在してゐた日本人が個人として野村先生の一行を招待したこともあるが其んな場合行つて見ると、軒先に日の丸の旗を出してゐてくれたので實に感慨が深かつたと云ふ。

南はイタリーに行つた。世界最長のトンネルと云はれるシンプロン、サンゴタの中工事中のものがあつたので野村先生はわざわざ汽車を降りて、工事中のところを步かれた相である

が、先生が福米間の工事を仕上げたことがあるだけに感慨の深いものがあつたに相違ない。

スキス等を見物して先生の一行が再びロンドンにゆかれたときは丁度、皇帝陛下の戴冠式が行はれる時で松方幸次郎氏が特に大枚百五十圓もする様なスタンドの席を三つもとつておいて先生一行を招待してくれたが、野村先生は之を斷はられて、この戴冠式の混雜をさけるためにスコットランドの方へ旅行をされた。

先生はよく停車場のヤード等を歩いて見學をされた相である。

ディッカーの電氣會社を見學したときのことであつた。案内の技師の說明に何となく不十分なところがあつたのでつい井上氏が中途から口を出して其れを補足する樣なことをした。其の後で野村先生は

『井上君ああ云ふことをしてはいけない。あれは失禮だ。殊に外國人に對しては氣をつけなくてはいけない』

と注意された。

『野村さんから叱られたことはありませんが、かう云ふ注意は實に時にとつての教訓で大に教へられました。私共は何一つ先生の身の廻りのお世話をするのでもなく、先生は全部御

自身でされました』

から云つて井上氏は今日でも恐縮してゐる。また『野村先生はあの几帳面さで停車場にゆくのでも半時間前位には行つてゐないと氣がすまぬと云はれます。ところが私が朝寢で仕度がおそいと來てゐるので共のために、いつもおくれ勝ちになるので井上君も少し早く起きられないかねと云はれました。

また私は洋行前に急に結婚の話が纒つて共れから旅に出たので野村先生は、井上君は夜明けの三時頃まで手紙を書いてゐるので朝がおそいのだ、などと眞面目に冗談を云はれました。

また歸朝後、私の妻の家の知合に當る武笠氏に井上君は結婚の支度に盛に銀器などを買込んで來たと話されたので、妻の家では共の話をきいてどんな仕度をしてゆけばよいかなどと話合つた相です。野村先生は眞面目なうちに共んなユーモアを見せられることもありました』

と語つた。

共れからアメリカに渡り各地の新興工業や鐵道を視察し、アメリカに井上氏は殘つて先生

の方が早く歸朝されたのである。

野村先生の滿鮮視察に二回共隨行した池上重吉氏は、詳細に當時の模樣を書いてくれた。これを書き改めることは、却つて其の興味を薄くするので原文の儘全部ここに載せることにした。

三、第一回鮮滿視察

野村さんは明治三十七年と三十九年とに、鮮滿地方に出張されまして、二度とも私がお供を致しました。

明治三十七年日露の風雲がます／＼急を告げ、色々デマが飛んで居りまして、朝鮮では京釜鐵道の速成工事中でした。

大浦遞信大臣が現地を視察されることゝなり、明治三十七年九月二十三日東京を出發されました。其の時野村さんは勅任技師で遞信省鐵道局の設計營業兩課長心得で四十五歲でした。

一行は大浦遞相、山之内鐵道局長、野村博士、堀遞相秘書官、池田遞信書記官、佐伯遞信

屬、吉川通信屬、岩村警部と鐵道局勤務の遞信技手周田吾一、同池上重吉の十名に、鐵道局の傭人で寫眞を撮ることの上手な田口といふ人も一行に加はることになりました。
此の他京釜鐵道會社の總裁古市公威氏、朝鮮政府の財政顧問目賀田種太郎氏と税關事務官鈴木穆氏等も朝鮮迄行を共にせられました。
當時は未だ關釜連絡船などゝいふ氣の利いたものはありませんで、一行は神戸からオハヨ號といふ汽船に乘つて二十六日の未明に釜山に着きました。
釜山では領事の案内で市内を視察し、午後軍艦高千穗に乘つて馬山浦から鎭南浦を視察され、翌日釜山に歸つて大池旅館に泊りました。一行の偉い人達はまだ地方長官の癖が拔けず判任官連は呼びつけにされましたが、野村さんが傍から何々君と呼びなをされたので、其の人達もやがて皆を君付で呼ぶやうになりました。
其の當時京釜鐵道は速成工事中で草梁から建築列車に乘つて金泉へまゐりまして其處へ一泊しました。其の列車は無蓋貨車で、大臣も無蓋貨車の上へ椅子を乘せ、夫れに腰をかけて居られました。線路の左側に洛東江の雄大なる風光を眺めながら、高い築堤の上を駛つて居つた列車が、ピッピ〳〵〳〵と非常汽笛で急停車をしたので、一同ビックリして立ち上ると、

鮮人の子供が築堤の腹を馳け下りて走つて行くのを、乘務車掌が逐ひかけて行つて、鮮人部落へ逃げ込んだ子供を横抱きにして築堤を上つて來ます。

後から鮮人の男女數名が、アイゴウ〳〵と叫びながら、逐つて來ます。何事が出來たのかと心配しましたが、此の附近の鮮人は質が惡くて、レールの繼目ボールトやら、止め釘を拔いて持ち去つたり、まことに惡いいたづらをするのです。今もレールの繼目ボールトを拔かうとして居る子供を見付けたので、列車を止めて、家の中迄逃げ込んだのを漸くつかまへましたから、次の驛迄連れて行つて警官に引渡すつもりだと云ひました。子供は十歳位で綠の裾衣を着た可愛らしい鮮人の子でした。叫びながら逐つて來たのは兩親に家族で、アイゴウ〳〵と叫んだのは、鮮人の泣き聲でした。

マア共の位をどしたら、之れに懲りて將來いたづらをしまいから、赦してやれと云はれた方があつたので、子供は共まゝ親共に渡して列車は出發しました。

九月二十九日に金泉を出發してから十月三日大田に達する迄の間は、線路工事中の區間で一行は轎又は乘馬でした。京釜鐵道會社の大屋技師長と同社員數名に、韓國の警務官と巡補數名、それに日本の守備隊兵も加はり一行二十餘名の大勢となりました。

途中金泉、大同、沃川、大同等に泊りましたが、宿舎は郡守の舎宅をあてられました。十月二日に九丁里といふ山を越しましたが、其の時から其の山を遞相の名をとつて乘武山と名づけられました。

大同から建築列車で、永登浦驛から漸く本式の列車に乘つて京城に着き其處に三日滯在しました。京城、仁川間は鐵道が通じて居りまして、仁川から安東丸に乘つて鎭南浦にまゐりました。此のときの航海は風波高く大抵の方は弱られましたが、野村さんは平然として居られました。其の船には小さな風呂敷包一つを持つた若い女が澤山乘つて居りました。鎭南浦に上陸して一行はそれ〴〵宿屋に分宿しました。其の當時は鎭南浦も小さな市街で宿屋も貧弱のところへ、大宮揃ひの一行が乘り込んだので、宿屋もメンクラッタやうでした。翌朝給仕に出た女中さんを見ると昨日同船した娘さん達で、天草の出稼女が早速宿屋の女中になつて働いて居るのでした。

其の女共は

「みなさんが多ぜい泊つたものだから蒲團が足りなくなつて私達の蒲團までお客さまに使はれて仕舞つたんですよ」

と云つてました。

つまり我々は女中の蒲團へ寢かされたので、ドウリでひどい蒲團だつたと後で大笑ひしました。

翌日から野村博士は大同江を溯つて兼二浦に上陸、其處を視察されて平壤に出て京義線の工事を御覽になり、鎭南浦へお歸りになつて、遞相一行と別れ、安東縣に向はれました。

野村博士に隨ふものは周田、池上兩技手と臨時に雇ひ上げた通譯と測量工夫二名で一行六名となり、安東縣と東清鐵道線（ダルニー、ハルビン間）との連絡線を踏査することになりました。

安東縣から先きは宿舍や食事は總て陸軍のお世話になりますので、安東縣の泊りが其の第一夜でした。

十月十日安東縣に着きまして兵站司令部にまゐりまして宿舍に案内されました。寢具は各自持參の毛布を用ゆることにしましたが、「夕食を渡すから容器を持つて兵站部へ受取りに來い」といふので、飯櫃の代りにバケツを持つて行きますと其の中に米飯を入れて吳れまして、「副食物の容器を出せ」と云はれますが「持つて來ませんでした」と答へましたら、米飯の

上へ味噌汁をぶつかけて渡されました。汁の實の菜ッ葉が大きいまゝでバケツのふちにベタりとくつついてる具合など全く悲觀させられました。

安東縣から軌間二呎六吋の軍用輕便鐵道に便乘させてもらつて鳳凰城に向ひました。其の輕便鐵道は貨物運搬用の假設線路で急勾配・急曲線の危かしげな線路でした。途中脫線の痕跡も澤山見えますし、不安でしたから山越し箇所の急勾配區間は下車して歩きました。

鳳凰城にて充てられた宿舍は支那人の大きな商店の奥座敷でした。家も大きいし部屋も仲々立派でしたが厠がありません。便所としては裏庭の空地に溝が掘つてあるだけで、其の溝を跨いで用便するのです。おまけに其の溝が豚小屋に續いて居て、豚がブー〳〵歡迎のウナリ聲を立てゝ居る始末です。鳳凰城には地方長官格の道臺が居りました。其の道臺は有名な趙爾巽だつたと記憶して居ます。其のお方が野村博士一行の爲めに白馬三頭を貸して呉れまして、尙護衞として支那人騎兵三名をつけてくれました。

野村さんと周田、池上の三名は白馬に跨り騎兵を供につれ、通譯と工夫二名は徒歩で一行の寢具やら食糧やら食器やらを支那荷馬車に積んでゴロ〳〵と鳳凰城の城門を出て奉天に向けて歩き出しました。寢具はなるたけ容量を減ずる爲皆毛布ばかりでした。食糧は兵站司令

部から乖燒パンといふ、おそろしく堅い兵隊さんの携帶食糧を支給され、夫れに鑵詰二三種でした。特別品は下の關で仕入れたウイスキー四打入一箱、アスパラカスの鑵詰四打でした。食器はバケツ二箇に洗面器三枚、夫れに各自水筒を準備しました。防寒具はオーバーコートの上へレインコートを重ねました。野村さんはオーバーコートだけで、夫れに安東縣で五十錢で毛の襟卷を一枚買はれ、夫れを首に卷いただけでした。

線路踏査は參謀本部から借りて來た、露西亞製の五萬分一の地圖を賴りにして地形を觀ながらまゐりました。地圖は仲々正確に出來て居りましたが、記入が露西亞語なので地名等もさつぱり讀めないのには閉口しました。踏査のため街道筋を離れて小道傳ひに山越えをしたり、道のないところを無理に進んだり、橋の無い川をヂャブ〳〵涉つたりしました。そんな譯で荷馬車も時々ひつくりかへりましたが馬丁は馴れたもので、車の轅に五疋の馬をつないで一ぺんに鞭をあてると轉んだ荷馬車も容易に復しました。荷馬車一臺を馬五疋に牽かせ馬丁は巧みに夫れを御して居ました。

護衞の支那騎兵は夕刻になると早く宿につきたがつたり、金をせびつたり、うるさいので三日程で白馬三頭共返してしまひました。其の後の四十日間はテク〳〵歩きとなりました。

途中守備隊の在る處は守備隊へ行つて宿舍を貰ひ食事も貰ひましたが、野村さんは勅任技師でしたから少將相當官で其の他の五名は下士以下なので階級に應じて支給される宿舍や食事がまるで段違ひなのです。野村さんの方は兵隊さんが食事を持ち運んでくれるのですが下士以下の方は例の通りバケツに味噌汁をぶつかけてくれるのです。夫れに一行は特別任務で出張して居ますのですが、陸軍の御用掛になつて居なかつたので軍屬の腕章をつけては居ません。鳳凰城迄は一般の日本人も通行自由でしたが、其れから先きは軍人軍屬以外は酒保の係員だけが居るのみでしたから、守備隊の兵站係員のところへ食事を貰ひに行くと係員は大てい曹長ですが我々の姿を一見して酒保扱ひですからたまりません。そこで守備隊につくと野村さんが守備隊長に會はれて「自分も隨行のものと同じやうな待遇にして下さい」と話されてくれましたので隊長も困つて隨行の技手二名は野村さんと同じ宿舍に入れるやうにしてくれたところもあります。

こんなふうで雪裡店、秋木庄、通達堡、草河口、連山關と泊つてまゐりました。連山關の守備隊で木越安綱少將と泊り合せました。守備隊では少將閣下のお泊りといふので大に緊張して居ました。木越さんは野村さんのお泊りのことを知られて特に野村さんを晩餐に招待さ

れました。隨行技手二名も招かれて同席しました。食堂は守備隊の食堂で食卓には白い布がかけられ、御馳走は西洋料理で、而かも各自の前へ皿に盛つて出され、宴會氣分横溢、久し振りで御馳走にありつきました。

木越さんは珍らしいお客さんとの會食だと云つて悦ばれて、いろ／＼愉快さうに御話されてました。軍人さんも少將閣下になられると少しも威張らないで我々下士待遇の技手共に對してもいろ／＼話題を向けて如才なく嬉しがらせてくれました。野村さんに「軍隊でかためた地方を背廣服姿の御旅行でさぞ御難儀でせう。何か御困りのことがございましたら御遠慮なく仰せ下さい。出來るだけ便宜を計るやうにいたします」と仰つしやりましたので野村さんが「いろ／＼兵站部のお世話になつて感謝して居ますが何分隨行のものとの待遇があまりに違つて仕事の上で困ることがあります」と話されました。それで木越さんから前途の守備隊に特別に通知してくれたとみえて、其の後は野村さんと隨行の技手二名とは大てい一緒の宿舍に入れてくれるやうになつて誠に都合よくなりました。

或る守備隊へ泊つたときに隊長さんが晩酌を傾けて居られました。守備隊でも第一線に近くなると日本酒が兵站部に置いてあるのださうです。野村さんは日本酒がとてもお好きなの

で、平常晩酌三合の大酒家なのですが、兵站部では僕等に日本酒はくれませんので、下關から仕入れたウイスキーを晩酌に召上つて居られました。守備隊長が日本酒の晩酌をやつてることをお話したら、うらやましさうなお顔をなさいましたから、隊長のところへ行つてウイスキーは如何ですと聞いてみたら、先生大悦びで久しくウイスキーに會はない、一杯頂戴したいものだとアッサリ云はれました。こちらはウイスキーに倦きて日本酒にあこがれてる話しをしてジョニーウォーカーの角瓶を一本持つて行きましたら、隊長大恐悦、早速返禮だと日本酒を澤山くれました。其の後日本酒の晩酌を野村さんに差上げましたら、野村さんも大悦びで毎晩陶然として御機嫌でした。「何うして日本酒が手に入つたか」と聞かれるのでウイスキーと交換したことを申上げ隊長も大悦びでしたと申しましたが、野村さんは「僕にはそんなヅウ／＼しいことは云へないね」と云はれました。これには少々冷汗が出ました。

　野村さんは傘のない時俄雨にあはれて軒先に立たれたとき家人からお入りなさいと云はれなければ庇の下へもお入りにならず、濡れてがまんをされる方で、こちらから、御免なさいといつて人の庇の下へ雨を避けるやうな心臓の强い人間とは違つて居られるのです。何事でも御自分が、がまんすれば濟まし得ることには、決して彼是文句を云はれません。暑くても

著いと云はず、寒くとも寒いと云はれません。

連山關から摩天嶺を越して奉天へ出る豫定でしたが其の方は戰爭最中で行かれぬといふので遼陽に向ふことになりまして、甜水站、狼子山を經て大安平といふ部落へつきましたら大砲の音が聞え出しました。其の日負傷者が莚製の假擔架で多數運ばれて來まして、同じ宿舍に泊り合すことになりました。本溪湖で激戰した梅澤旅團の負傷兵でした。翌朝邸內の井戶端へ洗面器を持ち出して顏を洗つてると、負傷兵がゾク／＼顏を洗ひに出て來ました。釣瓶が草を編んだ籠で出來て居るので、早く汲み上げないと水が漏つてしまふ。負傷兵は片手の人や片足の人なので思ふやうに水が汲めない。見兼ねて水を汲んでやり洗面器も貸してやりましたが、あとから／＼負傷兵が出て來て、洗面器を返してもらふことができず、こちらは出發の時間もせまつて來たので、とう／＼洗面器を其處に殘して出發しましたので、其後は一つの洗面器で顏を洗つたり足を洗つたりすることになりました。

遼陽から大石橋迄軍用列車に便乘して大石橋から下八岔溝、大孤山、岫巖、土城子、龍王廟等を經て安東縣にまゐりました。

大石橋では露助の建築した鐵道社宅に泊りました。當時は大石橋も民家は點々散在する程

度で、野犬が非常に澤山居りまして、土被り淺く埋められた露兵の屍體を掘り出して腕や足をくはへて部落を歩きまわつてる始末でした。

大石橋、安東縣間には兵站線がありませんので五萬分一の地圖を頼りに一日十里位の行程の部落を其の日の泊るところと豫定し、其處へついてから泊れさうな家を尋ねて泊めてもらふ始末で、甚だ心細う御座いました。食糧は連山關、遼陽間を重燒パンで、凌ぎましたが、中食を攝る時分は水筒の湯もいつか氷となつて居て飲めませんのに、重燒パンは堅くて、口に入れても容易に軟かくならず、飲物無しで唯口をモグ〱させるだけ、うまくもなんともなく、しまひには口が疲れてしまう始末だつたので、大石橋から白米を携行し、毎朝毎晩石を拾ひ集めて、卽製の竈を造り、洗面器二つを釜として御飯を炊き、晝めしは握りめしにしました。

大石橋を早朝出發して、豫定の部落へついてみると、民家はありますが宿屋などはありません。通譯が其處此處尋ねて漸く泊めてもらふ家を見付けてまゐりますと、夫れは、馬方や牛方の泊る、日本で云ふ木賃宿みたやうな家でした。夫れでも一番奥の室を野村さんの爲に準備してくれました。風呂などは御座いません。野村さんは其の小暗い部屋に端然と默座し

て居られます。我々五人は炊事係となり、竈を造るもの、米をとぐもの、畑から白菜を失敬して來るもの等手分けをして、空箱を並べて食卓を造り、群がる蠅や油虫を片手で逐ひ拂ひながら食事を致しました。

又或る日は豫定の部落へついてみると、戰火に燒かれて人家無く、止むを得ず先きの部落迄旅程を伸ばしたこともあります。此の失敗に教へられて、朝は東が白みさへすれば出發し、豫定の部落へついたら、日が高くとも泊ることに致しました。

又或る部落では、田舍の小料理屋の家族の居室を借りて泊つたこともあります。其處では商賣柄油虫が實に驚くばかり多く、夫れも夜燈火を消して床にもぐりこむと、天井やら棚やらからガサ〳〵バタ〳〵音を立てゝ何ものかが襲來する、蠟燭に點火すると火に驚いて逃げる、手に取つてみると一寸位もある實に大きな油虫でした。火を消すとまた出て來て床の中やら襟の中へもぐり込んで來るので誠に氣持ちがわるい。はじめは氣になつて睡れなかつたが、それでも疲れてゐるから、いつしかグッスリ寢こんでしまひます。翌朝床の中に百疋近い油虫が押し潰されてるには驚いた。野村さんの御床の中も澤山の油虫の死骸でした、「此の家は油虫の多い家だネ――」と泰然自若格別痛痒を感じられないやうでした。又下八岔溝と

いふ部落へついたときは大きな商人の奥座敷を借りて泊りました。此の日は周田技手が朝から齒痛で惱んで居たので、其處へついたのはまだ晝頃でしたが、野村さんは周田技手の爲に此處へ泊ることになされましたので周田氏も大いに助かりました。

又岫巖を過ぎて大孤山方面へ向ひましたら、露助の鐵道工事中の處がありました。土工も大部進んで居り、軌條も其處此處に運ばれてありました。此鐵道の竣工前に皇軍の大孤山上陸軍が進んだので、軌條も其まゝ露軍は迯げ出したのでした。開戰が今少し遲れて居れば、大孤山に上陸は難儀になつたらうと思はれました。

又小灣溝といふ部落へつきましたら守備隊がありまして、丁度其の日は十一月三日天長の佳節で、守備隊で其の祝宴がありました。紙製の日の丸の小旗を澤山造つて庭に張り渡し、其の下へ食卓を假り造りして、白布を貼り、隊長さんの音頭で、天皇陛下萬歲を三唱されてから、開宴、野村さんの一行も其の食卓へ就かしてくれて御馳走してくれました。

安東縣から、今度は拆木城を經て、海城に出る區間を踏査しました。此の時はモウ十一月の中旬となりまして、急に寒氣がきびしくなりました。携帶のバロメーターに付いてる寒暖計には零度以下三十度まで盛つてあるのですが、水銀が一日中顏を出さなかつたときもあり

ました。雪こそ降りませんが、風の冷いことお話になりません。毛のシャツを二枚着て、毛糸製のスエーターも着、上にはオーバーコートの上へ、レインコート迄重ねて着て居りましても、寒さは骨の髓迄しみ通るようで、口をきくのも、ものうくなり、唯默々と歩き續ける始末でした。橋の無い川を渉るときは、荷馬車の上へしがみ付いて、石ころの川底をガタガタ大搖れに振られながら越しました。

野村さんは、實に足がお達者で、オマケにとても我慢强く、此の寒さにも寒いと云はれず、五十錢で買はれた襟卷一筋を首へ卷かれただけ、シャツこそラクダの上等をお召しになつて居られませうが、オーバーコートも一枚で、寒さにちつともめげられず、歩調とても、いつもしつかりテク〳〵お歩きになり、平均一日約十二里の行程、三十餘日の難行苦行中にも、ついに一度も苦情を云はれないのには私達もホト〳〵驚きました。

難行の一つに便所の不便は、いつも付いてまわりました。誠に尾籠な話ですが、支那人家屋へ泊ると、かなり大きな家でも、完全な厠はありませんで、家々の間へ勝手にたれるので、足の踏み入れるところもなく、馴れない者には、いつも閉口しました。

或る處へ泊つた時など、適當の場所が見付からないので、裏門を出で、野廣い處で用便に

かゝりますと、いつの間にか、まわりに野犬が澤山集つて來て、見馴れぬ格好をいぶかつてか、ウー〳〵ワン〳〵吠え付きます。其の野犬も戰死者の肉など食べて山犬みたいに獰猛になつてるので、油斷は出來ません。いくら吠えられても途中で止めるわけにも行かず、止むを得ず、小石を拾つて投げ付けると聊か退却するが、又じきに近寄つて來る。又石を投げる、其うちに手近に石が無くなるので、ピョン〳〵飛びながら石のある處へ行つて、石を拾ひ集め、片手に石を持ち片手で投げながら用便をする。今こそ笑ひ話ですが其の當時は、用便にも仲々緊張させられたものです。野村さんに伺つたら、やつぱり石合戰しながらすまされたさうです。

海城に着きまして、踏査を終りました。其の當時遼陽の少し先きの煙臺といふ處に、滿洲軍總司令部が在りました。其處へまゐりまして兒玉參謀總長に、野村さんから踏査の結果を御報告なさいました。周田、池上の兩技手は隣室で待ち受けました。野村さんから隨行員の苦行もお話になられたと見えまして、兒玉さんが、隣室へ出て來て「ヤア御苦勞さんでした」と云はれ、大に面目をほどこしました。

其の戻りに煙臺の停車場にまゐりますと、停車場のまはりは大へんな兵隊さんにとりかこ

まれて居ました。何事だらうと思つて、驛長室へ行かうとしますと、「コラ／＼酒保はソンナ方へ行つてはいけぬ」と、叱られました。酒保でないことを說明して、漸く驛長室へ入つてみますと、露西亞の看護婦二名が捕へられて居るのでした。露西亞人でも何でも兎に角若い女が居るといふので、數百人の兵隊さんが、夫れを拜みに集つた次第でした。

煙臺驛から無蓋貨車に乘せられて遼陽にまゐりました。其の無蓋貨車には霜が眞白に、雪のようにみえました。其の上へ莚の擔架に乘せられた、負傷兵が、大連の病院へ送られるので、ゴロ／＼乘せられて居ました。實際御氣の毒で、我々の旅行の難行など夫れに比べれば、何でもないとツク／″＼感じました。

遼陽にまゐりましたとき、野村さんが「漸く都に出たから支那料理を御馳走しやう」と云はれて、市中を見物しながら、通譯に料理屋を探ねさせました。其の案內で一軒の料理屋へ連れこまれましたところ、まるで日本の居酒屋みたいな下等な料理屋で、支那人夫らしいのが、多ぜい入つて居ました。夫れでも入つてしまつたので出るわけにも行かず、並んでゐる食卓の一つに就きますと、卓の上に筆立みたやうな筒に竹製の長い太い箸がドツサリ立てゝありました。男ボーイが來て、鼠色に汚れた前掛けで、食卓の上を拭き、其の前掛で、筒に

立てゝある箸を拭いて、みんなの前に並べました。此の箸で食べるのかと思ふと、甚だ氣持ちがわるく、夫れに室内は油の煮える臭ひで、ムウ〱としてゐる。流石の野村さんも、雑巾で箸を拭いて出されたのには驚かれたやうでした。仕方がありませんから、ナイフを出して箸を削つて淨めて差上げました。

食後に市中を散歩して、大きな毛皮店に入りました。外套の裏になる小羊の皮を野村さんが買はれようと思つて、値段を通譯に聞かせたら二十八圓とのことでした。二十圓にまけろと通譯から云はせますと、毛皮屋の主人は妙な顔をして居ましたが、やがて筆と紙を持つて來まして、一十八圓と書きました。イー、シー、パー圓と云つたのを通譯がインチキなので二十八圓と聞いたことがわかりました。十八圓の云ひ値を二十圓にしろと云ふので毛皮屋が驚いたことがわかりましたが、さあさうなると、十五圓にまけろといふのもきまりが悪く、云ひ値で買ふのも馬鹿々々しいので、買はずに笑つて其店を出ました。

料理屋の撰擇のやりそこなひと云ひ、毛皮値段の誤譯といひ、誠に心許ない通譯でしたが、野村さんは其の都度笑つてるばかりで遂に怒りはなされませんでした。

遼陽から軍用列車に乗せてもらひまして大連に向ひました。此のとき遼陽に野戰鐵道提理

部の技師に高橋邦太郎氏が居られまして、野村さんの座席のために、奔走してくれまして、三等客車が連結してありました。其の客車は横に入口の並んでる舊式のものでした。其の扉の一つに高橋さんが野村少將相當官閣下御乘用と書いた紙札を貼り付けてくれましたので、樂々と腰をかけて汽車旅行が出來ました。

大連に着きましたのは十一月の二十一、二日でした。古川阪次郎さんが野戰鐵道提理部の技長で、長いあごひげを生やして威風堂々たる武者振りで居られました。しかし軍人さんに威張られて意氣聊か振はないやうでした「二十六日から旅順の總攻撃が始まる、今度は陷落するから、序に旅順を見物して行つては」と云はれたので、其の間に天津を見物することになりまして一行大連を出發、大石橋から遼河を渡つて營口に出ました。其處で野村さんは支那服の大人と御會見なさいました。其の大人は日本軍人で坂西利八郎氏でした。營口から天津行の汽車は英人の經營で、車掌も食堂ボーイも英國人でした。夜間は運轉しませんで山海關泊り翌日天津にまゐりました。天津で野村さんは袁世凱を御訪問なさいました。二十八日に大連に戻りましたが、旅順攻撃の砲聲は盛んに聞えますが、まだ仲々落ちさうにありませんし、其の上旅順の敵砲臺が堅固なペトン製で軍に在る機械では仲々孔をあけることが出來

ず、鐵道で隧道掘鑿に使用する、鑿岩機を用ひたいといふことになり、野村さんは歸京の上鑿岩機を取揃へ送ることゝなりましたので、十一月三十日大連出帆の阿波丸に乘込み十二月五日宇品に上陸歸京されました。

四、第二回鮮滿視察

明治三十九年三月の議會に鐵道國有法が提案されました。時の首相は西園寺公で、遞信大臣は山縣伊三郎でした。貴族院を通過し衆議院にて賛否兩論揉みにもんで、最終日の三月二十七日の夜議員の腕力沙汰を閉止幕として可決確定を見ました。續いて西園寺首相が滿洲御視察のことゝなりました。

此の一行は西園寺首相、秘書官山下芳太郎、大藏次官若槻禮次郎、主計局長市來乙彦、外務省政務局長山座圓次郎、同書記官本多熊太郎、農商務省農務局長酒匂常明、遞信省野村博士と外務省の信夫淳平、大藏屬梅澤、農商務技手井上及遞信技手池上の十二名と外務省の給仕長酒井某でした。此の他陸軍省から山口砲兵大佐、加藤工兵大佐、佐藤砲兵少佐、宇高騎兵大尉が案內役として隨行しました。

一行十七名四月十四日東京出發、十七日宇品から鎌倉丸に乘込み、二十日午後大連に上陸、旅順戰跡を馬車を連ねて視察しました。到る處未だ戰爭の臭ひが殘つてゐるやうな氣がしまして、二百三高地などには、捨てられた長靴の中に生々しい骨など入つてるのがありました。

大連から列車で大石橋に向ひました。普通の客車に毛布を持込んで、一晩車中に睡りました。判任官連と酒井給仕長は三等車で、其の車に現地駐在の陸軍大尉が案内役の一人として乘つて居りました。軍から三等車に支給された毛布は一人に二枚宛で、暖房は無し寒くて睡られない。同室の大尉さんは從卒を連れて居て、毛布も七八枚用ひ車內に板を並べ、寢臺を假造して、いゝ心地に睡つてゐます。酒井給仕長は四十五、六歲の人でしたが、大連上陸以來軍人連中の我々隨行員に對する差別待遇があまりひどいと、いつもブツ〳〵云つてましたが、此の車中で大尉の大威張りを見て、急にムカ〳〵したとみえて、夜中列車進行中にいきなり立ち上つて「コラ馬鹿大尉、我々に毛布を一枚宛別けろ」と怒鳴つたので、大尉もビツクリして起きてみると、給仕長のタンカなので一笑に附して又橫になると、酒井氏はいきなり大尉を床の上へ押へ付けて喉をしめにかゝつたので、大尉は大聲を上げて從卒々々と怒鳴るやうな大騷ぎがもち上りました。翌朝大石橋に着いて營口に行き、首相は領事館にお泊り

になり、酒井氏も共處へ泊ることゝなつたが、前夜の活動は既に發病の徴で、トウ〳〵本物の精神病となり、領事館の應接室に立小便をする始末で此處で落伍しました。

一行奉天に滯在四日、露淸クラブを宿舍にしました。

當時奉天道臺は趙爾巽將軍で、一行歡迎の爲給仕女として日本藝者を大官一人に一名を提供してサーヴイスして吳れました。それで一行出發の前日に答禮のため道臺の連中を招いて宴會をしました。藝者共に交涉して舞臺で踊らせたり、仲々豪華版でした。

そのクラブの支拂の時に、タバコ代二百圓とあるのでビツクリして、帳場へきゝに行きましたら、皆さんの部屋に出した接待煙草の代だと云ふ。部屋にはそんなに出てゐなかつたので、尙よく問ひたゞすと、總理大臣一行が來ると云ふので、大連から煙草を二百圓仕入れたと云ひ、帳場の棚の上に金口やら葉卷がまだ大分殘つてゐましたから二百圓拂つた代りに全部持つて來てしまひました。それから藝者の立替金の請求高が莫大なのに又ビツクリして談判しました處が、晝間の線香代は道臺から貰ひますが、夜の線香代は皆さんから頂きます、と云はれました。夜の線香代は幾らかと云ひますと、一晩三十圓だとの事で、晝間も立替金の要つた人が二人あつた勘定になるのでした。その下手人を調べるのにチヨイと苦勞しまし

た。

その藝者の中に、元東京の新橋で都家の哄松と云つたのが居ました。それに案内させて護衛兵三名を連れて、そばやへ行きました事を野村さんにお話しましたら、野村さんと若槻さんと山座さんの三酒豪が宴會のあとで二次會をするからそのそばやに案内しろと云はれるので哄松を先き棒にして宿舍の露清クラブを出ました。ところが夜遲いので奉天市內も殆んど人通りなく、犬は吠えるし、街角には劍付鐵砲の兵隊さんが立つてゐて、とき〴〵おどかされました。

そのそばやでお三人がいい心もちに召上つた御勘定はなか〳〵高かつたやうです。

五月三日一行奉天出發、安奉線の輕便鐵道に乘り、連山關に一泊して四日に安東縣に着きました。其處に二泊して平壤一泊、京城二泊、十日に京城を出發して釜山から下關に渡り、神戶、名古屋に泊つて十四日に歸京しました。

京城では、大官連は韓國皇帝に謁見され。奉天では趙爾巽將軍と屢々會合されました。

朝鮮の平壤で一行は四軒の宿屋に分宿しました。野村さんは難波旅館に泊られまして、翌朝停車場へ人力車を走らせましたら首相一行は、すでに停車場に居られまして、野村さんの

襟首が赤くなつてゐるのを首相が御覽になつて

「野村さんは昨晩惡い處へ行つたから、南京虫に食はれたんだらう」

とからかつてゐました。若槻さんがそれを肯定されてゐた處をみると、野村さんもその時代はからかはれる資格があられた樣です。併し平壤ではその晩難波旅館から他へどこへもおでましにならなかつたのでしたが、京城の泊りでは、少々あやしい處がありました。

下關についた時大吉樓で宴會がありました。入口に警部と巡査が椅子にがんばつてゐました。十二時過ぎて、藝者がその前を出たり入つたりするので巡査が横目でにらみました。藝者が「入口の巡査が恐い」と云ふから特別諒解を求めてやりました。「お蔭で今晩は無事だが、あとでいぢめられる」と云つてゐました。

こんな風に至るところ殆んど毎日毎晩地方々々の歡迎宴會がありました。若槻、山座兩酒豪の間に伍して野村さんは少しも見おとりなく宴果てるまで杯を手にし、翌朝はケロリとして平氣で居られました。

名古屋ホテルに泊つた時に、地方の歡迎を一切斷つて首相が一行十六名を御馳走して呉れました。みんなが首相の處にお杯を貰ひに行きました。野村さんが私を首相の處へ連れて行

つて呉れまして

「この人は金春に住んでゐて、金春藝者の家主さんだ」

と紹介されましたら、首相が

「それは一番藝者にもてるお方だ、君に頼めば外れっこなしの色男になれるから、あやかる様に一つぱい頂戴しやう」

と云はれたのでおどろきました。

第十章　滿鐵總裁・社長

一、飯野吉三郎の送別の辭

野村先生の如き人格者を見る場合には、常に其の人自身を觀察すべきで、其の仕事に現はれたる結果によつて判斷することは出來ないと考へる。

されば之を仕事の關係から見れば或る時は失敗の歴史もあらう。だが、その失敗も更に詳細に觀察すれば、失敗と云はれる方が、野村先生のためにはむしろ悦ぶべきで、これこそ『光榮ある失敗』と見るべきであらう。

先生の滿鐵における事蹟の如きは其の一例である。

蓋し當時の如き政黨華やかなりし時代において、政黨出の野心家を其の部下とし政黨の魔手を其の背後にひかへて、野村先生の如き人格者がすべてに成功される理由がないのである。されば先生の失敗を說いてこそ、先生が如何に時流に阿らず自己の所信を枉げず泥中にあつても其の淸節を守られたかを知るに足らう。

野村先生がはじめて滿鐵總裁となられたとき同鄕の在京者百餘名が鐵道協會に集つて盛大なる送別會を開いたことがあつた。

其の會の席上で穩田の行者として知られてゐる飯野吉三郎が

『野村さんの如き人格者が滿鐵總裁の如き役をひき受けられるのは大間違ひだと思ふ。其れは仕事の大小の問題ではない。乘る土臺がよくない、かかる人を部下において君子人がやつてゆけるだらうか、恐らく諸君は皆肯かれるであらうが野村さんは君子である。君子たる野村さんがいまの政黨出身の悍馬を乘りこなしてゆくことの出來ないのは當然でありま す。既にお引受けになつた以上は致し方がないが私は一日も早くお辭めになつて御歸京になることを切望します』

と云ふ樣な趣旨のテーブル・スピーチをやつた。

この席に出席してゐた關屋龍吉氏等はこの話をきいて、送別の言葉としては亂暴だと思ひながら隣席の人達と顏を見合はせるばかりであつた相である。

だが、この感じは誰れも持つて居るものであつた。

二、總裁就任事情

野村先生が、滿鐵總裁として行かれる當時の鐵道院は野村先生が副總裁、古川阪次郎氏が技監であつた。

而して、野村先生は副總裁在官のまゝ滿鐵總裁になつた。當時石丸重美から

『野村氏が滿鐵に行く』

と云ふ話を聞いたときに、野村先生を知る多くの人々は

『よく思ひ切つて野村氏が行かれるものだ』

と驚いた位であつたと云ふ。

これは前に書いた飯野吉三郎の送別の話でも分る通り、當時の人達の何れも意想外とする出來事であつた。

然らば何故に、かくも意外とされる野村先生の滿鐵總裁就任が實現するに至つたか。其の事情を少し明かにしておかねばならない。

そも〱野村先生の前任者である中村是公は色々な事情から退職せざるを得ない狀態にあ

つた。時の總理大臣は山本權兵衞であつたが、中村是公は總理大臣に面會しようとしても、どうしても面會が出來ない。そこで一本氣な是公の事であるから閣議の部屋にヅカ〳〵と入つて行つて直接に總理大臣に自分の意見を云つた。それで物事が一つぺんに決つて中村の辭職となり、其の後任に野村先生が決つたと云ふ譯である。

當時の消息通は

『野村先生を總裁として置いて、其の實際は政友會に有利に仕事をさせると云ふのが本當の腹の底であつたらしい』

とまで云つてゐる。其の結果から見れば、かうした見方は或は當つてゐるかも知れないがこの案を考へた原敬と云ふ人に其れまでの作意があつたかどうかは神ならでは知るよしもない。

少くとも原敬の意見としては、政黨はとかく惡評を受けるので大きな植民地の仕事には野村先生の如き人格者を据えることが必要であるとの堅い信念があつたことは事實であらう。然らざれば計畫的に人を二度も同じ仕事に利用すると云ふことは到底考へられないことである。

三、まづ人事問題起る

然るに案の定、先生は滿鐵においては實に種々の困難に遭はれたがまづ最初に現はれたのは人事の問題である。

當時犬塚信太郎と云ふ人が滿鐵に居つた。その人は理事をして居つて、後藤新平、中村是公、國澤新兵衞等、前の總裁、又は理事長の時から引きつゞいて理事となつて居つた人で、三井系統のやり手として知られて居つた。殊に從來から引きつゞいて理事をして居つた關係で、部内にも非常な勢力があつた。

當時の滿鐵の組織から云ふと、仕事は各課長が分擔してやつた。それで課長の經伺に對して重役が決裁することになつて居つた。而して犬塚が重役で各部長を殆んど兼任して居つた。であるから、總括的には、犬塚が決裁することになつて居つた。

野村先生は滿鐵に入られてから、副總裁に伊藤大八が据はり、佃一豫、清野長太郎、川上俊彦等の理事が新に入り、其の後から樺山資英氏等が理事に入つて來た。而して制度の改革に着手された。新しい制度では理事が部長となつて仕事を分擔することになり、重大なる仕

事については會議制をとつて相談することになつた。

然るにかうなると、裏面の話になるが、從來の勢力を持つて居つた犬塚の地位と云ふものが非常に落ちる事になる。其處で心中不滿であつた犬塚は

『自分は敢て辭職しない。而し乍ら今後は自由な行動をとる』

と云つて、副總裁の伊藤大八と事毎に意見の衝突をやつた。

この部長擔任合議制と云ふ制度は今の松岡總裁が就任される前まで滿鐵の職制として存續して居たのである。

また第二に仕事の問題でも先生はかなり苦しい立場におかれたことがある。朝鮮鐵道經由の連帶運輸の運賃問題についても相當に苦勞された。當時の朝鮮鐵道には大屋權平がゐた。

又蒙古の王樣の土地を滿鐵に買はせた事がある。これは今の熱河省の一部分であるが地權はあるけれども圖面も何もついてない。これを六十萬圓で滿鐵に買はした。

かうした事で、野村先生に相談せず副總裁が勝手に事を運んで先生に相當迷惑をかけたこともある。

こんな風で總裁の名の下に會社としては種々な批評に上る仕事も行はれて居たけれども、一總裁その人が苟くも私の爲に事をせざる清廉にして潔白なる人であると云ふ一事に至つては何人も疑ふ者がなかつた。

當時の書類は今でも芝浦の倉庫にあつて、野村總裁の印をついてない書類も相當にあるらしい。

この當時總裁としての野村先生の功勞に歸すべきものは滿鐵社内に於ける特別賞與の制定であつた。これは、從來の賞與は地位と俸給に從つて與へられたものである。然るに新に制度を定めて特に會社の爲に功勞のあつた社員に對して特別賞與を與へる規定が出來た。この制度は野村先生の時代のものとして特筆大書すべきものであるとさへ云はれてゐる。

四、再び滿鐵へ

第二回に先生が滿鐵に入られたのは原内閣時代であつた。第一回の時には原敬が内務大臣

の時であつて、原敬は第一回の時の關係をよく記憶して居り、特に再び野村先生を滿鐵社長にした譯である。

然るに先生は前回に於て相當苦い經驗をなめて居られるし、第二回の時にはすでに奧さんも失つて居られ、年頃の令孃が二人居られるし、東京を離れて大連に行かれる事はかなり臆劫であつたらしい。再三辭退されたが、斷はることが出來なくてたうとう行かれる事になつた。

當時は政黨の全盛時代であつて、野村先生は當時の遞信大臣野田卯太郎に交渉して無理やりに中西遞信次官を滿鐵の副社長に引き拔いた。

中西淸一は遞信省から更に中川健藏を理事として連れて來た。又其の他に松本烝治、片山義勝、それから島安次郎の諸氏等が重役として新任することになつた。

當時滿洲の新聞が滿鐵の惡口を書く。すると、栗山虎次氏の如き野村先生の下で働いて居つた人は口惜しがつて

『とんでもない話である。今度の滿鐵の幹部と云ふものは實にもつたいない程の人が集まつて居る。松本、片山、中川、島、何れも滿洲などに來る人ぢやない。かう云ふ立派な人達が

満鐵に來たのも全く社長の人德の然らしむる處である。いゝ人が來たので自分達は鼻を高くしてゐる譯だ』

と云つて說明した譯である。

又後藤新平伯も

『よく島を連れて行くことが出來たね』

と云つて、其の顏ぶれの堂々たるを賞めた相である。

然るに第二回の社長の場合にも其の最後はあまり香ばしいものではなかつた。一ッには中西副社長が病氣となつた事にもあり、更に塔連炭礦事件と云ふのが起つた爲でもあつた。

塔連炭礦事件は要するに政友會に政治資金を寄附する爲に塔連炭坑を、滿鐵に値をよく賣り込んだと云ふ事件である。

其の爲に問題が起つたのであるが、仕事をしたのは中西副社長と森恪のコンビであり、其の仕事を當時滿鐵の庶務課長をして居つた山田潤二が火をつけて、いろ〳〵材料を書き集め東京の中村是公に送つた。その材料によつて仲小路廉が議會の問題にして世間をさわがせたが延いて社長辭職の問題となつた譯である。野村先生も參考人として召喚されたことがある

が、特に當時の閣、沼等の係判事は先生を鄭重に取扱ひ、晝は遠慮して夜先生に來て貰ひ話を聽いたさうである。

だが、もと〳〵先生は、全然知らない立場であつたので問題にはならなかつた。

この問題は撫順炭坑の近くにある塔連炭坑が製鐵に必要な石炭を持つて居ると云ふので、外國人に買はれては將來取り返しのつかないこととなる、鞍山站の製鐵にはどうしてもこの石炭が必要であると云ふ立場から滿鐵に買はせたもので、當時の事を栗山虎次氏はかう云つてゐる。

『もと〳〵非常に必要なもので、當時中西さんあたりの見方からすれば、二十萬圓や三十萬圓の金は何でもない、何分にも地下にうづまつて居るものであるから八十萬圓とも云へるし百萬、百二十萬圓とも謂はれて居つた。然るに反對者は八十萬圓に見當をつけて、百二十萬圓で買つたのが高いと云ふのである。が、副總裁の中西氏は非常に剛直の人であるから人を見くびつてズバ〳〵とものを言ひ

「お前達の知つたことぢやない」

と云ふ樣な口をきいたので却つて人を怒らせて問題を大きくしたかの感がある。何分にも

内閣は變つてゐるし滿鐵の社長をやめさせやうとかゝつてゐる時であるからこの問題に火がついて、結局野村先生もおやめになることになつた。』

其の後中西さんはお酒の爲に神經衰弱になり、法華宗にこつて、しきりに『南無妙法蓮華經』と云つて居つた。そして人に會ふ毎に

『野村さんにすまない〳〵』

と話して居つた。栗山氏等にも

『親父にすまない』

と口ぐせに云つて居つた。

五、滿鐵へ殘した足跡

大正八年の五月のはじめに野村先生の一行は大連に赴任された。

野村社長と中西副社長は四月に任命になつた。其の後に松本烝治氏と片山義勝氏とが理事に任命された。この四人が同じ船で五月上旬に一緒に赴任された。

當時は歐洲大戰の最中で事業界は膨張發展の時代であつた。滿鐵は大きな會社の事ではあ

るし實際の必要と施設とは一致しないことがありがちで、とかく會社の施設が後れて居つた。第一に社員の給料が物價騰貴の實際に伴つて居なかつた。其の爲に有能の士は滿鐵をやめて別な處に出かけて行くと云ふ狀態であつた。而も仕事は激增して從業員の增員を要する狀態であつた。其處に整然たる統制が出來てゐなかつた。

其處で人事に關する新しい制度を作つて職員の待遇をよくすることゝ冗員淘汰とを斷行した。又既に申請中の運賃値上げの程度は時勢に適しない廉があつたのでその申請を取下げ四割程度の値上げに改めて申請した。

又社內に滿鐵の消費組合を作つた。この消費組合は今日非常に發展してゐるが、出來上つたときでも年額八百萬圓位の買上があつた。

この消費組合も、創立當時は商人の有力なる反對があつたけれども其の反對を押しきつてやつた。

かく、各方面の刷新改革の上に、更に事業の大擴張が行はれた。

丁度その頃に鞍山の製鐵所がはじめて火を入れた。この鞍山の製鐵所を擴張し、又撫順炭坑も大擴張をし、鐵道の方も改良工事を行ふ事にした。

この大計畫はたつた五ヶ年位で遂行した。

かくしてこれ等の事業を行ふ爲に二億圓の資本を四億四千萬圓にする計畫をして大正九年の夏に增資が出來上つた。當時增資をする爲に非常な苦心があつたと云ふのは滿鐵の資本金は株式の半分を政府が持つ事になつて居つて、さうすると新に增資される二億四千萬圓の半額、即ち一億二千萬圓と云ふものは政府が引き受ける事になるのである。如何にしてこの一億二千萬圓を政府に引き受けて貰ふかと云ふことが當時滿鐵幹部の苦心の存する處であつた。滿鐵を委任經營として朝鮮鐵道の經營を滿鐵に委任することにして、そして政府に出資して貰ふ案もあつた。

處が、この朝鮮鐵道の委任經營と云ふことについては當時の朝鮮總督齋藤實が斷然承知をしなかつた。其處で別な事を考へて滿鐵の英貨社債の中一億二千萬圓を政府に出して貰ふと云ふ方法を考へた。この方法によつて增資が出來た。

昭和八年に再び滿鐵が增資をしたが、その時もこの方法によつて出來上つた。

云はゞ野村先生が總裁時代に行つた增資の方法と云ふものが一つの新しい例を開いたものである。

勿論この仕事は中西副社長と、總務部長の松本烝治氏の發案であらうが、其の功は總裁に歸すべきものであらう。

これは何と云つても野村先生時代の滿鐵に於ける大きな仕事であつた。この增資が出來た爲に各方面の事業を大いに擴張することが出來た。其の他、任期が比較的短いにもかゝはらず各方面に仕事をした。支那に對しても種々働きかけて四洮線の仕事も前からの懸案ではあつたけれども、この時代に一つの階段をすゝめることが出來て、其の後完成した。鞍山の製鐵所も貧鑛を處理して製鐵出來るやうにした。撫順の露天堀も大擴張をした。又アメリカの技術者を連れて來て種々研究したり、其の研究に基いて擴張したり、內外非常に多忙であつた。其の時、例の塔連炭坑の事件が起きて來たが、この事件も大正十二年に控訴審に於て無罪の判決が下つた。

この際の野村先生の在任は二年餘であつた。

六、松本烝治氏の話

かく大發展を遂げた譯であるが、野村先生の社長ぶりは之を統轄すると云ふ態度であつた。

松本烝治氏は野村先生の社長ぶりについて

『野村社長は、將に將たるの器であつた』

と今でも激賞されて居るが、仕事はみな部下にまかして、本當に自分は大將格で構へて居られた。であるから中西副社長が東京に居れば松本總務部長は大連に居る。松本氏が東京に居れば中西は大連に居ると云ふ風に、二人が交代して仕事を着々と實行した。野村先生は、すべてを要職の人達にまかした。

『野村先生が、あゝして仕事をまかして呉れなければあれだけの仕事は出來ませんでした。尤もあとで塔連炭坑の如きことが起つたのは洵にお氣の毒でありましたけれども、それ以外の事はかなり仕事をしたつもりです。

尤も、私の父が野村先生の先輩であつた爲に、そして又同藩であつた爲に、私に好意を持つて使つて呉れたと考へて居ります。

自分達は、申さば野村先生の子供位に當るのに、實に信頼して使つて下さつたので思ひ切つた仕事も出來た譯です。

野村先生について、別に逸話と云ふものもありませんが、時々何かの會合で酒を飲みに行

つても、洵に春風駘蕩と云ふ有様で、あまり口をきかないが實に立派な酒でありました。中には惡い酒の人も居て、ともすれば節度を失してしまふ場合がありますが野村先生は酒を飲んで愉快になられ、切り上げ時を知つて居られる洵に立派な酒でした。

滿鐵に於て仕事の出來たのは野村先生の賜であります。寛容にして温順玉の如きものがなければあゝ云ふことは出來なかつたと思ひます』

と松本氏は話された。

七、栗山虎次氏の話

尙、滿鐵時代野村先生の秘書役であつた栗山虎次氏はかう語つた。

『第二回は、第一回と違つて相當に仕事をされました。つまり滿鐵の增資がこの時代に出來たことも見逃すことは出來ません。その仕事の實際をやつたものは中西副社長を筆頭に松本烝治氏等でありました。當時二億圓の資本であつたものを四億四千萬圓に增資しました。これは非常に大きな功績であつたと謂はれてゐます。

その頃はまだ歐洲戰爭の影響をうけて日本の財界は戰時の好景氣時代で滿鐵も各方面に手

を擴げて居つた頃であります。

前の理事長の國澤新兵衞氏等が手をつけて居つた鞍山の製鐵所、撫順の炭坑等の仕事も先生の時代になつて擴張され、鐵道としても盛に改良の工事を行はれました。

そんな風に各方面に仕事をすゝめて居つたけれども實際にぶつかると、當時まだ滿鐵に於ては資金計畫が完全に出來て居らなかつたので、いよ〳〵ヨーロッパの大戰が休戰と決つて、仕事はどん〳〵とすゝめられる、さうするとみな豫算を超過して來る。そこでこの豫算の組替が計畫された譯です。だが、この滿鐵の豫算の增加と云ふことは從來容易に出來ないものでした。然るに野村先生の時代に之が出來上つたと云ふことは、何と云つても野村先生の功績に歸すべきものであります。

其の結果として人も入れ變り、又鞍山の製鐵所では新しい計畫が成立しました。これによつて仕事が行はれたけれども、これを大觀するとまだ〳〵仕事は一向統一出來ず、手を廣く擴げたまゝの狀態にあるものが多かつたのです。例へば列車の運轉も時間が後れがちで滿鐵の汽車と云ふものは三十分や一時間は後れるのが通常だとさへ云はれる有樣でした。

この混亂の狀態は野村先生が在任中に努力せられたにもかゝはらず、完全に刷新すると云

ふまでにはゆきませんでした。だが何れにもせよ試驗計畫が出來て、其の仕事が實行の途についたと云ふことは特筆すべきであります。

島氏の如きは其の後四年滿鐵に在任されました。早川千吉郎、川村竹次等の人が野村先生の後任として滿鐵に赴任されました。島氏が辭職して內地に歸る頃に、漸く汽車の時間の後れることがなくなりました。つまり野村先生時代の計畫が四年後に實行されたと見るべきであります。

又增資が成立し、仕事の計畫が成ると共に社內の制度の變更も行はれました。これは合議制度を分擔の制度に改められて各部で分擔することになりました。又技術部を新設して、總務部が松本烝治、地方部が中川健藏、工業部が片山義勝、技術部が島安次郎、經理部が杉浦倹一の諸氏で今の鐵道協會の會長、元の鐵道大臣井上匡四郎氏の如きは野村先生に賴まれて滿鐵の顧問になつて鞍山の製鐵所、撫順炭坑の仕事をゆだねられて居りました。當時井上氏はアメリカに出張してエキスパートを六人連れて來られました。そしてこの鞍山の製鐵所や撫順炭坑の檢討をされたのです。

アメリカから囑託されたエキスパートの人達は十分實地を視察研究の上、鞍山の製鐵所や

撫順炭坑の露天堀について報告書を提出しました。これ等が動機となつてかなり仕事が發展したのです。』

八、野村先生の眞骨頂

野村先生の一生涯の中に於て、一番强硬であつたのは滿鐵總裁をやめる時の態度であつたらうと云はれてゐる。

先生は當時の鐵道院總裁である仙石貢に呼ばれた。其の內容は將來は貴族院議員にでも推薦する腹を政府で持つて居るから今やめて貰ひたいと云ふ話があつたらしい。それに對して珍しく野村先生は强硬につつぱつて、普通は非常にやさしい人であるが、あの時ばかりは自分の上の人に自分の意志を强く主張した。

『私は餌でつられてやめる樣な意志は毛頭ありません』

ときつぱりと言つたさうである。その時の事情は副總裁の伊藤大八をやめさせて、總裁たる野村先生にも其の責任を負つてやめて吳れと云ふ樣な話であつた。だが野村先生は

『私は私、伊藤は伊藤』

と云ふ樣な考を持つて居られた。談判決裂と定まるや先生の秘書の栗山氏は緊張した顏で歸つて來た。戶田氏が

『どうした』

と云ふと栗山氏は

『いよ〳〵先方からやめさせられました』

と云つたさうである。

又滿鐵總裁在任中に、時の北海道の局長をして居つた井出繁三郎から戶田直温氏に親展書をよこした。それは

『野村さんはあの通りの人格者であるし、滿鐵の樣な荒つぽい處ではどうも適當な女房役が要る。就ては自分のことを云ふのもおかしいが、自分が及ばず乍ら働いてみたい』

と云ふ、井出さんとしては珍しい意見をたてゝよこしたのである。當時も井出さんと戶田氏は親しかつたので打ち解けた手紙を井出さんも戶田氏に當てゝ書く氣になつたと考へる。

其處で早速その井出さんの希望を野村先生に取り次いだ處が、他に色々事情もあつたが、何しろ井出さんが當時北海道の局長になつたばかりであるので、鐵道としては無くてはなら

ない人であるし、まあ、滿鐵に置くよりも鐵道で局長をやつて居つたらと云つて其のまゝになつたと云ふ、表に出ない問題も織り込まれて居つたのである。

何れにしても野村先生の滿鐵總裁は前後二回であるけれども二回共たゝられた譯であると、戸田氏は素直に當時の事情を話された。

滿鐵の增資の時は株の申込が思ふ樣にゆかなかつた。

總會を開いて、その成績があがらないのをみて心配してゐた。野村先生はさう云ふことは嫌ひであつたけれども會社の爲に遂に意を決して、態々自分で安田善次郎の處に行つて株の引受を賴んだ。

そこで殘つた株だけ引き受けて吳れたので非常に成績をあげることが出來た。

第十一章　東京地下鐵道

一、地下鐵の創業

官界を去り、二度目の滿鐵を辭した野村博士は、民間にあつても亦多忙な生活を送る人であつた。世の中には官界にゐたり顯職に在るときは華々しく活躍しても、一度其の地位を去るとまるで閑散になつて仕舞ふ人がある。然るに野村先生の如きは、社會が遊ばせてはおかぬ型の人である。かくして先生は自ら求めざるに人より懇請されて種々なる事業を扶けられた。

東京地下鐵道の如きも亦先生を社長とし先生の人格と識見によつて今日あるを得た事業の一つであると云つてよい。

勿論地下鐵については、現地下鐵社長根津嘉一郎氏、專務取締役早川德次氏の功績等をはじめ、社の內外に幾多の有力なる人々の貢獻があつてこの難事業も創業より現在に至つてゐる。殊にこの事業の創始者とも云ふべき早川專務が其のライフ・ウォークとしてこの事業に

專念沒頭したことは人の知るところであるが、早川氏が野村先生を社長に迎へ得たことはこの仕事を成就する上に於て、まさに成功の第一着手を得たものと云ふことが出來ると思ふ。

野村先生は一面において非常に几帳面に、必らず會社に出勤された。病氣か重大な事故のない限りはチャンと會社に出られた。

だが、同時によく人を信じて人に仕事をさせた。

殊に野村先生は仕事については實によく出精されて、鐵道省、內務省等にもよく出かけて行つて當局との完全なる諒解を得ることに努力された。野村先生のこの努力が、今日の地下鐵の出來るためにどの位貢献があつたか分らない。

『私共も、會社のため仕事を完成するためにずゐ分ガムシャラなことをやりました。何しろ年は若いし仕事に對しては張り切つてゐたし、勿論自分の我儘のためではないがとにかく今日から思へば自分でもやりすぎたと思ふ樣なことをやりましたが野村さんは少しも其のために怒られたこともなくよく仕事をまとめて下さいました』

と早川專務は其の建設當時の苦心談を今日でもすることがある。

野村先生が地下鐵に關係されたのは、發起人として企業の當初からであつたが、大正九年

十月、阪谷芳郎男と共に相談役となり、大正十三年三月には社長となり、昭和七年十二月に辭職されるまで前後實に十數年の久しきに及んでゐる。

抑もこの地下鐵道の事業は東京の交通問題を解決する大きな役割を持つて居るばかりでなく我國の交通史上にも不滅な足跡を殘す仕事である。

大震災前の東京市の交通機關としては市電一つしかなくこの市電が唯一の市民の足たるの役目をして來た。其のために東京市電の混雜と云ふものは當時、有名なもので、新聞紙も市電のことと云ふと熱心に記事をのせたものであつた。

『鈴なり滿員の電車』はたしかに當時の東京名物であつた。

いま倫敦、巴里、伯林、紐育、市俄古の六大都市における當時の交通機關の平均の狀態をとつて見ると、人口五千三百二十人に對して一哩の路面電車と、三分の一哩强の高速鐵道があるわけであつた。この比率を東京市にあてはめると、四百二十哩の路面電車と百二十哩の高速鐵道があれば理想に近い都市交通機關があると云つてよかつた。然るに當時の東京市には僅かに百六十六哩の路面電車と、高速鐵道としては鐵道省の線路が九哩あるばかりであつた。これを見ても、東京市電と云ふものが如何に無理な客を乘せてゐたか想像が出來る。殊

に大震災の年の四月十五日は恰も花の滿開の頃とて、人出が多く、一日の乘客約二百萬人、收入十九萬圓といふレコードを示したことがある。

『路面電車のゆき詰り』と云ふことは既に各方面から論ぜられてゐたのである。

この狀態を見て、地下鐵の必要を痛感し、早くから東京市に地下鐵の建設を思ひついたのは早川德次氏であつた。

だが當時未だ多くの人の意見は

『東京は昔海であつたから地質が惡く地下鐵は駄目だ』

と云ふにあつた。

だが早川氏は、共れ等の反對を押切り、更に東京市內の交通量を調査し、また地質及び地下水の狀態等につき非常に苦心して研究した結果、東京の地質が世人の思ふが如き脆弱なるものでないこと、また東京の地層には湧水量は極めて少いものであること等を確め、ここにいよ〳〵地下鐵の出願をすることになつたが、當初においては有力なる政治家、實業家等の贊同と聲援を得つゝも、自ら立つて其の中心となり代表者となるべき程の人物を發見し得ず、しかも時勢の切迫はます〳〵この事業の必要を感ぜしむるものがあるので、增田義一、前島

密、池田龍一、坂本三郎、浦邊襄夫、田中四郎右衞門等の諸氏を發起人として地下鐵敷設の免許申請書を提出するの運びとなつた。まさに大正六年七月十八日のことであつた。

其の名は「東京輕便地下鐵道株式會社」で芝高輪から淺草公園と千住に至るものであつた。

然るに其の後に至り競願者が相ついで起つて來たので、早川氏の地下鐵案も一時運命如何と危まれた位であつたが、競願者の出現は却つて、其の一面において許可を早めるの力ともなり、ここに鐵道院の內示となつて現はれて來た。

卽ち大正七年十一月に至つて、時の監督局長佐竹三吾から早川德次氏に對して、

一、專門技術家の調査したる地質書、工事設計書、及工費豫算書を提出すること

一、更に多數有力なる發起人を追加すること

この二箇條である。

かくして、野村先生が地下鐵の發起人中に加はることになつたもので、當時追加發起人として加はつた人々は野村先生の外に左の通りであつた。

山本悌二郎、安田善三郎、松方五郎、日下部辨二郎、大川平三郎、山本條太郎、根津嘉一郎、三枝守富、白石元治郎、古市公威、柵瀨軍之佐、成瀨正行、藤原銀次郎、星野錫、

荒井泰治、津輕英麿、松方正熊、玉木辨太郎、小倉鎮之助

この頃に至つて、競願者の一つである「東京鐵道」において早川氏の輕便地下鐵と合同しようとする運動が盛になり、發起人の一人である森恪は合同運動の歩をすゝめ、早川氏に合同の會見を申込むと同時に四方八方を動かし、遂に野村先生や山本悌二郎にも話込んで、これ等の先輩をも動かした。

當時のことを野村先生はかう語つて居られる。

『森恪君と屢々會ひ、又、山本悌二郎君とも會見の結果、合同することになつた。利光君の方とは相談がまとまらなかつた。合同してからは初の內は大變兩方とも意氣込んでゐて、都合よく行つて居たが、會社が成立する時分には不景氣になつたので先方側は皆逃げて仕舞つた。結局こちら側だけで成立することになつた』

かくて、野村先生と山本悌二郎、早川德次の三氏が東京輕便地下鐵道側から出て、東京鐵道側からは增田義一、森恪の二人が出て、三田の山本悌二郎邸で會見し、互に意見の交換を行ひ、午前十時から午後二時半までかかつて、合同覺書を締結した。

かく野村先生は地下鐵の創業時代において既に發起人中の有力者としてこの事業の推進者

たる早川氏を扶けて盡力された。
かくして、「東京地下鐵道」となつて、財界不況の困難な中にも會社を設立し、古市公威男を社長とし早川德次氏專務となり着々工事にかかることになつた。
當時古市公威男は技術家出身の有力者で其の人格と識見は一世に高かつた。そこで選ばれて初代の社長となつたわけである。
古市男を社長とすることについては同鄕の關係から星野錫氏、また土木界の元老として野村先生が奔走されたことが與つて力がある。この二人の熱意ある勸說によつて古市男も地下鐵の社長たることを承諾されたのであつた。
古市男を社長に推薦した事情について野村先生はかう云つて居られる
『初代の社長をきめる時、古市君を推薦して、星野君と二人で行つて勸めたがなか／＼引受けなかつた。古市君と星野君とは同鄕であるし、私と古市君とは昔からの友達であつたから同道して行つて度々賴んで見たが、自分は經驗がないからと云つて承知しない。しかし大事業であるから德望のある人を社長にせねばならぬので是非古市さんをと云ふので、漸く承諾させた。其の時阪谷男の相談役は最初から決つてゐたが、私にお前も相談役になれ、

お前が相談役をひき受けたら自分も社長を引き受けようと云ふので止むを得ず相談役をひき受けて、社長になつて貰つた。其の後古市君が樞密顧問官になつた時、今度は私に社長になれと云ふので、引受けて私が社長になつた』

この時、野村先生は中川正左氏の入社を條件として社長を引受けられた。

かくして、會社は定款の改正を行ひ、新に副社長の制度を定め、野村社長、中川副社長、早川專務と云ふ陣容を整へて進むこととなつた。

この頃に至つて東京市においてもおくれ走せに地下鐵の案を立てて高速鐵道建設經營に關する出願をするに至つた。

元來東京市は、市電を經營し、東京市會においては東京市の交通を市に統一すべき決議をしてゐながら少しも其の實行の運びに至らず、乘合自動車の如きも早くより民間において經營されるにまかせ、地下鐵の計畫についても無關心であつた。後藤新平伯が東京市長たりしころ時の市電氣局長長尾半平は、大震災の最中にとにかく市營バスの認可を得て、乘合自動車の事業を開始し更に地下鐵の計畫を發表して大正十三年の夏辭職した。

其の後をうけて大正十四年に延長六十哩の高速鐵道の出願をしたが、この路線中には東京地下鐵の路線と併立を許されぬ様なものもあつた。

民間における地下鐵熱が財界の不況と大震災の打擊等によつて薄らいで來ると、今度は公營の方面からの競爭が現はれて來たわけである。

一難去つてまた一難、眞に一事業を創めて之を完成することの困難を思はしめるものがある。

『中村市長から私のところへ地下鐵道の權利を讓り渡せと云ふ相談があつた。これは統一せよと云ふ鐵道省の意嚮によつたものであつた。が、東京市でやるとなればこれから準備にかかつて、何時出來るか知れない。此方では敷設準備も出來て工事に着手しようとしてゐたのだから、何でも出來るだけ早くやつた方がよいではないかと云つて斷つた。これには中村君も一言もなかつた。あの時この方針でどん〳〵やつたからよかつたがやらねばいまだに何も出來なかつたらう』

と野村先生は當時の事情を話して居られる。

凡そ事業に波瀾曲折はつきものである。まして、東京地下鐵の如きは大東京の中心の大通りの下に電車を通さうとする我國交通史にも時代を劃すべき大事業であるから、幾多の困難にぶつかつて居る。其の間に日本財界の大變動や、關東地方の大震災の如き社會的の事件や、また天災等が織り込まれて、この事業の成立をます〳〵困難なものにしたが、時勢の地下鐵を要望することはいよ〳〵切なるものがあり、內部の人の和と時代の力とによつて遂に上野淺草間の工事に着手するに至つた。地下鐵の工事はもとよりこれが我國に於ては最初の事であるから、この工事についてもいろ〳〵なエピソードが殘されてゐる。

最初の免許條件には、地下五十尺と云ふことになつて居た。この事は

『亂暴な話で免許條件の地下五十尺は、地下五尺の間違であつたらうと云ふ勝手な解釋で地下五尺の路下式設計で工事施行認可申請をした。幸ひこの時、東京府で東京市へ諮問することを忘れて、直に鐵道省へ申達して仕舞つた。其れで市からうるさい苦情も出ず、鐵道省では地下五十尺などと云ふことは實際不可能と云ふことがわかつて來て居たので、五十尺は五尺の間違で認可になつた。これが前例となつて以後皆此の程度の路下式で認可が得られた』

と當時の技術長安倍邦衞氏が語つてゐる位である。

またこの事について、野村先生は

『初めてのことだからいろ〳〵と滑稽なこともあつた。免許されたのは原さんの内閣の時であつたが、原さんが倫敦に行つたとき、倫敦の地下鐵道は百尺も深いのにホテルまで地下鐵の音が響いて來る。東京の樣な地盤の弱いところでは地下鐵道は音響が多くて、宮城に響くから五十尺以上の深さでなくてはいかぬと云ふので、隧道の位置は地下五十尺以上の深さと云ふ條件がついて居た。然し後では到底出來ない相談であることが分つて、現在のやうなものになつた。また陸軍の方からもやかましいことを云つて來た。空中から攻撃された時には隧道が堅固でなくては役に立たぬから、コンクリートの厚さは五尺以上にしてくれと云ふのであつた。これは非常に金がかかるので到底出來ない。其れでお斷りした』

二、工事着手

かくて、いよ〳〵上野淺草間の工事に着手することになつた。

大正十四年九月一日からいよ〳〵工事を開始することになり、技術設計は遠武技師長の手

許において一切の準備が出來たので、八月二十日、鐵道省の秋田建設事務所長愛甲勇吉氏を建設課長として迎へ、東洋において最初の地下鐵道の工事の準備は全く出來上つた。そして大倉組の手によつて豫定通り九月一日から淺草駒形の土砂棄トンネルの工事から着手した。

勿論これは地下鐵工事の準備施設にすぎないが、何しろ繁華なる東京の市街に隧道を堀りはじめたのであるから、地下鐵工事の手始めとして都下の新聞紙が書き立てたことは勿論である。

かくして長い間計畫されてゐた地下鐵道の工事がいよ〳〵具體的になつて來たわけで、この土砂棄工事が出來上つてから今度は本工事に着手することになつた。

時は大正十四年九月二十七日、午前十時上野山下において、上野淺草間の起工式が行はれた。まづ祭壇を設け神官が祝詞を奏して祓ひを行ひ、前途の工事の多幸を祈願した。

この日、古市公威男も前社長の故を以て出席し、野村社長、早川專務、遠武技師長、大倉組の横山專務等が席に連なり、古市男、野村社長、早川專務等の順序で杭打式はいとも嚴粛に行はれた。

これは綱をひくと、櫓の上から鐵槌が落下して鐵杭を打ちこむもので、ガタンガタンと云

ふ金屬性の音が響いたときに、これが帝都の交通の劃時代的の地下鐵工事の第一着手かと思ふと自然とすぎこし方を想ひ出し、來るべき時代を想像し各人感慨無量のものがあつたことは云ふまでもないが、中にも徒手空拳から地下鐵の事業を思ひ立ち、あらゆる困難と戰つてここまで來た早川專務の如きは萬感胸に迫つて泪の頬に傳はるのを禁ずることが出來なかつたと云ふ。

かく工事着手と共に、十二月十四日帝國鐵道協會において株主總會を開いたが、其の時の野村社長の演說は左の通りであつた。

『これから工事の模樣を申上げます。工事は前期より引續き地下埋設物の整理を行ひ、本年九月廿七日より土留用及桁受用の鐵杭打機を据付けまして廿七尺から三十尺餘の杭を道路の兩側に打込むのでありまして、既に今日まで千五百本餘を打ち了りました。此の杭の上部に溝形鐵材を取付け其の上に道路を横ぎりて鐵桁を架し板張りをなして路面覆工を施すのであります。電車の運轉せぬ道路は晝間でも仕事が出來ますが、軌道の下は夜間電車運轉の停止せる僅々三時間の間に桁架け板張りをなして假裝路面を仕上げ、電車の運轉に支障なき樣致すのでありますから非常に工事が面倒であります。しかし社員一同は苦心努力

致しまして工程を相當に進捗させて居ります。淺草方面におきましては本線より分岐して土砂搬出用の隧道を設け、更に河岸に棧橋を造り搬出された土砂は之から直ちに船に移して運搬することになつて居ります。又一方上野方面におきましては、車坂町に捲揚機を設置し捲上げられた土砂は直ちに自動車で運搬するのであります。掘鑿の進行するに伴ひ、防水設備を施し鐵骨、鐵筋コンクリートの構築に着手するの順序でありまして、來年一月下旬には本構築の工事にとりかかることが出來ると思ひます。工事は順調に進んで居ります。地質も良好で、湧水も豫期した程でなく、諸事誠に好都合に運んで居ります。工事費も努めて節約致して居りますから、豫算の範圍内で十分建設し得ることと思ひます。

工事の竣工は大正十六年夏の豫定でありますからおそくも同年夏秋の頃には運輸を開始し、皆樣の御乘車を願ふことが出來ると信じます。斯樣の次第でありますから皆樣におかれても何卒御安心あらんことを願ひます』

さて此の工事は非常に順調に進んだ。そこで翌大正十五年には中間的に工事の模樣を宣傳する必要があるので、一月に政友本黨總裁床次竹二郎を招待して工事の實況を視察して貰つ

たのをはじめとして諸名士が續々として視察した。

かくして地下鐵工事の視察は一種の流行の如くなり應接に遑なき程であつたが、これ等はこの事業の有望なることを知らしむるには最も有力なることであるので會社としても努めて之を歡迎したが、中でも意義のあつたのは銀行團の視察であつた。

かねて、地下鐵の財的後援者たる銀行團は小野日本興業銀行總裁が幹事となつて、三井、三菱、安田、第一、十五等の大銀行を集め時々會合を催して地下鐵工事狀態等を聽取し會社の業績を知ると共に、好意ある援助を續けて來た。

だが、これ等銀行團が安じて地下鐵を援助するためには、工事の實況を知ることが最も必要な事である。現に上野淺草間の工事請負を滯りなく大倉組に依賴することの出來たのも、第一、安田、三菱、三井の四銀行が地下鐵から大倉組に振出した手形の割引を引受けてくれたためである。それ故に、これ等四銀行に對しては順調なる工事の進行の模樣を知らしむる必要があつた。

そこで三月一日にこれ等の銀行家を東京府知事、東京市長と共に工事視察に招待することとなつた。小野、佐々木、池田、結城、成瀨の諸氏と、平塚東京府知事が來場したので會社

からは野村先生はじめ早川、阪谷の諸氏が接待の役となり、上野と駒形の工事場を視察したが、野村先生はかかる場合非常に努められて來觀者に技術上の說明をしたり、愛想よく應接されたりして非常な滿足を與へられた。

百聞は一見に如かずである。種々の議論もあつたが、かく地下鐵道の敷設が眼前において立派に行はれてゐる實狀を眺め

『地下鐵の工事も畢竟案ずる程のことはなかつた』

と云ふ感じをすべての人にハッキリと與へることが出來た。視察を終つてから一同上野精養軒で午餐を共にし更に其の席上において野村先生や早川氏から會社の內容、將來の計劃等について懇談があつた。

この銀行團の工事現場視察の效果は覿面であつた。

其の翌日三越の專務の倉知誠夫氏が親しく地下鐵本社を訪ねて

『池田さんが昨日上野淺草間の工事を視察されて地質のよいのに驚かれた。東京市の地質があの樣であるならば、恐らく地下鐵は非常に早く建設されるであらう。地下鐵道は、大通りに敷設されると云ふから間もなく三越前にも達するであらう。今の內に三越前に停車場

を置いて貰ふ樣に交渉してその停車場から直接三越に出入出來る樣にして貰つたらよからうと云ふお話でした。其れで私は今日特に參つた譯でありますが、是非將來其の樣にして頂きたい。これに要する費用は三越において引受致します』

と云ふことであつた。この申込は當時の地下鐵の幹部にとつては非常に有力なものでまさに勇氣百倍するを覺えしむる事件であるが、池田成彬氏の其の機敏なる處置も亦驚嘆に値することである。まさに一葉の動くを見て風位を察するの看察力を備へたものと云ふべく、今にして非常戰時の大藏商工の兩相を兼攝し近衞內閣の財界方面の智謀として國民の信賴を受くるの榮位にあることを思へば、當時のこの處置の迅雷疾風の神速さも亦自然肯かるるところがあるであらう。

現在の三越前の地下鐵停車場と三越とを聯絡する華麗にして壯大なる地下道は、實にこの銀行團の一員として上野淺草間の工事を視察した池田成彬氏が、其の日に考へつかれたことに端を發し、其の翌日早くも三越倉知專務の出動となつたものであることを特筆しておく必要があると思ふ。

これが地下鐵とデパート等大建築との聯絡の濫觴であつて、其の後松坂屋、白木屋、日本

生命館（高島屋）松屋等から地下鐵に聯絡の申込があつた。

だが、工事は大體において順調に運んだとは云ふものの、共れは何等の故障なしにスラスラと行つたものと思つたら、大變な間違ひである。事實としては故障百出であつて、決して努力なしには何一つ出來上らせることは出來なかつたと云つてよい有樣であつた。無人の境に軌道をひくさへ工事となれば容易でない。況んやこれは、江戸時代から續いて來た古い都の大通りを掘り返して共處に電車を通し停車場を造らうとするのである。思ひも及ばぬ樣な事故があとからあとからと續出して來る。これを未然に防ぎ、または出來上つた事故を處理してゆくと云ふことは實に容易ならざる努力を要する。

この建設時代の苦難をとにかく切りぬけることの出來たことは地下鐵における人の配合が共のよろしきを得たためであつて、社長に野村先生、副社長に中川正左氏、專務に早川德次氏といい人選を得たためにさしもの困難を切りぬけることが出來たものである。野村氏が中川氏を副社長にしたことはこの意味においても成功であつた。

中川正左氏は、地震内閣時代に鐵道次官の職にあつたが、虎の門事件のため山本内閣が總辭職をしたため、大正十三年一月に辭職した。

そこで氏は久しく官界生活をした後のことでもあり浪人生活を好機として、洋行の計劃を立てた。ところが丁度折惡しく大阪において母堂が病氣をされたので、其の母堂を病床に見舞はれて歸京した。

そこへ一日、野村先生が往訪されて

『是非地下鐵に副社長として入社して貰ひたい』

と云ふ話をされた。だが中川氏は

『實は洋行をしたいと思つて計劃をしてゐるところです』

と云ふと、野村先生は

『洋行はいつでも出來ることぢやないですか、是非一つ仕事を助けて下さい』

かう云はれた。しかも二度もこの話で中川氏のところにわざ〳〵ゆかれたので中川氏も、自分の方から野村先生の赤坂のお宅へお斷りに出かけて行つた。すると

『君が入つてくれなければ、僕もやめるより仕方がない』

と云はれた。其のためにさすがの中川氏も其れではと云ふので更に考へ直して、承諾することにして地下鐵の副社長となつた。而して挨拶のために山之内一次のところへ中川氏がゆ

くと

『君は役人を長くやつたが、辭めてから會社に入らうとは思はなかつた』

かう山之内氏が云つたので中川氏は

『實は野村さんに是非とすゝめられたものですから』

と云つたら

『僕は君に外のことをして貰ふつもりで居つた』

山之内氏は中川氏にかう話した相である。

かくていよ〳〵野村、中川の組合せで地下鐵の正副社長が出來上つた。

野村社長は精勵恪勤であつた。時には精勵しすぎると思はれる程精勵であつた。

午後には必らず出社した。一時ごろから、四時、四時半ごろまでは歸られなかつた。

『野村さんは、毎日キチンと出られないと氣持が惡いのかも知れませんね』

中川氏はかう云つたことがある。而して社の公文書や招待狀、宣傳文等には必らず加筆や訂正をされた。

『野村さんは外のことはだまつて居られても、文章のことになると必らず直されたものです。

やつぱり學者ですね』

中川氏はまたかう話された。

ブリスケと云ふ獨逸の顧門についても野村社長は

『是非指導して貰ひたい』

と云ふので通譯を介して熱心に其の説明をきかれた。

『私は技術のことは分らず、建設時代のことですから工事について苦情が絶えなかつたので町會だの有志だの各方面へあやまりにゆくのが一と仕事でした』

と中川氏は當時の苦心談を語つたことがある。事實、東京の市街の中央にあれだけの大工事をする苦勞と云ふものは外部の人の到底想像すらも出來ないことであつた。沿道の住民からは小言ばかり云つて來た。

『地下鐵が杭を打つために其れがひゞいて夜眠れなくて困る』

『地下鐵の工事のために水が出なくなつて仕舞つた』

から云ふ苦情は風呂屋、染物屋等から出た。更にまたガス管が爆發して其のために窒息者を一人出した。これは震災で既にいたんでゐたパイプを掘り出したためにその破損個所から

爆發したものであつた。
中川氏はこれ等の面倒な交渉をひき受けて陳謝係を勤めて居た。
また官公署との關係も實に面倒であつた。市電の線路を少しいぢくるのにも、書類につける青寫眞を八枚も要すると云ふ程姑小姑が澤山ゐた。
まづ市の關係がある。つぎに府、警視廳、復興局、遞信局、遞信省、內務省、鐵道省等共の關係は實に八方に及んで居る。民間で仕事をすることの困難は實にここにある。更に民間で仕事をする困難はこれに止らない。
會社の仕事であるから株式を募集し事業を宣傳するためには、この事業が有利であつて、前途が有望であると云ふことを明らかにしなければならない。もつとつつこんで云へば「地下鐵は儲かる」と云ふことを宣傳しなければならない。然るにさうすると、其の地下鐵工事のために直接間接に損害を蒙る人々は
『地下鐵は怪しからん、自分達が儲けるつもりで仕事をしてわれわれにこんな損害を與へる、儲かる仕事ならば十分損害を拂つて貰はう』
から云つて苦情を云つて來る。苟くも仕事をした人ならば皆經驗があることであるが利害

問題が纒綿してゐる苦情程面倒なものはない。しかも其の關係が沿線の住民全部に及び更に一般の交通人にまで及んで居るのであるからこの苦情陳情を處理するだけでも並大抵の苦心ではなかつた。

殊に、また官廳方面においてもデリケートな事情があつた。其れはこの地下鐵道は、地方鐵道として鐵道省が免許したものである。而して工事に際して、道路使用の關係で内務省の許可を受け監督を受けることになつて居た。

これが大阪における地下鐵道が軌道として許可され市自身が建設し經營するのとは大變な違ひである。其れだけに内務省關係は、鐵道省關係よりはるかに複雜なものがあつて、社の幹部として苦心を要するものがあつた。

然も、沿道の住民は苦情を東京府や内務省あたりへまで持つてゆく。行政官としての經驗ある中川副社長の如きは

『かかる事業は民間の會社がやるにはあまり適當ではない、やはり市や國家がやるべきものだ』

と云ふことを考へさせられた程、實際には故障や困難が續出したことは事實である。

だが、完成の曉から見れば事業は其の多くの困難があればある程、後には一層の光彩を加へるわけである。

とにかく困難はあつたが、會社の陣容よろしきを得たために、よく之に打ち勝つことが出來てかく工事はまづ順調に進んでゐた。だが更にここに經營上について新なる故障が起つた。

其れは大倉組の市營地下鐵代行出願事件である。

民間の地下鐵の上野淺草間の工事が着々として進行しつゝある間に東京市營の地下鐵案は遲々として進捗する氣配もなかつた。大正十四年五月免許は得たものの市營計畫は幾度か暗礁に乘上げ、其の實現をさへ危ぶまれた。

其の原因は勿論財政難にあつた。市の財政がかゝる大事業に着手することの困難なる事情にあつたことは何と云つても根本的の原因であると云つてよかつた。だが其の財政上の困難さへも、要するに人次第である。人物があつて、よくこれを貫かうと思へば不可能なことはない。しかるに政治的に面倒な東京市政においては、かかる根本的の計畫を實行に移して行かうとする程腰を落ちつけて眞に市民のための政治をやつてゆく程の理事者がないのである。殊に當時岡田高級助役と大道電氣局長との意思の疎通を缺くものがあり、中村市長は、電氣

局案を握りつぶしにした。

翌十五年三月三十日、東京市會は市電地下鐵計畫十三ヶ年繼續事業一億八千七百萬圓の大豫算を可決し、第一期線として澁谷・巣鴨間、池袋・洲崎間の二線の敷設に着手し、七ヶ年に之を完成し其の後引續いて第二期線の敷設をすることになつてゐた。

だが、この計畫にも勿論財源はなく公債によつて支辨する計畫であつた。

だが、當時は非募債主義を高調する憲政會內閣であつたために、內務大藏兩省の意向としては東京市に二億に垂んとする大公債を發行せしむることは東京市の財政を危殆に導くものとの懸念があり不認可に終らしむるものの如くに見えた。

だが、電氣局は尙も地下鐵の工事開始の希望をすてず、大道局長は岡田助役に讓步して地質調査費を豫算に計上したが、地下鐵の豫算が認可とならなければ其の資金がないので他よりの流用をはかつたが之れに對しては中村市長は容易に決裁を與へなかつた。

しかるに當時行はれた東京市會の改選に於て憲政會の大勝となり中村市長はアッサリと市長のイスをなげ出し、伊澤多喜男氏が市長となつたが市長は宿痾のために第一助役丸山鶴吉氏が主として活躍し、大道局長の希望するが如き市營地下鐵計畫はなか〳〵決しなかつた。

この市營地下鐵行惱みの實狀を見て、大正十五年八月二十七日大倉組の門野重九郎氏が中心となり都下有力實業家と郊外電鐵代表者を發起人として東京高速鐵道株式會社と云ふ資本金二千五百萬圓の會社をつくることとして、東京市の有する地下鐵免許線の全部の代行を出願した。

これは野村社長にとつても、早川專務にとつても全く寢耳に水であつた。現に地下鐵の工事を請負つてゐる關係のある大倉組からこの煮湯をのませられるとは思はなかつた。早速協議して百方奔走することになつた。

だが、幸にもこの代行の許可は大道局長も反對であつた。

『代行の許可は東京市の地下鐵の統一を困難ならしめる』

と云ふのであつた。かくして、この出願は一週間もたたぬうちに却下となつた。だが、當時地下鐵としては狼狽もし憤慨もした。一事を完成せんとする者のいつも經驗する大きな苦心はかかる時にしみ〴〵と味はれるのであつた。

其の後大道局長の辭職となり生野團六氏が市の電氣局長となつた。だが市營地下鐵の局面打開は到底望むことは出來なかつた。

この形勢を見て、大倉組の代行出願の計畫が再び開始された。今度は前回の代行出願にこりて、どうしても東京地下鐵との聯絡を保たなければいけないと云ふので、野村社長、早川專務の抱込の計畫を立て、根津、大川兩氏を其の說得役として交涉を試み、ついに大倉組で東京高速鐵道の發起人總會を開催し東京地下鐵道を中心として會社を設立するといふことになり、之を條件として諒解を求めたので野村社長も小異を捨てて大同につくと云ふ決心をし東京地下鐵道の重役全部が發起人に參加して昭和二年十月五日代行出願するに至つた。

上野淺草間の地下鐵は起工以來既に二年の歲月は流れた。昭和二年秋頃になつて工事は略完成に近づき、この際最後の努力をすれば年內に開通することが出來る見込が立つに至つた。大倉組との契約は、竣工期限は昭和二年六月三十日となつてゐたが、これには多少の事故もあり、當初の設計を變更した點もあり事情餘儀ない次第であつた。

だが其れにしても地下鐵は日本最初のことであると云ふので、鐵道省、內務省、遞信省、東京府、東京市、警視廳等の關係官廳が非常に好意をもつてくれたことがこの工事を進むる上に非常な便宜であつた。而してこの關係においては、地下鐵社長として野村先生の存在は

大きな働きをしてゐた。

三、地下鐵の開業

十二月二日の午後に初めて電車を萬年町の車庫から出して、上野、稻荷町間の地下鐵の線路に入れることになつた。この處女運轉には東京鐵道局の草刈工作課長、菰田運轉課長等も立會つた。

かくて、着々準備は進んで試運轉がすみ、鐵道省の竣功檢査を受けて見ると小さいことながら此處彼處と故障が百出してなか〳〵檢査が通らず年末に開通は困難かとも思はれたが社員一同終日終夜の大奮闘によつて、遂に二十六日福富監督局長の公式監査となり、一般旅客營業を許可さるることになつた。

十二月二十九日、この年もおし迫り希望多き新年を目の前にひかえて、いよ〳〵開通披露式を行ふことになつたがこの開通披露式の擧行に先立つて午前十時畏くも、朝香、竹田兩宮殿下の御台臨あり、御試乘の榮を賜はつたことは東京地下鐵道の永遠に輝く光榮であつた。野村社長はじめ重役社員一同感謝を以て御迎へ申上げ上野精養軒において御少憩茶菓をお進

め申した後、上野驛前乘車口に成らせられ、野村社長の御先導、早川、增田兩重役の御案內で上野驛から、淺草驛まで御試乘になつた。淺草驛にて御少憩の後再び上野驛まで滯りなく御試乘を了らせられ御興味深げに御自ら十錢白銅を投入れてターン・スタイルを動かし給ひ、電車の御乘心地も至極御滿足の樣に拜せられた。

さて當日開通式の式場は上野公園竹之臺で、今の省線上野驛公園出口の右前にあるテニスコートの所であつた。ここに天幕をはり、アーチを造つて、來賓を迎へることになつてゐた。だが、當日の披露の主眼とするところは、東洋最初の地下鐵に試乘して貰ふことにあつたので料理等は簡單を旨とし、茶菓、ビール、サンドウヰッチの接待とし、開通記念帖と工事概要と優待乘車券を呈するの外、野村社長の名に依つて左の挨拶狀を印刷として來會者に渡した。

御挨拶

今般當社地下鐵道線路の內上野淺草間工事竣成を告げ、運輸營業を開始する運びに立ち至りましたるに付御披露の爲御案內申上げましたる處年末御繁忙の折柄にも拘はらず朝野貴紳多數の御賁臨を辱ふし電車の御試乘を賜はることは當社の光榮之にすぎず、深く感謝す

る處であります。

帝都の混亂せる交通狀態を緩和し、市內の長距離輸送竝に郊外と都心との交通を迅速にし以て市民の便益を計り、能率の增進に務むるは、今日の急務にして、其れは、高速地下鐵道の敷設に俟つ外なしとかたく信ずる所であります。

當社夙に爰に見るあり萬難を排して此の事業を計畫し大正六年七月十六日其の第一期事業として、品川、新橋、上野、淺草間の地下鐵敷設免許を出願し大正八年十一月十七日を以て之が免許を得て大正九年十月十三日を以て會社の設立を見るに至りました。爾來沿線の詳細なる地質調査を行ひ、大體の設計豫算を調製し主任技師を歐米に派遣し地下鐵道の視察研究をなさしめ、第一に新橋、上野間の工事に着手の見込を以て鋭意其の準備を急ぎ居りましたが、偶々十二年の大震災に遭遇しまして計畫に一頓座を來たし一時中止の止むなきに至りましたことは洵に遺憾に堪へざる所であります。其の後財界の狀況に鑑み、資金竝に營業上の關係等を考慮しまして、當初の計畫を變更し最も交通頻繁にして兩端に遊覽地を有する上野、淺草間の工事に着手し地下鐵の模範を示すことと致しまして其の工事を大倉土木株式會社に委託し十四年九月を以て起工し二ヶ年餘を閱みし本年十二月末を以て

開通を見るに至りました。

抑々本事業の如きは我邦始めての試みにして、其の當否に關しては、專門の技術者間に於てすら、兎角の議論もありました程ですから、當社におきましては、特に獨國、シーメンス・バウユニオンの技師長アール・ブリスケ氏を技術顧問に聘し、鐵道省、其の他の各專門家にも夫々技術上の囑託を爲し、其の設計につきては愼重なる研究を遂げ紐育伯林等の地下鐵道の設計に準據し加ふるに我邦における地震の影響を考慮し、鐵骨、鐵筋併用コンクリート構造の函型式を採用することに致しました。而して工事を施行するに方りましては道路の直下に設くるものでありますから、毫も交通に支障を來さざる樣先づ以て路面の假覆工を施す必要があります。其の電車軌道の部分の如きは夜半電車運轉休止中の間合を見計らひ僅かに三四時間の外仕事をなすことを得ず、又地下に於ては水道、下水、瓦斯管其他埋設物の複雜せるものありて之が移轉又は防護を必要とし、本工事を施行するに先立ち斯る豫備工事の爲めに費す所の苦辛も亦容易のことでありませぬので、施行上につきましては細心の注意を拂ひ、萬遺漏なきを期しました。

幸に地質は良好にして地下湧水も亦甚だしからず、工事順調に進捗し、多少區劃整理の遲

延其の他の爲、豫定の工程を誤つたとは申せ今日の成工を見るに至りましたことは洵に欣幸に堪へざる所でありまして、是れ偏に社員一同竝工事請負者の奮勵努力に由るは勿論でありますが、亦監督官廳、關係官公署、會社竝に沿線各位の甚大なる御同情と御援助に由ることと感謝措く能はざる所であります。

然しながら今日落成の區間は僅かに免許線の一部に止まり、今後益々事業を進展し全線の完成を期するは、前途尙容易の事ではありませぬ。何卒大方の諸彥におかせられてもこの重大なる使命を完全に果たし得る樣今後一層の御同情と御後援を賜はらんことを切望して已まざる次第であります。

昭和二年十二月二十九日

東京地下鐵道株式會社

取締役社長　野　村　龍　太　郎

當日の重なる來會者は、小川鐵相、原法相、八田鐵道次官、森田衆議院議長等、關係各官公廳の當局、及關係方面の名士三千名に達し、皆、物珍らしげに地下步道に流れ込み、ここ

に最初の地下鐵試乘を行つた。

開通式の翌日、一般の乘客の取扱を開始すると、非常な評判であつた。ターンスタイルを使用し之に十錢の白銅を投入するとバタンと廻轉して入場することが出來る設備や、間接照明によつて車内を照らして、蔭を生ぜぬ朗らかな裝置を採用したことや、青少年を乘務員に仕立て、之に嶄新なスタイルの綠色の服を着せたことなど今日まで我國の汽車、電車で見られない新機軸を色々採用したので世間の人氣はます〳〵高められ連日早朝から夥しい乘客が雪崩を打つて押しよせて來て、文字通り超滿員の盛況で上野驛の地下改札口から上野公園山下廣小路まで長蛇の如く續くと云ふ有樣で列に加はつてから乘車するまでに一時間以上もかかると云ふ物凄い繁昌ぶりであつた。かくて東京市民は勿論、東京に來る人々は昔から話にばかり聞いてゐたロンドン、パリ、ニユーヨーク等の地下鐵と云ふものを一層新らしき設備として眼前に眺め、自ら其の乘客となり、文明の最も進んだ交通機關の快適さをエンヂヨーイすることが出來る樣になつたのであつた。

かくして、僅か一哩餘の電鐵で、一日十萬の乘客を吸收し得たことは實に驚異すべきことで我國交通史上にも類例を見ざる所であつた。

さて地下鐵社長としての野村先生のことを、も少し書いておかう。

『地下鐵の仕事は日本はじめてのことでもあり、かつ監督官廳や關係の公署が非常に多かつたので時々關係者が集つて協議會を開いたものです。

建設の場合にも、內務省、鐵道省、市役所、東京府、警察、等の關係者が集つて設計に關する協議會を開きました。かかる場合には、野村先生が地下鐵の社長として居られたことが、地下鐵の位置を非常に重からしめて、仕事を進める上にどの位有力であつたか分りませんでした』

當時、地下鐵の支配人であつた愛甲勇吉氏は語つた。

『工事中、社長はよく現場にもゆかれましたが工夫なども進んで野村さんに近づいて來ました。大概エライ人と見ると、あの連中は逃げるものですが、野村社長には大に親しんで居ました。さすがに、永年鐵道で建設の現場の經驗があるので社長としても、あの連中に非常に親しみを持つて居られたわけで決して恐れられる様なことはありませんでした』

と云つて居る。ここにも野村先生の人格の一端がよく現はれてゐる。

また、野村先生が、地下鐵社長としても非常に精勵であつたことは、前に中川正左氏の話

にもあつた通りであるが、早川德次氏も

『私共も仕事が大切であるし、早く完成したいと云ふので隨分勝手なことをやりました。勿論これも私心あつてやつたことではありませんが、やりすぎたことも澤山あつたことと思ひますが野村社長は決して怒られたことがありませんでした。しかし私の聞いて居るところでは、野村社長も若い時には負けず嫌ひであつた相ですから、結局非常に我慢づよい方だと云ふことです。この我慢づよいと云ふことのために立派な人格を作りあげられたのだと思ひます。

また非常に精勵で、御病氣の外は社に來られない日は一日もありませんでした。さうして私共の報告を一々聞かれました』

と語つた。

要するに地下鐵の社長として、野村先生は蓋し最も適役であつた。先生を社長として戴いたことが、地下鐵が出來上つた大きな原因であると云つて決して過言でないと思はれる。云ふまでもなく地下鐵は日本最初の試みである。されば、其の社長としては技術にも通ずると共に常識的判斷がなければならない。殊に人的關係においても官廳にも財界にも信用が

あると共に、社内の德望と云ふことも勿論大切である。然るに官廳關係においては、鐵道省としては、野村先生は大先輩であるし、內務省においても、技監中川吉造氏の如きは野村先生を絕對信用して、この仕事の完成に援助を惜しまれなかつたと云はれてゐる。

殊に地下鐵建設當時においては、野村社長、中川副社長、早川專務のコンビが最も有效に働いたために、彼の故障百出の難局を切りぬけて、完成することが出來たものである。されば早川氏は今日においても

『京濱地下鐵の進行ぶりよりも、東京地下鐵の方が眞の進行ぶりがよろしかつたことは事實です』

と告白して居る。殊に野村先生が社長として地下鐵に前後九年に近い間在職され、地下鐵を今日あらしむるに至つた功績は、我國、否、東洋における最初の事業として、交通史上に不朽の名を留められたものと云つてよい。

野村先生は、地下鐵の重役室で、古市公威男、大林組の岡博士、及び早川專務などと雜談をしてゐたときのことである。たま〳〵野村先生の室に端然として居られることに話が及ぶ

『野村社長は君子人で居られるから女性の問題などはおこらなかつたでせうね』

と云つたことがあつた。さうすると古市氏がすぐに其れをひきとつて

『いや野村君だつて男だから女性の問題がなかつたと云ふわけはないさ』

と云つた。すると岡博士が

『さうですとも、社長だつて川長の娘に惚れられてお困りになつたことがあつたですからね』

とやつたので、さすが君子人の野村先生もこれを聞いてニヤ〳〵笑つて居られたと云ふことである。

第十二章　湘南電氣鐵道

湘南電氣鐵道も、其の發端に溯ればほんの偶然なることから思ひ付かれたものである。されば一つの事業を思ひ付くことは必らずしも至難ではないが、これを實現し之を完成することは難中の難と云ふべきで、この事業も幾多の人々の奮闘と、之等の人をよく統括して今日を致さしめたる野村先生の苦心とは沒することは出來ない。湘南電鐵の存する限り野村先生はじめ之等多くの事業に參加したる人々の名は不朽であると云つてよい。

大正三四年のころ谷口守雄氏が東京市電氣局の技師長兒玉隼槌氏と雜談中、ふと地圖をひろげて見ながら

『東京市の附近において交通機關の發達しないところは三浦半島があるばかりである』

と云ふ話から、敏感なる谷口氏は

『左樣だ、其れなら一つ實見した上で交通機關の計畫を立てて見よう』

と思ひ立ち早速この案を心合ひたる友人達に話したるところ賛成する者が多く、そこで鈴木寅彦、三好榮次郎、小澤信之輔、武和三郎の四氏と自動車を走らせて三浦半島の地を親しく視察した。

然るに一帶の土地は風光明媚であつて富士の靈峰を仰ぎ、太平洋の碧波溶々たるを眺め、しかも金澤八景あり、横須賀軍港あり、油壺の絕勝あり、城ケ島あり、また金澤文庫、安針塚、ペルリ記念碑等々名勝の地に舊跡及び施設等の見るべきものが多いので、ます〳〵交通機關の必要を痛感していよ〳〵電鐵の出願を決意するに至つた。而してこの計畫を持つて谷口氏が種々の人に話してゐるうちに當時鐵道を退いて浪人生活中であつた石丸重美も

『共れは結構な計畫だ』

と大贊成の意を表し同時に石丸は

『井出繁三郎君も目下浪人をしてゐるから發起人にしてはどうか』

と親友の間柄だけに井出を發起人に加へることを提案した位であつた。

かくして發起人中から委員長を求める必要が出來たので谷口氏は曩に朝鮮鐵道の社長に野村先生を推薦した關係もあり、人格閱歷等よりして野村先生を委員長に推薦することとし先

生も亦之を快諾されるに至つた。
然るに其の中に政友會內閣が出現し原敬總理大臣となり、床次竹二郎內務大臣兼鐵道院總裁となり、湘南電鐵の發起人中に其の名を連ねた石丸重美は鐵道院副總裁となり、井出繁三郎は東京鐵道局長より更に本省の監督局長となつた。
この狀勢よりすれば湘南電鐵の認可は極めて簡單なるが如く見えたが、事實は意外に複雜なことになつて仕舞つた。
其れはこの湘南の出願線に對して既に競願者があつた。又出願區間の一部に對しては先願者もあつた。かかる事情に依つて石丸、井出の兩氏が鐵道省の當局者となつてゐながら湘南電鐵を免許すると云ふわけにゆかなかつた。
其のうちに此の湘南電車が橫濱を起點とするのを物足らぬと云ふものが出て來て更に計畫を變更し、起點橫濱を東京と改め、京神電氣鐵道として湘南電鐵と同一發起人にて出願することとしこれも野村先生を委員長とした。然るにこの路線のうち東京橫濱間については岡田治衞武と云ふ人が既に敷設免許を得てゐた。
岡田は非常に頑强で仕事も始めないのになかなか權利を放棄しない。殊に餘程巧妙に立ち

廻つて、歴代の内閣に諒解を得て其の工事施行の延期をして貰つて免許の權利だけをしつかりと持つてゐた。これが武藏電氣鐵道であつて、今日の東京橫濱電鐵である。

何れにしても湘南電氣鐵道は之等種々の障害のためにます〳〵免許が延びた。同志の人が當局者となり次官たり局長となつてさへ出來ないのであるから其の困難は想像が出來やう。この間において出來るだけ競願者を買收したり地元の反對者を說得する等の手配をした。

また當時、鐵道敷設法の一部が改正されて湘南電氣鐵道の出願路線と同じコースの三浦半島の一周線が豫定線に組入れられたので湘南電車の必要性がはつきりして認可の曙光が認められるに至つた。

かくして周圍の條件はます〳〵好轉しつゝあつた。

たま〳〵關東地方に大震災が起り東京をはじめ湘南地方の損害は激甚なるものがあつた。交通機關の如きも非常な打擊を受けたときであつたので出願人等は井出監督局長に

『是非この際湘南電鐵を免許されたし』

と懇請した。この時は鐵道大臣は大木遠吉伯であつたが、大臣官邸は汐留にあつた。文書課長兼秘書官瀧脇宏光子より大臣に湘南電鐵の必要性を說いて貰つたので漸く機運熟して、

横濱から三浦半島を一周する湘南電鐵の免許となつた。
これより前、原内閣の時に野村先生は、二たび滿鐵の社長として赴任すべき交渉を受けた。湘南電鐵の關係もあり前回のにがき經驗もあるので谷口氏等は
『まあおよしになつた方がよいでせう』
と云つた。勿論野村先生も當初から受けられる意志はなかつた。然るに原敬は五度も野村先生を勸說した。如何に原敬が野村先生のことを考へて居たかはこれでも分る。
かくて野村先生は再び滿鐵社長として赴任され、湘南電鐵は其の委員長を失つた。だが委員長は缺員のままとしてあつたが、其の間に野村先生が滿鐵を退社されたのでまた元の如く委員長に就任された。
ともあれ長い間かかつた免許も漸くにしてとれた。湘南電鐵會社も具體的に株式を募集し、仕事に着手することになつたので谷口氏自ら筆をとつて次ぎの如き趣旨書を書き上げた。實に稀れに見る名文と云ふべきで、ここに其の全文を載せて當時の氣運を想像するの資料としたいと思ふ。
湘南一帶の地風光明媚にして氣候溫和、就中三浦半島は東南は太平洋に面して遙かに煙靄

の裡房總の連山を望み、西は相模灘の綠波洋々として仰けば富士の靈峰長へに平和の雲を戴き伏しては足柄の峰巒透迤として頷く等、實に山海の絶勝を一眸の裡に鐘めたるものにして、而も夏季は涼風颯々として衣袂を吹き到るところ海水浴に適せざるなく、冬季は暖潮四圍を浸して温氣人に適し自然の惠を併せ有するもの海内之に比すべきものなし。加之鎌倉時代以降の史蹟に富み、探勝に懷古に將た保健に推賞措く能はざるところなり。

由來東京は武藏野の中央に位し風光の見るべきもの少く、偶ま日光鹽原妙義箱根の勝地ありと雖も、何れも距離遠く一日の行程に適せざるのみならず、其の設備多くは貴族的なるが故に富豪紳縉に非んば行樂の人となる能はず、纔かに上野日比谷の小公園に積日の勞を遣るか、或は熱閙の淺草に黃塵を浴びる外亦市民と兒童との保健行樂の地を覓むるに由なきは、獨り市民の爲めに痛惜するところなるのみならず、將來帝國の安危を荷ふべき青少年の爲めにも大に考慮せざるべからざるところなり。

京濱市民の遊覽地として、一日の行樂地として將た最も帝都に接近したる國立公園として三浦半島は之が最好適地にして同地方の如き風光の絶佳と氣候の温和と、史蹟の豐富なるとを併せ有する所は到底他に之を求むる能はざるは舒說するところの如し。而かも此絶勝

の地に今日に至るまで文明的交通機關のなきは、むしろ一遊の士の意想外とするところにして、若し此勝地にして關西地方に在らしめんか、二十餘年前相當機關の敷設せられたるべきは何人も想到するところなり。

茲に於てか吾人は此絶勝の天地に最新式の電氣鐵道を敷設して此惠れたる自然の大絶勝地を世人に開放せんとす。若し夫れ電鐵の收支に至りては之を横須賀線の交通量に比し將た東京又は大阪附近の電鐵に較べ其一班を推知し得るのみならず、沿岸には浦賀、津久井、三崎、小網代、長井等の小港灣接比し遠洋の漁獲物は悉く集積せらるるを以て、獨り乘客收入のみならず、貨物收入に於ても相當の收益を計上し得べし。

吾人が湘南電氣鐵道を發起計畫せる所以のもの、如上、大要陳述するところの如し、庶幾は大方の人士、一は京濱市民保健の爲め、一は天與の絶景開發の爲め、揮つて本事業の大成に賛成援助せられんことを

この谷口氏執筆の趣意書を野村先生が讀まれて

『あれは實によく出來たよ。唯一字字が間違つてゐる』

と云はれた。其れは

『山海の絕勝を一眸の裡に鐘めたるものにして……』

とある鐘めは鍾の違ひであると訂正されたもので、こゝらに野村先生の面目が現はれてゐるから敢へてこゝに其の全文を載せたわけである。

然るにいよ〳〵株式の募集にかゝるとこゝに思ひがけざる一大故障に逢着するに至つた。其れは歐洲大戰後に世界の財界を吹きまくつたパニックであつた。戰爭中は桃源の夢に耽つてゐた日本の財界にもこの餘波は押しよせて來た。其のために多年の好況になれて手をひろげてゐたものはバタ〳〵と殪れ、忽ちにして槿花一朝の夢と化して仕舞つた。されば湘南電鐵の株式の如きも容易に募集が出來なかつた。當時の模樣について

『路線はよし見込があると云ふので其の發起人の如きは實に天下の名士を集めたものです。然るに其の人材揃ひの發起人を以てしても僅か千二百萬圓の株が出來ないと云ふ始末で、實に苦心慘憺たる有樣でありました。據ろなく根津嘉一郞氏に泣きついて、同氏の出馬を促し委員長制度をやめ、改めて發起人總代制度とし根津嘉一郞氏、野村龍太郞氏の二人を相並んで發起人總代とすることに決しました』

と谷口守雄氏は語つた。之を以ても當時の苦心の一端を想像することが出來やう。

根津氏ひき出しまでには井坂孝、大川平三郎氏等の奔走が與つて力があつた。また谷口氏は前から井坂氏、原富太郎氏に接近しこの兩氏の力によつて横濱の有力なる實業家の贊成を得ることが出來た。これが湘南電鐵の成立には非常に有力であつたことも見のがすことは出來ない。

かくして、根津、井坂兩氏の盡力に依つて、保善社の結城豐太郎氏に話込み同氏の後援を得て引受のない株は全部安田において引受けると云ふことになり、大々的鳴物入りで株式の公募にかかつたので今度は非常な盛況で株の割當に困つたと云ふ有樣であつた。

其の頃、鐵道省監督局總務課の事務官として敏腕を振つてゐた八木鶴藏氏が退官してゐたのでこの湘南電鐵の會社創立の仕事を手傳つて貰ふことになつた。

八木鶴藏氏は云ふ

『どうしてあすこの仕事を手傳ふ樣になつたかハッキリ記憶はないが谷口守雄氏と井出繁三郎氏から話があつたので行くことになつた樣な氣がする』

八木氏はまた、創立當時の苦心談をかく語つた。

『その頃、報知新聞の五階に事務所があつて毎晩々々徹夜で仕事をして居つた。主として僕

が働きその下に四五人居つた樣に思ふ。

僕のやつて居つた仕事を話すと各關係方面に趣意書を送り、その返事を貰ふこと、それから「線路を見たい」と云ふ樣な人に現場を案内する。又は大阪に飛んで行つたりすると云ふ樣なことが主で、正確に云へば株式募集係であつた。

事務所へ時々見えたのが谷口、半田の兩氏であつた。その當時工業クラブで月に二、三回位發起人集會をやつたが、最後の頃は殆んど二日置位であつた。

何故こんなに忙しい思をしてやつたかと云ふと、十二月三十日で、工事施行認可申請期間が切れるのだ。而も二十八日が御用終ひだし又登記をするのにはどんなに急いでも十日間かかるといふ、さうすると、どうしても十二月の上旬には總會を開かなければならない。然るにこの仕事にかゝつたのが九月も末の事で、わずかに一ケ月か二ケ月の間に解決をつけなければならない。

大正十四年頃の東京附近の電鐵と云ふものは赤字と云ふ譯ではないけれども繁昌はしてゐなかつたから、株主募集の時には新聞廣告其の他をうんとやつた。處が宣傳がきいて非常に申込が集まつてしまつた。遂にはその振當てに困つて賛成人に引受株數を減らして呉れと云

ふても應じて呉れない、しかたがないから一般應募者の申込株數を減らして割り當てることとし、三百株位の申込は十株位に減らしてしまつた。かりに六百株のものは二十株、千株は三十株と云ふ風に減らして、どうやらおつつけてしまつた。

その總會の議長は根津さんであつた。その他谷口氏等の苦心の結果相當の顔ぶれがズラリと並んだが、その代表取締役の選擧になり互選の結果野村さんが社長になつた。

それから登記にかかつたがこれが期限までに登記が出來さうにない。それは僕等が慣れなかつたのでもあつたが、代書人が手早くやつてくれないのだ、それで、特別に金をやつてやつと間に合してもらつた。

それから、工事施行認可申請の圖書類の作成は現場を實測してゐては間に合はないから野村さんから池上重吉氏に特別に頼んだ。何しろ線路經過地は要塞地帶なので參謀本部の地圖は賣つて居ないし時日は切迫してゐるし池上氏も大に苦心して實地踏査やら設計やら連日連夜殆んど徹夜といふ非常な努力をして横濱三崎間二十八哩餘、鎌倉支線六哩餘、葉山支線十哩、合計四十四哩半の全線の線路圖やら設計圖やら工費豫算書、工事方法書等認可申請圖書類一切を一ヶ月半ばかりの間に、實測したと同じような完全なものを作り上げた。

それが出來ると神奈川縣廳へ持つて行つたが丁度二十八日のことで、御用仕舞で受付けないといふのを土木課に知つてる人が居たからその人に賴んでやつと受付てもらつた。これで工事施行認可の申請が期日に間に合つて失効をまぬかれたわけである」

かくして湘南電氣鐵道株式會社は、立派に出來上つた。從來の關係から野村先生を社長とし、半田貢氏を專務として工事に着手することになつた。

然るに、この線路は隧道が非常に多く又横濱市内高架線等の爲めに建設費は尨大なるものとなつた。

其の上營業成績は案外に不振で事業は缺損續であつた。かくして安田も其の株を賣りに出したので、京濱電車で之を引受け、一部は、東横で持つことになつた。

其の後望月軍四郎氏を會長とし野村先生は平取締役に殘り、半田貢氏は退きて生野團六氏が專務となり、京濱電鐵の軌間を湘南と同じに改築して車輛の直通が出來るやうにし又品川の終點を改築して省線と聯絡する等經營上大に努力されたので、營業成績が見直すやうになつて、面目が全然改まつた。

然し一面において湘南電鐵は横須賀の乘合自動車との競爭のため苦しんで居たのであるが

此の乘合自動車の路線を湘南電鐵へ買收合併するに至り、湘南電鐵の成績頓に好轉するに至つた。

一方に於て鐵道の補助金は增加するし、沿線の名所、杉田、富岡、金澤、横須賀、浦賀等は、都人士の訪づれるところとなるに加へて、軍需工業は隆盛となり、附近に新なる工場の建設せらるるあり、住宅組合も亦年と共に增加し、乘客も次第に增加の趨勢を辿り、環境の良好に赴くに從ひ、會社も亦はじめて四分の配當をなすに至つた。

之を二十餘年前はじめて此の線の免許を出願し、十數年にして漸く之が免許を得たる當時に比すれば眞に感慨無量なるものありと謂はざるを得ない。

現在京濱電氣鐵道會社と湘南電氣鐵道會社の社長たる生野團六氏は野村先生についてから語つた。

『私は、實は野村先生をあまりよく存じませんでしたが、一ツの疑問を持つて居りました。それは野村先生は勿論大先輩でありますから知つては居りましたが直接御指導を受けたり仕事をした事は殆んどありませんでした。野村先生と仕事の上で何か關係が出來たと云ふこと

はツーリストビューローの會長になられた時がはじめてゞありました。大正三、四年の事でしたがたしか平井博士の後でした。今からは二十六年も前で、野村先生はまだ五十餘歳の頃でした。已に圓熟されて居つた時です。

そのビューローは、創立間もない時分で私は色々の仕事をやつて居りました。其處は仕事の性質上一々會長に指圖を受けることは要らないのでした。其の前に千九百十年に野村先生が最後の御洋行の時、歸つて來られてから土木學會々長になられた時も多少交渉がありましたが、これもたいしたことではありませんでした。

それからずつと後、十年前私が會社にはじめて關係した時、野村先生が湘南鐵道の取締役會長をして居られました。私は其の一切の實務を見なければならない重役として行きました。まだ建設中でしたが、この時分にも野村先生は直接御自分で御指圖になると云ふ事ではありませんでした。

湘南電鐵も開業後經營困難で、三十餘圓拂ひ込んだ株が、只みたいになつて居る時も野村先生がおいでになつた譯です。

自分も隨分苦勞しました。

これ等の事實を綜合して私が種々感じて居る事は、私は一度も野村先生から叱られた事がありません。また大事な事でもお聞きにならないのです。「湘南の借金はどうなつてる」「營業成績はどうなつて居るか」とか「かうしたらいゝだらう」と云ふ樣な積極的なお指圖は絕對にありませんでした。野村先生の下に居りました私として指圖を受けたこともありませんし、突き進んだ質問と云ふか、小言を云ふ樣な意味の言葉を受けた事は一度もありません。

野村先生の爲人については皆さんと同樣に考へて居りましたが、色々な困難に遭遇しても普通の人ならば「あれはどうした」「あれはかうしたらいゝ」と云ふ事を言はれる場合にあつて、野村先生は決してそんな事は云はれない。

斯の如き事情なるため、私としては斷然先生に御迷惑をかけないと云ふ覺悟でやつて來ました。

私は前から、野村先生を只不思議な方だと思つて居りました。百人中の九十九人までは「どうなつてるか」と云ふ樣な事を云ふものだがと、それだけがどうしても解らなかつたのですが。

私は何時でも必ず自分の案を、自分で最善なりと思つたことを案にして持つて行くのです

が決して何も仰言る事はありませんでした。

只、一ツだけ前後を通じてあつた事は土木學會の事をやつて居りました時に、大體出來上つた手紙を持つて行きますと訂正の筆を入れられた事でした。私等がうそ字を書いて居ると默つて筆を入れられる。これはきつとやつて居られました。

私は支那の事などよく知りませんが支那ではよく大人先生と云ふ言葉を使つて居ります。野村先生を支那に持つて行つたらこの大人先生ぢやないかと思ひます。お若い時分からそんな風なのでどう云ふ事で御修養になつたのかと思つて居りましたが、これはやつぱり偉いお父さんと賢母の御兩親の御教育をお受けになつたので、若くしてすでにそんな風だつたのが圓熟されたと云ふことが解りました。」

第十三章　南武鐵道株式會社

一、野村社長就任まで

南武鐵道も亦、野村先生の力に依つて出來上つたものの一つである。これは、神奈川縣川崎市から立川町に至る本線と、尻手から濱川崎に至る支線とを合せて二十七哩の鐵道である。大正八年歐洲大戰の好況の餘波を受けて、各種の事業が勃興したころ、川崎から、稻城村大丸までの間を、はじめは地方沿線の有力家によつて目論まれたもので、當時は主として多摩川の砂利の運搬が目的であつた。

而して、大正九年一月に鐵道省の免許を得たものである。目的が砂利の搬出にあつたので最初は省線川崎驛との連絡などは問題にされず、多摩川の河岸に出る樣になつて居た。資本金は二百萬圓であつたが、中央の資本家が參加しないので、地方の有力家だけでは會社が出來ず、ゆき惱んだ結果、資本を百萬圓に減じて漸く會社が成立した有樣であつた。

當時川崎に於て活動してゐた大塚榮吉氏は早くもこの鐵道に着眼し、線路を立川まで延長

することを計畫し、其の免許を得た。これが震災の年の出來事であつた。而して大塚氏は七月に社長に就任した。

立川まで延長したために、青梅地方における石灰石を川崎に搬出するの便が開けたので、淺野總一郎氏がこの鐵道に乘り出すことになつた。而して六萬株の中、淺野セメント株式會社が三萬株以上を持つた。かくして第一回の拂込がすんだ時に彼の大震災に襲はれたのである。

當時本社は日本橋槇町の日米信託ビルに在つたが、勿論彼の大火災に遭つた。この震災の痛手のために南武鐵道の事業も一頓挫の姿であつたが、其のうち、京濱間の復興事業が目ざましい勢で進むにつれて、大正十三年春頃からこの會社の事業も其の立直しに着手し、淺野系からは、淺野泰治郎、金子喜代太、田中榮八郎、鈴木紋次郎氏等が、取締役又は監査役として入社することとなつた。其の後に至つて淺野良三氏も入社した。

かくして第二回の拂込を取り立てて仕事をすすめることにした。當時相談役顧問として鐵道界の三長老がこの鐵道に關係してゐた。渡邊嘉一、野村龍太郎、古川阪次郎の三氏である。古川氏は專務取締役秋山清氏の關係から、野村先生は社長大塚榮吉氏が大垣出身で野村先生と同郷であつたから夫々この會社の爲めに援助されるに至つたものである。

然るに、大正十四年七月、秋山清氏がある事情のため退職したので、鐵道省出身者として杉本義朗氏が共の後任として專務取締役に選任された。

當時會社は三百萬圓の資本で、三十萬圓の拂込金で仕事をやることになつて居た。また、用地の如きは、川崎登戸間の三分の一までは買收がすんで居た。

當初は蒸汽鐵道の計畫であつたが、杉本氏は之を電氣鐵道に改めると共に、未だ白紙の狀態であつた川崎の省線との連絡の問題を解決する必要のあることを痛感して、之が實現に着手した。この問題については野村先生も古川阪次郎氏も夫々盡力されるところが少くなかつた。

大正十四年八月に、大塚氏が社長を退き、遂に野村先生が社長に就任された。

そも〳〵大塚氏が社長を退くまでには、かなり複雜な事情があつた。大塚氏は前にも書いた通り大垣の出身であつて、獨力で工場を經營しまた政界にも志があつて、府會議員にもなつたことがある。この大塚氏は東京電氣の株を持ち、マツダ・ランプの株を持つてゐた關係上マツダ・ランプの監査役をしてゐた。

ところが南武鐵道の川崎驛乘入れの問題は、はしなくもこのマツダ・ランプとの間に込入

つた問題を惹起するに至つた。其れは川崎驛に乘り入れるには、どうしてもマツダの土地を讓受けなければならなかつたが、東京電氣の重役連は頑として之を承諾しなかつた。當時東京電氣は、社長はグリー、副社長はブルマンで、アメリカ人が全然實權を握つて居た。これ等の人は南武鐵道が乘入れるために自分達の土地を少しでも讓渡することを、頑として肯じなかつた。

杉本氏等は

『たとひ鐵道と接近して居ても側線がなければ何の役にも立たないではないか』

と鐵道家としての意見を述べてやるが彼等は

『共れは私共の主觀に何等の關係のないことです』

と云つて、南武の線が決定するまで側線の問題を押へられてゐても平氣で居る有樣であつた。これには杉本氏等も手こづつた。

『お百度參りと云ふ言葉がありますが私は事實五十度位は交渉に行きましたらう』

と杉本氏は云つて居る。而して外國人との交涉をすると、彼れ等は如何にも偏狹に自說を守つてゐる。一方野村先生などの奔走によつて、東京鐵道局は非常に好意をもつて、大井田

工務課長や、岸本運輸課長等が同情して、會社に話してくれるが、日本人の重役を說得して話がきまりかけても、結局、外國人のところへ行つてまた變更されて、其のために岸本氏等は何度面目を失つたか分らない程だつた。

最後に東京電氣側は

『單線の乘入れを承諾するが、將來改良計畫はしないと云ふ覺書を入れて貰ひたい』

とまで申出た。これは非常に無理な話である。天下の交通機關に將來の改良計畫をするなと云ふ條件が付けられるわけはない。事ここに至つて南武鐵道側においても最後の肚をきめて、土地收用法にかける決心をした。東京電氣、マツダ・ランプの方では專門家に調べて貰ひ、收用法を適用されると東京電氣、マツダ・ランプの方が敗れると云ふことが明かになつたので、南武鐵道に讓歩する形勢となつて來た。然るに、南武の社長の大塚氏は兼ねて、先方の監査役であつたので、中間において板挾みとなり、其の立場に苦しんだが、結局南武の社長を辭したのである。かくして同鄕の先輩として野村先生を推して後任の社長とした。

二、開通式の頃

昭和四年の十二月、立川までは開通したが、海岸線の方は其れよりおくれ、翌年の四月に開通の運びとなつた。そこで四月十九日西國立驛において盛大なる開通式が行はれた。

武藏野の櫻は一重は既に散り果てて、躑躅の花が咲き、八重櫻が咲き出さうとする、まさに鳥鳴き花咲く春の酣なる季節である。

當時の模樣を報じた新聞紙の記事によれば

『南武藏の大平野を橫斷して中央線と太平洋を結びつけ、貨客輸送上に新時代を畫した南武鐵道は、立川驛より川崎市の突端新濱川崎まで全線二十七マイル五分が去る十日全通し、貨客の輸送を開始して居るが、十九日午前十一時三十分これが祝賀會を西國立驛前廣場で擧行した。安達內相、江木鐵相、小泉遞相、中川東京府知事、山縣神奈川縣知事、春藤川崎市長、中島立川町長、其の他沿線各町村長、中小學校長、市參事會員、縣會議員、警視廳各部長、沿線警察署長、建設關係者、株主其の他來賓約一千五百名參列、

野村社長の挨拶について鐵道大臣、帝國鐵道協會長、中川鐵道同志會副會長、東京府知事、神奈川縣知事、春藤川崎市長、中島立川町長、白井神奈川縣會議員等の祝辭朗讀あり、十二時式を閉ぢ、祝宴に移り、立川、府中の藝者連の立川小唄や、元祿花見踊等の餘興に次いで

稻田村青年團員の多摩川音頭、あゆたか踊があつて、萬歳を三唱盛會裡に散會した。これより先朝日新聞社は其の式典を沿道市民と共に祝ふべく、立川飛行場よりサルムソンとメルクール號の二機を飛ばし、空中から祝意を表する準備を整へて居たので、山縣神奈川縣知事代理田邊土木部長、春藤川崎市長、横山助役、中島立川町長、保谷南武社員の五氏飛行場へ驅けつけ、メルクール號に便乘するや、酒井飛行士操縱で午前十時四十分爆音勇ましく出發、會場の上空で見事の旋回飛行を行ひ、會衆の歡呼に送られて南武鐵道の線路に沿つて川崎市に向ひ、海岸埋立地から鶴見に旋回し全通祝賀の宣傳ビラを散布し、川崎市の上空では三度旋回飛行を行ひ、十萬市民に敬意を表し、十一時半再び會場の上空へ姿を現はし、低空飛行を行ひ立川に歸着した。一方熊野飛行士はサルムソンを操縱して正十一時會場の上空に飛來すれば、會衆は小旗を打ふりながら萬歳を連呼して迎へる。やがてエンヂンのうなり物凄く下降するよと見れば地上僅かに尺餘の地點で鮮かに上昇し、三度妙技を振つたので、會衆は手に汗を握りながら唯感嘆の聲を放つのみ、かくて

「空中より南武鐵道開通式に祝意を表す」

と印刷した赤靑黃三色ビラがヒラ〳〵と會場中心に散らされ、歡呼の聲に送られて十五分

の後悠々立川へ歸つた』

とある。以て當時の盛況を察すべきである。

開通式場における野村先生の挨拶は次ぎの如きものである。

野村社長挨拶

今回當社幹線、川崎立川間、尻手濱川崎間及び其の支線を併せ二十七哩七分が竣功致しましたから從來一方ならざる御後援と御同情とを賜りました皆樣に對し其の御挨拶を兼ねて開通の御披露を致したいと存じ御案内申上げました處御多用中にも拘らず斯く多數の御來臨を得ましたことは當社の最も光榮とするところであります。

抑々當南武鐵道は當初多摩川砂利鐵道株式會社の名稱の下に大正九年一月敷設免許を得まして省線川崎驛附近に起り中原、高津、稻田の各町村を經て稻城大丸に至る延長十四哩四十鎖の蒸氣鐵道を敷設して多摩川產の砂利搬出をなすと共に沿道の旅客を輸送するを目的とする計畫でありました。

然るに其後間もなく本鐵道を中央線立川驛まで延長する計畫を立てたのであります。立川以奧の貨物で川崎方面に集散するものは石灰石を首として、其の數量非常に多くしかも此等

の貨物は輸送力の關係上概ね八王子を迂回し横濱線を經て川崎方面に到達したのでありまして之を直接立川から川崎に輸送する鐵道を敷設することは頗る有利の事業なるのみならず、東海道線と中央線とを連絡する捷路となり一般公衆の便益少からずと考へ、同年三月前述免許線の終點大丸より延長して、立川に至る線路及び府中町を起點として、國分寺に至る支線敷設を出願し、尙ほ社名を南武鐵道株式會社と改稱して大正十年五月設立を完了致しました。而してこの延長線は大正十三年二月に至り敷設免許を得たのであります。尙共の後に至り動力に電氣を併用して電車運轉をなすことに致し、更に昭和二年五月尻手より分岐して濱川崎に至る二哩五十鎖の敷設免許を得るに至り、川崎、鶴見の海岸に進出するの端緒を得ました。

然るに創立當時は大戰後の恐慌時代に當り資金の調達意の如くならず、事業の進捗上非常に不便なる狀況でありましたにも拘らず、鋭意之が促進に努力致しましたが、時偶々大正十二年の大震災に遭遇し、關係書類及測量圖面等全部烏有に歸し從つて工事着手遲延の止むなきに至つたのであります。共の後省線品川、鶴見間貨物線敷設の關係上、當社豫定線の一部は變更を餘儀なくされ、工事の着手期にも亦幾分影響するといふやうな事情もありましたが幸に大なる蹉跌もなく、此等免許區間は用地の買收完了するに從ひ、逐次工事を進め、昭和

二年三月川崎登戸間及矢向川崎間十一哩七分の開業を初めとして、工事竣工毎に其の部分を開業し、遂に今回尻手川崎間の竣功を以て、府中國分寺間の支線を除く外全部開通するに至りまして、一般交通機關として公衆の利用に供し、社會に奉仕することを得ましたのは、偏に關係官民各位の御同情によることと存じ、誠に感謝に堪へざる次第であります。

以上の如く

一、本鐵道は川崎と立川卽東海道と中央線とを連絡して直通旅客の便益を圖り、青梅五日市線對川崎方面出入貨物の輸送を圓滑にすること

二、從來比較的交通機關に惠まれざりし沿線の開發を圖ると共に土木建築工事に必需なる砂利を此地方より低廉に供給すること

三、東京より放射する各電車との連絡をとり、大東京の外輪たる交通機關の使命を全ふすること

四、近來長足の發展をなしつゝある川崎鶴見海岸一帶工業地域と京濱兩都との交通を完備すること

が其の主たる目的でありまして、尚近く開通せらるべき八王子高崎間の國有鐵道所謂八高

線とも連絡をなし、兩毛、信越地方と横濱との交通上の捷路ともなり得ることと考へます。
尙當鐵道の諸設備は勿論十分とは申兼ねますから今後漸次諸般の改善を施し、皆樣の御期待に背かざるやう努力致す覺悟でありますから、何卒將來一層御指導御後援の程をお願ひ致す次第であります。
又本日は式場其の他の準備共誠に不行屆勝でありまして、遠路御來臨を忝うした各位に對し恐縮に堪へざる處でありますが、其の補ひとして四邊に漲る武藏野の野趣を觀賞されて、盛春の一日の行樂を盡されんことを切望する次第であります。

三、杉本義朗氏の話

野村先生は南武鐵道の社長としても實に精勵であつて、また何事に對しても几帳面であつた。前の專務取締役杉本義朗氏は其の精勵ぶりについてかう語つた。
『野村先生は、私が何か報告にあがると其の後に屹度叮嚀な手紙を下さいました。そして仕事については關係者に依賴するなり、また其れに對する意見等を云つてよこされると云ふやり方でいかにも正確であるのには恐入つてゐます』

そも〳〵この鐵道には種々の難問題があつた。其の一つは鶴見操車場の問題である。川崎溝ノ口間において南武の路線が約三哩程其の用地に當つてゐた。そこで鐵道省から線路を迂回せよと云ふ交渉があつた。この問題に就ても野村先生は古川阪次郎氏と共に奔走し鐵道當局と交渉し結局半哩程迂回することとなつた。其のために南武の新線の用地は鐵道省に於て買收して南武に引渡したが、其れにしても工費も豫定より嵩みたる爲、鐵道省より三十二萬圓交附された。これ等は野村先生等の奔走の賜ものと云ふべきで、かくして其の工事も豫定通りに進捗することが出來た。

南武鐵道の多摩川の橋梁は、この鐵道としては大工事であつた。鐵道省より材料の拂下等についても野村先生の盡力によつて多大の便利があつた。立川驛の乘入れについても更に五日市鐵道との連絡についても野村先生の斡旋の力を無視することは出來ない。

また、海岸線については、省線の貨物線を使用しなければ南武としては非常なる不便である。其れ故に南武鐵道において用地を買收しそれへ鐵道省の線路を通し在來の省線を南武において使用することとしたが、これ等についても野村先生は熱心に奔走された。

野村先生が、よく文章の字句の末まで目を通されることは前にも書いたが、杉本氏に宛て

た澤山の書面のなかに次ぎの樣なのがある。

前略陳者、只今中川社員本期考課狀持參被致候拜見の上調印返送致し候處狀中、元動力として云々とあるを原動力ならんと注意致し欄外に調印致し置候處後にて考へ候て、以前に動力としての意味に有之候樣被存小生の誤解と氣付候果して右樣の意味に候はゞ元の字はなくても宜敷樣被存候も若しや他の重役も同所に調印被致候場合には元の字一字御省き被下候ては如何に候や何卒可然御取計被下度此段貴意を得申候草々頓首

一會社の社長が專務に宛てた「至急」と云ふ書面の內容が右の如きものであるといふことについては見方によつては之を一笑に附する人もあるかも知れない。しかし、先生が如何に物事を几帳面に考へ正確に處理して居られるかと云ふ點から見れば大に學ぶべきものがあると思はれるので、敢へてここにこの一文を載せた次第である。

また、野村先生が鐵道の經營について如何に熱心に考へて居られたかは次ぎの手紙でも之を窺ふことが出來やう。

(前略) 府中競馬場も愈々十一月八日竣工式擧行せらるる運と相成候引續き秋季競馬も同場にて擧行相成候事と存候就ては南武鐵道に於ても運轉回數の增加、車輛の準備は勿論、

省線、京濱電鐵線、東横線等の南武線との連絡を明示し關係線路の列車内又は各驛等にポスター廣告等にて大々的宣傳を爲し、又神奈川縣下の新聞等にも廣告掲載專ら乘客の吸集に御盡力被下候樣願度右等は現に御如才なく御準備被成候事とは存候へ共爲念申上候次第に御座候何れ近日會社に出頭種々相談申度と存候草々頓首

かく先生は社長として熱心に社務に當られたが、昭和九年十一月代表取締役を辭任し、取締役として今日に至られた。

四、府中競馬場問題等

南武鐵道の技師長として野村先生の下で働いた野崎信一郎氏は、野村先生の社長ぶりをかう話したことがある。

『野村先生の南武鐵道に於ける勢力と云ふものは實に素晴しいものでこの鐵道を建設するのにも、淺野、大川等の種々の財閥がはじめは對立の關係にあつて、重役會議にも色々問題が起つた。其の財閥の人達の立場が違ふだけに議論の紛糾する場合もあつたが、野村先生が「それがいゝでせう」

と一言入れると、言葉は尠いが結局先生の云ふ通りに物事が極つてしまひました。この有様を見て私達は今更の如く先生の信用と人格の絶大なる事に敬服致しました』

他の鐵道の大先輩の中には大に議論をする人があつて、會議の席上の議論は多いが、結局それが通らないことが多かつた。其の爲に、席上でむしろ默つて居られる野村先生の意見の方が通ると云ふ狀態であつた。

南武鐵道の川崎の驛から濱川崎驛に行く線路が出來上つたのは、殊に野村先生の力によるものが多い。この線路は野村先生の奔走と盡力によつて省線を讓り受けて、今尙これを使用してゐる。

南武鐵道に關聯して興味のある事は、現在の府中競馬場についての話である。野村先生はこの競馬場に南武鐵道を引き込んで旅客吸收の一策にしたいと云ふ事を考へられた。それで野崎氏が競馬場に關係する事になつた。であるから最初の競馬場の設計は全部野崎氏の手によつたもので、現在の府中の競馬場は久野節氏が其のあとをやつたものである。

そもそもこの競馬場の話の起つたのは大正九年頃の事である。目黑にあつた競馬場が、もともと土地を借りて經營して居つたので土地の持主はそれを住宅地とすると云ふことを云ひ

出した。さうして競馬場に對し地代の値上げを申込んだ。その結果土地を借りて置く譯にも行かず、其處で東京競馬クラブを作つて、府中に競馬場を選定した。南武鐵道としては自分の沿線にかう云ふものが出來ることは利益であるから、當時社長をして居られた野村先生も其の計畫に野崎氏の關係することを賛成されるに至つた譯である。其の結果、競馬場に近く南武の停車場を置くことが出來て横濱方面の人々がこの競馬場に行くのには必らず南武鐵道を利用する樣になつた。

其れには岡野昇氏が其の競馬クラブの重役大場某と云ふ人と親しかつたので岡野氏の橋渡しで野崎氏が設計することになつた。

野崎氏が其の現場を見ると敷地の地均しに土が多量に入用だけれども其の土採り場が近くに無いから南武鐵道の線路の傍にある山を買つて、其の土を持つてゆく計畫を立て南武鐵道の請負人に相談して豫めその山を買はして置いた。それで工事がはじまる時に其の請負人を推薦したところが競馬クラブの人は、野崎氏と其の請負人と何か結託があると邪推して其の請負人を排斥した。そんな譯で其の山の土を競馬場に持つて行くことは出來なかつたけれどもとにかく競馬場の近くに南武の停車場を作つたので、競馬のある時には一日に三、四千人

もの乗客を運ぶことが出來る樣になつた。

これ等も全く野村先生が上に居られて、よく部下を信用し、其の手腕を振はせたので出來たものである。

杉本義朗氏はこれ等を總括してから語つた。

『私が野村さんに對して非常に感じたのは、つまり人を信用されると云ふことで、人の云はれる事を何もかも信用される譯ではないけれども實に純眞な、ひがんで物を御覽にならず、そのまゝにとられると云ふことであります。

つまり野村さんは、惡い人が（所謂腕のあるといふ人が）瞞さうと思へばいくらでも利用され得る人であると思ひます。

吾々の樣な者でも或る場合には誤魔化さうとすれば出來ると思ひます。

唯、私共にはそれをやらうと思つてもそれが出來ないのです。

私はこの間八十年のお祝に、はじめて下手な詩を奉つたのですが「白髮童顏加清健」と云ふのですが童顏では足りなくて、童心だと思ひます。普通の人が七十歲、八十歲になるまで

昔の子供の様な純眞な心を持つて通されると云ふことは凡人の企て及ばないところで、どつちに轉んでも責任のない様な事にでも警戒心が強くなるものですが

「野村さんはあんなことしなければいゝのに」

と云ふ様なことも度々あります。けれども、結局野村さんが取入れられたことは結果はよくなります。

私はよく思ふのですが

見過卽知仁

と云ふことがありますが、それは野村さんの爲には全くあてはまつてゐると思ひます。かりに、御迷惑を蒙つたことがあつたとしても、(大變何ですが) たしかバイブルにも

「嬰兒の心にあらざれば天國に入るを得ず」

と云ふのがありますが、野村さんはキリスト教信者ではないでせうが、全く幼い時と同じ心を持つて居られる。その幼い時の心を持つて邪道に入らずにそれを通して終始された人であると思ひます。

結局、野村さんの様な人に使はれると誤魔かすことをしようと思へば出來るから正直なも

のには出來ないと云ふことで、獻身的に働くやうなことになつてしまふ。まあさう云つた譯です……』

第十四章　大湊興業會社

東北地方を振興することは、今日では國策の一つになつてゐるけれども、明治時代に於ては、只識者の間に於てその必要が叫ばれてゐる程度であつた。この點に早くも着眼したのが鈴木誠作であつた。この人は東北狂とも謂はれた人で、大湊興業を考へついたのも實にこの人であつた。そしてこの鈴木誠作は犬塚信太郎の岳父に當つて居つた。犬塚信太郎が滿鐵の理事として野村總裁時代に副總裁の伊藤大八と折合が惡く、その結果野村先生にも迷惑をかけたことは前に述べた通りである。

然るに不思議なもので、滿鐵を辭めた後犬塚信太郎が東北振興の問題について野村先生を煩はすことが一番適當であると考へて野村先生に懇請し、遂に大湊興業の社長に引き出すに至つたのである。思へば實に人事の配合程不思議なものはない。

鈴木誠作は、床次竹二郎、上泉德彌中將等と三人兄弟の杯を交した人で、上泉中將は年齡の點から一番兄分として扱はれてゐた。そんな關係で床次も上泉中將も、鈴木の東北振興の

仕事を援助した。然るに犬塚信太郎も亦大正七年に滿鐵をやめて內地に歸つて來てから、若手のチャキ〳〵として岳父鈴木の片腕としてその仕事を助けることゝなつた。

さう云ふ譯で床次も鈴木を野村先生に近づけることを盡力したので、野村先生が、この鈴木誠作と犬塚信太郎の關係してゐる大湊興業を助けることになつたのである。

然らばどう云ふ譯で東北振興を理想とする鈴木誠作が、大湊に着眼したかと云へば、上泉中將が大湊の司令官になつたことがある。その時鈴木が豫てから、東北を開發する爲には、橫濱や神戶にも匹敵すべきいゝ港を東北の爲めにこしらへなければいけないと云ふことを考へて居つた。然るに大概の港は海からすぐ山があつて平地がすくない爲に、廣い市街を造ることも出來ず、工場地を造ることも出來ない。さう云ふ條件を具へた港を東北に發見したいものであると云ふことを鈴木は上泉中將に依賴した。

すると上泉中將が色々研究してみたが、結局大湊以外にいゝ場處がないと云ふことになり、そのことを鈴木に報告すると、鈴木は自ら大湊を見に行き

『此處なる哉』

と手を打つて喜んだ相である。

地形については申分がない。あとは海軍が許して呉れさへすればいゝと云ふことになつたので、早速海軍の意向を聞いて見ると、これは許してもいゝと云ふ内議であることが解つた。そこで政府に大湊開港論を請願した。明治四十三年から、四年にかけての議會に建議案として此の問題を出した。

當時の政府の答辯は、商港を造り得るならば、海軍は開港場として許すと云ふことを言明した。これは當時の議事錄に載つてゐる。

かくして大正七年に大湊興業株式會社をこしらへることに決定した。この會社は又一面に於て大倉喜八郎に關係があつて、その賛成を得た。當時大倉も野村先生を社長に押すことに熱心に賛成してゐた相である。

大湊興業株式會社の創立は、大正七年六月のことであつて、野村先生は創立委員長から引きついて、其の社長に推された。當時の先生の社長ぶりについて加藤春三氏は

『あの頃會社の事務所は日比谷の、電氣倶樂部の附近にありましたが、野村社長は毎日几帳面に出勤されて社務を見られました。社長は申すまでもなく鐵道界の權威者であり、滿鐵の總裁までされて植民地の經營の經驗をもつて居られるので東北振興についても種々適

切な意見をお出しになつて、鈴木氏を扶けられました。會社としては時利あらず、あまり捗々しい仕事も出來て居りませんが、机上の計畫がすつかり出來たところへパニックが來たのですから如何とも致し方がなかつたのです』

と語つた。

また加藤氏は野村先生が第二回目に滿鐵に社長として行かれる當時の模樣を語つた。

『野村社長は大正八年四月上旬まで會社に居られて再び滿鐵にゆかれました。大正八年三月原内閣が組織されると、間もなく野村先生は原總理から呼ばれました

「加藤君行つてくる」

かう云つて野村社長が出てゆかれました。

社長が歸つて來られて

「原さんから滿鐵へまた行くやうにと云ふお話だつたがこの前のこともあり、自分も年をとつたしお斷りすることにきめて來た」

と云はれました。

ところがまた第二回目に原總理から呼ばれました。

「加藤また行つてくる」

社長はかう云つて行かれました。

第二回目には歸つて來られて、

「どうしてもお斷りした。今度は原さんにもよく分つたのでこれで私も安心だ」

社長はお斷りが出來て本當に悦んで居られました。ところが第三回、これは神武天皇祭の前後のことでしたが、第三回目に原總理から「是非來て貰ひたい」と呼ばれて社長は行かれました。

今度はかなり時間がかかつて歸つて來られましたが

「加藤君、原さんから是非なれと云はれてお斷りすることが出來なくなつた、止むを得ず私はお引受けすることにするからあとはよろしくたのむ」

と云はれました。これが普通の人の場合とまるで反對で「お斷りした」と云ふときは實に元氣で安心された樣子でしたが「お引受した」と云ふときは如何にも御迷惑相でしたので私は當時のことをよく記憶して居ります。』

かくして野村先生は滿鐵にゆかれたが、大湊興業としては初代の社長のことであるから、

先生を事實上の相談役として其の後引續き盡力を請ひ、滿鐵を退職されると正式に相談役に推薦し今日に至つて居る。

會社は、第一期の港內の浚渫埋立の工事を終り、三千噸の船は岸壁へ橫着けにすることも出來る樣になり、臨港線の鐵道も完成し船舶用の水道も敷設された。

また一面、大湊水電も大倉組の資本に依つて成立し大湊興業會社の姉妹會社として野村先生が社長に押されたが、これは昭和二年に縣に買收された。

また浚渫埋立の第一期工事が完成したので大湊冷藏會社が出來た。この會社についても野村先生は盡力されるところが少くなかつた。先生は日東製氷の社長を說得して其の協力を求められたので日魯漁業の堤淸六なども其のなかに加はつて會社が成立した。

また最近は大湊が我國における三大砂鐵鑛區の一つとして有名になり、石灰石や石炭等をも採掘せんとして居る時に、日本特殊鋼管株式會社が時勢のため、材料難よりここに着眼し大湊に工場を設けることを條件として新らしい會社が出來、大湊興業會社も國策の線に乘り頓に活氣を呈するに至つたが、ここにも野村先生の献身的な盡力を見逃すことは出來ない。

第十五章　家庭の人としての先生

一、野村先生の眞實なる姿

野村先生は、社會においても、家庭においても、全然變らぬ行き方をしてゐる人である。生地のままの純無垢の人である。

されば、家庭の先生を描くことはますく先生の生一本なることを明かにすることになら う。

殊に、ここに一言しておくことの必要なるは、この傳記編纂に方つても、先生の取られた態度が普通の人とはまるで異つてゐると云ふ點である。大概の人ならば、自己の長所とか得意なる方面の資料を出來るだけ供給し、自らも亦其の思ひ出話等を十分にするものであるが、野村先生の場合には全然違つてゐる。これが後世にのこるべき自身の傳記の資料を供給する話かと思はれる程アッサリとしたものであつて、しかも自ら進んで話されることもなく、資料蒐集についてはむしろ非常に苦心を要した程である。

この一事においても、先生の性格はよく現はれてゐる。また先生は僅かばかり話された資料についても、其れが正確に書かれてゐるか否かと云ふことには非常に關心を持たれて

『濃尾の地震の時に、自分は神戸の方に勤務して居て、尾の道に出張してゐたのをひき返して大垣へ行つたのだが、あの邊のことを間違ひなく書いてあるだらうか』

と池上重吉氏に話された相である。これを以て見ても、野村先生が記事の正確と云ふことには非常に注意されてゐることが分らう。然るに先生は敢へて己れを語らず、資料にして野村先生から供給されたものは極めて小部分である。

元來本書の如きは、故人の傳記を編纂する場合と全然趣きを異にしてゐるので、野村先生にしてもし己れを語られることを好まれるならば種々な回想談は傳記の外に、『蓑洲先生追懷錄』として一書をもなすべき筈である。明治維新前から今日まで八十年の生涯の追想は、個人としても公人としてもまさに數冊の書籍をなすに足る筈で、傳記の外に『一夕談』のみにても一本をなす分量はあるべきだと思はれるが、先生の場合には非常に分量が少いので、取材についてはずゐ分苦心を要するものがあつた。

だが、其れが野村先生の人格のしからしむるところであるから、其の僅少の資料を珠玉と

し、其の材料によつて先生の生活を描き出すことが筆者の責任であると考へる外はなかつた。

家庭における野村先生についても亦然り、普通の人を說く場合とは全然其の趣を異にしてゐる。其處には少しも絢爛たる部分がない。また華麗なる場面がない。人を驚かしたり、人を笑はせたり、人を直ちに感動させたりする樣なところは見られない。先生は全く精緻なる翠繪の南畫を見るが如き人格である。

靜かに長く眺むるに從つて眞の値打が分つて來る。而していつまでもいつまでも眺めてゐると、遂に其の眞實に打たれて思はず泪さへ出て來るのである。

されば野村先生の生涯は、波瀾曲折が多かつたとか、偉勳輝やかしきものがあるとか、さう云ふ外形的の描き方では到底現はすことが出來ないと思はれる。率直に云へば失敗もあつたかも知れない。また今少し蠻勇を發揮し、辣腕を振はれてもよいと思はれるところに、少しも其れらしきことがない。家庭生活においても亦同樣である。我等はここに何等の飾り氣なき虛飾なき人としての野村先生を見る。もしもつと世俗的の見方からすれば物足らぬ樣な點もあるかも知れないが、よく〳〵味つて見ると、ここに非凡なる、餘人と全然異つた野村先生の眞實さが現はれてゐると思ふ。さればここに令息駿吉、陸雄の兩氏、美惠子さん、壽

惠子さん等のお話の要領をあげておかう。

二、野村駿吉氏の話

父は何事も子供に干渉しませんでした。例へば學校を選ぶ時にも、又學校を卒業後職業を選ぶ時も希望等に少しも干渉しません。自分で決めるとそれに贊成して吳れる。學校の事についても成績の惡い時等はあつさりと

『少し勉强しなければいけない』

と云ふ樣な事を申しますが、いゝ時でもあんまり喜んでは吳れません。一體感情を外に現さない性質であります。從つて誰も怒られた記憶がありません。尤も、酒を飲んだ時だけはどうしても笑ひ顏が多くなります。

然し、子供の事は、やはり心配して居て吳れる事は事實であります。

弟が南米に居つた時など弟から來た手紙の如きは全部自分で整理して、其の手紙に一々返事を出すと云ふやり方で、非常に几帳面であります。

私は前後十七年間アメリカに居りました。先づ大正二年に行つて七年間居り、日本に歸つ

た時に母が亡くなりましたが、私がアメリカに滯在して居つた時も、父は弟が南米に居つた時の樣にして呉れたと思ひます。手紙も實によく書きます。これは家族の者に對してばかりではありません。自分の目下の人に對しても返事だけはチャンと自分で書いて出すと云ふのが父のやり方です。

私の記憶に殘つてゐるのは、公私の區別をはつきりつけると云ふ事で、昔から方々の方からお中元やお歳暮を戴いたりしても、それが仕事の關係のものである時は必ず鄭重に送り返す樣にして居りました。

又自分の藩主とか或は前に使はれてゐた先輩などに對しては、最後まで禮をあつくして尊敬の情を現して居りました。これは外に出た時ばかりではなく、家の中にあつてもチャンと尊敬の意を表して居つた事は子供にも見受けられました。

ひとり、かうした人達ばかりでなしに自分より若い人でも其の人が大臣と云ふ樣な榮職に就かれると、非常に尊敬の意を表して、たとへ陰であつても呼び捨てにせず、敬意を表するやり方でした。

又祖先の靈を供養する事も非常に氣をつけて居ります。私共の樣に若い者があまり几帳面

にやらないと、それにはかまはず自分だけはそれを實行して無言のうちに手本を見せてくれる樣にします。

それは父が育つときに嚴格な教育を受けたのと、又エンヂニヤーとしての教育を受けた爲であると思ひます。

父は寢るのも起きるのも食事も、色々の整理も自分で几帳面にしないと氣の濟まない性質であります。雜誌や新聞を孤兒院とか圖書館とかに送ることをやりました。趣味は割合に尠くて謠はかなり長く觀世流を學んで淸之の弟子で、碁は至つてザル碁で、親類や家の者を相手にやります。芝居や音樂は好まず、一體に酒が好きで

『自分は身體の具合の惡い時でも藥なんか要らない』

と云つて居りました。酒は日本酒、ウイスキー、葡萄酒、何でも飲みます。この頃は親孝行のつもりで父の相手をして一本位飲みますと御機嫌がいゝのでいたゞきます。

最近は餘程變つて、子供に非常にやさしくなり、又子供に賴ると云ふ樣な氣分が見えて來ました。

それまでは何となしに恐い、別に怒られた事はないが何處となしに恐いと云ふ氣がしまし

たが、近來は親しみを感じます。

一體私は中學から神戸の高商に行き、三井物産に入り又神戸に行き、更にアメリカに行つて、割合に父と暮した事がないので父に對して他の兄弟程傍に居らなかつたのでそれ程委しくは知つて居りません。

要するに朝は早く夜は遲く非常な勉強ぶりで、年始狀等も自分で一々書いて、先方から來たものも一々目を通して自分で返事を書くと云ふやり方で、腹の中はやさしいけれども面には出すことをしない性質であります。憤慨した事を見た事はありません。昔は大酒を飲んだ事もある樣ですけれど自分としては父が酒の爲にへべレケになつたりした醜態を見た事はありません。

近頃は笑ふ事が增へた樣です。

三、謹嚴なる先生と夫人

野村先生の六男陸雄氏は鎌倉に靜養中であるが、兄弟の中でも一番先生に多く接してゐる人である。其の話によると、先生の家庭における生活は實に禮節が嚴重であると云ふ。これ

は先生の先夫人の訓育の力も非常に與つてゐる。子供達はまづ毎朝兩親に

『お早やうございます』

と云ふことを敎へられ、また何かして貰ふと必らず

『有り難うございます』

と禮を云ふ樣にしつけられた。だから、自然な自由なやり方でなく、昔の侍の家庭の如く子供は父に對して畏敬すると云ふやり方であつた。

近來「庭訓の權威」が地に墜ちて居るとき、日本の家庭としては聞くも愉快なる家庭であると思ふ。

であるから、家庭における野村先生は、酒の御機嫌の時の外はあまり冗談を云つたり、子供達を相手にして戯れるなどと云ふことは全然ないと云つてよかつた。兄弟中で一番野村先生に接近し、最も可愛がられたと云ふ陸雄氏でさへ

『父の方からもつと軟く碎けてくれるといいと思ふことが度々ありますが、父は其の樣なことをしてくれません、だから役人としてはよいかも知れませんが家庭の父としてはすこし謹嚴にすぎたとでも申しませうか。

私の學生の頃父は夕食の後で機嫌の良い時などには、父の若い頃に鐵道の建設工事を監督してゐたとき、雨が續いて水が出て、腰まで水びたしになりながら現場監督をして苦しんだ事などを話してくれました。毎日水の中につかつてゐたので、腹をこわしたり、脚氣に罹つたりして、隨分辛いことがあつたさうですが、それでも我慢强く辛抱して勤めを果した事など話してくれました。

人間は精神力と云ふものが一番大切で少し位の病氣はこの精神力で癒つてしまふのだ、何事も精神力が源であるから若い頃には努めて苦勞をしなければいかんと修養の話を常に聞かされたものです。

父は一體寡言の方ですから默つて自分から實行して之を子供に見習はせるといふ方針でした。自分の身の廻りの事は總て自分で始末して女中などを使ふな、と云ふ様な事も常に自分から實行して子供に見習はせると云ふ風でした。又物事に非常に几帳面で苟も事をなげやりにするなどゝ云ふ事はありませんでした。手紙や、雜誌や、報告書なども、實に氣持のよい程よ、整理されます。手紙の返事など殊に几帳面で代筆などさせた事はありません。私など前にはよく手紙の書き方や、返事の出し方が遲いと小言を云はれたものです。

日頃役所の仕事にかまけて、家の事や子供の事は割合に母委せでした。私などに對してあまり口をきかぬ方でしたが、母が亡くなりまして後私が遠く南米に行つて種々苦勞をしてゐた時父から非常に心を配つた長い手紙を貰ひました。平素は寡言の父も實は心中私の事を非常に心配してゐてくれるのだと熟々父の有難さを感じました』

と云つてゐる。また野村先生の先夫人は、小原鐵心のお孫さんだけあつて、禮儀正しく、子女の敎育には實に嚴格であつた。

『母は父に對して絕對從順で、勝手なことなど云ひたることがなく、又全く父を尊敬して父の云ふことを遵奉してゐました』

先夫人は野村先生にまさるとも劣らぬ謹嚴な女性で

『兩親共謹嚴そのものでしたよ』

と陸雄氏は云ふ。先夫人は大正七年の二月、外出先の電車のなかで發病された。面疔で、鼻のところを指先でかいたところが急に寒氣がして、具合が惡くなつたので用事をやめて、其のまま林病院に往つて診てもらつた。ところが院長が、折惡しく不在、翌日曜日も不在であつたため外の醫師には臨機の處置をとることが出來ず、たうとう手おくれとなつたものら

しかつた。

當時池上重吉氏は見舞に詰めて居たが、林院長は二日二晩詰め切りで看護され、悲痛な面もちで

『發病後すぐに病院に來られたのでしたがこの病氣は實に面倒なやつで、一口に面疔といつてもその病菌の種類は四十九種もあつて夫々その質が違ふのです。それで注射の藥が病菌の種類に幸ひ適合すれば病勢を食ひ止めることが出來ますけれども豫めそれを知つて藥を加減することは出來ないのです。一體に顏面は營養に富んでゐますので病菌の勢ひが少しも衰へず心を痛めて居ります』

と云はれ、また

『他にどこと云つてお惡いところがないのですから非常に殘念です』

とも云はれて居た。

かくて、大正七年二月二十一日鐵子夫人遠逝せらる。享年五十一。

思へば夫人は十七歲にして野村先生に嫁し十人の子女を擧げてゐる。

幹　子

龍吉
駿吉
三吉
廉吉
信夫
陸雄
芳子
美惠子
壽惠子

さん達である。しかもこれ等の子供さん達を育てる頃は野村先生もさう豐かな生活ではなかつた。

『私共の幼稚園から小學校時代のお辨當はにぎり飯で、海苔を共れに卷いたのなどをよく母が自分でこしらへてくれました』

と陸雄氏は語つた。

『母は、また、自分のものはつめて、人にはよく物を與へました。特に養老院や孤兒院などには貯蓄したもののなかから努めて寄附をしました』

と云ふ。この點について

『古い包紙や荷造紐等は一々之を整理して一つ箱に入れてあり、私共に物を下さるときは必らず、其の紙やひもを使用されたのを拜見して感服されました。又「池上さんお歸りに何處へかお寄りですか」と御尋ねになられて「すぐ宅へ歸ります」と申上げるとキットお菓子なり果物なり何かしら包んで下さいました。嚴格の中にも實によく行屆いた奥様でした』

と池上氏は云つた。かく十人の子女を敎育しつゝ出世ざかりの野村先生に奉仕した鐵子夫人の心勞は察するに餘りあるものがある。

殊に夫人について感服させられるものは、其の里方小原家の人達に對する態度である。

『母は小原の子供が來ても少しも御馳走などは出しませんでした。いまの謙太郎男が中學生時代に兄弟揃つて遊びに來ましたが、いつもお惣菜だけで決して特別な御馳走をしなかつたやうです』と陸雄氏は語つた。

昔の侍氣質で、夫の家を家とし、里方のことを輕んずると云ふ精神がハッキリとしてゐる

ので、この夫人の態度には皆人が動かされたと云はれてゐる。殊に鐵子夫人は藤陰先生の未亡人鈴子刀自に事へ孝養をつくしたので、其の氣苦勞は一と通りではなかつた。鈴子刀自はこれまた氣丈な女性で野村先生のことを

『龍太郎、龍太郎』

とずつと後になつてまで呼んで居られた。而して鐵子夫人などにも

『お世話になりました』

などと挨拶をされたもので、實に几帳面な而して賢しいお姑さんであつた。其れだけに鐵子夫人としては心に油斷も出來なかつた譯である。

先生も亦鐵子夫人を尊敬して居られた。いつの頃か蓑州會で

『今度は先生是非奥さんもつれてお出で下さい』

と幹事役の池上氏が話したら

『いや前の方ならばつれて行つてもよいが、今のは昔の話もないから止めよう』

と云はれた。後の夫人は尾崎男の未亡人で、『龜久衞』と呼ばれた。石丸重美や杉浦宗三郎等が仲に入つて斡旋して話が纒つたものである。

先夫人は實によく野村先生に仕へられた。その事に就て陸維氏は次の様な事を云はれた。

『私の中學生の頃父は役所の用事や宴會などで夜分遲く歸つてくる事が時々ありましたが、母はいつも仕事をしたり、子供達の衣類の繕ひなどをして必ず父の歸るまで威儀を正しくして待つて居りまして、玄關まで必ず出迎へるといふ風でした。時には晝間の疲れで居眠りをしたりすることもありましたが、先に休むといふやうな事は一度もありませんでした。

又父が興に乘じて夜遲くまで謠をうたつてゐましたときも、必ず傍に端座して之を傾聽してゐるといふ風で實に今から考へると、よく父に奉仕した事を憶ひ出します』

家庭においての野村先生は要するに沈默寡言で一見氣むづかし相に見える。其れ故に周圍の人達もつい

『御用事がなければ失禮いたします』

と云つて長く話し込んでゆくと云ふことをしない。外へ出られたときも、家に在るときと大して變つたことはないが、其れでも外では先生は大に努力して居るのである。されば宴會等の席でも非常な努力をしてあとまで殘つて居られるので、家に歸つてからは敢へて努められぬために、子供さんや孫さんが行つても格別愛想も云はれぬのである。

先生は新聞、雑誌はよく目を通して居られる。鐵道の雜誌等もよく精讀されて、其の內容を熟知して居られることが多い。されば、先生自身としては退屈されることはないと云ふ。であるから先生は役所の仕事とか自分のやつてゐる仕事が趣味であつて、家族をつれて食事にゆくとか旅行をすると云ふ樣なことはされない。謠だけは少しやられて、これは

『先生一番如何ですか』

と云はれると

『いや』

とは云はれなかつた。

先生は、一日に一度は夕方に必ず庭に出て、盆栽を眺めたり、水をやつたり、鋏で枝を切つたりして頭の疲れを癒し、叉腹こなしの助けとされた。之なども先生の趣味の一つであらう。

要するに野村先生の過去の家庭生活は、いいこともあつたに相違ないが、心勞苦勞も多かつた。先生が長壽を保たれてゐる間に、ずゐ分多くの葬式も出された。家庭人としての野村先生は必らずしも幸福な人とのみ云ふことは出來ない。だが、一度貞淑なりし鐵子夫人のこ

とに想ひ及べば先生は其の配遇に人を得たものと云ふべく、また幸運なる人であつたとも云へる。

ここに陸雄氏のことを少し述べておかう。陸雄氏は一高の二部甲より農科に入り、學校を出ると志を抱いて南米ブラジルに行き農業を營んだ。しかもここで中農の生活を自らすることに決心し、蔬菜栽培を行つて相當經驗を經て後、柑橘園の經營を志し、種々研究して計畫を立てたが、ある事情のため之を中止し、果樹園を整理し、ブラジル國立試驗所で日本の養蠶のことなどを敎へ、コーヒー園にて働く等種々の經驗を積み昭和四年のころ一旦歸朝して、拓務省に入り結婚してから拓務省からまた南米へ出張した。

然るにサンパウロの領事館に在勤中健康を害し、昭和七年に歸朝し、爾來鎌倉にて靜養し、繪を書き、園藝を樂む等悠々自適の生活をしてゐたために近來健康も頓に囘復した。

『私は、もと〳〵繪がすきで、はじめは繪かきにならうと思ひましたが父が許し相もないので、繪に最も關係の近い建築を志しましたが大學に入るときに農科になつて仕舞つたのです』

と述懷した。

陸雄氏は、父思ひの心情を洩らして

『私の家内の三好の方でも九人の子供があり、しかも其れが一人男であとは皆女と云ふ賑やかな家庭ですが、この姉妹が集ると父母も一緒になつて遊び、どこかへつれ立つてゆく、一寸したところですが何か見物すると云ふ風で澤山の姉妹が一人も缺けないで揃つてゐる家庭を知つてゐるだけに、二度も母に先に逝かれた父を非常に氣の毒に思ひます。殊に近頃は公務もなく、あまり外に出ることもないので、定めし淋しいことだらうと思ふのです』

と告白してゐる。

兄弟の中で、駿吉氏は母方に似、亡くなつた龍吉氏は父君そつくりだつたと云はれてゐる。いまの新坂町に移轉されて間もなく、芳子さんがはしかで亡くなつた。これが新坂町においてのはじめての不幸であつた。

また美惠子さんは、兄弟中でも一番陽氣な性質であつたが五代家に嫁いで不幸にも主人公に先立たれ、其のまま緣家にあつて、老齡の舅、龍作氏に事へて孝養をつくされてゐる。

四、質素と几帳面

先生の一番末のお嬢さん壽惠子さんは赤星鐵馬氏の弟喜介氏に嫁いで居る。其の壽惠子夫人は語る。

『父は一言にして云へばよい父であります。私は一度も父から怒られた事はありません。五代の姉は時々父から怒られた事があつた樣です。

それは姉が十九の時、さうして私が十六の時に母が亡くなりました。其の爲に、姉はすぐに母の代りとして一家の事について働かなければならなかつた爲に、父との折衝もあつたし、用事の事もあつたし、さう云ふ譯で時々父から怒られた事があるらしいのです。

又一番上の兄なども學校の事で時々怒られた事があつた樣です。而し父は大きな聲をして人を怒る樣な事は決してありませんでした』

家庭に於ける野村先生は、やはり好々爺で、酒を飲むと御機嫌がよくなる。酒の肴にはめざしが一番いゝと云つて、自分で網の上にのせてめざしを燒きながら杯を口にすると云ふやり方である。又枝豆、そら豆と云ふ樣なものも好まれる。枝豆は其の季節のつゞく限り、た

えず食膳に上ると云ふ有様である。又以前には、よくすき燒を好まれた。家族全體ですき燒を食べられた事が多かつた。がこの頃は多少變つたと云はれて居る。

或時、池上重吉氏が一緒にお宅で食事をした時に瀨戸物の中に、四角な黄色い、小さく刻んだ物を入れて酒の肴にして居られた。よく見るとそれはチーズの細かに刻んだものであつた。

『さう云ふものが、酒の肴になりますか』

と池上氏が聞くと

『これは仲々いゝよ』

と笑つて答へられたと云ふ話である。

服裝はかまはない方で從つてあまり其の好みと云ふものは持つて居られない。而し乍ら其の性格から云つても、極めて几帳面で、何時もキチッとして居られる。

昔は能を見物されたりした。芝居はあまり見られないが曾我廼家の喜劇等は喜んで家族と見物される事があるが近頃はあまり行かれない。好きなものは何と云つても謠であつたらう。觀世流で、昔はお客をして謠の會を催されたこともあつた。けれども、それも近頃はあまり

されない。碁も好きだが、あまり上手と云ふほどではない。玄關に居る男等を相手にしてよく碁をうたれた。

滿洲に居られた時代には骨董品等特に古代の小形の佛像を集めて樂しみにして居られた。掛物は山水の繪が好きで、さうした種類のものをよく買つて來られた。

書は大層好きで、前には自身大きなものをよく書かれた。先生は顏眞卿、文徵明等の書を學ばれて非常に能筆だつたので諸方から揮毫を賴まれたりした。從つてよく熱心に書かれたものである。

要するに先生は喜怒哀樂を、あまり表に出さない。嬉しい事があつてもはしやぐ樣なことをされない。只酒を飲まれると少し賑やかになられる。先生の酒について池上重吉氏はかう語つた。

『野村さんは日本酒がお好きで盛んな頃は晩酌三合を召上られました。其の御酒とても例のキチヨウメンの性格で、追加請求などはなさらなかつた。さりとて飲みたいものは飲みたいので三合に不足があると苦情を云はれたやうです。以前用ひられたのは二合入りの九谷燒の德利で、それに一本半で三合になる。ところが此の半が屢々問題の種となりました。奧樣は半

分入れたといはれるし、野村さんは召上つてみて少し足りないと「今晩のはどうも半分より少なかつたやうだ」と云はれる。これこそホントの水かけ論で判定がつかないので、ツラツラ研究の結果、晩酌の徳利は二合入りの硝子徳利にされて其の徳利の一合目に赤い筋をつけ二本目は其の筋迄で丁度三合になるといふ至極公平な設備を採用されました。蓋しこんなことでも採り上げないと野村さんの御家庭では言ひ爭ひらしい種がない。而して此の徳利の改良で晩酌の量目での論爭は解消したが召上る御本人としては其の二本目の赤い筋が國境線程重大で非常に氣になる。其の筋から一分でも少い目だと非常に足りないやうに感じて又事實飲んだ酒の醉もヒッ込んで仕舞ふやうに感じられたさうです。又其の反對に二本目の一合入りが赤い筋から少しでも上に出てゐるとトテモ嬉しく感じられ陶然とされたさうです。それで二本目の一合入りに就いて赤い筋の存在が重大問題となり野村さんは二本目のときは十分其の量目を檢査されて少し餘分に入れてあれば默つてるし、少しでも少ないと奥樣に再檢査をお命じになられたやうです。始めの徳利の二合入りのときには多少のことは何ともいはれず二本日の赤い筋になると頗る嚴格になるのを奥樣はいつもニコ／＼笑ひながお相手して居られました。蓋し之れは酒飲心理で野村さんにしてやはり然りと思ふと面白いことだと思ひ

ます』

生活に對する總ての問題等については先生は實に我慢强い性格である。お嬢さん方も銘々家庭を持たれて、種々生活の苦勞をされてから

『やはり父の事を考へると氣の毒になる事があります。折角あれまでやつたのだから、もう少し自分のやり度い事をやつて、氣兼ねなしに生活を樂しんだらいいと思ふ位ですが、父はさう云ふ事は致しません』

と云はれる。

先生はまた、寒い著いをあまりいとはれず、夏にも必ず足袋をはかれ、そして冬もあまり寒がらなかつた。

旅行先でなど、隨行の人から

『先生寒くはありませんか』

と聞かれると、

『うん、寒い』

と云はれるけれども、自分から云はれる樣な事はめつたにない。其の位我慢の强い人であ

る。そこで最近家族の方々が

『せめて部屋に煉炭ストーブでも入れては……』

と相談したけれども、先生は仲々承知されない。其處で或時大勢で先生を訪ねて、其の賑やかな間に、とう〳〵取り付けてしまつた相である。こればかりはさすがの先生も反對が出來なかつたと云ふ有樣である。

だが近頃はお孫さん達が大勢お訪ねして先生の周圍を取りかこむと、非常に喜んで、お孫さん達の遊ぶ樣子を見乍らまねをすると云ふ樣なお祖父さまぶりを發揮し、家族の方々は、成るべく兄弟姉妹一緒に先生を慰める爲に實家を訪問されると云ふ樣に申し合せて、お孫さん達を連れて、其の祖父さまの處に、なるべく同時刻に集まると云ふ樣にして居られるさうである。

夏は、この二、三年箱根に行かれたり强羅の觀光ホテル等に滯在された事もある。又那波博士のすゝめによつて輕井澤に別莊をたてると云ふ樣な事も話があつたが、それも今はやられない。

要するに先生は出不精である。然し壽惠子さんの話によると、前には亡くなられたお母さ

んと壽惠子さんとがお伴をして先生と一緒によく日曜の朝から郊外散歩に行かれた事があつた。日曜には朝から訪問客がつめかけて來るので、それでは靜養にならないと云ふので郊外に出かけて行つて、途中で食事をして歸つて來られると云ふ事をよくやられたものである。そんな場合その散歩の場處は先生が自分で選定して出かけて行かれた。先生は他に運動と云ふものをされなかつたので歩くと云ふことが唯一の運動であつた。而し其の歩くことも近頃はあまりされないさうである。例へば青山の齋場に行かれるのにも、前にはお宅から歩いて行かれたものであるが近頃はやはり車に乘られると云ふ。

近來、あまり身の廻りの物が古くなつたので令息が外套のいゝ材料等を先生に屆けてあげても、仲々先生はそれを外套に縫ひ上げて着用されなかつた相である。

五、戸田直溫氏の話

現在奈良電鐵の專務取締役である戸田直溫氏は野村先生の甥に當る。

戸田氏の話によれば、第一に野村先生の名前の龍太郎は、父藤陰先生の名前が龍之介であ

る處から長男を龍太郎として、その「龍」に對應させる爲に弟を虎次郎として、つまり「龍」と「虎」とを對照させたと云ふ。あとの兄弟の名前は別にさう云ふ理由はないけれども、長男と次男に龍と虎を配した處は藤陰先生の深き心が其處にひそんで居つたものと見られる。

野村先生が人に對して怒つたことのないと云ふことは總ての人の話にすでに明かなことである。

處が、先生の今日までに於て後にも先にもたつた一回人に小言を云つた光景を見て居つたことのある戸田氏がかく語つた。

『昔から叔父は無口で小言を云つたことがありません。だが、後にも先にもたつた一度あるのを知つてゐます。それはずつと前に家に居つた書生ですが、すでに故人となつて居りますので、あまり話したくはないのだが……』

と前置きをしてから

『その書生が、足が痛いとか何とか云ふ理由でずるけてゐました。鄕里から出て來たものだつたが、とかくなまけるのを平常から氣にさわつて居つたものと見えて、役所の出がけにこ

の書生を怒つて居りました。尤も怒ると云つても「馬鹿」とか云ふ樣な言葉を用ひたのではないけれども、とにかく本當にけしきばんでこゞとを言つて居つた樣です」

それが、野村先生が人に對して明らさまにこゞとを云つた唯一の例であると云つてもいゝらしい。

一冊の傳記を書くに當つて、其の主人公が人に對して怒つたことのないと云ふ樣な人のことを書くのは、丁度變化のない唱歌を歌ふ樣なものである。一回でもさうしたエピソードのある方が變化があると云ふので、これを唯一つの例として大切に取り扱つて、かくは大きく記錄をする譯であるが、とにかく先生が人に對して怒つたことのないと云ふ證據には充分なるであらう。

しかもこの事は丁度戶田氏が學生時代と云ふから今から三、四十年前の話である。野村先生もまだ血氣盛りの時のことであるから何か癇癖にさわつたことがあるとみえる。

戶田氏の話を綜合してみても先生は、人に對しては親切すぎる程親切で、どちらかと云へば氣の小さい方で

『あれは困る』

と云ふ様なことを云はれることはあるけれども、人に向つてあけすけに云ふ様なことは絶對にされなかつた。

六、恩賜の御菓子

宮中からお菓子を賜はつた時は必ず家人にこれを分ち與へた。

先生の夫人が逝去された時にも畏くも宮中から御下賜品があつた。先生はそれを謹んで家中の者に分ち與へられた。そして一家中が光榮に感激したものであるが、先生はさう云ふことには非常に氣がついて全部の人に其の幸福を分つと云ふことを始終考へて居られた。

第十六章　社會に於ける先生

一、戸田伯爵家と先生

戸田伯爵家と野村先生の一家とは藤陰先生時代からの關係で先代の氏共伯は特に其の關係を考へられて、大正五年先生を戸田家の協議員とされた。其れからは引きつゞいて伯爵家の主要事項の諮問にあづかつて居る。

當主氏直氏は氏共伯の令孫で當年十八歳學習院中等科に通學中である。

戸田家には家憲があつて、其の家憲の中には、戸田家の重大なる事柄は協議員が相談にあづかることになつてゐる。而してこの協議員の議決の結果が『否』と云ふことになれば戸田家の當主と雖も其の反對を押し切つて斷行すると云ふことは容易に出來ない。

其のために必らず數人の協議員が任命されてゐる。現在は、野村先生、井田盤楠、中島虎吉、佐藤三吉の四氏が協議員として、時々集り、相談の結果を申上げることになつて居る。

この協議員會の席上においても野村先生は議論されることは非常に少い。意見を吐かれる

様なことも少く、また强硬に主張されることもないが、其の德望と人格とは、自然上下の信望をあつめてゐる。殊に戸田家と野村先生の一家、戸田家と小原家との關係等によりて戸田家の野村先生に對する信賴は非常に深いものがあり、先代の時において既に野村先生は高齡の故を以て協議員を辭したいと云ふ意向を洩したが先代は藤陰先生の訓董を親しく受けられた關係もあるので

『是非ひき續き協議員として居て貰ひたい』

と云ふ希望があつたので、野村先生は其のまま協議員として現在に及んでゐる。

先生が舊藩主として戸田家を尊敬し、戸田家のために忠實に考へて居ることは眞に終始一貫してゐると云つてよい。されば、先生が自ら議論したり主張したりすることは少いが自然物事が動いて、忠實なる先生の精神が現はれることが多い。先生の如きが、眞に主家に忠なる人と云ふべきである。

殊に先代の薨去されたる後は當主は年齡未だ若く、母堂は三十歲前の女性の身を以て後見人たるの關係上、協議員の輔導の責任は一層重大なるものがある。

勿論戸田家には協議員會の外に親族會議があつて重大なることを決するけれども、協議員

會の說は種々の意味において重きをなしてゐる。

二、蓑洲會

先生を中心として『蓑洲會』と云ふ親睦を主とする會合がある。この會の出來た動機はかうである。

安藤又三郎氏が滿鐵理事の職を辭して、東京目白文化村に新邸を營み移轉されたのは昭和二年のことであつた。其の翌年十一月のころ久しぶりで東京に落ちつくことになつたので、往年鐵道へ就職のときからお世話になつた關係で、野村先生を招待することを思ひ立ち同鄕の那波光雄博士、松田貞治郎氏を相客として、極めて家庭的の會合を催された。沈默寡言の先生もかうした會合は非常に好まれるところであつて、くつろいで主客共半日愉快に且つ談じ且つ食した。

其の時安藤氏が

『野村先生のお世話になつた人は實に澤山居る筈ですがどうでせう其の連中が一つ會をつくり、あなたに時々來ていただいてお話を承ると云ふことにしては……』

と云つた。

『其れはいいね、其れは結構な思ひ付ですね』

まづ那波博士が非常に賛成した。そこで

『先生どうですこの考は……』

と野村先生にきくと野村先生も

『それはいいね』

と言葉は簡單であつたが先生としても非常に愉快らしい樣であつた。そこで一つ會をこしらへ樣と云ふことになつた。だが野村先生は

『いつも呼ばれて御馳走にばかりなるのは心苦しいね』

と云ふことであつたので

『其れではあなたも會費をお出しになればよいではありませんか、さうすればあなたがお禮に招き返すと云ふ心配も要らないし、要するに本當に氣心の分つたものが何も心配なしで集まつてあなたを中心としてくつろぎたいのですから、あなたに御心配をかけることは本意ではありません、ではあなたも會費を其の度毎にお出し下さい』

から云ふことから出來上つたのが先生を中心とする『蓑洲會』である。

この會名は先生の雅號の蓑洲を採つたので蓑州は先生の生國美濃から生れた。

この蓑洲會についても、ある時幹事役の池上君が案内狀を出すとき『簑洲會』として出したことがあつた。すると後になつて

『いや御苦勞だつた、だが、あの簑洲の簑の字は竹冠は俗字で草冠の蓑が本當だよ』

と云はれたことがある。先生はしば〳〵書いた樣に文字は實に几帳面であつた。

かくして蓑洲會は出來上つた。よく政治家などに何々後援會と云ふのがあるがこれはさうした會とは全然趣を異にしてゐる。野村先生を中心とし先生から昔の話などをきくと云ふ外には何等の目的もないと云ふアッサリとしたしかも情味の濃やかな云はば趣味の會である。

この會は第一回を芝公園の紅葉館で催したが其れから折にふれて隨所で催される。

鐵道出身の大先輩も相當にあるが、かかる會を持つてゐる人はわが野村先生一人と云つてよからう。ここに野村先生の人德が輝いてゐる。

野村先生も

『蓑洲會だけは愉快だ』

と云つて喜んで出席される。近來

『どうも會へゆくのが億劫だ』

と云はれるがこの會だけは氣に入つて、特別に早く出かけて、おそくまで例の如く端然として杯をあげて居られる。

蓑洲會は那波光雄、池上重吉兩氏を常任幹事として毎年交代にて當番幹事を定め昭和五年四月第一回の會合以來今日迄に十二回の會合を重ねてゐる。その會員は次ぎの通りである。

蓑州會

野村龍太郎	赤坂區新坂町三五	赤坂三九七〇

會員（イロハ順）

井上昱太郎	杉並區上高井戸三ノ六四三	
生駒　勇	品川區五反田町六ノ一九一	大崎三二九一
稲垣兵太郎	大森區池上德持町九一五	大森八四五六
池上重吉	芝區高輪南町五三	高輪　一一三
石川　鼎	世田谷區北澤二ノ二五	世田谷三〇八八

馬場豐藏	浦和市常盤町四ノ四〇	浦和二八三五
八田嘉明	本郷區駒込上富士前町七三	大塚五四五〇
橋本敬之	兵庫縣川邊郡伊丹町緑ヶ丘	
丹羽武朝	中野區新井町五八〇	中野四九一〇
新元鹿之助	世田谷區深澤町四ノ一七三三	
戸田直溫	京都市左京區下鴨宮崎町一五二	上　四七七四
遠武勇熊	目黒區洗足一四三九	
富永謙治	市外北多摩郡小金井村小金井三九九	
種田虎雄	兵庫縣川邊郡小濱村川西字坂戸二三	寶塚　四一
大田峰尾	大森區馬込町西四ノ三一一八	大森四三四九
大園榮三郎	品川區大井庚塚四九二八	大森三二三〇
大塚晃長	品川區大井金子町六一九六	大森五七二六
大河戸宗治	荏原區小山町五〇九	荏原三二九八
加藤勇	牛込區東五軒町三五	牛込一五〇四

加藤貞次郎	市川市八幡六九七	北八幡二〇七
鹿島精一	小石川區關口町二〇七	牛込六〇〇九
河原直文	四谷區內藤町一ノ六一	四谷 二〇九
田中正平	芝區高輪南町五三	高輪一二九二
谷口守雄	四谷區永住町二	四谷四六〇二
高味壽一	豐島區池袋二ノ八七九	
那波光雄	目黑區洗足一四七二	荏原五六〇八
中西鍊次郎	牛込區加賀町二ノ一	
中川正左	牛込區中町三三	牛込一〇二〇
中村謙一	中野區上ノ原町三〇	中野七二三五
中野深	澁谷區青葉町二一	青山七七六九
長屋脩	本郷區駒込神明町四五六	小石川一八二〇
村井二郎吉	澁谷區榮町通二ノ一三	青山六六〇二
鵜飼賢一	大森區田園調布二ノ八三八	田園調布二四六一

梅野　實	赤坂區新坂町二二	赤坂三九九〇
海野力太郎	澁谷區櫻丘町一四	
野崎信一郎	目黒區洗足一四六八	荏原二六〇〇
國澤新兵衛	澁谷區千駄ヶ谷一ノ五六二	青山一八三五
栗山虎次	澁谷區穏田一ノ一〇一	青山一四〇九
熊田鋭雄	大垣市歩行町七八五	
山田龜治	品川區上大崎長者丸二六九	高輪一六〇五
曲尾辰二郎	神戸市灘區弓ノ木町一ノ五	
松田貞治郎	麻布區本村町二二五	三田四五一〇
松永　工	世田谷區東玉川町二九	
藤根壽吉	靜岡市西草深町二五	靜岡　九四四
藤崎三郎	仙臺市北一番町三二ノ二五	仙臺三二八二
古川晴一	品川區上大崎中丸四四九	高輪一六八八
今野讓三郎	仙臺市米ヶ袋廣町二九	仙臺一八九一

遠藤藤吉	澁谷區代々木山谷町二八九	四谷二一三八
安藤又三郎	淀橋區下落合四ノ一七一二	大塚三九二三
愛甲勇吉	大森區馬込町西四丁目三一二一	大森五六〇九
青木勇	神奈川縣小田原町谷津四五五	
佐橋信一	横濱市鶴見區平安町一ノ一四三	
坂口榮禎	中野區野方町二ノ一三一四	中野四三七三
木下立安	荏原區戸越町一一七七	高輪二三二二
生野團六	中野區上町一	中野七四五八
白石多士良	麻布區飯倉四ノ二二	赤坂一二六四
島安次郎	芝區高輪南町四五	高輪 九七五
島崎直也	荏原區中延町一〇三二	荏原四一四三
杉廣三郎	北支天津滿鐵事務局	
杉本義朗	大森區馬込町東二ノ九四三ノ二	大森四五四四

以上現在會員六十名にして、この他に左記の通り物故者二十名あり、いづれも野村先生の

恩顧を受けた人々である。

井出繁三郎　伊藤常夫　伊地知壯熊　今井義和
西　大助　鳥越欽之助　大井田瑞足　大河内甲一
田中耕三　高石庫治　武　和三郎　武笠清太郎
矢野亮一　山本信要　佐武正一　佐久間謙吾
坂牛義任　鹽川敬吉　周田晋一　杉浦宗三郎

三、濃飛學寮

小石川茗荷谷一帶は土地高燥で閑靜なので各地方の學寮がかなり多くある。「濃飛學寮」も亦其の一つであつて高臺の住宅地内の道はうね〳〵して自動車の快走に適せず、電車の音も聞へぬので、學生諸君が落ついて思索し勉强するには最も適當な場所である。

この濃飛學寮の出來たのは大正六年のことで、昭和十一年十一月二十五日に二十周年の記念式を行ひ、其の時野村先生は二十年間理事長たりし故を以て表彰せられ、銀盃一組を贈られた。

抑もこの學寮は其のはじめ安藤又三郎氏、佐竹三吾氏等が、學生時代に傳通院の附近に寄宿舍を造つたのがはじめで、其の後財團法人となり、其の規模を擴張し、現在の場所に移轉し、野村先生が理事長に推された。勿論美濃、飛驒出身者中には種々の人材が居る。だが、野村先生の先考藤陰先生が塾を經營しまた藩學校の校長たりし緣故を尊重され、加ふるに野村先生の人格を慕ふ者が多いので、殊に野村先生が理事長に推されたのであつた。

先生は寮の經營の細かいことは一切理事に依賴し、之を信任して居られたが、しかし何か正式の事が行はれる場合には理事長として必ず出席して、若い同鄉の人達の中に入つて愉快に時をすごされた。二十年の久しき間變ることなく理事長たりし事は珍らしいと云つていい。また眞實先生は若い者の面倒を見られることが樂しみでありまた好きであつた。

現在理事として、寮生の監督指導に當られる關屋龍吉氏は大正九年に就任されたが、當時寮生の規律が亂れがちであつたので五十數名の寮生全部に退寮を命じ、其の內入寮嘆願者から優良と認められる二十餘名に再び入寮を許し大英斷を以て一人一室主義に改めた。この大改革の斷行も畢竟野村先生がよく關屋氏を信賴して居たから斷行することが出來たと云つても決して過言ではない。

關屋氏は佐竹氏が大阪市の市電局長に就任する關係から野村先生から特に推されて後任の理事となつた。關屋氏の先考も亦大垣において家塾を開いてゐた儒者で一柳元吉と云つた。關屋氏は別に一家を創設されたのである。

同じ儒者として、野村藤陰先生と一柳元吉とは親交があつた。野村先生が關屋龍吉氏にこの學寮の理事を依囑されたのは關屋氏が文部省の高官であつたためばかりではなくこの往年の先考の交友關係を追想されての事と思はれる。

元來この學寮は同鄕の青年が便宜上一つ所に居て勉强すると云ふ制度であるが、この改革の後にはよく纒つて何等の問題もおこさなかつた。殊に震災後は關屋氏はこの寮の脇に住宅を造り日夕青年を指導監督する樣にした。

この附近より大塚、竹早町のあたりにかけて、同鄕塾が數十あるが、近來アパートの異常なる發達によつて、皆其の打擊を受けたり、然らざる者は、何か騷動をおこしたりして居るが濃飛學寮だけは、入寮希望者も每年定員を越え、其の內容に於ても優秀なる成績をあげてゐる。

寮生は自然

『野村先生の名を恥かしむる様なことがあつては相すまぬ』

と自戒してゐる。

關屋理事は寮生についてから語つた。

『鄕里と云ふものは有り難いもので、同じ美濃と云つても、東と西とでは大變な違ひで、東は信州に近く、西は近江に近いのですが、やはり同鄕だと云ふので、田舍から出て來たものは田舍を忘れず、何か共通なものがあつて、仲よくして居ます。この學寮を中心として岐阜縣人の集る會を作りたいと思ひますが、これはどこでもあることで、縣人會が三つも四つもあつて、夫々雜誌を發行して居てなか〳〵合同が出來ません。

然し教育と云ふものは面白いもので此の寮を出た者について見ても、出た當座は一寸寄りつかない樣なものもありますが、年をとるに隨つて昔をなつかしがり、上京の度每にこを訪ねてくれる樣になります。ですから教育は長くかからねば駄目です。其の意味でも、野村先生が廿年間理事をして居られたことは實に尊いことだつたと思ひます』

現在滿洲國にゐる大橋忠一氏の如きはこの學寮の出身者で上京の際は必らずここを訪ねられる相である。

廿周年記年祭には、當時の文部大臣平生釟三郎氏も出席して、野村先生の人德をたたへ、同鄉の先輩、寮の先輩及寮生全部出席し非常に盛會であつた。殊に地方からわざ〳〵上京したものもあり、會の後に別室に同鄉の先哲の遺墨展覽會があり、多大の感動を與ふるところがあつた。また當日は物故者百八名の慰靈祭もあり、理事長野村先生の挨拶、謝恩の辭として寮友總代隈川八郎氏、寮生總代高野貞一氏感謝の詞を述べ、理事關屋龍吉氏の挨拶の後、平生文相の祝辭があつて會を閉ぢた。

四、養　成　社

野村先生が長年理事たり理事長たりし社團法人『養成社』は、戶田伯爵家内に事務所をおく奬學會である。

舊大垣藩有志者が協同醵金し、舊大垣藩士、舊大垣藩御領内及び御預り所の子弟の學奬を奬勵し、人材を養成するを以て目的とし、思想堅實、體格强健、學業優秀なる學生に學費を貸與して居る。

この會の創立は明治十八年のころであつて、明治三十三年七月社團法人となり、この時野

村先生は理事に推薦され。後理事長に推された。

はじめは舊藩士の子弟の補助に止つてゐたが、其の後範圍を廣めて、舊藩の御領内及び御預所の内の優秀なる子弟をも補助することになつた。

昭和十二年度の現在貸費生は二十七名であつて、東京帝大、京都帝大をはじめ各種の學校に在學してゐる。

本社の貸與した學資を返還した者は更に本社に奬學資金を寄附することになつてゐる。

五、岩倉鐵道學校

今でこそ鐵道學校も澤山あるけれども大正以前は鐵道學校と云へば岩倉鐵道學校の代名詞と云つていゝ位に只一つのものであつた。

その岩倉鐵道學校は日本鐵道株式會社の創立者であつた岩倉具視公のために日本鐵道株式會社から岩倉神社を建設すべく醵金したのに對して、岩倉家から神社を建設するよりも育英の事業に當てゝ貰ひたいと云ふことで岩倉鐵道學校が生れた。

岩倉鐵道學校は日本鐵道株式會社から用地を寄附されて、當時、下谷車坂町に木造二階建の堂々たる校舍が出來上り、生徒の數も千名を越える程であつた。

野村先生の岩倉鐵道學校々長ぶりについて鍋川德一氏は次ぎの如く語つた。

『野村先生が明治三十五年頃岩倉鐵道學校の校長をされて居つた時のことです。

三月の卒業式に際して

「諸君は鐵道に就職されたならば、馬車馬主義にわきめをふらずに邁進せよ」

と諭されました。其の當時の馬車馬と云ふのは東京市に未だ電車の出來ない頃でして、市中を二頭立ての馬車鐵道があり、その馬は線路の中に並んで走り、馬の目には線路以外に眼をふれない樣におほひがついて居りました。

其處で、馬車馬主義に、すべて鐵道以外のものを見ずに邁進せよと云ふことを云はれたのを記憶して居ります。

校長としての當時の印象は、先生は生徒監や其他の者が生徒に對する懲罰的の進言をする事があつても、決してそれに贊成されず

「學校は惡い青年をよくして出すのが本務であるから」

から生徒監を諭されて

「よくする事に苦心せよ、罰する事はいつでも出來る」

と云はれたと云ふことを伺つてゐます。

それから先生は比較的無愛想であつた。生徒に對しても教員に對しても只口を細くして笑ふ程度で、如何にも面白かつたと云ふ豪傑笑ひなどされた樣なことはありません」

六、鐵道院中央教習所

明治四十二年に鐵道院職員中央教習所が出來た。次いで大正五年に制度が改正されて鐵道院中央教習所と改稱され、後に鐵道省教習所となつた。而して、はじめての中央教習所長が野村先生であつた。

當時の教習所は全國から百名の生徒を募集して八ケ月間の教習を施すことになつてゐた。教育の主義は、後藤新平がまだ男爵であつて遞信大臣兼鐵道院總裁であつたときに、その教習所に臨席されて

『教育の一切は野村君に託して置くのだが、この鐵道の教育は要するに人である。一に人、

二に人、三に人である。人によつて鐵道が動くのだ』

と云ふことを話された。それにつゞいて野村所長は

『總裁の御趣旨によつて、將來本當の鐵道の中堅人物となるべき諸君は勉強して貰ひたい』

と云はれた。當時のことを追懷して鉛川德一氏は

『その時生徒達は野村所長に對しては、自分の祖父さんに對するやうな氣持で接して居りました』

と云つてゐる。

其の後或教員が新任されて教習所に來た。其の教員は橫暴であると云ふので、はじめから生徒の間に人望がなかつた。

然るに其の教員を更に支持する教員が一人現はれて來た。而してこれらの教員は生徒に對して壓迫的な態度をとつた爲めに血の氣の多い生徒は治らず、遂に、全部の生徒が辭職願を書いて時の生徒監松木幹一郞氏に宛てゝ提出せんとした。松木氏は驚いて、野村所長にこの事を報告すると同時に氏自ら陣頭に立つて說諭に務めた。

そこで多くの生徒ははじめて所長に非常に心配をかけたことに氣がつき、師・師たらずと

も、弟子もつて弟子たらざるべからず、の古語を引用して話された松木生徒監の人格に信頼してストライキの行動を中止した。

だが一時は、九十餘名の血氣熾の生徒が教習所の講堂に集まつて大に氣焔を擧げたものである。教習所はその頃帝國ホテル裏のアーチの中にあつた。

『嘗つて岩倉鐵道學校であれだけ恩顧を受けて居るので野村教習所長に御迷惑をかけては申譯がないと云ふことを感じたのです』

と鮎川君は當時の心境を語つた。

それから一番の大問題はこの善後策であるが、一部の高官連中は

『全部首を切つてしまへ』

と云ふ强硬論を主張するものもあつたが、野村所長は岩倉鐵道學校の時と同じく

『よくして出すのが教育の本旨で、殊に全國から選ばれて來てゐる百名の者を、そんなことをするのは本旨でない、やはり傷をつけずに名譽の卒業證書を與へよ』

と云ふにあつた。

教習所にかうした騷動のあつた年が過ぎて新年を迎へることになつた。

一月の四日に生徒全體を集めて所長から一場の訓話がある事になつた。教習所の生徒は皆時節柄の事ではあるし、きつと所長から激烈なる訓示があるものと思つて、かたずをのんで集まつた。

然るに野村先生は一向平生と變ることなく

『諸君、年のあらたまつたのと共に諸君もまた折角自重して大いに勉强して吳れ給へ』

と云ふ、あつさりした訓示をされた。

其處に集まつた血の氣の多い生徒達も全く感動させられたと云ふことである。

野村先生が教習所の第一回の所長であつた時に、第一回の卒業生が、卒業を前にして江の島鎌倉に行つた事がある。

三月の末の事であり、すでに山櫻が滿開であつた。

年は若いし教習所は卒業するし、連中は非常な元氣で江の島の岩本樓で飮み且つ歌つて盛な會をした。

其の時に、一番酒を飲んで亂暴な學生が勢に乘じて

『野村龍太郎の馬鹿野郎』

と大聲で叫んだ。これは別に所長に惡意を持つて居つた譯でも何でもない。只大言壯語して先輩や上長に對して呼び捨てにしたりすれば偉いものゝ樣に思つてやつた事である。

然るに、それを聞かれてか聞かれなかつてか野村先生は

『一體あれは何者か』

と云ふ樣なことをさへも聞かれずに平氣で杯を擧げてチビリ〳〵飲んで居られた。

この有樣を見た、龜川德一氏や東武鐵道の長瀨與二郎氏等は實に驚歎して先生の寬大なる人德に今更の如くに敬服した。

それから二十數年も經つてゐる今日でも兩氏は當時を思ひ出して感服してゐる。

七、東亞鐵道硏究會

野村先生の關係されたる事業の中に東亞鐵道硏究會がある。

東亞鐵道硏究會は明治三十八年一月に創立されて居る。當時日露戰爭のあとをうけて世界

の大勢が東亞に對する認識の深められた時節であつて、一日も早く亞細亞の樞要の地に鐵道を敷設して、運輸交通の便をはかる事を以つて最大の急務であるとした。

其處で吾國に於てもこの方面の先覺者が集まつて『東亞鐵道研究會』を組織してその目的の爲に適當なる手段を講ずることになつた。

明治三十八年の十月二十五日に帝國鐵道協會に於て、發起人として原口要、畑精吉郎、小川資源、大屋權平、渡邊嘉一、笠井愛次郎、圖師民嘉、楊井清八、古市公威及び野村先生の諸氏が出席した。

外務、遞信兩大臣に提出する具申案の要旨及この會の規約を可決し役員の選擧をした。野村先生も其の時理事に選ばれた一人であつた。

當時同會の理事としては野村先生の他に原口要、圖師民嘉、平井晴二郎、渡邊嘉一、小川資源の諸氏があつた。

同會は個人及各鐵道會社等の寄附金を得て着々と目的に向つて進むことが出來た。

殊に清國大官の來遊を機として招待會を開き、勉めて彼我の意志疏通を圖り、鐵道交通を通じて日清兩國の親善に盡すことが多かつた。

又其の間に於て事業經營上、清國の内情をつまびらかにする爲に委員を彼の地に派遣した事も屢々あつた。

この會はかくして幾多の貢献の歷史をのこして、先頃、帝國鐵道協會に合併することになつた。

八、帝國鐵道協會

野村先生の關係された社會的方面の一に帝國鐵道協會を語る必要がある。

帝國鐵道協會は鐵道界の先覺者であつた松本莊一郎、平井晴二郎、仙石貢、渡邊嘉一、笠井愛次郎、久野知義等の發案、協議の結果、東京市京橋區西紺屋町の地學協會に於て第一回の總會を開き、其の設立を見たものであつて、野村先生は當時擧げられたる二十七人の評議員の中の一人として同會の創立及び其後の發展に多大の力を盡されて居る。

鐵道協會は明治三十二年の一月に時の陸軍大將川上操六を會長として、當時大阪に存在したる大阪鐵道協會を合併し、更に大阪には支會を置く事として、明治三十四年七月に東京市京橋區日吉町十二番地に事務所を置いた。

野村先生が鐵道協會の會長に擧げられたのは大正十年のことであつた。六月二十六日の理事會に於て滿場一致を以つて野村先生を會長に推薦した。

この月にアメリカのペンシルベニヤの鐵道會社の副社長ターナー氏が來朝した。鐵道協會に於ては同氏を歡迎する爲に晩餐會を催した。

野村先生は云ふまでもなく其の會長としてメインテーブルに着いて一場の挨拶をこゝろみられた。

又其の年の九月に東京市の高速鐵道速成調査委員會を開いて谷口守雄氏他七名が其の委員となつてこれが調査を開始した。蓋しこの頃は關東地方大震災の直前であつた。東京市内の交通としては東京市電の路面電車が其の唯一のものであつたと云つてもいゝ時代である。從つて其の乘客の混雜は極點に達して、東京の交通を論ずるものは如何にしてこの交通の混雜を緩和するかと云ふことに苦心をして居つた有樣である。されば東京市内に高速度鐵道を設くる必要は洵に切迫した狀態であつた。この點に關して鐵道協會が高速鐵道速成調査委員會を組織したことは洵に時機を得たるものであつて、野村先生は又會長として奔走することが多かつたものである。

又大正十二年一月には鐵道銀行の設立に就いて調査結了したるをもつて根津嘉一郎氏他六名を擧げて同月十一日を以つて内閣總理大臣、鐵道大臣、大藏大臣等にこれが建議を提出した。五月の九日には十二回の定時總會を滿洲大連市に於て開催した。先生は會長としてこの總會に出席をされた。

翌月、先生の任期が滿了したので渡邊嘉一氏が推されて先生の後をうけて會長となつた。會長の職をひかれて後も先生と協會との關係は益々密接となつた。

震災後、東京市電の軌間が問題になつたことがある。東京市電の四呎六吋をこの際四呎八吋半とすべしと云ふ案を鐵道協會から提出した。この調査會には野村先生も出席し、非常に熱心に改革論を主張され、自ら、數回、鐵道省、東京市等に行つて、當局者に其の必要を力說された。

不幸にしてこの問題は實現を見るに至らなかつたが、當時野村先生がこの說を主張されたことは見のがすことは出來ない。大正十四年の五月八日には評議員會の滿場一致によつて野村先生を鐵道協會の名譽會員に推薦した。

當時の鐵道協會の名譽會員と云へば西園寺公爵、後藤子爵、古市男爵、元田肇、仙石貢、

山之内一次、根津嘉一郎、笠井愛次郎と云ふが如き鐵道界に於ける一粒選りの名士であつたが野村先生もまた渡邊嘉一、古川阪次郎の兩氏と共に名譽會員に推薦されたのである。
爾來先生は鐵道協會の名譽會員として終始同協會の發展の爲に盡力されて其の功績が少くない。

鐵道協會の創立のころについて海野力太郎氏は次ぎの如く語つた。
『當時の鐵道協會と云ふものは、まるで近所に家のない原つぱの中に出來た樣なものである。隣の保險協會だけが出來て居つたが、向隣りの日石の建物は勿論なし、其の隣りの二十一號館もない。前の方の商工獎勵館もなく、全く原つぱの中に出來た樣なものである。さう云ふ譯で三菱ヶ原は相當にまだ草茫々たる處が澤山あつた。
それで一番はじめに内幸町の濠を埋めた跡にまだ建物が出來てないので、それならば坪九圓位で賣つて與れると云ふので、はじめは其處を買つて引き移らうと云ふ說もあつたが、三菱の方は土地ならば幾らでも貸してやると云ふ話が出た。其の爲に今の丸ノ内の方に引き移ることになつた。

三菱は幾らでも貸してやると云ふのであるが、やはり地代の關係から三百坪だけ借りることになつた。三菱は家を建てゝやるから、それに對して月賦で金は返せばいゝと云ふ事で契約を取り交して建てゝ貰つた。今の鐵道協會の前の方の建物がそれで、十八萬圓でそれが出來上つた。それは建物が十二萬圓、あとの飾り附等が六萬圓で出來上つた譯である。

然るに、いよ〳〵建物が出來上つて募金運動をやつてみると個人からも會社からも意外に早く金が集まつて三菱には年賦で金を返すと云ふ契約はしたが、またゝく間に金が集まつたので一年間で契約を止めて金は返すことが出來た。』

かう云ふ風に鐵道協會の基礎と云ふものが、早く出來上つたと云ふのは、全く鐵道の關係者が鐵道協會に對して深い理解を持つて助力を惜しまなかつた爲であるが、其の會の發起人となり、會の爲に働かれた野村博士、其の他の人の功勞と云ふものも忘れることが出來ない。

さて、いよ〳〵丸ノ内に引き移ると云ふ時に三菱の重立つた人に何か記念品を贈らうと云ふ議が起つたけれども末延、莊田と云ふ人達が

『向ふは商賣だ、何もやる必要はない』

と云ふ强硬な意見が出て、何等の記念品をも贈らずにしまつた。

かう云ふのが當時の空氣であつた。

九、先生と勅選

先生の如き功勞者に對して、誰しも思ふことは

『何故勅選議員になられなかつたか』

と云ふ問題である。半年か一年警保局長をやつた位の官歷でも勅選に推薦された者もあるのに、先生の如き閲歷、學識經驗の持主が何故に其の榮職につかれなかつたかと云ふことは一應研究しておく必要がある。

事實は眞に微妙なるチャンスの問題であつたと見る外はない。茲に消息通によつて語られた當時の模樣を記して、この疑問に答へることとしたい。

政友會から後に政友本黨に走り床次竹二郎と終始行動を共にした榊田清兵衛は地下鐵の建設に方つても、かくれたる同情者として非常な力のあつた人であるが、この榊田が

『野村君の如き人格者は、其の功勞から云つても早く貴族院議員にしなければいけない』

と云つて原敬に話し、かねてから野村先生に好意を持つて居る原敬も全く同意見で、其の決心をしたと云はれてゐる。

若し原首相にして、突然東京驛であゝいふことにならなかつたならば、野村先生は、當然勅選議員になつて居られた筈である。

然るに東京驛頭における凶變に依つて、大政友會の總裁として、平民宰相として、其の名を謳はれてゐた原敬が殪れたことは、野村先生のこの問題を永久に案件として葬つて仕舞ふことになつたのは洵に遺憾千萬な次第である。

第十七章　野村先生と後進

一、部下を引立てる工夫

野村先生が部下や其他の人々に非常に親切であることはしば〳〵書いた。

島安次郎氏もまた其の事についてから話された。

『野村さんは仕事のことについては別に指圖がましい事はされない。只、公文書や報告書等の文字が間違つてゐるとそれだけは實によく訂正される。多くの技術官は皆其の文字や文章では教へられたものである。違つてゐると

「それは違つてゐる」

と氣のつかない様に直して異れられる。同時に又部下の書いた報告書等は實によく目を通して其の急所々々をつかんで其の報告書を活用する様に策を講じて下さる。

鐵道局時代に部下の人達が私設鐵道を見學して報告書を出した時も間違つた字や文章を訂正して、そして其の書類を局長だの次官等に必らず、目にふれる様に特に其の書類を取り扱

はれて部下の面目を立て其の手柄になる様にして與れられる。つまりかうして部下を引き立てる事を考へて居られるのです』

と云ふ話をした事がある。又社交上の禮儀等も注意して敎へられた。

『例へば新しい仕事に轉任した樣な場合には、第一に次官の處に名刺を持つて挨拶に行つて來いとか、又は敍位授勳の際は宮中にお禮に參內する事など、細かに注意を與へられる。つまり野村先生と云ふ人は自己表現を好まない、又自分の手柄などを吹聽することを好まない、普通の人ならば、當然自分の手柄として差支ないものでも野村先生は共れを自分では手柄とされない。實に謙抑そのものと云つてもよい人であるが、部下に對してはさう云ふ細かい心づかひをされる。であるから受ける方では長い間共の好意を身にしみて感謝すると云ふ心持になるのです』

二、凡て實質本位

野村先生が後進の者を指導敎育される場合には、非常に實質本位で生活する事を奬勵され、うはすべりのした社交的なことはよくないと云つて戒しめて居られた。

前にも書いた樣に、禮儀はキチンとする樣に敎へられたが、單なる社交的の事は絶對にすべきものでないと云ふ風に敎へられた。

であるから指導方法も非常に嚴格で、自分の息のかゝつてゐる人物であるからと云つて特別に待遇をよくすると云ふ樣な一時的の方便を使はれる樣なことは絶對なかつた。

殊に建設時代からの技術家のなかには英雄豪傑型の親分とも云ふべき人が居たが野村先生は其れ等の人とは全然ゆき方を異にして居た。であるから親分子分と云ふ關係でなしに、本當に先生として其の人徳に敬服して近づいて行く人が多かつたのである。

三、部下の思ひやり

野村先生は謹嚴身を持して居られるが一面に人に對しては非常に思ひやりが深く殊に後進者に對しては寛大である。

嘗つて××××氏が野村先生に隨行して關西地方に行つて、ある旅館に着いたとき、野村先生は××氏に

『君達は若いのだから何も宿屋にばかりゐなくてもよい。勝手に遊びに行つて來給へ』

と云つた。其れで××氏も羽根をのばして遊びに出ることが出來た。何しろ先生からのお許しが出たと云ふので

『いや大ビラ切つて行つて來たよ』

と友人達に話した相である。野村先生は無口だと云はれてゐるがこんな細いところにまで氣をくばつて、若い者の氣心をチャンと知つて居るのである。

四、先生と陳情者

池上重吉氏の話にから云ふのがある。

『鐵道院で大淘汰のあつた當時或る日御宅へ伺つたとき來客で長い間待たされました。其の客は

「自分の子供が鐵道學校を卒業して鐵道に勤めて居たが今度クビになつた。伜は貴方が校長をして居られた鐵道學校を出たのです。夫れに貴方は鐵道のいゝ地位に居られるのにどうして伜を首にした」

と長い間繰返して云つて居たとのことでした。

「さう云ふ話はいゝかげんに聞いてをかないときりがありませんよ」

と申しますと

「自分には小さな問題だけれども陳情して居る親の身になれば重大事件なんだからこちらも愼重にその苦情を聽いた。

此の頃からういふ陳情客が多いので毎朝食事も滿足にとれず茹で玉子にお茶を飲む位で急いで出勤することも屢々ある」

と云はれました。

先方の身になつて陳情を聽くといふことは仲々できないことで、洵に行き屆いたことをされる珍らしい方だと感じました。』

五、先生と宴會

先生の酒ずきは各方面で書いた。强くはないが餘程好きである。

其のために宴會に行つても殿であり『長つ尻り』と云はれてゐる。時には先生をおいて皆逃げる樣に歸る者もあるが、先生はおかまひなしでチビリチビリやると云ふ風であつた。而

していつになつても膝もくづさないと云ふ端然たる有様である。

『野村さん歸ればよいがな』

中には野村先生に居られては氣がつまると云ふのでかうしたことを云ふものも宴會のすみにはある位だと云ふ。

安藤又三郎氏は

『先生の宴會は長い。少し長すぎる位でした。だが、この頃は會に出るのは億劫だと云はれる樣になりました』

と語つた。

六、酒と役所

中川正左氏が嘗つて蓑州會の會合の席上において『酒と役所』と云ふ題で三つの物語をしたことがあつた。其の中の二つは野村先生に關係があり、一つは直接には關係がないが、やはり野村先生の先輩の話であるので、全部ここへのせておく。

第一の話

明治三十八年の七月十何日かに中川氏は法科大學卒業生として、鐵道局へ入つた。當時赤門出の法學士と云へば内務省、大藏省等へは入るが、鐵道局へ入ると云ふのは珍らしいことであつた。さて十二月が來た。皆が暮のボーナスを貰ふといふことになつた。だが、七月に入つたばかりの中川氏にボーナスの出る筈はなかつた。殊に中川氏は七月に就職すると間もなく長い間休みをとつて文官試驗を受けたのでいよ〳〵ボーナスの出る譯はなかつた。

ところが中川氏の室に居た古參の屬官に河合と云ふ人がゐた。當時一級俸であつたから屬官では威張つたもので、しかも大の左黨であつた。一升壜を役所の事務室へ持ち込んで飮む程であるから其の酒豪ぶりも想像が出來やう。其の人が中川氏に

『君辭令が出るから課長の室へ行つて來給へ』

と云つた。少し變だとは思つたが古くからゐる人の云ふことではあるし、ノコ〳〵と二階の課長室へ出かけて行つた。中川氏は營業課兼庶務課勤務であり、野村先生は營業課兼技術課長心得と云ふ役であつた。當時野村先生は既に勅任官であつたので心得と云ふことになつて居た。遞信省が燒けないころであつた。課長室のドーアをノックして野村課長のところへ行くと、中川氏に渡す辭令などあるべき筈はなかつた。

野村先生も何のために中川氏が入つて來たのか一寸理由がわからなかつたので妙な顏をして居た。

『何かお呼びになりましたか』

『いや――別によばないよ』

氣がつかないので野村先生はかう云つた。中川氏は實にキマリが惡く、間の惡い思ひをしながら再び大きな階段を自分の室へ降りて來た。

『あんなキマリの惡い思ひをしたことがない。殊に相手が謹嚴な野村さんのことだけに一層具合が惡かつたが、これも河合属の酒のための出來事です』

と云ふのだ。

第二話

野村先生が技監か副總裁時代のことである。杉文三と云ふ技師がゐた。これは杉と云ふ統計學者がゐたが其の人の子で、これも有名な酒傑であつた。

朝からウヰスキーなどを飮んで居た。其の日も朝來酒氣を帶びてプン〳〵匂つて居た。處がベルで野村さんの室へ呼ばれた。其處へ中川氏も行き合はせて居た。

杉君は酒の匂が野村さんにわかるといけないと警戒してなるべく遠方にゐたが、何しろ技術家のことなので

『君この圖面はどうなつて居るのかね』

と云はれたので、杉君ます〳〵立場に困り、勸進帳の辨慶よろしくと云ふ格好で圖面を持ち、なるべく顏が見えない様に、臭い呼吸が知れない様にして說明して居るので傍に見てゐる中川氏の方が却つて赤面して仕舞つたと云ふ。

第三話

省線の京濱間の電車が出來上つて、東京驛の開業と、この電車の開業が一緒に行はれたことがある。大正三年十二月廿日のことで、仙石貢が總裁で古川阪次郎氏が副總裁であつた。野村先生が滿鐵總裁として赴任されたので其の後に古川氏が副總裁となつたものである。

しかも其の日は神尾將軍が靑島から凱旋するのを迎へると云ふので大騷ぎであつた。これは品川から東京までうまくいつた。午前十時ごろ、この晴れの運轉だけは滯りなくすんだ。其れから午後は線路の試乘をするために來賓を乘せて電車を走らせたところが、其の電車が大森の手前あたりで、パンタグラフが外れて、工合が惡くなり、夕方までかかつても東京驛

に歸れず、機關車でひつぱつて來るなど散々の醜態であつた。
仙石氏は六時頃まで評議してゐたが
『どうも怪しからん。これは新聞でお詫びの廣告を出さなければいけない』
仙石氏はかう云つて居る。運輸局長は木下淑夫氏、文書主任は中川正左氏であつた。
『役所のことですから新聞にお詫び廣告にも及びますまい』
と云つたが、仙石氏はいつかな聽入れない
『役所だらうとお客を呼んでおいてあんなことになればお詫びをするのが當然だ』
と云ふので木下中川兩氏で文案をこしらへ大きな活字でお詫びの廣告を新聞に出した。
其れから關係技師十何人かを呼んで、事故の模樣や原因等について事情をきくことになつた。其の時は既に夜の八時ごろであつた。
中村次郎氏が秘書であつたが仙石氏は秘書に
『おい君、鰻丼をとつてくれ給へ、其れからあつかいかんを一本づゝ』
總裁の一言に中村氏は早速其の手配をした。いよ〳〵食事となると仙石氏の註文通りあつかいかんが一本づゝチヤンとつけてあつた。

だが、事故のために散々叱かられたので折角のおつかんも飲む人は少なかつた。詫び状の原稿を書いた中川氏が一番落ちついて飲んだ位のものだ相である。

それについて中川氏は

『何しろ十二月の二十日のことですから、夜に入れば役所の室は寒いので仙石さんは叱ることは叱つたが、また一本つけさせると云ふ溫情もあつたわけで、これが酒の效用の一つでせう』

と語つた。

歐米鐵道事業視察の報告書

小官曩ニ歐米鐵道事業視察ノ命ヲ奉シ先ツ米國ニ航シ夫ヨリ歐洲ニ渡リ英國及大陸ヲ巡回シ豫テ御訓令相成候各事項ニ就キ調査仕候ニ付茲ニ其梗概ヲ記シ謹テ報告仕候也

明治三十一年五月二十日

遞信技監　野村龍太郎

遞信大臣文學博士男爵　末松謙澄殿

一、東京中央停車場及之ニ接續スル高架線建設ノ工事方法ヲ計畫スルニ必要ナル諸材料ヲ蒐集シ其設計ヲ審案スル事

但シ市内及近郊鐵道ノ配置構造及運轉方法等總テ本文設計ノ參考トナルヘキモノヲ取調フル事

歐米諸國市内鐵道ノ重ナルモノヲ擧レハ倫敦ノ地下鐵道、紐育及**シカゴ**ノ高架鐵道、伯林及維也納ノ市内鐵道等是ナリ就中著名ナルモノハ倫敦、紐育及伯林ノ鐵道ニシテ倫敦ハ千八百六十三年、紐育ハ千八百七十二年、伯林ハ千八百八十三年ニ建設セシモノナリ

紐育市 鐵道線路圖

略ス

紐育ハ、**ハドソン**河ト**イーースト**河ノ間ニ介在シ市區甚タ正格ナリ市内鐵道ハ四線路アリ第二街、第三街、第六街及第九街ノ道路上ニ高架シ南北ノ方向ヲ取リ且ツ交互聯絡ヲナス而シテ道路ノ廣狹ニ應シ或ハ車道ノ兩側ニ上下兩線ヲ各別ニ設置セルモノアリ或ハ道

路ノ中央ニ複線ヲ設ケタルモノアリテ一樣ナラス其構造鐵製ニシテ軌道ハ鐵桁ノ上ニ枕木ヲ並置シ其上ニ軌條ヲ布設シタルノミナレハ列車走行ニ際シ甚タ喧囂ヲ極ム又停車場ハ何レモ狹隘ナル待合所ト出札所ヲ設ケ且乘降場ニハ單簡ナル上家ヲ設ケタルノミニシテ至極簡便ナルモノナリ要スルニ本鐵道ハ何レモ市內交通ノ便ニ供スルモノニシテ機關車客車ノ如キモ亦特殊ノモノヲ用ヒ全體ニ於テ頗ル輕便ナルモノトス

シカゴ市ハ**ミシガン**湖ノ西岸ニ在リ市區正格ナリ街路上ニ高架鐵道ヲ設ク何レモ鋼鐵製ニシテ現今尙建設中ニ係ルモノアリ大體ノ構造ニ於テハ紐育高架鐵道ト相似タリト雖モ同鐵道ニ比スレバ近來ノ建設ニ係リ大ニ改良ヲ加ヘタル所アリ而シテ紐育ニ於テハ總テ機關車ニ石炭ヲ使用スルモ本市ノ鐵道ハ多ク電力ヲ使用シ軌條流傳式ヲ採レリ本市鐵道モ亦專ラ市內交通ノ便ニ供スルモノナリ

勃斯頓ニ於テハ千八百九十四年ニ於テ該市ノ重ナル街路ニ布設スル**ツラムウヱー**ヲ廢シ地下電氣鐵道ヲ布設スル事ニ決シ目下尙其建築中ニ係レリ本市ノ地下鐵道ヲ採用セシ理由ノ一二ヲ擧クレハ往來人ノ危害ヲ除却シ車ノ喧囂ナル音響ヲ避ケ冬期氷雪ノ害ヲ除キ市街ヲ往復スル車馬等ノ運輸量ヲ大ナラシメ又聯絡點ニ於テハ一線路ノ下ニ他ノ線路ヲ

鑿通スル容易ニシテ相互ノ交叉ヲ避ケ以テ衝突及遲延ノ害ヲ除ク等ノ利益アルニ依レリ其構造法ハ大別三種ニシテ第一ハ側壁幷ニ拱(アーチ)トモ煉瓦ヲ以テ疊甃スルモノ第二ハ側壁ハ煉瓦ヲ用ヒ頂上ハ工字梁ヲ横架シ其間ヲ煉瓦小拱ヲ以テ塡充スルモノ第三ハ側壁ハ混凝土ヲ以テ築造シ頂上ハ第二ト同樣ノ構造ナルモノトス而シテ線路ハ複線ノ箇所アリ又ハ四線ノ箇所アリ此鐵道ニシテ竣工ノ上ハ市内ノ交通ニ一大進步ヲ來スヤ必然ナリトス

倫敦市鐵道線路圖

略ス

倫敦ハ英國ノ大都會ニシテ商業繁盛ヲ極メ其商業ノ中心ハ**シチー**ト稱スル市ノ東部ニ在リ無數ノ商人日ニ此所ニ集合シ其雜踏實ニ名狀スヘカラス而シテ市ノ内外交通ノ便ヲ助クルモノハ地下鐵道ニシテ**シチー**ヲ圍繞シ西方ニ長ク一ノ楕圓形ヲナスモノヲ内環線ト稱シ其西方ニ中央環線アリ又其北方ニ外環線アリ合シテ一系統ヲナス抑々倫敦ハ甚ダ古キ都府ニシテ市區正格ヲ缺キ街路ノ廣狹屈曲甚シク加ルニ地價非常ニ貴キカ故ニ市内ノ鐵道ヲ計畫スルニ方リ地下鐵道ヲ設クル蓋シ已ムヲ得ザルニ出テタルナラン幸ニ地質甚

ダ良好ニシテ此種ノ工事ヲナスニ適當セル亦此計畫ヲ採用スルノ一原因タリシニ相違ナカルヘシ線路ハ隧道又ハ切取ヨリ成リ隧道ハ重ニ煉瓦ヲ以テ疊甃シ切取ハ煉瓦石材又ハ混凝土ヲ以テ其側壁ヲ築造セリ停車場ハ半哩内外ノ距離ニ設置シ其構造ハ場所ニ應シ種々ニシテ一樣ナラス又坑内通風ノ方法ハ扇風器ヲ使用スル箇所アリト雖モ多クハ街路上ニ設置セル風竇ヲ以テス此場合ニ於テハ列車ノ迅速ナル進行ニ依リテ前面ノ空氣ヲ壓迫スルカ故ニ自然ニ風竇ヨリ外部新鮮ノ空氣ヲ吸入シ以テ内部汚穢ノ空氣ヲ排除セリ斯クシテ列車ハ機關車ノ煤烟ヲ以テ坑内ノ空氣ヲ不淨ナラシムルト同時ニ亦空氣ヲ清潔ナラシムルノ力ヲ供給スルモノトス

本鐵道モ亦全ク市内幷ニ近郊交通ノ便ニ供シ紛テ各地方ヨリ集合スル諸幹線ノ極端停車場ト聯絡ヲ通スルト雖モ交互直通ヲナスモノニ非ス又機關車客車ハ普通ノモノト異ナルナクシテ客車ハ之ヲ三級ニ區分セリ

伯林市
鐵道線路圖

略ス

伯林ノ市內鐵道ハ前記ノ諸鐵道トハ特殊ノ性質ヲ有シ其設計ノ確定セシハ千八百八十年ニシテ倫敦ノ鐵道ニ比スレハ二十年、紐育ノ鐵道ニ比スレハ十年ノ後ニ屬シ即チ此兩鐵道ニ就キ實地研究ノ末地形上交通上幷ニ軍事上最モ適應セル設計ヲ採用シタルモノナリ市內線ハ伯林ノ中央部ヲ東西ニ紆餘シテ**シユレジツシヤ**停車場ヨリ**シヤロツテンブルフ**停車場ニ至リ東西兩幹線ニ聯絡シ又此兩停車場ヨリ南北ニ分岐シテ市外ヲ回リ北環線及南環線ヲナセリ

中央線即チ市內鐵道ハ高架ニシテ連續セル煉瓦拱ヨリ成リ其河川又ハ道路ヲ横過スル所ニハ鐵橋ヲ架設セリ線路ハ四線アリ其二線ハ東西兩幹線ト連絡シテ直通列車運轉ノ用ニ供シ他ノ二線ハ單ニ市ノ內外交通ノ便ニ供スルモノニシテ市內及循環列車ノ運轉ニ用フルモノナリ停車場ハ前記**シユレジツシヤ**及**シヤロツテンブルフ**兩停車場間七哩餘ニ九ケ所アリ市內及循環列車ハ何レモ其各停車場ニ停止シ直通列車ハ其內四ケ所ニ限リ停止ス停車場ハ何レモ規模宏壯ニシテ外觀宛然タル二階建煉瓦家屋ニ異ナラス而シテ其階下即チ線路ノ下ニハ事務所、出札所、待合所、手荷物取扱所、便所等ノ設ケアリ又階段ヲ上リテ乘車場ニ至レハ其上ニハ圓形ノ鐵製屋背アリテ線路ノ全幅ニ跨リ覆フニ玻璃板ヲ以

テセリ

南北ノ兩環線路ハ普通ノ築堤ニシテ複線ヲ布設シ停車場モ亦市内ノモノニ比スレハ其構造甚タ粗ニシテ普通ノ中間小停車場ニ異ナルナシ

市内及循環列車ハ普通ノ機關車及客車ヲ以テ組成シ市内列車ハ三分乃至五分間毎ニ兩端停車場間ヲ運轉シ又循環列車ハ凡ソ半時間毎ニ北環線又ハ南環線ヲ經テ一週ス客車ハ二等、三等ノ兩種ニシテ一等ハ之ヲ使用セス

維也納ニ於テモ數年前市内鐵道新設ノ事業ヲ起シ現今尚其建築中ニ係レリ其目的ハ市内繁盛ノ部分ニ循環線ヲ設ケ且同市ニ集合スル諸幹線ノ交互聯絡ヲ通スルニ在リテ計畫完全ナルモノナリ同市ハ地形甚タ起伏セルカ故ニ或ハ切取ヲナシ或ハ隧道ヲ鑿チテ地下ヲ通シ或ハ煉瓦拱ヲ建築シテ高架トナシ以テ線路ヲ設置セリ其高架線ノ構造ハ模範ヲ伯林ニ取リ之ニ一層ノ裝飾ヲ加ヘタルモノナレハ外觀頗ル美ナリ全線路ノ竣工ハ尚凡ソ二ケ年ヲ要スルトノ事ナリシカ全部完成ノ後ハ交通上著大ノ便益ヲ與フルニ至ルヤ明カナリ

歐米諸國市内鐵道ノ重ナルモノハ大概前記ノ如シ我東京ニ於テ建設セントスル市内鐵道ハ主トシテ東海奥羽兩幹線ノ聯絡ヲ通シ兼テ市内及近郊交通ノ便ヲ開クニ在リテ此種ノ

モノヲ前記歐米市內鐵道中求ムレハ伯林ノ市內鐵道最モ相類似セリ卽チ伯林ノ市內鐵道ハ**シユレジツシヤ**及**シヤロツテンブルフ**ノ兩停車場ヲ聯絡シテ東西兩幹線ノ直通ヲ計リ東京ノ市街鐵道ハ新橋ト上野ノ兩停車場ヲ聯絡シテ東海奧羽兩幹線ノ直通ヲ計ルニ在レハナリ而シテ東京ノ市街タル區劃甚タ不規則ニシテ屈曲亦甚シキカ故ニ紐育、**シカゴ**等ノ如ク街路上ニ鐵道ヲ布設スルハ到底望ム所ニ非ス又下町ニ至リテハ其地質甚タ粗惡ニシテ加フルニ海面ヲ拔ク事僅ニ數尺ニ過キサレハ浸水甚タシクテ倫敦ノ如キ地下鐵道ヲ設クル亦頗ル難シトスル所ナリ然ラハ則チ伯林ノ市內鐵道ニ準シテ新橋上野間便宜ノ方向ヲ撰ミ私有地ヲ通シテ高架鐵道ヲ設クルノ外他ニ策ナカルヘシ而シテ線路ハ四線ヲ設置シ其二線ヲ以テ直通列車運轉ノ用ニ供シ他ノ二線ヲ以テ市內列車運轉ノ用ニ供スヘシ

線路ノ方向ハ既ニ鐵道局ニ於テ略ホ撰定シアレハ茲ニ之ヲ揭ケス

次ニ其構造ニ就テハ鐵製ト煉瓦造ト孰レヲ採用スヘキヤハ一ノ問題タリ米國ニ於テハ専ラ鐵製ヲ用ヒ歐洲ニ於テハ重ニ煉瓦造ヲ用フ（但シ英國ノ**リバープール**市ノ高架電氣鐵道及伯林ノ一部ニ於テ目下建築中ニ係ル高架電氣鐵道ノ如キハ何レモ鐵造ナリ）輓近鋼鐵ノ製法大ニ進歩シ隨テ其代價モ頗ル低廉ニ赴ケルヲ以テ工費ニ至リテハ鋼鐵煉瓦孰レヲ

撰ムモ格別ノ差違ナシト信スト雖モ鐵造ノ高架道ニ在リテハ列車走行ノ際震動大ニシテ且音響轟々頗ル喧囂ヲ極メ假令橋上ヲ蓋ヒ混凝土及バラストヲ敷キ力メテ音響ヲ減セントスルモ尚喧囂ヲ免レサルカ故ニ我邦ノ如キ家屋ノ構造ニ在リテハ沿線居住者ノ迷惑ヲ感スル亦尠少ナラサルヘシ彼ノ煉瓦造ノ高架道ニ在リテハ其喧囂幷ニ震動ノ點ニ於テ遙ニ鐵造ニ優レリトス然ラハ則チ煉瓦造ヲ採ランカ我邦ノ如キ地震ノ多キ所ニ在リテハ其被害ニ就キ須ラク考慮ヲ煩ハサヽルヘカラス然レトモ充分ニ其基礎ヲ鞏固ニシ其構造ヲ堅牢ニスレハ敢テ其災害ヲ防禦スル能ハサル事ナカルヘシ彼ノ地震調査會ニ於テハ學士専ラ其防禦法ニ就キ研究スル玆ニ年アリ宜シク同會ノ意見ヲモ徴シテ以テ其構造ノ方法ヲ究ムヘシ若シ其ノ震害ニシテ果シテ之ヲ防禦シ得ルトスレハ余ハ鋼鐵煉瓦ノ兩種ニ就テ煉瓦造ヲ最モ適當ナリト信スルモノナリ故ニ今煉瓦造ヲ採用スルモノトシ左ニ其設計ノ大體ニ就キ陳述スル所アルヘシ

伯林ノ市内鐵道建築ノ際煉瓦拱ノ適當ナル構造ニ就キ精密ナル調査ヲナセシ結果五種ノ徑間(スパン)ヲ採用スル事トナレリ其ハ六、八、十、十二及十五メートルノ五種ニシテ拱ハ缺圓形ヲ用ヒ其拱矢（拱ノ徑間ニ對スル高ノ比）ハ前記五種ノ徑間ニ應シテ四分ノ一、六分

ノ一、四、五分ノ一、四分ノ一、及三、五分ノ一ナリ東京ノ市内鐵道ニ於テハ徑間ノ成ルヘク小ナルモノヲ用フルヲ適當ナリト信スレハ二十尺乃至三十尺ヲ以テ制限トナシ之ニ應スル拱矢ヲ用フル可ナランカ而シテ停車場構外普通四線路ノ場所ニ於ル拱橋ノ全幅ハ欄干等ヲモ見込ミ四十八尺ヲ有スレハ充分ナルヘシ又拱ノ憑台ハ四個又ハ五個毎ニ其厚ヲ大ニシ若シ其一方ニ於ル拱ノ崩壞セシ場合ニ於テモ尙他方ノ拱ヲ支フルニ足ルヘキ强サヲ有セシムヘシ又連續セル兩拱間ノ三角形ノ空所ハ塡料ヲ節スル爲メ二三ノ小拱ヲ設ルモ可ナリト雖モ寧ロ混凝土ヲ以テ悉皆塡充スル方安全ナルヘシ何レニスルモ拱ノ上面ト平ニ混凝土ヲ以テ均シ其上ニ全面煉瓦ヲ敷列シ**アスフアルト**又ハ膠泥ヲ以テ之ヲ塗リ水氣ノ浸透ヲ防キ其上ニ**バラスト**ヲ敷クヘシ但シ**バラスト**ハ成ルヘク其厚ヲ大ニシ以テ列車ノ音響ヲ減スル樣ナスヘシ

線路ノ街路ヲ横斷シ又ハ河ヲ越フル箇所ニ於テハ鐵橋ヲ架スヘシ鐵橋ハ板桁ヲ使用スルモ不可ナシト雖モ繁華ナル場所ニ於テハ鐵製ノ拱橋ヲ架スレハ大ニ美觀ヲ添フルヲ得ヘシ又板桁ノ如キモ多少其外面ニ裝飾ヲ施スハ必要ノ事タルヘシ鐵橋ニ於テモ亦軌道面ハ波狀鐵板ヲ以テ悉皆之ヲ覆ヒ混凝土及**アスフアルト**ヲ以テ透水ノ害ヲ防キ其上ニ**バラス**

トヲ充分ニ敷キ列車ノ音響ヲ減スヘシ又橋下ノ地面ヨリノ高ハ各國共最高運搬物ニ依リテ制限ヲ立テ一様ナラスト雖モ大概十四尺乃至十六尺ニシテ東京ノ如キモ其平均十五尺位トスレハ充分ナルヘシ

停車場ハ上野中央及幸橋ニ大停車場ヲ置キ直通列車及市内列車ヲ停止セシメ其中間ニ便宜小停車場ヲ置キ單ニ市内列車ノミヲ停止セシムヘシ其呉服橋内ニ設置スルモノヲ以テ中央停車場ト稱スレトモ此所ニ於テ特ニ宏大ナル停車場ヲ置キ客車庫機關車庫等ノ設備ヲナシ各列車ヲ發着セシムル如キハ決シテ得策ニ非ス只幸橋ト同様ニシテ稍々規模ヲ大ニスルヲ以テ足レリトス（列車運轉ノ方法ニ至リテハ後段ニ於テ之ヲ論スヘシ）又秋葉ト中央停車場附近ニ於テハ別ニ貨物停車場ヲ置キ貨物ノ取扱ヲナスヘシ

何レノ停車場ニ於テモ事務室、出札所、待合所等ハ拱橋ノ下ヲ適宜ニ區分シテ之ヲ設置スヘシ又乘車場ハ上下兩線路ノ中間ニ設ケ其幅員幷ニ延長ヲ充分ニシ上下兩列車ノ用ニ供スヘシ乘車場ニ昇降スル階段ニハ中央ニ柵ヲ設ケ昇降ノ路ヲ各別ニシ旅客ノ混雜ヲ防クヘシ又改札所ハ乘車場内ニ於テ其昇降口ニ設クヘシ乘車場ノ上家ハ小停車場ニ於テハ乘車場幷ニ之ニ附屬スル左右ノ兩線路ヲ覆ヒ又大停車場ニ於テハ二個ノ乘車場及之ニ附

屬スル四線路ヲ覆フヘキモノトシ鐵製ニスヘシ又遠行列車ニ附屬スル乘車場ニハ其兩端ニ水力又ハ電氣昇降機ヲ備ヘ手荷物及小荷物ノ上ケ卸シニ供スヘシ

貨物停車場ハ成ルヘク高架線路ヨリ百分ノ一前後ノ勾配ヲ以テ下リ地上ニ設クヘシ若シ場所ノ狹隘ニシテ此設計ヲ爲シ難キ場合ニハ同シク高架トナシ貨車ノ上ケ卸ニ供スル水力又ハ電氣昇降機ヲ設備スヘシ

列車ノ運轉ニ關シテハ市內走行ノ速度ハ二十哩ヲ以テ極度トシ市內列車ハ上野品川間(上野幸橋間ニテハ區域狹隘ナルヘシ)ヲ五分乃至十分間毎ニ往復セシメ又其間凡ソ一時間毎ニ品川赤羽線ヲ經テ一週スル循環列車ヲ發スヘシ機關車ハ骸炭ヲ使用シ客車ハ伯林ノ如ク二等及三等ノ二種トナシ一等ヲ使用セサルモ不都合ナカルヘシ

品川停車場ニハ轉車臺ヲ置キ機關車ノ囘轉ヲナサシメ又數多ノ側線ヲ設クヘシ

直通列車ハ其北方ニ向フモノハ新橋停車場構內ニ於テ列車ヲ組成シ幸橋停車場ヨリ發セシメ其北方ヨリ到達スルモノハ幸橋停車場マテ運轉セシメ夫ヨリ空車トナシ新橋構內ニ入レ掃除ヲナスヘシ又其南方ニ向フモノハ上野停車場構內ニ於テ列車ヲ組成シ同所ヨリ發セシメ其南方ヨリ來ルモノハ上野停車場マテ運轉セシメ同構內ニ引入レ掃除ヲナスヘ

シ此ノ如クシテ東京發着ノ旅客ヲシテ上野、中央、幸橋ノ三停車場中何レニテモ便宜乘降スルヲ得セシムヘシ

現在ノ新橋停車場ハ貨物專用トナスヘシ

伯林ニ於テハ中央市内線ハ專ラ旅客列車ノ運轉用ニ供シ貨物列車ノ如キハ市外ノ線路ニ依リテ運轉セシムルノ規定ナレトモ東京ニ於テハ此例ヲ追フ能ハス故ニ貨物列車モ同シク中央市内線ヲ通過セシムルノ必要アレトモ品川及赤羽停車場附近ニ於テ貨物列車ノ組替所ヲ設ケ兩所ニ於テ貨車ノ組替ヲナシ單ニ東京到達ノ貨物ノミヲ以テ成レル列車ヲ組成シテ市内線ニ入レ他ハ悉ク品川赤羽線ヲ經テ之ヲ其極所ニ輸送スル方繁雜ヲ避ケ大ニ便宜ナルヘシ

品川ニ於テハ嘗ニ貨物列車ノ組立場ノミナラス將來旅客列車ノ組立ヲモ此所ニ於テシ北方往復ノ旅客列車ハ品川停車場ニ發着セシメ又茲ニ機關車庫客車庫轉車臺等運轉上必要ノ設備ヲナシ且各種ノ工場ヲモ建設シ車輛橋梁諸器械等ノ製作修繕ヲ施スヘキ計畫ヲナスヲ必要ナリト信ス抑々現在ノ新橋停車場ハ其構内廣クシテ客車庫機關車庫等ノ設備ヨリ各種ノ工場ニ至ルマテ悉皆整頓スルカ如シト雖モ高架線竣工ノ後ハ聯絡上不便尠カラ

ス且漸次運輸事業ノ繁盛ニ赴クニ隨ヒ車輛ノ設備モ亦增加シ隨テ客車庫機關車庫等ノ增設ヲ要シ又工場ノ如キモ諸般ノ製修工事益々繁忙ニ赴クカ故ニ其擴張改造ヲ要スルニ至ルヘク此時ニ方リテ市內高價ノ地所ヲ占有スル此構內ヲ擴張スルハ決シテ容易ノ事ニ非ルカ故ニ東京附近ニ於テ便宜ノ地所ヲ撰ミ將來ノ擴張ニ應スルノ計畫ヲナスハ敢テ不急ノ事ニ非ルヘシ而シテ其場所ハ品川現在停車場ノ南方ニシテ東海道幹線ノ西ニ位スル田圃中ヲ適當ナリト信スルナリ即チ現在ノ品川停車場ヨリ赤羽線ト東海道幹線ノ間ニ二線路ヲ布設シ之ヲ田圃中ニ設置スヘキ構內ニ延長シ夫ヨリ自在ニ枝線ヲ布設スヘシ但此所ニ於テ赤羽線ヨリ東海道線ニ直通スル線路ノ障害ヲ爲スアルカ故ニ該線路ハ此場合ニ於テハ鐵造高架線トナサヽルヘカラサルナリ

右ハ東京市內線ニ關シ大體ノ卑見ヲ陳述シタルマテニシテ其設計ノ詳細ニ至リテハ實地ニ就キ篤ト調査ノ上各地ニ於テ蒐集セル材料ヲモ參照シ徐々ニ計畫スル所アルヘシ

歐米諸國ノ重ナル都市ニ於テハ前ニモ述ヘタル如ク諸幹線ヲ成ルヘク市內ニ引長シテ其終端ニ宏大ナル停車場ヲ設ケ其諸幹線ノ聯絡ハ（伯林及維也納ノ如ク市中ヲ横斷シテ其幹線ノ二三ヲ直ニ聯絡スルモノヲ除クノ外）大概市外ニ於テシ市內ニ於ル諸極端停車場

間ノ聯絡及市内交通ノ方法ハ市内專用ノ地下又ハ高架鐵道ヲ以テスルノ外街路ニ布設スル馬車、電氣又ハ用錬鐵道ヲ以テシ其他尙**ヲムニバス**ヲ以テスルアリ其線路ハ各街ニ普及シ實ニ便利ヲ極ムルモノトス而シテ將來交通法改良ノ傾向ハ電氣鐵道ヲ使用スルニ在リテ米國ノ如キハ**ヲーバーヘツド、ツロリー**式ヲ使用スルモノ多シト雖モ歐洲大陸ノ重ナル都府ニ於テハ**コンヂユイツト**式又ハ蓄電槽式ヲ採用スルモノ多シトス

我東京市内ニ於テモ高架線ヲ以テ悉ク諸幹線ノ聯絡ヲ通スルハ頗ル難事ナルカ故ニ重ナル幹線ヲ除クノ外ハ交互ノ聯絡ハ市内ノ交通法ハ重ニ街路ニ布設スル電氣鐵道ヲ以テシ之ヲシテ各市街ニ普及セシムルヲ最モ便利ナリト信スルナリ

一、軌條及附屬品ノ形狀製法等現行ノモノヲ改ムル必要アル考ニ付最モ適當ナリト認ムルモノヲ取調フル事

軌條ノ形狀ニ就テハ多年米國著名ノ技師幷ニ製造家中其研究ニ從事セシモノ尠カラサリ

シカ更ニ米國工師會ノ討議問題トナリ同會ニ於テ千八百九十年ヨリ同九十三年ニ涉ル三ケ年間熟議審査ノ結果遂ニ軌條ノ定規斷面ヲ撰定シ爾來諸鐵道會社ニ於テ續々此斷面ヲ採用シ今ヤ米國鐵道用軌條ノ定規斷面ト稱スルモ敢テ不可ナキニ至レリ

又歐洲ニ於テ**サンドベルク**氏ガ十有餘年間軌條ノ性質形狀及製法ニ就キ專心研究ヲ爲シ千八百七十八年ニ於テ始テ軌條ノ定規斷面ヲ撰定シ世ニ公ニセシヨリ諸鐵道會社ノ之ヲ使用スルモノ多カリシカ爾來益々之カ研究ニ從事シ其實驗ノ結果ト製法ノ進歩ニ從ヒ多少當初ノ斷面ニ改良ヲ加ヘ千八百九十四年ニ於テ更ニ新斷面ヲ公ニセリ氏ノ**ゴライヤス**ト稱スル百磅軌條ノ如キハ頗ル有名ノモノナリトス

今兩種ノ斷面ヲ比較スレハ左ノ如シ

	重量一碼ニ付	百磅	八十磅	七十磅	六十磅	五十磅
高	サ氏舊斷面	五吋四分三	五吋	五吋	四吋二分一	四吋八分一
	米國工師會斷面	五吋四分三	五吋	四吋八分五	四吋四分一	三吋八分七
	サ氏新斷面	五吋四分三	五吋四分一	五吋	四吋二分一	四吋八分一
頭幅	サ氏舊斷面	二吋八分五	二吋八分五	二吋四分一	二吋四分一	二吋八分一
	米國工師會斷面	二吋四分三	二吋二分一	二吋十六分七	二吋八分三	二吋八分一
	サ氏新斷面	三吋	二吋四分三	二吋二分一	二吋二分一	二吋四分一

頭厚	サ氏舊斷面	一吋八分七	一吋三十二分二十一	一吋三十二分二十一	一吋二分一	一吋十六分五
	米國工師會斷面	一吋六十四分四十五	一吋二分一	一吋三十二分十一	一吋三十二分七	一吋八分一
	サ氏新斷面	一吋八分七	一吋十六分十一	一吋三十二分十七	一吋八分三	一吋三十二分九
底部兩端ノ厚	サ氏舊斷面	八分三吋	八分三吋	四分一吋	四分一吋	四分一吋
	米國工師會斷面	十六分五吋	三十二分九吋	三十二分九吋	四分一吋	三十二分七吋
	サ氏新斷面	八分三吋	十六分五吋	三十二分九吋	四分一吋	四分一吋
低幅	サ氏舊斷面	五吋二分一	四吋四分三	四吋二分一	四吋	三吋十六分九
	米國工師會斷面	五吋四分三	五吋	四吋八分五	四吋四分一	三吋八分七
	サ氏新斷面	六吋四分一	五吋四分一	五吋	四吋八分五	四吋八分一
腹部ノ厚	サ氏舊斷面	十六分十一吋	二分一吋	三十二分十五吋	十六分七吋	十六分七吋
	米國工師會斷面	十六分九吋	六十四分三十五吋	六十四分三十三吋	六十四分二十一吋	十六分七吋
	サ氏新斷面	三十二分十七吋	三十二分十五吋	十六分七吋	三十二分十三吋	八分三吋

右ノ表ニ依レハ米國工師會斷面ハサ氏新舊斷面ノ中庸ニ在リテサ氏ノ新斷面ニ於ル變更ノ重ナル點ハ頭ノ重ク且廣ク腹部ノ輕ク且薄ク底部ノ著ク廣クナリシニ在リ

又兩種斷面ノ頭部底部ニ於ル割合ヲ比較スレハ

	米國工師會斷面	サ氏新斷面
頭部面積	四割二分	四割五分六厘乃至四割六分九厘

腹部面積　二割一分　一割七分二厘乃至一割七分五厘

底部面積　三割七分　三割七分二厘乃至三割五分六厘

之ヲ要スルニ良好ナル軌條ヲ得ルニハ先ツ其頭部ト底部トノ面積ヲ經濟上許ス限リ相平均セシムルヲ須要ナリトス是レ其輾壓(ローリング)ノ際全部ヲ成ルヘク平等ニ冷却セシメ以テ内部逼迫(インターナルストレイン)ノ害ヲ減却シ軌條ヲシテ各方向ヲ殆ント眞直ナラシムルノ効果ヲ得ルニ在リ又頭部ノ斷面ハ成ルヘク之ヲ廣ク且薄クシ輪緣(タイヤ)及接際狹版ノ支柱面ヲ大ニシ以テ輪緣ノ磨損ヲ減少シ機關車ノ牽引力ヲ增加シ且接際ヲ强固ナラシムヘシ又底部ニ於テモ同シク其幅ヲ廣クシ枕材上ノ支柱面ヲ大ニシ以テ枕材ノ保存ヲ善良ナラシムヘシ

飜テ我邦ニ使用スル軌條ノ斷面ヲ見レハ頭部ハ甚大且厚キカ故ニ輾壓ニ際シ平等ニ冷却セスシテ頭ノ内外鋼質ニ粗密ヲ生シ自然磨損ヲ容易ナラシメ又底部ハ甚タ狹キカ故ニ其枕材上ニ於ケル支柱面小ニシテ枕材ノ保存上良好ナラス故ニ前記ノ斷面ヲ參照シテ速ニ之カ改良アラン事ヲ希望スル所ナリ

添附ノ圖ハ我邦ニ使用スル六十一磅軌條ノ斷面ト略々同重ノ米國工師會斷面及サ氏斷面ヲ示スモノナリ

第一、本邦鐵道用軌條斷面及接際圖
第二、米國工師會定規軌條斷面及接際圖
第三、サンドベルグ氏定規軌條斷面及接際圖

略ス

又軌條接際ニ就キ現今歐米ニ使用セラルヽ重ナルモノハ添附ノ軌條斷面圖第二、第三ニ示スカ如キ形狀ニシテ且最モ多ク使用セラルヽモノナリ又獨逸國ニ於テ專ラ使用セラルルモノハ左ノ種類トス

一、特種軌條接際圖
一、獨立軌條接際圖

略ス

抑々歪長等强等硬ノ線路ヲ得ルハ決シテ容易ノ事ニ非ス何トナレハ夏冬溫度ノ變化ニ因リテ軌條ニ伸縮ヲ生スレハナリ例ヘハ一ノ接際ニシテ軌條ノ伸縮ヲ許ス爲メ半吋ノ空隙ヲ存セシメ而シテ其接際ヲシテ軌條ノ中央部ト强硬ノ度ニ於テ等一ナラシムルハ決シテ單簡ナル事ニ非ズ良シ之ヲ爲シ得ルトスルモ尙ホ軌條ノ極端ニ於テ頭部ノ挫平スルハ殆ト避クヘカラザル所ナリトス此ノ等强ノ接際ヲ得且軌條極端ニ於ル頭部ノ挫平ヲ除却セ

ンコトハ歐米ニ於テ技師ノ苦心考究スル所ニシテ輓近獨逸國ニ於テ發明セル獨立軌條接際ト稱スルモノハ稍此目的ヲ達シ得タルモノニシテ最モ良好ナリトス其形狀ハ添附圖ニ示スカ如クニシテ其特殊トスル所ハ

軌條極端ニ於ル頭部ノ挫平ヲ除ク事

本軌條ト獨立ナル事

特殊ノ構造ニ依リ全線ヲ通シテ軌條ノデフレクシヨンヲ平等ナラシムル事

此發明ノ重要ナル點ハ普通ノ外部挾版ニ代フルニ軌條ノ短片ヲ用ヒ此補助軌條ト本軌條トノ間ニ塡充スルニ短キ兩頭材片ヲ以テシテ軌條ト補助規條ノ腹部ニ支柱セシム又内部挾版ハ之ヲ本規條頭部ノ下邊ト底部ノ上邊及枕材上ニ支柱セシム

補助軌條ノ兩端ハ垂直並ニ水平線ト或ル角度ヲ以テ斜面ヲナス如ク鑿平シ又其中央部線路ノ外方ヘ斜面ヲナス如ク鑿平セリ其主旨ハ磨損セル輪線ノ接際ニ達スルトキ平滑ニ補助軌條ノ上ニ囘轉セシメンカ爲ナリ又補助軌條ト本軌條トノ間ニ塡充セル材片ハ接際ボールト上ニ生スル應剪力ヲ減却シ且兩軌條上ニ來ル車輪ノ重量ヲ平等ニ配分セシメンカ爲ナリ

千八百九十一年以來伯林官設鐵道ニ於テ試驗セル結果頗ル良好ニシテ其利益ノ重ナルモノヲ列擧スレハ

一、運輸上ノ安全ヲ增加ス何トナレハ此接際ヲ使用セル線路ハ激衝ノ害ナキカ故ニ軌條ノ磨損ヲ減少スルノミナラス亦車輪ノ破損ヲモ減少スレハナリ

二、重量ノ軌條ヲ用ヒスシテ線路ノ運輸量ヲ增加ス何トナレハ此裝置ハ接際ノ強度ヲ增加スレハナリ

三、前二項ノ結果トシテ線路幷ニ車輛ノ保存費ヲ大ニ減少ス

我邦從來使用スル所ノ單簡ナル接際ハ舊式ニシテ甚タ不完全ナルモノタルハ論ヲ俟タス歐洲ニ於テ試驗セル成績ニ依レハ此ノ如キノ接際ハ軌條ノ中央部即チ接際ナキ部分ニ於テ負荷シ能フ重量ノ平均三分ノ一以上ヲ支フル能ハスト夫レ然リ故ヲ以テ各國夙ニ接際ノ改良ヲ考究シ今ヤ此ノ如キ舊形ヲ用ユルモノ甚タ稀ナリ

以上ノ理由ナルヲ以テ我新設線路ニ於テハ自今新式ノ接際ヲ使用シ既設線路ノ如キハ漸次之カ改良ヲ加ヘラレン事切望ニ堪ヘサル所ナリ

因ニ曰ク英國ニ於テハ兩頭軌條又ハ**ブルヘッド**ト稱スル軌條ヲ使用シ轍枕（チエーア）ヲ以テ之ヲ

枕木上ニ裝置スレトモ我邦ニ於テハ此種ノ軌條ヲ使用セサルカ故ニ以上單ニ平底軌條ニ就テノミ論セリ
又歐米各國ニ於テハ枕木ノ代價大ニ騰貴セルヲ以テ產鐵地方ノ如キハ漸次鐵枕ヲ使用スルニ至レルモ其他ノ地方ニ在リテハ未タ容易ニ之ヲ使用スル能ハサルカ故ニ依然木材ヲ使用スルモノ多キモ代價ノ高値ニ制セラレテ自然柔質ノ木材ヲ使用スルヲ免レス又一方ニ於テハ運輸事業ノ頻繁ニ赴クニ隨ヒ過重ノ機關車ヲ使用シ隨テ軌條ニ漸次重キヲ加フルカ故ニ枕木ハ容易ニ壓挫セラレ爲ニ軌間ニ狂ヒヲ生シ絕ヘス之カ交換ヲナスモ尙ホ線路ノ安全ヲ保スルノ容易ナラサルヲ以テ近來軌條ト枕木ノ間ニ底板ト稱スル鐵板ヲ使用シ枕木上ノ支柱面ヲ大ナラシメ以テ壓挫ノ害ヲ防キ且之ヲ枕木ニ緊扗シ以テ軌間ノ狂ヒヲ防クニ至レリ我邦ニ於テモ漸次枕木ノ代價騰貴ヲ來シ其結果不良ノ木材ヲ充用スルノ止ヲ得サルニ至レルヲ以テ底板ヲ使用スル方經濟上利益ヲ見ルニ至ルヘシ

一、英國ボールド・ヲブ・ツレード規程ノ如キ鐵道ノ構造其他ニ關スル

一般ノ規定ヲ定ムルニ必要ナル材料調査ノ事

英國商務省ノ鐵道ニ關スル規程ハ**ブロツク**電信、信號、**ポインツ**、**イントルロツキング**、側線、停車場、轉車臺、線路ヲ横キル人道橋、軌道、踏切、聯及制動機等ニ就キ規定シタルモノナリ其外ニ單線路運轉法及運輸ニ關スル諭告アリ何レモ簡單ナルモノトス

又同國諸鐵道會社ニ於テ一般用ヒラル、營業線路從事員服務規程ハ先ツ營業線路從事員ノ遵守スヘキ一般ノ規程、信號ノ種類及其使用法、**ポインツ**及信號ノ併用法、停車場各係員ノ職務及監理、列車運轉規則、線路係員及工夫ノ服務規程、單線路運轉規程、**ヴアキユアム・ブレーキ**及**ウヱスチングハウス・ブレーキ**使用方法、複線路**ブロツク**電信應用規則等ヲ包括シ頗ル浩澣ナルモノナリ而シテ昨年中諸鐵道會社支配人會議ニ於テ其改正案ヲ可決シ漸次之ヲ執行スルノ運ニ至レリ

我鐵道局現行ノ營業線路從事員服務規程ハ英國ノ同規程ヲ參酌シテ制定セルモノナリ

獨逸國有鐵道ニ於テハ職員ノ服務規律ヨリ建築及營業上ニ關スル諸般ノ規則等頗ル整頓シ居レリ此等ハ漸次反譯シテ高覽ニ供スルノ見込ナレハ茲ニ之ヲ贅セス

其他佛國及白耳義等ニ於テモ諸種ノ規則類ヲ得タレハ同シク反譯ノ上瀏覽ニ供スヘシ

一、鐵道監査ニ關スル事項

監査員ノ資格

監査ノ實際方法手續等

英國ニ於テ商務省ニ屬シ監査局アリ監査官二人助員一人ヨリ成ル此二人ノ監査官中一人ハ鐵道事業ノ監査ヲ掌リ助員之ヲ補佐シ他ノ一人ハ電氣事業ノ監査ヲ掌ル抑々英國ノ如キ其鐵道ハ悉皆民設ニシテ國内ニ普及シ殆ト壹萬八千哩(英、蘇及**ウエールス**ヲ合シテ)ノ延長ヲ有スル盛大ナル所ニシテ僅ニ一人ノ監査官ト一人ノ助員ヲ以テ全體ノ監査ヲ爲スハ決シテ能クスヘキ事ニ非ルカ如シト雖モ各鐵道會社ニ於テ自ラ充分ノ監督ヲナスカ故ニ平時監査ヲナスノ必要ナク只重大ナル事故ノ發生セシトキニ於テ之カ原因狀況ヲ調査スルニ止ルヲ以テ盖シ多數ノ人員ヲ要セサルナリ

又新ニ鐵道ノ敷設ヲ發起シ其新設ヲ出願スルモノアルトキハ其可否ハ議院ニ於テ決スルノ例ニシテ同院ニ於テ之ヲ鐵道委員ニ附托シ同委員會ニ於テハ發起者及反對者ヲ召集シテ技術上ノ點ハ勿論苟モ公衆ニ及ス所ノ利害ハ細大トナク審議セシメ然ル後其可否ヲ決スルノ成規ニシテ商務省ニ於テハ議院ノ請求ニ應シテ種々ノ調査ヲナスハ格別普通ハ監査官ヲシテ所計線路ノ道路交叉方ヲ調査セシメ之ニ關スル意見書ヲ徵シテ之ヲ議院ニ提出スルノミナリ而シテ會社ノ愈々鐵道布設ヲ許可セラレタル場合ニ於テハ其工事中ハ一ノ監査ヲ爲スコトナク只其竣工セシトキニ方リ監査官ヲ派シテ實地監査ヲ爲サシムルモ主トシテ信號器、信號及**ポインツ**ノ併動裝置**ブロツク**法等運轉上保安ノ設備ニ關スル事項ヲ監査セシムルニ在ルノミ

佛國ニ於テハ官有鐵道及六大私設鐵道ヲ監理セシムル爲メ各鐵道ニ付キ一人ノ監査總長ヲ置キ其下ニ技師四人ヲ屬セシメ各々建設、保存、運輸及總務ノ四課ニ長トシテ事務ヲ分擔セシム尙其他ニ商務監査長官ヲ置キ同シク總長ニ隷屬セシメ運賃其他商業上ニ關スル事項ヲ監査セシム此本部ノ外又地方ニ支部ヲ置キ同一ノ分掌ヲ以テ各鐵道ノ監督ヲナサシムルモノトス

私設鐵道新設ノ場合ニ於テハ其線路ノ調査ハ發起者ヨリ提出スル圖面ニ就キ之ヲナシ特別ノ場合ニ於ルノ外ハ實地調査ヲナスコトナシ又工事中ハ其所管地方ノ建設支署ニ於テ常ニ之カ監査ヲナシ落成ノ節ハ更ニ其區間全體ノ監査ヲナシ之カ報告書ヲ製シテ具申セシムルノ例ナリ

墺地利ニ於テハ鐵道省中ニ監査局ヲ置キ之ヲ建設及保存、運輸、商務、計理、總務ノ五課ニ分チ各課ニ監査總長ヲ置キ監査官數名ヲ之ニ隷屬セシメ官私鐵道ノ設計圖面、新設及保存ノ工事、運輸事業、私設鐵道ノ特別保護ニ關スル事項等一切ノ監理ヲナサシム各課ニ屬スル監査官ハ常ニ各地方ニ出張シテ其分擔事項ニ付監査ヲナシ不都合ノコトアルトキハ直ニ之カ改良ヲ命シ事ノ重大ニ渉ルモノハ總長ニ具申シテ適當ノ處分ヲナスモノトス

歐洲諸國ニ於ケル鐵道監査ノ方法、手續等ハ大略前記ノ如シ我邦ノ鐵道ハ開始以來僅ニ十五年ニ過キス而シテ其勃興ヲ來シタルハ漸ク近年ノコトニシテ運輸上諸般ノ設備不完全ナルノミナラス其業務ヲ擔任スル職員ノ如キモ亦經驗ニ乏シキ者尠カラサルカ故ニ漸次運輸ノ頻繁ナルニ隨ヒ往々危險ノ事故ヲ發生シ爲ニ公衆ヲシテ不安ノ念ヲ生セシメ自

然鐵道ノ發達ヲ阻害スルナキヲ保シ難シ故ニ將來益々監督ノ方法ヲ嚴ニシ鐵道事業ノ改良進歩ヲ謀リ交通ノ安全鞏固ヲ期センコト希望ニ堪ヘサル所ナリ

一、イントルロツキング信號中差向キ我鐵道ニ適用シ得ヘキモノ調査ノ事

線路聯絡ノ數增加スルニ隨ヒ特リ各線ニ對シテ各別ノ信號機ヲ要スルノミナラス尙信號機ト**ポイント**ヲ關聯セシメ卽チ信號機ハ**ポイント**ノ適當ナル轉動ヲ完了シタル後ニ非レハ決シテ安全ノ信號ヲ示ス事ナク又之ニ反シテ**ポイント**ハ關係信號機ノ何レモ危害ノ信號ヲ現シタル後ニ非レハ決シテ其轉動ヲ始メ難キ樣相互併動ノ裝置ヲナシ以テ列車運轉上ノ安全ヲ保セサルヘカラス此併動裝置ヲ稱シテ**イントルロツキングシステム**ト云フ此**ポイント**ト信號ノ併動裝置ニ就キ歐米諸鐵道ニ於テ現今使用スルモノヲ大別スレハ四種アリ卽チ

單ニ人力ニ依ルモノ
水力ヲ用ユルモノ
電氣空氣併用ノモノ
電氣力ノミヲ應用スルモノ

是レナリ單ニ人力ヲ用フルモノニ在リテハ英國**サクスビーヱンドフアーマー**器械及米國**スチーブンス**器械ノ二種ヲ以テ重ナルモノトス兩種トモ其大體ノ設計及構造ニ於テ異ナルナシト雖モ只鎖定ノ方法ニ於テ相同シカラサル所アリ此兩種中歐米各國ニ於テ汎ク使用セラル、モノハ**サクスビーヱンドフアーマー**器械ニシテ英國倫敦ニ於ケル同名ノ會社及米國**ペンシルヴアニヤ**州、**スウヰツチ・ヴヱール**ノ　**ユニオン・スウヰツチ・ヱンドシグナル**會社ニ於テ製作セリ又　**スチーブンス**器械ハ米國ニ於テ專ラ使用セラル、モノニシテ同國**ペンシルヴアニヤ**州　**イーストン**ノ　**ナシヨナル・スウヰツチ・ヱンド・シグナル**會社ニ於テ製作セリ

水力利用ノ機械ハ多年實驗ノ結果其良好タルヲ證シ今ヤ諸地方ニ於テ大ニ使用セラル、ニ至レリ其ハ水ト**グリセリン**ノ混和體ニ壓力ヲ加ヘ之ヲ小管ヲ通シテ**ポイント**ニ近ク裝

置セル複唧子又ハ信號柱ニ定柱セル單唧子ニ輸迸シ此流動體ノ力ニ依リテ作用ヲナサシムルモノニシテ其所要ノ力ハ唧筒ニ依ツテ生セシムルモノナリ此種ノ器械モ亦英國ノ**サクスビーヱンドフアーマー**會社ニ於テ製作セリ

電氣空氣併用（エレクトロ・ニユーマチック）ノ器械ハ米國ノ**ユニオン・スウヰツチ・ヱンド・シグナル**會社ニ於テ製作スルモノニシテ**ウヱスチングハウス**氏ノ發明ニ係リ**ポイント**及信號ヲ運轉スルニ壓搾空氣ノ力ヲ用ヒ而シテ此空氣ノ壓力ヲ整理スルハ電磁氣ノ作用ニ依リ開閉スル弇ヲ以テ之ヲナスノ方法ナリ此器械ハ米國諸鐵道ノ極端停車場ニ裝置シ頗ル精巧ナルモノナリ

電氣單用ノ器械ハ獨逸國伯林府ノ**シーメンス・ウンドハルスケ**會社ノ電氣工場ニ於テ製作スルモノニシテ獨、墺、瑞等ノ諸國ニ於テ多ク使用セリ是ハ電氣空氣併用ノ器械ニ比スレハ其構造一層精緻ニシテ完全ナルモノトス

以上四種ノ器械中最モ精巧ナルモノヲ撰ヘハ電氣專用ノモノニ若シクハナシ而シテ之ニ次クモノハ電氣空氣併用及水力應用ノモノナリト雖モ何レモ其ノ構造頗ル精緻繁雜ニシテ其製作費ノ如キモ亦甚タ貴キカ故ニ列車ノ運轉頻繁ヲ極ムル大停車場ニ於ケルニ非レハ之ヲ使用スルノ必要ナシ然ラハ卽チ現今我邦ノ鐵道ニ於テ最モ適當ナルモノハ第一種

即チ人力ヲ用ユルモノニシテ、**サツクスビー**又ハ**スチーブンス**器械中其場所ニ依リ最モ適應スルモノヲ採用スルヲ可ナリトス

一、橋桁、機關車、軌條等重要品製造所ニシテ目下最モ信用ヲ置キ得ヘキモノヲ調査スル事

歐米諸國ニ於テ調査セシ中ニ就キ最モ信用ヲ置キ得ヘキ製造所ハ左ノ如シ

○橋桁製造所

ペンコイド・アイヲン・ウオルクス	米國
ユニオン・ブリツヂ・コンペニー	同
フキニツクス・ブリツヂ・コンペニー	同
キーストン・ブリツヂ・ウオルクス	同

ウイヤリム・アロール・エンド・コンペニー……蘇國

ヘッドライトソン・エンド・コンペニー……英國

アンドリユー・ハンデサイド・エンド・コンペニー……同

パテント・シヤフト・エンド・アキスルツリー・コンペニー……同

ソシエテー・ジヨン・コツクリル……白耳義國

ハーコルト……獨國

マシネンバウ・アクチエン・ゲゼルシヤフト・ニユールンベルグ……同

グーテホフヌンクス・ヒユツテ……同

ユニオン……同

○機關車製造所

スケネクタデー・ロコモチーブ・ウオルクス……米國

ロジヤース・ロコモチーブ・コンペニー……同

ピツツバルグ・ロコモチーブ・ウオルクス……同

ボルドウキン・ロコモチーブ・ウオルクス……同
チユーブス・エンド・コンペニー……英國
シヤープ・スチユワルト・エンド・コンペニー……同
ベーヤー・ピーコツク・エンド・コンペニー……同
キツトソン・エンド・コンペニー……同
ネールソン・エンド・コンペニー……同
ソシエテー・ジヨン・コツクリル……白耳義國
エーグストルフ……獨國
ヘンシエル……同
シユソルツコツフ……同
ボールジヒ……同

○軌條製造所

カーネギー・スチール・ウオルクス……米國

イルリノイ・スチール・ウォルクス……米國
チヤールス・カムメル・エンド・コンペニー……英國
ボルコー・ヴオーガン・エンド・コンペニー……同
スチール・コンペニー・ヲブ・スコツトランド……蘇國
ドルマン・ロング・エンド・コンペニー……英國
バルロー・ヘマタイト・スチール・コンペニー……同
ソシエテー・ジョン・コツクリル……白耳義國
クルツプ……獨國
グーテホフスングス・ヒユツテ……同
ボーフムメル・フエライン・フヰユール・ベルグバウ・ウンド・
クススタール・フアブリカート……同
ユニオン……獨國

○建築用諸鋼材製造所

カーネギー・スチール・ウオルクス……………………米國
ペンコイド・アイヲン・ウオルクス……………………同
パテント・シヤフト・エンド・アキスルツリー・コンペニー……英國
ドルマン・ロング・エンド・コンペニー……………同
ユ　ニ　オ　ン……………………………………………獨國
ソシエテー・ジヨン・コツクリル……………………白耳義國

○輪縁(タイヤ)製造所

ラトローブ・スチール・コンペニー……………………米國
スタンダード・スチール・ウオルクス…………………同
ミツドヴエール・スチール・コンペニー………………同
ヴヰツカース・ソンス・エンド・コンペニー…………英國
ジヨン・ブラウン・エンド・コンペニー………………同
スチール・ピーチ・エンド・トーザース………………同

トーマス・フアース・エンド・ソンス……英　國
テーラーズ・ブロザース・エンド・コンペニー……同
チヤールス・カムメル・エンド・コンペニー……同
ブラウン・ベーレース・スチール・ウオルクス……同
ユ　ニ　オ　ン……獨　國
ボーフムメル・フエライン・フキユール・ベルグバウ・ウンド・グススタール・フアブリカート……同
ク　ル　ッ　プ……同

○車輪製造所

ヲーウエン・エンド・ダイソン……英　國
ジヨン・ブラウン・エンド・コンペニー……同
ジヨン・ベーカース・エンド・コンペニー……同
ソシエテー・ジヨン・コツクリル……白耳義國

ボーフムメル・フエライン・フヰユール・ベルグバウ・ウンド・グススタール・フアブリカート……獨國

ユニオン……同

クルップ……同

○車輛製造所

ミツドヴエール・スチール・コンペニー……米國

ヴヰツカース・ソンス・エンド・コンペニー……英國

チャールス・カムメル・エンド・コンペニー……同

ジョン・ブラウン・エンド・コンペニー……同

トーマス・フアース・エンド・ソンス……同

スチール・ピーチ・エンド・トーザース……同

ブラウン・ベーレース・スチール・ウオルクス……同

クルップ……獨國

ユニオン……獨國

○彈機（スプリング）製造所

フレンチ・スプリング・コンペニー……米國
ダイヤモンド・ステート・カール・スプリング・コンペニー……同
チャールス・カムメル・エンド・コンペニー……英國
ジョン・ブラウン・エンド・コンペニー……同
ブラウン・ベーレース・スチール・ウオルクス……同
スチール・ピーチ・エンド・トーザース……同
ボーフムメル・フエライン・フキユール・ベルグバウ・ウンド・グススタール・フアブリカート……獨國
ユニオン……同

蓑洲詠草

早春雨

雨ことに野邊の草木ももえそめて心のとけき春は來にけり

遠山霞

群山は深く霞におほはれて富士か根はかり空にそひゆる

旅宿聞琴

さ夜ふけて松吹く風や誘ふらん琴の音聞ゆ旅のやとりに

隣家泉

垣根こし隣の清水みてあれはむすはぬ袖も涼しかりけり

寄名所戀

思はしと思へは尙も思川ふかくのみなる我か思ひかな

歲暮松

荒磯の岩に聳ゆる老松の影もさむけき年の暮かな

太田持資

武藏野の千代田の城のいや高く君かいさをは千代に殘らん

高野長英

惜しや實に國を憂ふる心よりものし〻書の仇となりぬる

山時雨

冬されは外山の紅葉ちりはて〻夕さひしく時雨降るなり

閑居讀書

古の聖の書に親しみて心しつかに日をは過しつ

渡時雨

隅田川渡しまつ間に日はくれて衣手さむくしくれ來にけり

橋邊柳

丸木橋渡せる川の水の面にのとかになひく靑柳の糸

地下鐵道

いつしかと土の下さへやすらかに行きかふ世とはなりにけるかな

蟹

いかなれはすくなる道をふますして横さまにのみ蟹の行くらん

夏夜短

短夜の眠る間もなく鷄のしのゝめ告る聲そ聞ゆる

野徑薄

しのすゝきしけり〳〵て武藏野は路さへわかすなりにけるかな

松殘雪

春されと猶山里は風さえて松の梢に雪そ殘れる

柳先櫻

隅田川堤の花にさきたちて川沿柳もえ出にけり

梅雨

おやみなく降りつゝきたる五月雨に庭もさなから池となりぬる

雨後夏月

夕立の雨はいつしか過ぎ去りて雲間をもれて朝日かけ見ゆ
夕立は山の奥にやいりにけむ松の木の間に月を殘して

夏簾

高とのに晝の暑さを忘れつゝ簾かゝけて月を待ちけり

水聲幽

かすかにも谷よりひゝく水音に心を洗ふ山陰の庵

箱根避暑

朝夕に山のいて湯に浴みして都の塵を洗ふたのしさ
山中の杜の木陰にたゝすめは夏ともしらす鶯の鳴く

雨後月

村雨の雲吹き拂ふ秋風を松に殘して月のすみける

籬の萩

我庭の破れし籬もかくしけり秋萩の花さきみたれつゝ

夜の虫

さらぬたにさひしさ思ふ秋の夜に鳴くなる虫の聲そ身にしむ

社頭雪

としのたつ代々木の宮のはつ雪に白ゆふかけぬ木立たになし

若菜

野に出てゝ若菜つむ日は老の身も若き心に立ちかへりけり

折にふれて

誠もてまつりことをは議らすにいさかひにのみ過すかなしさ

早春雨

ものかけに殘りし雪も消えそめて夕のとかに小雨そほふる

春雪 三月になりて雪頻りに降りければ

世の人の心きよめん爲にとや春ともいはす深雪ふるらし

藤

老松の枝にかゝれる藤波の花そ一しほ色はえて見ゆ

高山彦九郎

君の爲國の爲にと盡しつゝはかなく消えし身こそ惜しけれ

賴山陽の百年忌に際して

み國ふり史につゝりて大御代に盡しゝいさを高したふとし

明らけく治まる御代の興りしは史のいさをもすくなからまし

蓮

濁り江にそたちなからも蓮葉の濁りにしまぬ色のきよけさ

溪雲

溪深く雲のかゝると見る内にしくれ來にけり秋の夕暮

朝紅葉

我庭の松の木間のもみち葉も朝な〳〵に色まさりゆく

朝水鳥

うす氷朝日にとけて池水にうかへる鴨の心地よけなる

逗子の濱にて

相摸の海鏡の如くしつかにてまはゆきはかり夕日きらめく

鶯

春ことに庭に来なきし鶯の今朝の初音を聞くそうれしき

柳

大宮の濠邊の柳萠え出てゝのとけき春の色そ見えける

秋晴

見渡せは秋空清くすみ渡り遠の山々かゝる雲なし

寒梅

春近くなると知らせて梅の花雪の中にも匂ひ初めけり

老松

高砂の尾上の松は年へても常盤の色はかはらさりけり

初夏

野も山も若葉青葉のかさなりて風さへかをる初夏のころ

水邊納涼

風かよふ柳の陰に舟よせて水音聞きつ暑さしのかむ

輕井澤避暑

浮世をは離れし山の假庵に夏をもしらてすむこゝちよさ

立ち昇る淺間の嶽の白煙空を蔽ふてすさましきかな

山中の秋の野原は名も知らぬ千草の花そ咲き亂れたる

筍

竹の子のかなたこなたに生ひ出てゝ千代の榮えを競ふたのしさ

雨晴れし朝に見れは竹の子は見上る許りはやのひにけり

東郷元帥の薨去を惜みて

國の柱海の鎭めと仰かれし譽れは千代に朽ちせさるへし

對島沖あゝ軍艦うちしつめ朽ちぬ功をたてし君はも

葉山避暑

波の上に高く浮へる富士の根は遠く仰くもたふとかりけり

沖遠く海士の釣舟つらなりて鷗の群の浮ふこと見ゆ

森戸崎濱の松原波越えて吹きくる風そ涼しかりける

虫聲

こしかたを思ひ續けて深かす夜は虫の聲さへ淋しかりけり

朝顔

數々の鉢にそたてし朝顔の朝ことかはり咲くそうれしき

朝霜

この朝け寒さ一しほ身にしみて庭の芝生に霜ふりにけり

出征者を送る

君の爲身をかへりみす出てゝ征く我ものゝふのたのもしきかな
出てゝ征くものゝふ送る我れ人も勳立てよと唯いのるのみ

戰死者を弔ふ

火玉もて身をも碎きし武勇こそすめらみ國の誇りなりけれ
君の爲命さゝけし武士の魂は殘りてみ國守らむ

蕢洲小稿

家嚴躋七秩高齡。壽賀之什自四方至。不肖龍不堪感喜。
賦蕪詩一章。以呈膝下。明治廿九年

早挂朝冠歸故鄉。齡重七秩益康强。好迎嘉客開淸宴。先向尊親献賀觴。
家有餘慶原積德。門多俊秀盡流芳。無疆壽福何將比。養老山高蘇水長。

又攀自壽韻恭賀

養老山下避軟輪。遐齡方逕古稀春。多年督學育才俊。平日敎倫化族親。
脩竹淩風知勁節。喬松冒雪見精神。聖明餘澤及幽僻。自適優游稱逸民。

偶成

投身官海卅年餘。偶脫朝衣意晏如。東亞經倫方及就。西歐禍亂猶難除。
花追節序開還落。雲伴風威卷且舒。一笑雄心未消盡。浩然養氣臥茅廬。

大正乙卯十一月
今上陛下行大典之日。有功臣表彰之儀。先考亦拜贈從五位之恩命。
一門光榮不過之。恭賦蕪詩一章。

聖上登極政新初。贈位恩光被草廬。積善祇今拜餘慶。英魂泉下喜何如。

梅雨

梅霖早已二旬連。愛此幽棲日若年。却憶農家正多事。田々水滿挿秧天。

犬吠岬矚目

宿雨初晴旭日紅。渺茫蒼海望無窮。遙看一道煤烟漲。巨艦排波入半空。

甲子元旦 大正十三年

何幸茅堂免震殃。擧家健在迓新陽。復興氣象全都漲。應祝隆々皇猷昌。

初秋

金風梧葉落。早已報秋聲。薄夜憑欄坐。高天月色淸。

殘炎威漸退。獨坐覺更長。一雨添秋氣。吟衫不耐凉。

初冬

風威蕭々早霜繁。葉落疎林鳥雀喧。時把新書還懶讀。南軒移榻負微暄。

冬夜讀書

門巷蕭條人跡疎。夜來孤坐鎖茅廬。撲窓風雪眠難就。燈下閑親古聖書。

七十七齡自壽

交通事業幾酸辛。五十餘年致此身。喜字壽齡加老健。悠々昭代一閑民。

春寒

料峭殘寒春信遲。爐邊獨坐擁裘時。東風一夜無情雨。勒住桃花欲綻枝。

夏夜

蒸々炎暑恰如烹。夜熱依然睡不成。起出庭前新月上。梧陰深處度微凉。

函嶺避暑

仰看蓊欝翠微岑。俯聽潺湲溪水音。豈啻幽郷宜避暑。靈泉一浴豁胸襟。

殷々轟雷指顧間。油雲潑墨失前山。滂沱雨到須臾霽。冷氣如秋月一彎。

歲晩

光陰如矢歲將彈。名利相忘意自寬。舊友即今纔屈指。追懷往事幾悲歡。

海上雲遠 勅題

曙色東瀛瑞象呈。水天接處彩雲横。堂々巨艦連滄海。日本皇威耀八紘。

觀雪

舞風如棚架。著樹似梅花。春雪深盈尺。皚々不見涯。

探梅

乘霽携吟杖。逍遙意境寛。野梅花若雪。香氣襲衣寒。

春夜

偶然客到笑相迎。對坐傾杯遣世情。春月時懸庭樹上。移来花影半窓明。

池亭聞蛙

陰々梅雨漸呈晴。步到池亭月色清。群吠蛙聲當皷吹。相呼相應達天明。

不忍池亭觀蓮

東台山下步蓮塘。翠蓋搖風曉色凉。綽約芳姿塵不染。亭々淨植散清香。

早秋苦熱

節入早秋凉未生。旱雲烈日恰如烹。何時驅逐殘炎去。領得心身水月清。

訪秋

出郭逍遙野水邊、五分秋色滿田園。疎鐘遠響知何處。竹塢楓林夕照天。

月下聞虫

一碧秋天月色淸、露華深處暗蛩鳴。窓間孤坐眠難就。愁聽啾々唧々聲。

觀月

風掃淺雲宿雨收。今宵恰是古中秋。玉輪輾出東瀛上。瀲灧金波萬頃流。

山寺觀楓

深山一路訪禪宮。霜染楓林樹々紅、幾杵鐘聲何處起。錦雲埋盡夕陽中。

冬暖

趁霽吟行野水涯、日暄冬景似春華、丹楓黄菊皆飄落、疎木林中噪暮鴉、

新春寒甚

節入新春暖未回、庭前殘雪白成堆、老來偏恐寒威勁、閑擁紅爐煖凍骸、

春江送人

江樓春夜祖筵開。風卷飛花入酒杯。一去鵬程幾千里。期君全任又歸來。

晩春坐雨

三月春光一夜空。飛花狼藉滿庭紅。斜風細雨愁多少。黄鳥聲迷綠樹中。

觀藤花

百尺蒼松點紫霞。垂々嫩蕋舞風斜。芳菲過去都無跡。占領殘春只此花。

夏日江村

漁村茅屋翠楊圍。雨後凉風暑氣微。欸乃一聲江上晩。魚鰕滿艇蹴波歸。

栽竹

塵埃滌盡雨初乾。移植蕭疏竹數竿。忽覺滿庭添景趣。淸風如水滴欄干。

始聞秋聲

突兀雲峰聳半空。連旬無雨暑如烘。夜來一葉梧桐落。秋在蕭々瑟々風。

秋夜

高樓秋氣爽。淺酌坐三更。過雁知何處。雲端月有聲。

詠皇軍

日本男兒赴遠征。奉公心念只忠誠。砲雷彈雨吾何恐。誓滅胡軍報聖明。

義勇從軍不顧身。砲烟彈雨幾酸辛。天兵所向前無敵。赫々皇威耀九旻。

看菊

乘晴尋到野人莊。菊繞東籬正傲霜。淡白深紅香馥郁。愛他晚節殿群芳。

昭和戊寅新年

皇威赫々瑞光新。犬馬更迎八十春。下賜銀杯榮罔極。兒孫相集賀佳辰。

牡丹

獨向深春占艷粧。姚黃魏紫壓群芳。天然麗質人爭賞。眞是花中一帝王。

觀螢

明滅飛螢日暮天。依簾入幔畫樓邊。不關醉後歸無燭。幾點殘光照路鮮。

山寺避暑

白雲深處梵王宮。萬樹松林一路通。脫却俗塵心意爽。山鐘響度夕陽中。

新秋微雨

洗去殘炎雨乍晴。西風颯々報秋聲。天光一碧涼如水。獨坐書窓對月明。

秋柳

衰柳經霜落葉稠。短條憔悴不勝愁。暮鴉點々歸何處。林際高懸月一鉤。

冬曉

冱寒侵枕夢頻驚。時聽村鷄報曉聲。早起初知深夜雪。瓊林玉樹不堪清。

野村先生八十壽賀詩

有眞吟社と詩友

先生は故郷及家系の關係からでもあらうが特に詩文に巧みであるが置詞謹嚴一字一句を苟かにされない。昭和十年十月から帝國鐵道協會內に同好の士が集まつて有眞吟社と名づくる漢詩會を設け每月二回宛斯道の大家岡崎春石詩伯を聘し三體詩、唐詩選、聯珠詩格等に依つて古來名詩の講義を聽き更らに每回課題を受け會員各自の作詩を提出し添刪して貰ふことゝなつてゐる。

會員は何れも鐵道關係の古つわもので先生を筆頭に國澤新兵衛、大園榮三郎、中川正左、金子六藏、久留義鄕、村井二郎吉、海野力太郎、杉本義朗、笠松愼太郎といふやうな顏觸二十名計だ。

先生は最初から每會殆んど欠席されたことがなく、そして其出席も矢張り何時もの調子で默々として來り默々として歸つて行かれる。而も其聽講中は何時も謹嚴な態度で熱心に講義の要點を書き取つて居られる、齡八十勤めて倦まざる其努力に對し會員一同誰れも感心せぬものはない。

されぱこそ、先生の作詩は何時も成績がよくて毎回圏點がついて會員一同を羨ましがらせてゐる。

殊に先生は筆跡が見事で毎回詩伯の手許に提出される詩箋の如きも謹嚴そのもので一點一劃を疎かにしてない。

日外や會員の一人たる笠松愼太郎君がオレの筆跡のお粗末なのにはつくゞゝ愛想がつきる何時も野村先生の綺麗な筆跡に比較され會員稠座の中で慘々油を絞られて困るよとこぼしてゐた。

今回先生が八十の壽齡を迎へられたので右有眞吟社中の有志から先生の手許へ呈出された賀詞は左の通りであつた。

奉賀野村蓑洲先生八十壽

青山　井田清三

功亘官私不見涯　風標德望少同儕　願君能保期頤壽　八十今年是一階

櫻丘　海野力太郎

學如大海涵天去　德似春風滿地來　鶴髮童顏人仰望　壽筵恭獻九霞杯

天山　大園榮三郎

學通今古識西東　歷代名家孝與忠　八十遐齡加矍鑠　神仙骨相瑞雲中

古雲　金子六藏

報效丹心八十年　勳功已向世間傳　長生不惜神仙術　嘯月吟花樂自然

誠堂　笠松愼太郎

北嶺南濱鐵路通　多年辛苦便成功　齡躋八十身加健　樂在吟花嘯月中

志南　杉本義朗

貢獻明時六十年　杖朝長壽節尤堅　童顏鶴髮加淸健　學德逾高匹古賢

坦溪　中川正左

鶴髮童顏氣節崇　世間隨處仰高風　縱横鐵路千秋業　北斗光輝照碧空

野村龍太郎博士・年譜

年號	年齢	記事
安政六年 己未	1	**一月二十五日** 美濃國大垣藤江に生る。双瞳と稱せらる。祖父龍左衛門、父君藤陰の幼名龍之助に因み龍太郎と名づけらる。弟虎次郎氏と相對し龍虎となるは父君命名に苦心せられし跡偲ぶべきものあり
萬延元年 庚申	2	
文久元年 辛酉	3	
文久二年 壬戌	4	
文久三年 癸亥	5	早くも父君藤陰の下に於て塾生と共に論語經書の講義を聽く
元治元年 甲子	6	**十二月八日** 令弟虎次郎出生 この頃先生は既に論語文章規範等の一節を暗誦す この年藩の『致道館』に入る
慶應元年 乙丑	7	
慶應二年 丙寅	8	

年	年齢	事項
慶應三年 丁卯	9	抜群の成績により、藩公の御前にて揮毫し、褒美を賜はる
明治元年 戊辰	10	父君藤陰「雞鳴塾」を開く
明治二年 己巳	11	
明治三年 庚午	12	塾庭にあるトネリコの木の下にて静かに一人冥想せることあり、この木を龍太郎博士冥想の木と云ふ
明治四年 辛未	13	**十一月三日** 天長節の佳辰に大唐紙に書を認め鎮守の八幡宮に奉納 成績優秀なるを以て賞せらる
明治五年 壬申	14	學制發布、大垣にも四つの學校開かる **八月** 父君藤陰と共に上京 **九月十二日** 東京横濱間鐵道開通 **十月** 慶應義塾童子局に入學
明治六年 癸酉	15	
明治七年 甲戌	16	**一月** 末弟喜三郎郷里にて病死（九歳） **二月** 慶應義塾を去る **同月** 東京外國語學校に入る **十二月** 東京英語學校に轉ず

明治八年乙亥	17	七月 東京英語學校下等科卒業 九月 東京開成學校に於て入學試驗を受け入學を許され豫科三級に入る
明治九年丙子	18	九月一日 給費生となる
明治十年丁丑	19	九月 東京大學理學部に轉じ土木工學科專修
明治十一年戊寅	20	十月一日 祖母美惠老病を以て歿す(七十七歲)
明治十二年己卯	21	弟虎次郎上京す
明治十三年庚辰	22	弟虎次郎東京大學豫備門に入る 十二月 諸工業實地研究の爲め同級生白石直治、原龍太等と共に京阪地方巡回を許さる
明治十四年辛巳	23	一月十五日 京阪地方巡回旅行より歸京す 七月九日 東京大學理學部に於て土木工學科卒業 七月二十三日 東京府御用係申付月給四十五圓給與さる 土木課工事部勤務となる 十月 京橋區靈岸島東湊町の高橋(鐵橋)の工事を擔任す 十二月十五日 月俸五十圓となる

年	年齢	月日	事項
明治十五年 壬午	24	十月二十五日	土木課設計係勤務となる
		十月	淺草橋を鐵橋に架換工事を擔任す この年東京大學に學生騷動あり先生は卒業生として之が鎭撫に奔走さる
明治十六年 癸未	25	五月	甲州青梅兩街道の修築工事擔任を命ぜらる
		七月三日	山梨縣より大月橋架設の事を東京府に依賴あり因て工事指揮のため出張
		十月	小原迪令孃てつ子と婚約す
		十二月	水道掛兼務となる
明治十七年 甲申	26	一月六日	郷里大垣に於て豫て婚約ありし小原迪令孃てつ子と結婚式を擧ぐ
		一月十三日	大垣出發
		一月十七日	東京着
		四月十八日	母堂、新妻てつ子と共に上京
		五月三十日	母堂歸鄕
		七月二日	月俸金五十五圓となる
明治十八年 乙酉	7	七月	皇居御造營御敷地內水道工事擔任を命ぜらる
		七月三十日	月俸六十圓給與せらる

		十月十六日　長女幹子誕生 十一月十九日　水道課水道掛兼設計掛勤務となる
明治十九年 丙戌	28	二月一日　水道部長心得となる 四月　父君藤陰母堂鈴子同道にて上京、五月歸鄕 七月十九日　政府は中山道鐵道敷設を廢し工事を東海道に起すことゝす 八月二十一日　東京府一等技手判任官一等給中級俸、土木課勤務 九月十三日　鐵道一等技手判任官一等給下級俸 九月二十五日　横濱沼津間鐵道建設工事擔任を命ぜらる 長女幹子死亡 十月十五日　鐵道五等技師奏任官五等下級俸下賜
明治二十年 丁亥	29	三月二十五日　叙從七位 七月七日　中級俸下賜 七月十一日　横濱國府津間鐵道開通す 引續き箱根トンネル工事を擔任す 七月十八日　大垣にて長男龍吉誕生 一月二十一日　甲武鐵道會社の工事を鐵道局に於て擔任することゝなる

明治二十一年 戊子	30	一月二十七日　上級俸下賜 六月　鐵道局は甲武線事務所を新宿に置き工事に着手す 七月　仙石貢擔任を解かれ原口要之に代り、其の監理の下に野村先生專ら工事に從ふことゝなる 九月四日　內藤新宿三丁目十七番地の寓居にて次男駿吉誕生
明治二十二年 己丑	31	四月一日　新宿立川間開通す 八月十一日　立川八王子間開通す
明治二十三年 庚寅	32	五月十四日　任鐵道技師、叙奏任四等下級俸下賜 十二月　鐵道局第一部建築課勤務として神戸に赴任す
明治二十四年 辛卯	33	八月十六日　任鐵道廳技師、八級俸下賜 八月二十五日　神戸下山手通七丁目の寓居にて三男三吉誕生 十月二十八日　濃美大震災、先生は尾道に出張中なりしが直ちにひき返し關ヶ原までは汽車、それより機關車に乘り又は徒歩にて現場に赴き長良川橋梁震災復舊工事擔當
明治二十五年 壬辰	34	二月二十六日　三男三吉痲疹の爲死亡 四月四日　長良川橋梁震災復舊工事竣功東海道線列車全通す 六月　東京に移住、麹町區上六番町三十二番地に借家 十月二十二日　叙正七位

年	年齢	事項
		十一月十七日　七級俸下賜
明治二十六年 癸巳	35	四月十四日　第一部新橋建築課長心得を命ず 九月三日　四男廉吉誕生 十一月十日　官制改正 任遞信省鐵道技師、叙高等官六等七級俸下賜 鐵道局工務課設計係長兼線路調査掛勤務
明治二十七年 甲午	36	一月十七日　六級俸下賜 四月十九日　鐵道局福島出張所長を命ぜられ福島米澤間鐵道建設 工事擔任 七月三日　五級俸下賜 十二月四日　五男信夫誕生
明治二十八年 乙未	37	十月四日　叙高等官五等四級俸下賜 十一月廿六日　叙從六位
明治二十九年 丙申	38	六月二十二日　三級俸下賜 九月二十三日　六男陸雄誕生 十月二十四日　青森鐵道局出張所長兼務を命ず 十一月九日　鐵道局監理課勤務

年	年齢	月日	事項
		十一月十一日	任鐵道技師、叙高等官五等三級俸下賜
		十一月十三日	歐米各國へ派遣
			この月福島より東京に移り麹町區富士見町一丁目一番地に居住し郷里より父藤陰母鈴子を迎へ同棲す
		十二月四日	出發、エムプレス・オブ・インデヤ號にてバンクーヴァーに向ふ
明治三十年 丁酉	39	一月十一日	叙正六位
		十一月十二日	令弟虎次郎逝去
明治三十一年 戊戌	40	二月二十五日	歸　朝
		三月二日	任遞信技監、叙高等官二等二級俸下賜、監理課長心得仰付らる
		三月三十日	叙正五位
		四月三日	赤坂區氷川町十九番地に轉居す
		四月十一日	鐵道會議議員仰付らる
		五月二十日	歐米鐵道事業視察報告書を提出す
		十一月一日	官制改正、任遞信技師、叙高等官二等三級俸下賜 鐵道局設計課長心得兼營業課長心得仰付らる
		十二月廿八日	勳四等に叙せられ瑞寶章を賜ふ

年	年齢	事項
明治三十二年 己亥	41	二月　父藤陰先生夫人と共に大垣に歸省 三月十五日　藤陰先生郷里大垣にて逝去 三月十六日　赤坂區氷川町の寓居にて次女芳子誕生 三月二十七日　工學博士の學位を授與せらる 四月七日　藤陰先生葬儀
明治三十三年 庚子	42	四月二十七日　赤坂區新坂町三十五番地(現住所)に移る 五月五日　二女芳子死去 六月二十三日　三女美惠子誕生 七月　社團法人養成社理事に推薦せらる 養成社は舊大垣藩士、舊藩御領内及御領所の子弟の學藝を奬勵し人材を養成するを以て目的とす
明治三十四年 辛丑	43	
明治三十五年 壬寅	44	十二月廿七日　勳三等に叙せられ瑞寶章を賜ふ
明治三十六年 癸卯	45	七月十日　叙從四位 八月十日　四女壽惠子誕生
明治三十七年 甲辰	46	七月九日　二級俸下賜 九月十七日　遞信大臣清韓兩國に出張につき隨行を仰付らる 九月二十三日　東京出發 十二月六日　歸　京

明治三十八年 乙巳	47	十二月廿五日　東亞鐵道研究會生る　理事となる
明治三十九年 丙午	48	四月一日　旭日中綬章を賜ふ 四月十三日　清國に差遣さる　西園寺首相滿韓視察に随行 五月十四日　清國より歸京 五月三十日　兼任臨時鐵道國有準備局技師
明治四十年 丁未	49	四月一日　兼任帝國鐵道廳技師　高等官二等 帝國鐵道廳建設部長を命ず 十二月廿三日　一級俸下賜
明治四十一年 戊申	50	八月二十日　正四位に叙せらる 十二月四日　免本官專任帝國鐵道廳技師、兼臨時鐵道國有準備局技師如故一級俸下賜 十二月五日　鐵道院建設部長を命ず 十二月廿二日　鐵道會議臨時議員仰付らる
明治四十二年 己酉	51	六月二十二日　鐵道院技監に任ぜらる 叙高等官一等、二級俸下賜 鐵道院建設部長を命ぜらる 七月二十一日　勲二等に叙せられ瑞寶章を賜ふ

明治四十三年 庚戌	52	四月一日　官制改正　俸給令改正、俸給年額五千圓 八月六日　四男廉吉死去 十二月三日　母堂（鈴子）逝去
明治四十四年 辛亥	53	二月四日　赤坂區新坂町三十五番地へ本籍を移す、爾來今日に至る 三月二十八日　歐米各國へ差遣はさる 四月二十二日　東京出發、シベリア鐵道にてモスコーに行き露都、ベルリン等を經て英國に入りロンドンにて旅客交通會議に列席、歐洲各國視察の後アメリカを經て 十二月廿三日　歸京
明治四十五年 壬子 大正元年	54	
大正二年 癸丑	55	五月十二日　鐵道院副總裁、高等官一等に叙せらる 鐵道院運輸局長を命ぜらる 九月十日　從三位に叙せらる 十一月廿二日　大禮使參與官仰付らる 鐵道部長を命ぜらる 十二月　大禮に關する委員長を命ぜらる

		十二月十九日　南滿洲鐵道株式會社總裁仰付らる
大正三年 甲寅	56	一月二十日　正三位に叙せらる、特旨を以て位一級を進めらる 七月十五日　滿鐵總裁退任
大正四年 乙卯	57	十一月　大正天皇御卽位式を擧げさせられるに當り先考藤陰先生生前の功により從五位を追贈さる
大正五年 丙辰	58	四月　大垣公園墓碑の前に藤陰先生の贈位奉告式を行ふ この年戸田伯爵家の協議員となり、引きつゞき戸田家の重要事項の諮問にあづかる
大正六年 丁巳	59	八月二十六日　五男信夫死去
大正七年 戊午	60	二月二十一日　てつ子夫人逝去 六月　大湊興業會社創立され社長に就任 六月六日　次男陸吉、松方正作次女增子と結婚す 十月二十三日　長男龍吉死去 十月二十五日　三女美惠子五代龍作長男友邦と結婚す
大正八年 己未	61	四月十二日　南滿洲鐵道株式會社々長に任ぜらる 八月二十七日　山田元彦養母龜久衛と結婚
大正九年 庚申	62	この年社團法人養成社の社長となる

大正十年 辛酉	63	五月三十日 滿鐵社長辭任 七月六日 四女壽惠子赤星鐵馬弟喜介と結婚
大正十一年 壬戌	64	六月二十六日 帝國鐵道協會の會長となる
大正十二年 癸亥	65	六月 帝國鐵道協會々長任期滿了す
大正十三年 甲子	66	三月四日 東京地下鐵道株式會社社長に就任
大正十四年 乙丑	67	四月 帝國鐵道協會の名譽會員に推薦さる 八月 南武鐵道株式會社社長に就任
大正十五年 昭和元年 丙寅	68	
昭和二年 丁卯	69	十一月 野村先生の恩顧を受けたる人々相集りて蓑洲會を創立す 十二月 東京地下鐵道上野淺草間開通す
昭和三年 戊辰	70	
昭和四年 己巳	71	十二月 南武鐵道、川崎、立川間開通 十二月廿九日 六男陸雄三好學五女敏江と結婚

昭和五年 庚午	72	四月十九日 南武鐵道濱川崎まで全通、西國立驛に於て開通祝賀式を行ふ
昭和六年 辛未	73	
昭和七年 壬申	74	東京地下鐵道株式會社々長を辭任し取締役となる
昭和八年 癸酉	75	十二月廿七日 後夫人龜久衞逝去
昭和九年 甲戌	76	十一月 南武鐵道株式會社々長を辭し取締役となる
昭和十年 乙亥	77	
昭和十一年 丙子	78	十一月十五日 小石川茗荷谷濃飛學寮、廿周年記念式に於て二十年間理事長たりし故を以つて表彰せらる
昭和十二年 丁丑	79	濃飛學寮理事長を辭任す 安藤又三郎氏後任となる
昭和十三年 戊寅	80	八十歳の賀を記念し傳記出版さる

野村龍太郎傳
【金參圓八拾錢】
（送料貳拾錢）

昭和十三年十二月五日印刷
昭和十三年十二月八日發行

著作者　石井滿
東京市杉並區馬橋一ノ三六

發行者　龜川德一
東京市小石川區大塚坂下町一三六

印刷者　內田柳次郎
東京市小石川區大塚坂下町一三六

印刷所　秀錦社

發行所
東京市杉並區馬橋一ノ三六
日本交通學會
振替口座東京六六九三一番